

俳諧提要全



五乳人の編纂に
といひていさけ
全部樹刻を成
賞贈せり

中松

おまわり

おまわり

おまわり

おまわり

おまわり



序

五乳人の筆まめに艸案せし俳諧提要といへるを讀味はふに二十年來のたましひこめたる斯道に最有益のものなり抑明心居士の御傘親重入道のはなひ草をはしめ導の書數ありしも稀にして得かたしさいはひなるかないまや之を公になして初て道に入るの俳士かたよりともし次に積年の丹誠をも世にあらはすこそよけれといなむをすゝめて此の緒をとくなりけらし

明治壬癸卯夏

東都上野の麓根岸の里

雪中庵雀志

緒言

一此書は余の俳句附合稽古に發心したる頃より二十餘年の間斯道の先生に就き聞き得たる俳事或は俳書より拔萃して附合提要に編たるものなり

一此書を編次する所の不順序なるは唯筆に任して書留たるなれば事の前後を撰はす編たるにつき見る人其の心してよ

一此書中に大同小異の俳事俳書を編て置きしは斯道の證引にして所謂人も知り我も知りてこそ風雅に樂みあるを人知らず我知りて語たるに何の樂みかわらんやこゝを以て斯道の樂みに知らしむるの微志なり

一此書に載する所は其最も必要とする事を取り疑はしきは之を省きて編ます蓋し誤りを傳ふことを恐れてなり

明治三十六年七月 編者 識

俳諧提要目次

一發句の事……………一

發句と附句の事……………一二

堅題横題の事……………一五

落題詞書の事……………一七

姿情と情俗の事……………一八

換骨の事……………二二

同巢の事……………二二

等類の事……………二三

雜句の事……………二五

祝言句の事……………二六

一發句切字の事……………二七

切字五答の事……………三一

一發句十八駄切の事……………四八

一發句眞行草の事……………五五

一親句疎の事……………五七

三つ物の事……………六五

一賦物の事……………七二

一夢想の事……………七七

一即興の事……………七八

一拶挨の事……………八〇

一兼題の事	八四
一當座の事	八五
一皮肉骨の事	八七
一序破急の事	八九
一脇附方の事	九一
一五體の事	九四
一大小の事	九八
一第三の事	一〇七
一韻字留心得の事	一〇八
一第三異體の事	一二七
一四句目五句目等の事	一二二
一折はし裏移心得の事	一二七
一名殘の裏の事	一三一
一揚句の事	一三三
一月花定坐の事	一三六
一月の座の事	一三九
一翻れ月の事	一四二
一隱見の事	一四七
一月の名所花の事	一四八
一花の事	一四八
一花櫻の事	一五一

一打越花の事	一五九
一戀句附合の事	一六二
一戀に上中下の事	一六八
一平句戀句の事	一七二
一俳附句の事	一七三
一名所附の事	一七八
一前句附の事	一八八
一指合の事	一九〇
一折合の事	一九八
一去嫌の事	一九九
一同字別吟の事	一九九
一去嫌早引	二〇六
一打越の事	二一四
一附句案やうの事	二四二
一執中の法	二四四
一遁句の事	二四六
一伸句の事	二四八
一遣句の事	二四九
一二句一意の事	二五二
一附合の事	二五七
一附合體用の事	二八一

附合虚實の事	二八三
附合自他の事	二八五
附合新古の事	二八九
一附合四道の事	二九〇
下の句作の事	二九五
附合疊字疊語の事	二九六
一懷紙式の事	二九八
一懷紙用捨の事	三〇三
一句數去嫌の式	三〇五
一句所に寄て名目ある事	三〇九
一會席作法	三一九
一宗匠判者執筆亭主連衆心得の事	三二八
一俳諧修行教の事	三三七
以上	

目

次終

俳諧提要

雪中庵雀志閱
五乳人鈞雪編

發句の事

定家卿の教へに歌の上の句と發句とはかはるへし發句は脇あるものなり有ましとても夫には拘らす一分の體を專らとす歌の上の句は下の句をうみ出す冠ゆへ上の句はかりの一分體には作り難し發句に二つの心得あり一は唯まかせて作れる句は餘意なくとも切留むへし一座の會をして巡吟を催す一は發句は切字留は有なから餘意有て詞の殘る様に作るべしとそ

風体と云は一句の姿也氣象といふものなくては發句に非らず發句の氣象を定むること大切なり

梅の鎖耳
底記

發句は第一時節違はざるやうにすへしいかにも長高く幽玄にすへき也或は時節の寒温山水花鳥虫獸庭園居宅の美景文學の修行等何に寄らす句と所と相かなふをよしといへり尤も禁句放埒平懷を嫌ふへし猶發句に於て花實五義六義十體三十體なといふ事ありて可習知 寄垣集

發句を作るに畫句圖句といふ事あり畫句は活物にして取るへく圖句は死物にして捨へし

譬へは畫句と云は絶景を見て其景の微細を捜さず見定置て眼を閉て心を以てこれを畫くか如く其景を捨て別に案する也

圖句は筆意も捨て其景を細かに生寫しにする也發句も是に同じ句の事を忘れて其風景のみにからまりたる句也

畫は見定置て其景を離れ畫法にて書く故に活るなり圖は畫の事を捨て唯正うつしにする故圖にして畫なき故に死する也句も全く是の如し故にかくはいふ也古説に龍頭抱尾といふ事あり上と下とつり合あしく譬へは上にいかめしく云たてゝ下の句さまでなく留る體の事也蛇足といふこともあり

是はたとへ五七にて句とゝのふたる時坐の句は云染す可をいらぬ者を取てひそかに添へなとする體なるへし

芭蕉曰發句は十ヲある物を七つ現はし三つは餘情に餘る物なれば其三つをもて脇を調る事よろし云々

發句畫に對して句をなすに讀と畫題との差別あり讀は其畫を褒て其畫に止らす畫題は其畫を題にして句をなす也畫題の句ならは何某題と書へし

發句は大悟の立つ所脇は大悟の收る所故に脇は少しも跡へ心の殘る所なきやう云ひさる也聊か次へ運ふ心あるは脇にわらず平句なり是れ芭蕉規矩準繩の一つなり以上師説録發句案し方の事に芭蕉曰發句は頭よりすら〜と言下し來るを上品とす物一つ二つ三つ取合てなすはよからす黃金

を打延したることく作るへし

芭蕉曰發句は取合せもの也題に物一つ取合てよく取合すを上手といふ

芭蕉曰題の内より案してはなきもの也題の外を尋れば有るものなり

芭蕉曰發句は一物の上にて仕立る事はかたき物也

毛衣につゝみてぬくし鴨の足

一物のうへにて仕立たるとなり

芭蕉の詞加様に其人によりて一筋ならず彼と是と工夫して偏執をはなるへし

芭蕉曰發句は落つかされは發句に非す

君か春蚊屋はもへ黄に極りぬ

越人か句すてに落つきたりと見へしか又此重み出來たり月影朝はらけなとゝ置て蚊帳の句とすへし替らぬ色を君か代にかけて歳旦となし侍るゆへ心重く句奇麗ならず

芭蕉曰句を作るに作り過て心の直を失ふ也心の作はよし詞の作は好むへからす

芭蕉曰句は七八分に言つめては遣やすし五六分の句はいつまでも飽す但かくいへはとて案し方を五六分にせよとにはあらず案は十分にして作を五六分にせよと也

芭蕉曰發句は大方物語のやうにする物なりとかく主人公をたてゝいかにも句になるやうに作配可然主人公なきは繪にかゝれぬ物也繪かゝれぬは發句にあらず

發句の題に動く動かぬといふ事功者の上には論なき事也其物より案し入て聚りより生み來る詞なれば動くへきやうなし初心の句作するは其題の本情を見すして其場に生來らぬ物をしほりのわきまへなく詞をきりつき柳にやせん櫻にやせんと跡より取付る故に何にも成へく見ゆる也其本情より入らぬ故也

嵐雪論す雷電の謠に菅公大に怒り給ひ御前にありあふ石榴をかみくたき妻戸にくはつと吹かけ給へは火焰と成てと書し文勢此御前にありあふもの饅頭羊羹ならは火焰となる文勢しほらしきはめて石榴の外なし物の本情慥なる故に動く事なしと申しぬ

芭蕉曰發句案る時和歌の三十體つかまへ方より案し力なりいかにも發句の心得に成るへしよき句は自然と三十體のうちいつれになりとも叶ふもの也

幽玄體 行雲 廻雪 長高 高山 遠白 有心 物哀
不明 理世 撫民 至極 澄海 麗體 存直 花麗
松體 竹體 可然體 秀逸體 拔群 寫古 面白 一興 景曲 濃體 見樣 一節 拉鬼 強力

連歌に句難をいふ事あり俳諧にも有るへし心敬僧都云凡俗なる句姿の凡俗心の凡俗也姿の凡俗は聞へ安く心の凡俗は少わきかたくやあらん道に心理を思はぬ人の句に其あやまち有物なり景曲の句には大かたなし有心なる句を作るに用心すへし

他の句を開事大切の習ありわか好方を胸中に定ては人のき

聞かたしわれをはなれて其句の天性を見るへし打聞くより能く感ずる句あり是は人をしてよく感せしむる句也

又深切に聞されは聞へかたき句あり意味深長の句なり強てまかりて聞て漸聞たるは誠に聞ゆる句にあらず其句の入ほか也聞く人正しければ是を答る也已くらき時はともに作者の邪路に入て是を聞とりたりとす心淺く境に入らぬ輩幽玄の心おほるけにもさとしるへからず

句を見る事大やう一句の成就と不成就と新古糟粕等類同巢又古事古意等の寄せ扱其上好惡と見る也位絶勝に至ては判者の力つく也

同巢と等類とは別也作例亦別なり

句を判する事物を鏡に移すことし此故に名師ならされは判者となし難し 以上直旨傳

句ひの句といふ事歌に上品也發句又然り古人定家卿の歌を評して云朧月夜に仙女の倅かりに顯れて消失たらん句ひなるへしとなり全傳

芭蕉曰發句は無念想のうちに一念を起す是を起といふ無念想とは胸中に一物なく立向ふ時花時鳥月雪に對して趣向起るを起といふ

是に自在の句作を添へて「てにをは」定め發句となる又初に磯の苦屋社頭の鷺とも趣向を思ひ寄せ後に千鳥初花と景物を置く故に題動て發句と成る事なしは無念有念の境

にして發句を論するの基なり猶花實を正さは千句萬句の上に置くとも發句の姿更に動くことあるへからず

和歌には通序題曲流の五品あり「五情五義とも云」發句には序題曲の三備あり

題 序 曲

元日に田毎の日こそ戀しけれ

題 序 曲

秋の夜を打崩したるはなし哉

傳に曰序は物のはしめにして元日に月の田毎を思ひ寄せ其後日こそ戀しけれと曲を求む

秋の夜の閑寂なるを嘶しに打崩したるは序也曲也此三つの境に欠けたるは發句と云へからず

發句は感を第一とす

發句の調格は略々和歌と相似て聊か變れるあり和歌は姿を本とす

姿とは初句より結句に至るまで吟聲するに一點の滯るなく優美なるをいふ

感とは其物其時其場所に應じて如何にも左もあるべき事と覺へず歎息せらるゝを云

姿の優美なるに此感の具備したる者を完全の歌とし名歌ともいふ也

發句も姿と感の具備せる者は論の限にわらずと和歌は三十一字にして詞に餘裕あり發句は僅かに十七字なれば其

餘裕なし故に歌より一層區域を弘めて俗言平話を交へても嫌ふなき也

かゝれは姿は第二とし感を第一とす詞の優美なること芭蕉も成るへき丈は然かせんと思はれつらめといかにせん姿をのみ大事とすれば詞に餘地なき故に感情の薄らくるゝは自然の道理也故に姿よくて感情薄からんよりは寧ろ姿おくるゝとも感の深さにしかすと思はれし者と覺ゆる也

枯枝にからすのとまりけり秋の暮

芭蕉

雛のさま宮腹くしましける

其角

黄菊白菊その外の名は無くもかな

嵐雪

是姿は亂れたるか如しされとかく字あまりにいはいはされは是程の感情あらんや是らを打吟し試て感情を第一とする者なるを曉るへし

發句は雅致にして卑俗なるへからず

發句は古人の妙所に眼を着くへし眞心を思ふまゝに云ひ出るを眞の發句なり

發句は眞心を以て詠すへし人を感動せしむる是れ發句の目的なり

發句は眞情を主とす

發句は感を主とする事と歌に異ならず

發句は野卑なる調を用ゆへからず

發句は人の精神を吟詠する者なり

發句の大事は語勢の自らなる妙にあり

發句の切字は語勢を助け句を調和するの具に過ぎず

發句は作言を求て感情に遠さかるへからず

發句は多く讀て其惡さを捨つへし

發句に動不動あり

發句の詞は聞へ易きやうに詠むへし

發句に用ふる今日の雅言は昔の俗言なり

發句は志想を述る道なり

發句の感あるは亦熟練の巧に依る

發句の感なきは句にあらず

發句の材料詩歌より取るへし

發句は誠心より出つへし

發句の解し難きは斯道に無用のもの也 以上俳句作法

發句は屏風の畫と思ふへし己か句を作りて目を閉畫に准らへて見るへし死活をのつから顯はるゝものなり此故に俳諧は姿を先にして心を後にするとより都て發句とても付句とても目を閉て眼前に見るへし心に思ひはかつてするは見ぬ事の推量なり目に見て附ると心に量て附ると自ら他門のさかひ紙筆の上に盡しかたし諸集の附合を見て工夫すへし 三十五ヶ條ノ中

發句と云は姿を先に見て情を後に案すへし其の姿といふは辯舌口才の人赤躰にて玄關に畏り侍らん何の使者か務り侍らん綾羅錦綵を身にまとひしたるしたる人の耳うと

く舌短き風姿わりて風情なきたとへなるへし花と咲葉と落日は春秋の姿と見て寒暖は風姿と知るへし此餘は山館野亭より送り表色に至るまで姿をとゝのへさるはなし

梅が香にのつと日の出る山路かな 芭蕉

冷々と壁をふまへて晝寝かな

前句は餘寒の姿と見えて後句は殘暑の姿と云ん然らば餘寒の發句にして梅を趣向といひ殘暑の發句ならんには晝寝にて其句の趣向といはん句作は其時の働にして趣向を隠す手つま也意外の餘情は爰に知るへし

發句の一作切字には及はす篤と五七五のテニヲハのまはし様大事によりてすらくと耳たぬやうの心得要用なるへし其内より心の切とて出來やうに出るを作意の傳と云事なり知らぬを此道にすゝめんとするには切字と云を知らせていはすことなり切字とてあとのつゝきよきテニヲハなれば一作の心得までの事なり芭蕉後集

發句は格に入て格を出さるはせはく格に入らざる時は邪路に走る格に入格を出てはしめて自在を得へし大鏡序

道はたの木槿は馬に喰れけり 芭蕉

古池や蛙とびこむ水の音

格中格外のことは分ちかたし其大むねをいはく格中とは其句ものにくらへて解所十人か十人なから思ひよる所也此前句も槿花一日榮といへるよりおもひ取て猶し道はたなどにある木槿ははかならむと句に當る所如此又格外と

は彼を是に當へきものなし古池の句にて禪悟有りしなどいへれとひかゝしき事也此句に限らす句の神さへ定まらば一以貫之へし禪のみにかきらんや此句の大いなる所格外たるへし格外辨

發句は寂しをりを第一とす詩歌文集を味ひて心を向上の一路にわそひ作を四海にめくらすへし千年不易一時流行他門の句は彩色の如く我門の句は墨繪の如くすへし折にふれては彩色なきにしもあらず心他門にかはりてさひしをりを第一とす名人は他をよく調へしうへに折にふれてはわやふき所に妙あり上手はつよき所に面白みあり等類作例第一吟味すへし

古今の撰集に眼をさらすへし我門の風流を學ぶ人は鶴の歩みの百韻冬の日春の日曠野ひさこ猿蓑炭俵等を熟覽すへし大鏡序

發句は時代くをすへし初心の時は句數を好むへし夫より姿情をわかち大山を越へて向ふの麓へ下りたる所を案すへし六尺を越むと思はし將に七尺を望むへしされは心高き時は邪路に入安く心低き時は古人の胸中を探ること能はす

てにをは專要なり夫我邦はテニヲハの國なれば先哲の作を味ひ一所も龜末なることなかれ句の姿は青柳の小雨にふれたるか如くにして折々微風にわやなすもあしからず附心は薄月夜に梅の句ひる如くありたし情は心裏の花を

も尋ね眞如の月をも觀すへし北枝傳

て留の發句の事

さらしなや月に歌人の興添て見る

所謂下に言葉を添て聞様にすへし此内にある見ると云字を添て聞也又に留め留ぬ留の發句も皆如此心得へき者也發句に詞書の事

草庵の留守をとひて

衰老はすたれもあけす庵の雪 其角

總て詞書のある句は詞書と句と照らし合せて解すへし句の光りをかゝけんか爲に詞書は添るもの也詞書なくても有ても同し力の句は詞書を添るに及はすと知るへし此句などは詞書なくんは其意遙かに迷ふへし衰老は老衰と同じし年老おとろへたりといふ事也簾もあけすとは香廬峯の雪は簾をかゝけて見るといふ白樂天か句のたち入にして句意は此面白く降る雪に庵主の風情もなく簾もあけす戸障子も建籠たるはいかにや扱は老衰の至極なるへしと内に入て見れば左はなくて留守にてそありけるよされは此雪に風狂して何地へか雪見には出られし也といふ句也と聞くへし此句詞書なからんには晋子か自己の老衰を述懐する句と聞ゆへし然らば自他大に相違たるへし芭蕉翁の草庵を訪しなるへし猿蓑がし

發句を扇子なとに書やうの事

扇子なとの書やうも季に及はす大方鳥を書たり花を書た

りするものなれば其書を考へ侍るべし何にも知れぬ繪な
らは見立にて一作働くへし芭蕉後集

頼山陽或る時書に題するとして此は行書に書かねばなる
まいと獨語せり門生聞き咎め題書の字に行草の別を立
てねはならぬ秘蘊あるものにやと質問しけるに山陽書
し了るの後足下能くこそ質問したれ書牀に眞草行の別
あるは書牀に眞草行の別あるか如し其書の體に依て其
牀の字を題するは勿論の事なり足下等此事を知らざり
しならば今後は此の心得なかるへからすと戒めける

想古錄卷一

發句と附句の事

發句も附句も我家の汲には趣向と句作の差別ありて趣向を
先にし句作を後にする事はたとへば花の題をとりて雪か
と見るは趣向にて袖打ち拂ふと姿をつけ志賀の山越と詞
をまはすそこを句作の上手とはいふ也

發句と附句との分別は極て物數寄有るへし

鼻紙を扇子につかふ女かな 信 徳
是は盃ほしかぬるかなと云句に附句也もと附合の道具な
るを珍らしとおもへるは未練なるへし

河舟やみよしかくるゝ蘆の花 中 翁

是は水邊に附合の句なるを一句に優ありとて發句に直せ
し也蘆間かくれに乗越す舟工夫に落すしてひゝきたしか
也

趣向にかゝはる人はすへて發句成かたし風景を知る人思
ひ出多し

寢られぬ夜思ひ出せし句を書とめて朝に成て吟し返して
見れば句のふりも聊かはりて心も互ひあるやうに覺へぬ
るは陰氣陽氣の間か句の浮き沈み覺束なし莊子に陽の字
を喜ふ陰の字を怒ると訓せしも一氣のはこひ成るへし
物思へとは誰教へけんと詠まれし夕へくの思ひせめて
哀深し起て今朝また何事をいとなまんとよみし朝鳥心の
動靜にかけて句ことの起點を働らきぬへし前略木曾路の
秋を語けるにも疊の上にては面白からぬけしきを言出け
りすへて景に合せては情負る故情をこらして扱景を尋ぬ
るか此道の手成るへし富士を見ては發句のちいさく成ぬ
るは心の及はざる故也

發句附句ともに句の主成るへき事得かたき也萬歳扇に名を
はるやうにて作者の名毎にあれども一牀を立されは其名
しかと定かたし只持扇のやうに名を張付すして慥なる句
の主といはれん様に心得へしすへてありていなる句にて
秀逸なるは妙を得し上手也

自性といふ題にて

安心の僧も悲しや秋の暮 枳 風

或僧難して云安心の上に悲みなし悲しめ秋の暮といはゝ
物我の隔なく天地一己の自性を云る句也 其角雜談集

發句豎横並狂句仕立の事

縦句 五月雨をわつめて早し最上川
傳に云口中に曲を含む事勿れ心中に曲を捨ることなかれ
譬へは

あなたふと八幡の森の時鳥

といふ句は口中の曲なり杜鵑といへるは心中に曲あり此
句もわつめてと虚なし自然と其趣味顯る是れ談笑也最上
川は閑清也曲流は一句の中に隠れて表に顯はさす五義備
る者也豎の句は言葉分て吟味すへし祝儀佳節其外表立つ
時皆是縦をよしとす縦の本歌を引くに

まかなくに何を種とて萍の

波のうね／＼生しけるらん

横題 すゝ掃や又この茶屋も不挨拶

傳云句牀作の時は上の五文字に其句の題を顯し心持にて
流を含み序に曲の心を包み篇にして押へ綴るなり譬は

萍の何を種とてまかなくに

生しけるらん波のうね／＼

如此五義篇序題曲流と全くつゝけて云に限らす顛倒して
も常牀の句には句中に五義を備へ侍るを第一とする也

狂句 景清も花見の座には七兵衛

傳云題を七文字に置き上下に篇流と備へ篇に序を含み題
に曲を綴るを狂句の句といふ此類右備れる句のみに非ず
曲流序篇題とも綴ることは作者の器量によれるへし譬は
まかなくに生しけるらん萍の

波のうね／＼何を種とて

如此自在に綴らるゝなり幼住庵著書

豎題横題の事

題に豎横といふ事あり月雪花時鳥雁鶯鹿紅葉の類皆々豎題
なり是れ本歌の題なればなり

歌連歌にせぬ題はみな俳諧の題なり角力踊ゑひす講の類
是をは横とはいふなり

近年世上みたりに題ならぬものを句作り芭蕉流の發句と
ていたす人あり是れ以ての外なり總して題は芭蕉の時荒
増極りあり紀行・挨拶・或は即興の句は格別の事にして
草の發句なり口傳

落題詞書の事

題の歌の第一の難也たとへは、山花といふ題にて花は讀た
れと山の心なきか落題也されどこれらはあまりなること
にて初心といへともこれらを落すことはまれなるへし、
山の花盛とも侍るに山花まてはよみて盛の心を落したる
やうの事はある也まして彼の結び題の内に眼目とよむへ
き文字を落すたくひ初心の歌には常のこと也よく心を付
へき也

八雲御抄に經信ツ池月ツといふに岩間の水とよみて用
池、俊賴は雨後野草といふに淺ぢふとよみて用野ニたり
野亭はすゝのしのやなといひつればあり山家を軒端の杉な
と讀るはその景色を思ひやる也あなからち題をよみいれん

とはせず是を聞て歌心得ぬもの落題は一定ありぬへきことと也よく思ひわきくまふへし八重垣

詞書の事

詞書の歌は題の歌とは聊か心持かはれり然る故は題の歌は題の上に合せて題をそらさぬやうに讀也

詞書はその歌の子細を詞に書て歌の心を詞書に譲り又は歌の心を詞書にてたすくるやうにする也但しそれも詞書の中に題あるは題の歌の詠格也

詞書の中に題あるとはたとへは新古今に詩をつくらせて歌に合せ侍しに「水郷春望」といふことをかやうのたくひなり

詞書の歌とはたゝその歌の故を詞に書たるやさて又詞書には、梅花とありて歌には花とはかり讀たる類多したとへは新古今に

二月まで梅花咲侍らさりける年讀侍りける

知らめやかすみ空を詠つゝ

花も匂はぬはるをなけくと

是詞書には梅とありて歌には花とはかり又古今集に

やよひのつこもりの日雨のふりけるに

藤の花折て人につかはしける

なりひらの朝臣

ぬれつゝそしゐて折つる年の内に

春はいくかもあらしと思へは

是詞には藤の花とありて歌には雨も藤も花もなくぬれつゝそといふに雨をもたせ折つるに藤花をもたせたりこれを詞書にゆつるといふ是則詞書の歌の一体なり

されど初心の歌にかやうに讀んとせは一首ぬけからになりて落着しかたき歌になるへし能々心つくへきこと也此外時にとりての即興景望の歌人の許に遣す歌などの題にてよまぬ歌はみな詞書たるへし尤其時の興景氣は即題なからなにゝと題を定めて詠るとはことかはるへし凡て初心の詞書は歌に讀へき趣向をことゝく書あらはせるゆへに歌は詞書の再釋のやうに聞へ詮なきことになる也能々心つかひすへきなり八重垣

落題詞書の事 落題詞書といふは題發句には落題あるへからす若し秀逸に落題の句ある時は前書あるへし證句あり

臘八に

はらわたを探て見れば納豆汁 許 六

是落題なり此發句最初は

臘八や腹を探れば納豆汁

といふ句なり芭蕉に呈す芭蕉曰是秀逸也然れども臘八にては句の勢ひぬるしとて句作り直し給ふ是落題詞書の格なるへし、又炭俵集に大根引といふ事をと前書して

くら壺に小坊主乗るや大根引

此前書は大根引といふこと題になきゆへ後世の嘲りを恐れ給ふて也是より大根引は題に用ふ又

甲戌の夏大津に侍りしをこの
かみの許より消息せられけれ
は舊里に歸り盆會をいとなむ
とて

家は皆杖にしら髪の墓参り

是前書にて題を入られたり

題にも又季にも節にも用ひかたしよつて前書を加へて盆
の句とは成けり是にて盆参りは扱ひにて秋になるなり又

深川にて月見の興を

催して

蝶鳥のしらぬ花あり秋の空

これ前書にて月賞翫を聞かせたる句なり

歳且無季格

明る夜のほのかに嬉しよめか君 其角

君か代にあふや狩野家の福壽艸 許六

これ等皆落題なりいづれも前書にて斷りたるものなり此
習をしらす當世新味なとて題を入れす謎のやうに句作
りて聞えぬを手柄とおもふ族多し以ての外的事なり師説
習を聞かぬゆへなり歌にも落題はいづれも前書あるよし
諸書に出たり先の大根引の句は前書にて題を極め其餘は
前書にて題を聞せたるものなり能々考てめつたに致さぬ
こと知りたまふへし奥儀秘藻集

姿情と俗情の事

姿情の事 古より論多し姿を先きに情をのちにすといへる

も初段のことなり情をさきに姿をのちにすといふは尤い
はれなき事也姿情は天地の如し前後の論にまとはすもの
ゝ姿と己か心と相合する時を一句にむすひて例の自己の
ものゝ姿と己かこゝろと相合する時を一句にむすひて例
の自己のたのしみとすへし

ものゝ姿と己か心と相合する時を一句にむすへとハ俳諧
の出る雅境をしめされしならん心得へし

偏到とは情のみによるを情到といふ是俳諧の風情のみに
いふに同じ又姿のみによるを景到といふ是俳諧にいふ風
姿なり

姿を眼前に見るかことくにいふなすものを風姿といふ
餘情は深きにしくはなし一句のよしあしもたゝに餘情の
浅深によれるなり通情は尤句々にこもるをよしとす親子
明友の情はさらなり春の花のはなやかに夕の露のもろさ
なんといつれか通情にあらずといふ事なし情はあしゝと
いふは己のみの情にして聞人なきをいふ情をさらふ證句
末にのす

情とは言外にあふるゝの意をいふさひしきといはすして
さひしき事かきりなく涼しきといはすしてすゝしきおも
むきをいふ

すへて句を案するには趣向より入るはよしとす詞道具よ
り入るをあなかしきはす又好むへきにもあらずいかん
となれば情薄ければ也

俗情の事 俗情といふはこゝろのきたなきをいふ外面は釋迦孔子をも奴僕のことくに思ふ形容にて口にまかせて人をのゝしり内心は色に耽り妻妾のはたしに苦しみ金銀をひさぬるを專一となす虎皮羊實のものは是也これらの人口才を以て言つゝむとも終には俗情を吐出すものなり
 詩歌連俳ともに思ひを述るものなればつゝむにいとまなく十七字の上にてわか俗傷を見透かさるるはつかしき事にあらすや

竹窓三筆云榮名厚利は世の同じくあらそふ所也これを求めて得へからすこれを退くるも亦得へからす求めて得へからさる事は人よくこれをする退くるとも亦得へからさる事をする人はまれなり若これをする人は俗情をまぬかれん

あの雲は稻妻をまつたよりかな 芭蕉

鹿の音に人の顔見るゆふへかな 一髪

かくのことく姿情の前後にかゝはらさるを知るへし

谷川や茶袋そゝく秋の暮 益青

今植し竹に客ありゆふ涼 柳居

これらにて風姿を知るへし風情の句は次の句に見るへし

枯枝にからすのとまりけり秋の暮 芭蕉

寂しき情かきりなし

渡りかけて藻の花のさく流かな 凡兆

すゝしき情かきりなし

野さらしを心に風のしむ身かな 芭蕉

捨身掛命の行脚をおもひ立たまひし時の句なりこれら皆通情にしてきく人腸を断なるへし
 秋はまた七日の夜の明やすき 猿 雖

中ゝに子をこそおもへ秋のくれ 肅 山

これらの句にて通情を知るへし

うらやましおもひさる時猫の戀 越 人

去來抄云芭蕉伊賀より此句を書贈て曰こゝろに俗情あるもの一たひ口に不出といふ事なしかれか風雅こゝに至りて本情をあらはせりとなり

たとへ通情なりとも俗情をさらふ俳諧寂癡拔

換骨の事

換骨とは詞同しくして句意のかはりてあるをいふなり

ものゝへは唇寒し秋のかせ 芭蕉

唇や蓼喰ひしあとの秋の風 許 六

これ換骨をしるへし

鹽鯛の齒くきも寒し魚の店 芭蕉

聲かれて猿の齒白し峯の月 其 角

其角曰此後反轉して猫の齒白しとも海人の齒白しともあれ發句の一昧を備へたらんには等

類の難ゆめゝあるへからす一句の骨を得て
あまき味ひになつむへからす

人の親のからす追ひけり雀の子 鬼貫

雀子を巢へもとしけり人の親 丈馬

これらもまた換骨なしたる体也

人の親の焼野の雉子打にけり 曉臺

是は前の鬼貫の句に反轉なしたる体にて換骨
ともかはれり寂業拔

同巢の事

同巢とは趣向は同じ意にてたゞ形容をいひかへたるまでに
て手柄なき句をいふ

葛の葉のおもて見せけり今朝の霜 芭蕉

朝顔の裏を見せけり風の秋 許六

去來曰同巢の句なるへし

桶の輪やきれて啼やむ蟋蟀 昌房

石くえて歎啼やむ月夜かな 居行

これらの句はものにうちおとろきて啼やみだ
る趣は同じこゝろ也たゞかたちをいひかへた
るまでにてこれを同巢とも又同窠ともいふ兄
よりうまれまさらむ事かたかるへし

したらくに寝れば涼しき夕かな 宗次

此句は目の句也したらくなる姿にてのけさま
にいねて四躰をあらはに出したるさま也これ

を他より見て別に魂を入れて一句となすとき
は

人酔て蚊にくらへとの寝さまかな 柴居

かくいへは形容は同じ事ながら自他のわかし
にて句意天地懸隔なれば同巢反轉の類をまぬ
かるゝなり

等類の事

翁曰野明か方に残したる

清瀧や波にちりなき夏の月

此句に似たる句この頭園女か許にて

しら菊や目に立て見る塵もなし

と作りぬれば清瀧の句を案しかへたりとて

清瀧や波にちりこむ青松葉

去來曰和歌に作例を證歌に引るゝと聞ぬされと等類は是
を憚る俳諧には等類は云に及すかの作例も事により用捨
あるへし

猿蓑撰の時

面楫よ明石のとまり郭公 野水

此句は師の野を横に馬牽向よと同じ先師曰野水か句は明
石の郭公を吟す等類遁るへし答曰明石の郭公と云へる分
にては和歌に詠する所とひとし一句たゞ馬と舟とかはり
侍るのみ是を俳諧ににらみたる場合は面楫よと乞たる船中
の眺望に有是また師の牽向たる馬に蹴出されたり句主の

手柄なし先師曰句のはたらきに於ては一步もはたらかす
明石を取物にして入れは入なん撰者のこゝろなるへしと
なり終に除き侍る時

月雪や鉢敲名は甚之丞 越人
此頃伊丹の句に

彌兵衛とはしれとあはれや鉢叩

といふ句あり越人か句入集いか侍らん先師曰月雪とい
へるあたり一句働き見えてしかもすかたありしれとあ
はれやと言下せるは格別なりされと鉢叩の俗鉢を立て俗
名を以て句かさり侍れば尤遠慮有るへし

桐の木の風にかまはぬ落葉かな 凡兆

其角曰此句は先師の檜の木の花にかまはぬの句の等類な
り師の檜の木は多く風景を見盡しねり出したる一句なり
凡兆の一句はやうく檜の木にとりつき指頭に拾ひあつ
めし句なり凡兆曰ことはつゝき似たるのみにて心かはれ
り去來曰等類とは言かたし同巢の句なり
許六曰

朝顔のうらを見せけり風の秋

といふ句せしを丈草にかたりければ翁の面みせけりの葛
の葉の句の作例たるへしといふ予思ふに翁の句は葛のう
らといふ古歌の詞をかへしてはしめて葛のおもてとはい
はれたり是をのつから別なり葛の裏といふ事古今歌俳諧
共別なし予の句くすのうらに對してあたらしみを言たる

句なり曾て翁の句に類することなし

外郎買に荷は先へやる

といふ句せしに退て思ふに不玉の縦尾集の俳諧に

荷は先へやる堂のちか道

といふ句ありこれ等類なり荷は先へやるといふ字にて下
はいかやうにも成るなり此句の魂は荷は先へやるといふ
事なり

舟のたよりに荷は先へやる

丁稚をのせて荷は先へやる

支考曰順徳院の御製に

ちくま川春行水はすみにけり

消て幾日のみねのしら雪

心敬僧都の連歌に

水青し消て幾日のはるの雪

といへるは淺間敷等類とのみ思ひ侍りしか澄は情なり青
しは姿なりと連歌師の申されし舊門俳諧語錄

雜句の事

雜の句に三ツの義あり

一ツには二季兼たる句、二ツには當季のもの二ツ三ツ取
合せていつれの季を題とも分ち難き句、三ツには當季
一ツにても其季を題とせず其所を題としその事を題とし
て其季はあしらひものに仕立たるとなり名所にもあれ何
事にもあれ其題の爲に寄たるは雜句にあらずして題詠の

格にはへる

雑の句と無季の句世上都て同事に思へり差別ある事を知るへし

無季の句戀旅名所離別讀等には稀に有るへし態と好てすへからすいかにしても季の詞入かたき時は此格も然るへし以上師説録

祝言句の事

祝言の時發句脇第三の句なとに仕様のことは、櫻、花、梅、柳、松、竹、花を待、花開、めくむ花、花運し、木の芽たつ、若葉茂る、牧の屋、薨重なる、軒のつまゝ、門道の行來絶えぬ、里の行かひ、駒放ち置此の如き類然るへし祝言の時松は千代千年なと、限りを定めざるかよし去なからかたつくへからす、花を植添る小松うへ添るなと然るへし末をかへることよし、夕暮、夕霧、雪消、露落、花散、木葉散、加様の事とも然るへからす

朝露、明方の雲、今朝、朝、加様の事にて然るへし

祝時の時上の句に句ひの心得あり發句脇第三同前宗祇云祝言の發句に「かな留候はんに脇のはしめの詞しきしまの道なとやうの事すましき也かなしとき讀つゝけらるゝ故也

又脇の留りにうれしきなと留候へはかなしきと文字ならひてあしく候すへて玉柳なと詞心すへき也、玉やなとといふにもまれ候へはなり是にて萬つ心得忘るましきこと

はり成るへし以上俳諧埋木

祝言の發句

芭蕉曰祝言の發句に忘れても千とせ千代なと限りたる句あしゝ多くある事なり師説録

發句の切字の事

發句に切字のこと諸家まち／＼に論して初學の惑ひ少なからず假にも切字なきは發句にあらずと頑にをしふる輩ありて切字の入れ所なきをも押て切字を入むと却て句の意を損ふものあまたありとそ當時は大抵その心を得たれとも先予か聞傳へたる切字の口傳をあらまし爰にしるす

大鏡

新々式に切字の事は初心を助る爲なれば宗匠憐みて早く傳授すへしと云々

先發句は混沌の間より太極の一氣の動き出たれと陰陽の姿の分れされは發句に切字を用ゆる時物二つになれば初めて天地陰陽となる事なり切字を用るは物に對して差別の義なり切字といふは發句のたけ高からむ爲に切字を用ゆ平句と姿を分んか爲也中・畧

切字といふは切る事にはあらずキレ字にてなくセツ字といふもの也蕪村か斷字といふもよからず「蕪村嘗ていふ我門にては切レ字とはいはす斷字といふとなり」切字といふ譯は至て重き大事なればあらはに書あらはしかたし深切大切なといふ詞にてもさとるへし婚姻祝義の句に必ず

セツ字を入へしセツ字かなければ陰陽が分らず彼と是とを合せて夫婦合鉢の事なれば一本立にては濟ぬか故也夫婦婚姻はと重き事のなきに切字か入らぬはならぬといふを師弟は三世の縁なれば切レ字を入ぬか芭蕉の微意なりとはあまりにつたなきいひ事なり夫婦に切字を入れるれば切れるといふて一本立の句をするやいかに初心の輩かやうな妄言を努々誠と思ふへからす同書に又曰連歌本式傳に切字は格字なりとあれば切字のなきはしかるへからす切字は發句の格なれば必あるへし芭蕉の常言に格は守るへし格中に居るは狹し格外に走るは法外なり格を得て格外に遊ぶへしと

何丸考此論をいかゝ心得て斯はいふを格といふは切字格字の格とは大違ひなり格字といふは假令は格目格子などの類にて定りたるを打やはらけてセツ字を格字とは謎言なり格中格外の義は發句附句によらず一座々々の捌きの上にある事なり必是と混すへからす已上大観

世に切字といふ事まことの童蒙を導く爲こそあれ元來いといふかひなき事也其切字といふ中にはテニハもあり又テニハならざるもありて法としかたき事とも也されと多くはテニハなれば別にこれか切字としてしるにも及はず(俳諧天爾波抄)を能く見てテニハたによく働らかは自ら切字の用たりぬへし切字として教ふる事童蒙の爲とはいへとも其故あり其故は初學の者され字はなくては是非叶はぬ

事と思ふより強て切字をたち入るゝ時はかへりて心ならぬ詞も出来るものにて後に至りても其くせやみ難きなり只々句のきるゝといふは一句の心の首尾する事をいふなればゆめゝ文字詞なとかたちにかゝはりてきるゝにあらず古人もしかあればこそ所謂切字と稱するものなき句あけて數へ難し今之をさとさむ爲に七部集中切字なき句二三句を掲げてに波抄

梅若菜まりこの宿のとゝろ汁 芭蕉
有明のはつゝにさく遅櫻 史那
年の暮たかひにこすき錢つかひ 野坡

切字は助字也咄しにも切字あれとも一句の塩梅を知らず切字とて極めて用ひていろゝの俳諧といふ物に書たり尤も初心の爲なりこの丁簡まいらぬうちは俳諧の成就にあらず此境偏に大事なり俳諧秘記

切字は和歌のテニヲハと異なり發句に限りたる一派の句格也

發句に切字と唱ふる者あり云々のや文字云々のかなの類是なりこは發句に限りたる一派の句格にて歌などの用格とは異なる者なれば昔より唱へ來れるまゝに切字と云て事足るへし

(中略)我御國の調は靈妙不可思議の活物也後世にテニヲハと唱ふる者は自ら其詞に備りてある故真心のまゝに云出れば知らずゝ自らに叶ふ者なり若しことわりに違ひ

て逆さまにいふ時は其語意聞へぬものになる其聞えぬ詞かテニヲハに外れたる者なり聞える者は皆テニヲハにわへる者なり然るに此テニヲハといふ者を餘りに大事かりて之に叶へん／＼と深く拘泥する時は反て詞の活動を失ふへし云々

一體格といふ名は天地碎けぬとも不變の物をいふ名なり格に變わらは格に非らず此遁辭を設けたるにても盡くは格に合ふへき者ならぬを知るへし故に歌の中にも眼の聞ける人は此テニヲハなといふ事はさばかり大事と思はぬ様也

近來玉緒八衢などの説を咎めいへる書とも世に出来たるは靈妙の言語に定格を云ひて活物を死物とせるひかこと通れかたきを知るへしといへるにも其一斑を思ふへし歌詠みすら此の如し

況して發句の大事はいかてかテニヲハにあらん大事は只語勢の自らなる者の妙にあるをかし決して彼の死則などに拘泥すへきものに非らず

古池や夏草や梅さくやなどの文字は玉の緒にいへる疑ひにもわらずやすめにもわらず云はゝ呼かけのよにかよふやと云はゝやゝ近き者と聞ゆれと夫とも定かたき者なり又哉と云詞は歌の上にては皆歎息の意をこめて古言にかもといふ者と全く同じけれと發句の方にては必しも歎息とは定めかたき者多しものと發句の切字といふは一種格別

に設けたる者にて歌と同様に論すへき者に非らず云々は語勢を助け句を調和するの具に過ぎず故に切字といふより外に名もなき者なるをよくもさとらずして彼の玉緒なとのせめ道具に拘泥し其格に叶へんとするは杓子定規も甚しき者にて笑ふへき事なりかし以上作法

切字五答の事

芭蕉翁切字五答

嵐雪問

芭蕉答

切は盡也

野坡問

全

切は節也

支考問

全

切は一句成就也

去來問

全

切は寄也

惟然問

全

切は四十七字各切字也

切字は論といふへからす問答と云ふへし切字皆問答の心なり一句も問答なり

切は寄也の寄の引歌

なかれてはいもせの山の中に落る

よしの川のよしや世の中

口訣になかれてはなからへてはの中略也妹背山は二ツの山の名なり其中を吉野川の流るゝと云ことなり寄所は必ず別るゝ切也天性の理也爰に別ありて夫婦の別論ある道理也天地も合して天なり地と下る日月萬象又々如斯天は清くして上り地は濁りて下るといへとも人なき時はいかんそ此理を知り弘めんや此人よく切の理に

かなふ深意思ふへし

切字の事はテニヲハのと、のひは皇國のならひにして歌に
まれ發句にまれさらぬ詞にもおのつからそれはかりて定
かになんあれは詞の本と末とをかなへ合るを近き頃初學
ひの輩らテニヲハといふへきを切字とのみいふめり切る
といふは其意の留る所をいふされは留るといふも切る
といふも同じことなりそかに餘情をふくめて「なく
に」なしに「して」にて「かに」「て」ましかは「ものを物
をの意のを」「りせは」などにて留りたるを切るとはいは
す餘情をふくめて留たりといふ餘情をふくめて留れるは
おのかまゝにいひ残すことならされは歌の例を以て歌は
詞長きゆゑ切るゝ格重なるは常におほかり切るゝ格いく
つ重なりたりとも意は下へとほりて切るゝ所はたゝ一と
所なる也發句は言葉みしかき故切るゝ格の重なることは
いとすくなし是も切るゝ格かさなりたりとも意は下たへ
とほりて切るゝ所はひと所なる物也切るゝ格くさゝゝわ
れとも切るゝやは多く句つめにゐるものなり句つめとは
歌は一遍□ □二序□ □三題□ □四曲□ □五流□
△發句は △序□ △二題□ △三曲□ △

此△印の所を句つめといひ此□印の所を句の中間といふ
也歌は遍序題曲流の五ツ發句に序題曲の三ツにて歌の三
十一字の意を發句十七字へこむればかならず意の殘る物
なれば脇を遍流とす脇は發句の餘情を付るものなれば發
句のテニヲハとゝのはされは余情聞かたし歌も發句も句
つめにて切るゝしらへさまなるものにて句の中間に切る
ゝはまれなり

切るゝやは切字を上にて受てやといふ切れ字とは

くすずじつぬふむんゆるりさ過去
現在

是を切字といふ也此切字を上にて受けて

くや すや すや じや つや ぬや ふや
むや んや ゆや るや りや さや しや

といふを切るゝやといふ歌には切るゝやを「とと受て下
へつゝきたるか多くて切るゝやにて切たるは少なし歌と
發句とを引合て見す切字は「外よりかゝる時のむすひ詞
なるもの也

くや 應ゝといへたとゝくや雪の門 去來

是は下より上へうちかへす意にて「雪の門應ゝ」と
いへとたゝくやと切たりかく打かへすを廻りテニヲ
ハといふなり

新古今おのか妻こひつゝなくや五月闇

神なひ山のやまほとゝきす

是もうちかへして「五月闇神なひ山の山時鳥おのか
妻こひつゝなくやと切るゝ意也

すや 狼の跡ふみけすや濱千鳥 史邦

是も濱千鳥狼のあとふみけすやと切たり

貫之集霜かれに見へこし梅は咲にけり

春には我身わはんとはすや

是も上にけりと切る、格あれとも意は下へつゝきて

「すやと切たり歌は切る、格重るはつねに多かり發

句は切る、格重さなれるは稀なり

すや 枯はてゝ霜に耻すや女郎花 杉風

じや 老か身^上にちる^下を^中はみしやけしの花 關夕

つや 我等しきが宿にも來つやけさの春 貞徳

ぬや うつり香の花もちりぬや衣かへ 麥雨

ふや ひと聲の江に横たふや郭公 芭蕉

むや 順禮もよ所にをかむや鶏合 其角

んやは發句みえされは歌のみをのす

古今集波のうつ瀬見れば玉そみたれける

ひろは、袖にはかなからんや

此「んやといふは「波のうつせ見れば玉そみたれける

ひろは、袖にはかなからんや。やは其玉をひろふとてもは

かなくもあらじとうらへ意のかへる「やはの意也すへ

て「んや「ましや「めやといふは皆うらへ意のかへる

「やの意なるもの也

ゆや 駕舁の肩に覺ゆやころもかえ 乙由

るや 霽の雨しるや土筆の長みしか 闇指

此句は句の中間にて切たりいと珍らし此しるやと切る

「やの上に受る「るは「つる「ぬる「ふる「むる

「くる「する「ける「あるなどの類ひの「るにはわら
す切る格の「るは

知ル 見ル 降ル 散ル 契ル 守ル 移ル

歸ル 渡ル 光ル 鳴ル 照ル 折ル 宿ル

樵^コル 回^{マゲ}ル 取ル 賣^ウル 遣ル 配ル 語ル

などの類ひ字のみに切る、格の「るを持たる「ると心

得へし此類ひの「るを「りといふはつゝくる時也「此

るはつゝさもす切れもすと心得へし又「るゝといはる

ゝ「るを

流ナカル 亂ミタル 別ワカル 思オモハル

隠カクル 顯アラハル 頼タノマル

といふときは切る、格の「る也是を「るゝといふ時は

つゝく格也

るや 氷よりさきへなかるや初こよみ 蓼太

是も「初こよみ氷より先へなかるやと切たり

りや 前^下うしろありや火桶^上の撫こゝろ 存義

きや 枯尾花まねく力もなかりきや 勇音

此過去の「きは「けりの反の「きにてなかりきやは

なかりけりやといふ意也「けりと留むへき時一字あ

まる時は過去の「きにて切へしそも又上よりのかゝ

りにしたかふへし

過去の「きは元祿の頃の發句に相見へすすへて發

句にはいとゝ少なし

しや 中 ひよろゝと 下 猶露けしや 上 女郎花 芭蕉
猶といふ詞の里語「ヤツバリ」「イヨゝゝ」の意也又といふ意にはあらず

歎息のやのこと歎息とハめてたき事にも悲しき事にも能きにもあしきにも歎息することわれは其心にて歎息の意につきてやと切る意と心得へしすへて歎息のやにて切るゝは「やの」「やなの意とみるへし」
歎息のや

行秋の猶たのもしや青蜜柑 芭蕉

是は行秋の青みかん猶たのもしやと切るゝ意なり此行秋「のといへる」のに心をつくへし青みかんといふへかゝる「のなり歌にも此例あり是ホの「のを味ひてみるへし」

すむ月や髭をたてたるきりゝす 其角

是も髭をたてたるきりゝす其髭まで見ゆるはすむ月やなと歎息の意につきて切るゝ意なり

名月や桔梗刈萱をみなへし 史登

是は桔梗は桔梗と見へかるかやは刈萱と見へ女郎花はをみなへしと見へわたる名月やなゝと歎息するの意につきて切たり

捨かぬる世のありさまやす拂 夢太

是も「す」拂ひすてかぬる世の有さまやのと切たり是らは世の有様といへるが歎息の意也此やを歎息の

意につきて切るゝやとしらざるものは「やとのみいへれは切るゝと思ふ故誤ることいとゝ多かりき」
なかむるやはよひ出しのやともいへと歌も發句も詠めをもとゝすれはなかむるやといふへし

歌のなかむるやは國郡名所地名又古くいひ來れる例を以てす

發句のなかむるやは賞する意なるもありて歎息のやにまかひ安けれと詠むるやは切さる物なればその下には必らず切るゝ所あり又詠むるやの下に動かぬ詞にて留りたるは十八十九二十の格なる物也詠むるやには此△印をつく

行年や親にしら髪を隠しけり 越人

是はなかむるやにて切れされは下はをよりかゝりたれは外のかゝりにてりと切たり

六月や峯に雲おくわらし山 芭蕉

六月やわらし山峯に雲おくときれたり是も外のかゝりにてくと切たり

名月や海も思はず山も見す 去來

此は賞するなかむるやにて外のかゝりなればすと切たりかくの如く切るゝ格重なりたるはすへて下のすにて切るゝ也

十九てにはの句

名月や池をめぐりて終夜見る 芭蕉

是も賞翫のなかむるやにて外よりかゝりて夜と留りたる下へ「見ると二字入てテニヲハを合て聞く意にて十九の格也

動かぬ言にて留りたるは一字二字三字迄に限りて言葉添へて聞く意なる物也これを心の切ともいふ也芭蕉俳諧秘記の中に

十七字のテニヲハは常也十八十九といふは發句の跡へ一字二字入て聞意也尤も心の切ともいふ也とあり十八といふは十七字へ一字入るれば十八といふ十九とは二字入るれば十九となる發句の跡とは十七字の意の留りたる下を跡といふ又まはりテニヲハにて上に語のつゝかざる所あるは

疑二十の格

山や花かきねゝの酒はやし 龜洞

是は下より上へ打かへして聞く意なれば「かきねゝ」の酒はやしは山や花○○○ならんと三字入てらんとテニヲハを合せて聞く意にて二十の格なり余情も四字の詞はとゝのはさる物としるへし

變格 枯枝に鳥のとまりけり秋の暮 芭蕉

是も秋の暮枯枝にからすのとまりけりと結ひて切りたり此脇は「鉞かたけ行霧の遠里の人といふ此發句はしめは「枯枝にからすのとまりたるや秋の暮といふ句也然るをある夜の茶話に季吟素堂桃青三人りし

て「枯枝にからすのとまりけりと詞をつゝめてわらはよからんわきも人といふても「鉞かたけゆくといふに人はあるへしとて「鉞かたけゆく霧の遠里と言葉をつゝめたりといひつたへぬ是より正風のおこれる也

十九格 是はゝと計花のよしの山 貞室

是もはかり花とはつゝかざる所に心をつくへし「花のよしの山是はゝとはかりなりと留る意にて十九の格なり以上饒舌録

十九てにはの格

眉掃をおもかけにして紅の花。 芭蕉

是はてよりかゝりて花と留りたる下へ「さくと二字入て「くとテニヲハを合て聞く意にて十九の格也然るに此句をうひ學ひの輩十八の格とて「にしての下へ「やと一字入て聞く意といへれと意のつゝく間へ詞を一字入るゝことは例なき事也俳諧秘記の中に發句の跡へ一字二字入て聞意にて尤も心の切ともいふ也と有

眉掃を俤にして。紅の花

と見る時は「てやとうたかひのやを花と動かぬ詞にて結ふ意にて花と留りたる下へ又詞を添て聞く意也「うたかひのやを添ふといふことは例もなしことわりにも不及ひかこと也是はやとのみいへは切るへも

のと思ひておのかまゝに「やとわらはよからんと何の差別もなく「やとせる物とおもはる是は上へ」「何とてといふ言を加へて其意をせる歌あるをわしく心得てつゝ意の間へ」「やと入るゝはテニヲハのとゝのひをしらぬ人のいたつらことなるへし

目に青葉山ほとゝきす初鯉。素堂

是は目に青葉。山ほとゝきす。初鯉。といふ意也此句はとくゝの句合の左の句なり是に自らたはふれに判の詞あり

左の五文字はの字なくとも目に青葉耳に時鳥口に鯉初とは聞へ待るへし」と

あれはこゝにはバの字を畧せり句意は卯月の空うらゝかにのとけき日影の折からのけしきを余情にふくませたりされは鯉と留りたる下へ「よしと二字現在のしを合て聞く十九の格也此句を聞書といふものに三段切とある故うひ學ひの輩はいとむつかしきやうにいふめれとも歌には二段切三段切といふことなし右の句切るゝ格三つかさねたれとも切るゝ格なから意はつゝきて切るゝ所はたゝ一ツなり歌には切るゝ格をいくつもかさねたるは常に多かり

古今 君やこし我や行けんおもほへす
夢かうつゝか寝てかさめてか

「君やこしとうたかひの「やを過去のしにて結ひて切

や行けんとうたかひの「やを「けんと結ひて切「おもほへすと切

切るゝ「四つ重ねたれとも五句のつめにて「覺て「かと切たりかくの如く切るゝ格重なりても切るゝ格なから意は下へつゝきて切るゝ所はたゝ一とつなり是はなそらへて切るゝ格重なりても上よりのかゝりにしたかひて「詞の「本と「末とをかなへ合する時は嫌ひなしと心得へし此歌切るゝ格を七つ重ねたれとも切るゝ所は只一つなり發句に十八十九二十の格あればいかやうにもいはるれば是らになそらへてしるへし

新古今 夜や寒き衣やうすきかたそぎの

行あひの間より霜や置らん

是は疑ひのや三ッあり是らになそらへて知るへし切字の事切字は深切と云こと也發句の眼目にして一句の魂を分明に聞へさせる語絶の文字也切れる切れさると云事に非らず切字十八字を父母と定む事は神代の昔男神の歌も十八字女神の歌も十八字佛道には眞言宗に悉曇の十八章に數多の文字を捌く是らを證據として十八字を切字の父母とせしなり左れとも十八字の切字あつて後に發句出來たるものには古哲の發句に自然と語絶の文字是は是れあれはあれと見出して後人の教の爲め先哲の集られたるもの也櫻の戸

切字十八字とは

かなもかなや現在のし未来のしはね字か
けりよそつせすれ畢ぬへけ
かに

右十八章諸抄異説多しといへとも正して是を用ゆ
切字十八字の外に

かもな けりな もなし やは かは
なりこそ いつ じ わり
たり

かなには

治定のかな 貯心のかな 褒美のかな
嘆息のかな 願のかな 當意のかな

時節のかな 吹流のかな 返かな
てにはかな

傘におし分け見たるやなき哉 治定の哉
野さらしを心に風のしむ身哉 貯心の哉
白露をこほさぬ萩のうねり哉 褒美の哉
色々のこと思ひ出すさくら哉 嘆息の哉
黄菊白菊其外の名はなくも哉 願の哉
梅か香にのつと日の出る山路哉 當意の哉
春立てまた九日の野やまかな 時節の哉
杜若かたるも旅のひとつかな 吹流の哉
吹流の哉とはいひ流して心の残らぬかな也

蓮の骨わはれは美女の尸かな 返哉

返る哉とは心のかへる哉なり

木からしの身は竹齋に似たる哉てには哉

やの事

名所のや とかむるや やすめや
口合のや 願のや はさみや
疑のや 捨や

名所のやとはいひ切て切字にあらすといふ説あれとも
切字也尤も名のやは稱美也

笠島や みよしのや をはつせや
須磨の浦やの類也これと呼ばいたすやと云
名所を二ツ重ねたる中のやは口合のやなり

かつらきやたかま すまやあかし
秋しのやとやまなとは名所をふたつ重ねたれば口
合のやなり

とかむるやとは

闇を見よとやの類

やすめやとは

やすめたるやなり是は言葉のやすみに置きたるはか
りにて心なきやなり
露けしや さすや夕日 ふるやあられ
立やけふりの類也
口合のやとは

物二ツいはんとて中にやと入て口合ひたるやなりたとへば

花や紅葉　月や花　すまやあかし

五文字より三ツめは口わひのやなり

願のやとは

聞はや　見せはやの類

捨やとは

やと願ひて言ひ捨たるや也

しらせはや　世をすくさはやの類

はさみやとは

とやともいふ

疑のやとは常にやと疑ひて下にらんと留る類也

花や散るらん　人や見るらん　春や立らん

宿やからまし　君やこし　秋や來ぬらしの類也

片疑のやとは　疑ひのやは大かた下にらん、らし、まし、かも、けんなどのか、へ字あり

片うたかひのやは　やとうたかひてか、への字なし
たとへば

ちりぬれは匂ひはかりを梅の花

ありとやこゝに春風の吹

白妙の雪や高ねの花さかり

重疑のやとは疑のやをふたつ重ねたるなりたとへば

君やこし我や行けん　夜や寒き衣や薄きの類也

疑ひ捨るやとは　人は知らすやの類也

をしはかるやとは　われなれや、人なれや、いとまわれやの類、なれやはなるや也、あれやはあるや也、

花なれや、月なれや、水なれや此や切字に用る也、なれやは成哉までに通ふ

すみのやとは　角のやなり三ツめは隅のやなり、おもふやと、しらぬやと此や五文字の角にある故なり切

字にならず

右七つのやの事は連歌の卷にも左の如くあり

五文字より三ツめは口合のや、五ツめは切るや、八ツめは中のや、四ツめは角のや、五ツめは八のや、また五ツめは疑のや、韻のやは捨やなり

三世のしの事　三世とは過去、現在、未來也

過去のしは　ありし、思はし、なかりし、見し、聞しなどの類なり々に通ふしは過去なり不切也　現在のしは　ふかし、とをし、多し、白し、青し、さむしなどの類なりイに通ふしは現在也切字也未來のしは　あるへし、なかるへし、あらし、なからし、見るへし、聞くへし、ちさるへし、なりぬへし、暮れぬへし、思ふへしなどの類也

濁りたるしは　せし、やらし、しるまし

言殘すしは戀し、ゆかし、うれしも同じ義也
 重ねしは 久し、珍らし、うれし、
 はなし、ものはなし、もなし、花もなし、影もなし 發
 句のもなし一物を云切る也第三もなしは治定せぬ心な
 り、かし、曇れかし此外散にし、出にし、花をし見れば
 の類切字にあらず皆助字也 以上俳諧秘記袖珍抄埋木等
 の留切字の事

不のぬとは「ずの一轉にて無の約りなる也」「咲かぬ」「散
 らぬ」「聞かぬ」「道あらはれぬ」「行やらぬ」「花さかぬ」「拂
 はぬ」是の類不に通ふを不のぬといふ切れぬなり

畢のぬとは既に成畢へる也「なりぬは成往」「たえぬは絶
 往」「しりぬは知往」「花ちりぬ」「鳥啼きぬ」「月晴りぬ此の
 如きにて切れる畢のぬといふ

かくれぬとは「きえぬ」「おきぬ此の如きの類は兩方へいは
 るゝをかくれぬといふ

エケセテチヘメレ此類不のぬ畢のぬ分かたし句意に心付
 へし

「きえぬ」「けぬ」「うせぬ」「はてぬ」「寝ぬ」「經ぬ」「とめぬ
 「とれぬ」「來ぬ」「居ぬ」「見ぬ」「干ぬ」「似ぬ此十三のぬの
 字不ぬ畢ぬ紛はしき也

證句 古足袋を四十に足を踏込ぬ

山寺の涅槃を過ぬ花さかり

また過ぬ峯の千部の蟬の聲

雪ふりて道あらはれぬ冬の山

雪きえて道あらはれぬ春の山

是は畢ぬとて切りたる也ぬの分別あるへし又言葉により
 て切れざるもあるへし以上櫻月、袖珍抄
 一字はね切の事

西行の庵もあらん花の庭

鶯の來て染つらん草の餅

如此ウに通ふは皆一字はね也「あかゝらん」「はやからん
 此類いか程もあるへし又らの字付て聞分かたきものもあ
 りおして知るへし」「らんは推量疑の詞也行末をおし量り
 て疑ふ詞也直ちに其事を疑ふには上にやの字等の指辭あ
 り其詞を結ぶ也」「けん」「なん」「せん」「みん」一字はね是に
 は切字なくとも不苦

さしのらんとは治定したる所をはねるをいふ也「物を見
 つけ」「聞つけたる所をはねる也」「霜やみん」「あすもねん
 「花を見ん此はね字切字也」「霜とみん」「花と見ん」「山と
 見ん」と譬にはねたるは不切「花とみんする」「霜と見
 んする」といふ故也

三字はねは多く連歌にありて初心の好ましき也「てん」「て
 は助字にして心なし」「けん治定して詞をゆるめたる也」「れ
 んれうと治定したる詞也」「せんはせうといふ心也、やら
 は「やらの略也」「ならはならはの略言也 全書

發句十八躰切の事

發句十八躰引てには幻住庵俳秘

挨拶切 中之切 自他切 無名切 玄妙切
 二字切 三字切 二段切 三段切 に廻し
 を廻し 大廻し 下知切 心切 句讀切

押字 抱字 重字切

挨拶切 いさゝらば雪見にころふ所まで

右挨拶は他に對するの二にして挨拶を天とし撥を地としていさゝらはは天也雪見にころふは地也すへて此類上下の言葉主客の隔てを以て一句の切とす是れ挨拶也

中の切 猫の戀やむとき闇の 朧 月

右猫の戀やむは言明也朧月は立春後にして物と物との七文字の中にて心言葉ともに替るを中の切といふ也

自他切 人に家を買はせて我はとし忘

右自他は物々皆自他なりといへども就中事隔りて人之家はと轉する所際立たる躰にて自他なり

發句に自他切なくて自他の違へるを嫌ふ

世を捨て樂しき菊の翁かな

此句に翁といへるは己か上とは聞へす菊作りの翁を他より見てよめると聞ゆ然らば樂しさうなりといはては聞えす樂しきとは自らの上ならてはいふましき詞なれば自他の混合せる者也又

足もとの蛇みて寒し茶摘妹

此句も茶摘妹を他より見ていへる者なれば寒けなりといはては叶ふへからず二句は作法抄

無名切 咲き亂す桃の中よりはつ 櫻

右無名は一句の立所なく何を切字とも用られずして吟聲に切あるを無名といふ其心は咲亂すも咲終るなるへし終ると五文字に置いて坐の句初櫻と綴るは理に落ち作意薄かるへしさるを亂すと心を隠くして無名となれり

玄妙切 春もやゝけしきとゝのふ月と梅

右玄は玄也妙にして心言葉も及はす詩に云歡見庭前梅與松なとかへして讀る心や含る是玄妙也

連歌玄妙の發句に

松白し嵐や雪に霞むらん

水寒し山や雪より詠むらん

月細し桂や茂り隠すらん

名そ高き月や桂をおりつらん

右しそやの分別と云是也はね申す内に切字三つあり現在のしやの字らん留り以上三つあり又その字入にてもやと切りはねても同玄妙の發句なり是によりてしそやのてにはとは申す也

過去 きのふより山の端遠し霞むらん

此發句も玄妙也以上連歌句中

二字切

秋冷し手ことにむけやうり茄子

右現在未來の隔ありて此二つ等しからず冷しは現在むけやは下知にして未いたらす此類二字切といふ

折る人は花にうらみん風もなし

花や引かへる袖みぬこかけかな

右發句うらみん、もなし、これ二字切なり又や哉是

二つ同前

三字切

過去の下知 現在のぬ也未來也
子供らよ晝良咲きぬ瓜むかん

右子供らよは呼終て過去の下知也晝良咲きぬは現在のぬ也瓜むかんは催して未た至らす此時は過現未各心替て現在を切となし過未を粧といふ總して過去は切れす一つの未來は切に用る也

かいて見よ何の香もなし梅の花

梅花清香の外汚穢の匂ひなきといふ心也たとへは見渡せは雪ほと黒き物はなしといふと同意也雪の白きに對する物なきといふこと也二字切三字切の格也 秘

記

二段切

櫻かな小町か姉の名は知らず

右櫻に小町と決定の二ツを哉なくしていへは花櫻小町か姉の名はしらすと心詞分るへし是二段切也

元日は嬉し二日はおもしろし

是も意二ツに分る作なり必切字あるなしに抱はらぬなり

三段切

目に青葉山ほとゝさす初松魚

右目に耳に口にといへる心を五文字に含て三段の切となれり句意此三ツに働く

梅若菜鞠子の宿のとろ汁

梅白く若菜の青き色立也偕鞠子にはとろ汁も有て旅中の景物を數へたる句意也風物多き中にとろ汁とは俳諧の寂也深く味ふへし葛藤の卷

連歌に三名切とも云

花はひも柳は髪を時津風

さみたれは峯の松風谷の水

此柳と時津風と正しき物二ツ入るによりて五文字ともに三段の切字とは申なり又峯と谷と五文字とも以上三つなりさてこそ三段切とは申候はめを廻し あをくてもあるへきものを唐辛

右此切は心に赤くといへる餘情ををの字に含て下の唐辛と轉する所少なけれとも上へかへして切侍るなりをに底心なければ切れす殊に裾枯などいへる病句也

を廻しは上にさへといひて下にをと押へ侍る也二ツ物をくらへて云ふにてとまる也一つにてとまるは心に今一つ用ひてする也秘記

に廻し 柚の花に昔をしのふ料理の間

右に廻しはものゝ餘情の強く餘りて一句止らす冠へ戻るをにと押へてしかも其にの假名にてことを廣くもてなすたとへは

桐の木に鶉啼なる塀の内

といへる句同し

大廻し連歌にあなたうと春日のみかく玉津島

といふ句を出せり然れとも今來上手の沙汰に證句に不叶といへり其故いかんとなれば上五文字より中の七文字をのけてあなたうと玉津島とまはり又下より玉津島あなたうともまはる故に大廻しといへり然れとも中の七文字下の五文字へみかく玉とつゝ故に今來の好士先輩何れもみなく不叶と難せられたりとかや俳諧には

たまりはせぬたまりはいたさぬ花の露

あれを見てみかく詩歌の月の顔

右はたまりはせぬ花の露花の露たまりはせぬあれを見て月の顔の顔あれを見てとまはるなり中の七文字を隔てまはる故に大廻しとは云小廻しといふ切字ある故に大の字を付たる也

を廻し切字の事小廻しとも云

兎口さへえくほに見るを花の顔

戀に泣我さへあるをしかの聲

右中の七文字より上の五文字へまはるなり故に小廻しと云残してにおはといふは切字をいひ残すを添て聞くなり

散る花に狂句もあらは寺の庭

右は狂句もあらはいかに面白からんと入て聞くなりみなく如斯なるへし

積りやせぬ積りやはせぬ花の雪

つもりはせぬ花の雪とまはる也大廻切不好事也

下知切 むかし聞け秩父殿さへ角力取

右下知は聞け云へ取れ等の類頭立る氣色にして切れり貴人高位の人に對して綴る事なかれ

出よ 染め出よ花の木のための春の雨

つくせ 染め盡くせ紅葉むらこの片時雨

まて 句ひ出てはらふ袖まて雪の梅

ふけ 吹け嵐花なきはるの夏木立

こほれ 翻れたゝさなから上に水の雪

思ふな 咲かぬ間と思ふな花を春の雲

め 梅か香をふかは身にしめ朝の風

ちらせ 見よ かすめ月

心切 秋かせに折れて悲しき桑の杖

右心は物々に移るといへとも秋風の冷しさに仙居の桑の杖我なくしてもろきかたち心詞分れてしかも睦ましき是心の切也此類多し

十七字のテニヲハは常にして十八十九テニハといふは發句のあとへ一字二字入て聞く句也尤も心切ともいふ也 秘記

句讀切 わすれずは小夜の中山にて涼め

右句讀は未來の物を現在に取越し無き物に指南して吟聲等しき假名にて轉する所を句讀の切といふ

句切れ歌といふ事あり季吟俳諧の句に

付句書

まゐをなはたゝ松はかり紅葉して

句切れ歌とは後人の名目なり歌にわかれテニハといふものなり秘記

押字

何の木の花ともしらす句ひかな

右押字はのとのゝ狹に紛はしき切なり是は上にて押へ下にてうき一旬切けり

抱字

夕顔や秋はいろゝの瓢かな

右此やは切也併し五文字の言語ふかひ無ふして答へずざるを秋はと抱へて一句分るへし哉は浮やにて切れず秋の句なり過去の花を思ひ出て一面に白かりけるもと今日を生すされはや哉の法又正し芭蕉の掟に

霧や海空に舟とふ一葉かな

花や咲句ふ雲降月夜かな

此兩句疑ひの。やに非らず霞のことを言て空の海花や咲雲のふる理更に不可叶是を捨やといふへし初心の人すへからすと也

重字切

奈良七重七堂伽藍八重さくら

右重字は島根に吉野によしのゝと言葉重古代は重説の切ともいへり以上幻住庵俳秘

發句眞行草の事

發句に眞行草あり眞の發句は第一題を撰ふへし堅題「和歌題のこと」なるへし言葉書前書等もなく題を讀入て一曲秀逸さひ細味備はりたる句を云ふ尤も正確体なり横題「俳諧題のこと」の句にも又眞の格あり是れ行の眞なるへし行の中の眞あり行の中の行あり句を以て爰に辨す

眞

振賣の雁あはれなり横題ゑひす講

象潟や雨に西施か合歡の花

象は百獸の長西施は三千第一の美人也是を以て是に對し能女の少しなやめる形を書しを思合せ眞の体とす余情誠に紙毫にあまる

滑稽傳に一代の秀逸は題を撰ふと書けりしも眞の發句のことなり

川音寒しみよしのゝ春

かね遠き岩のかけみち暮そめて

心詞のかけ合たるを眞といふ一坐の内に其心得あるへし袖珍抄

行

ゑひす講醉賣りに袴着せにけり

振賣の雁は芭蕉の本情より出て正風至極の城郭なり此哀れを見出されたるは眞の句也

又醉賣に袴着せたる流行にして眞の都を飛び出て伏見大津邊迄も出張してせられたり是行也

たとへ横題たりとも眞の句あるへし眞の壁題の句なり
とても行の句あるへし眞行の境工夫あるへき事なり

道端の木樅は馬にくはれけり

人の庭院なとへ生せはかゝるわさも有まし鯨濱牛道の
片鄙に生るゝ人と京師に育つ人等その生涯の得失を感
す是則行也

我身の上と更におもはす

闇にふる雪にあられの音なくて

大かたはり合たるを行といふ眞行草一坐の内に其心得
あるへし袖珍抄

草 此あたり目に見ゆる者は皆涼し

此句はかり聞く時は涼の題なり然れば皆暑しとも寒しと
も動くなりかやうの句を聞て師説なしの放題をいふ族
世上に多し此句は美濃國長良川にて十八樓の記を書たる
其文の留りに置き給ふ句也故に皆涼しの詞よく居りたり
是草の格也能く熟考して眞草の境を知るへし

景清も花見の坐には七兵衛

草は走にしてはしるの象句も意も共に草也

あしたの雲の跡をこそとへ

はなれたるこまの渡りの里の名に

趣向はかり付たるを草といふ袖珍集

草の格といふは題を撰はす季節の言葉を入れていひ流す句な
り

紀行挨拶の類は皆々前書詞書を以ていひ述ふ季節の詞の
働をかまはす其場を題とする故也或は文なと書て其留り
に發句を置く類皆々草の格也

宗養云心詞かけあひたるを眞といひ趣ばかりを付るを草と
いひ大かたよりあひたるを行といふとかや埋木

親句疎句の事

歌に親句疎句の二体あり又連歌にも同じとそ是に應して俳
諧にも又然り偕連歌と俳諧の差別を分るに連歌は親句俳
諧は疎句なるへきか其親句体といふは詞やさはみえんに
のとやかなるを云とそ疎句長高くはゝかるいろ色見へす
姿詞に拘らす有のまゝなるを云とそされは貫之萬葉集の
中に此二歌を撰らひて秀歌とかけり獨稽古

日くれたりいぎ歸りなん子なくらん

その子の母も我をまつらん

酒かめに我身を入れてひたさはや

ひしほいろにはほねはなるとも

又疎句の歌とて

鷺の居る池の汀の松ふりて

都の外のこゝちこそすれ

又連歌に

これやふせやにおふるはゝ木 と云前句に
いなつまの光りのうちの松の色 と付たり

親句の躰連歌に

氷のうへに波を立ぬる　と云前句に

さゆる野の月のかげ野の花芒　良阿

是等の姿を云とを猶委しくは奥に親句疎句と分たる所に申すへし但姿の親句心の親句姿の疎句心の疎句有るへし今こゝにたとへをとりて云は連歌俳諧を親疎に分るのみ

親句は有相、色相なり、近なり、文字なり、方便なり、淺なり、權なり、教なり、法門なり、音聲なり、事なり、輕なり、世諦なり、有爲なり、有漏なり、煩惱なり、迷議なり、生死なり、輪廻なり、

不了義經　是は三藏教の中に眞如實相中道等の實義をわかつ阿含等の經なり又は半字經とも云たとは、嬰兒に文字を教ふるに偏と作りとを片々つゝ教ふるか如し

親句は有門ワモン小乗なり疎句は空門大乘なり而かはあれとも初心の時は淺より深さに入りたりては深さより淺さに出る是佛法諸道の用心肝要と云り

有相の歌道は無相の法身の歌道の應用也方便の權實おろそかに思ふへからず木の形像は大智より發る紙墨の經卷は法界より流るゝといへり一大事の因縁は小乗より出るともいへりされとも有所得の法を説て人を化度するは三千界の人の眼をぬくよりも科なりと説まことの道は有にも無にも親句にも疎句にもとゝまらず佛の御心のことも成へしとそ但かくいへは連歌をととたるやうに聞く人も

あるへけれども左には非らず唯姿をわくるのみ也

俳諧は放埒凡俗の物なりと嘲弄する様やからもありそれらは皆道にいたらず不堪の人と云ところ成るへし今の俳諧はもと連歌の法式をかりて其味ひを父母として守ることとなり猶耳ちにたとへいは、連歌は能、俳諧は狂言其の能太夫堪能ならは尤可なり又狂言師堪能にて其能太夫不堪ならは能とて世にたてる程は有まし狂言と云とも堪能に於ては諸人心をよせて用ひましきや兎角連歌はいかゝいものとは一つにして今かく名の二つに分れるうへは連歌は連歌の意を守り俳諧は俳諧の姿を忘れさることよしとすへし何れの方にも外穢ゲエナシヤ内淨外淨内穢と云事あるへし句は教、意は權、理は實、道に執ふかき人心をよせて猶深きことをさとらむへし云々獨稽古

按るに親句は所謂眞の句作り也題中を離れずして寄くさり正しく云ひかためたる方也師說錄

親句と云は親しき詞にて五句をいひつゝる也猶正の親句、

響ヒキの親句とて二種あり八重垣

正の親句と云は親しき詞にてつゝきたるをいふ譬は

わかれいぬるとつゝく山の峯とつゝく生る松とつゝく立わかれいなはの山の峯に生る松としき

かは今かへりこん

響の親句とは前の如く親しき詞にて續きたるにはあらて五音にてつゝきたる也是にも又二様あり

五音相通 五音連聲是也

五音相通とはたとへは

みえぬ^{まて} たちかくしけり

タチツテトの相通也五句の中いつれの句も同

し

こゑすてふ、は山かくれのさほしかも

ハヒフヘホの通用也

普通の親句に

あら涼し鹿島^カの海の笹小舟^サ

連聲のつゝきといふは譬は

はのくくとをちのと山

トの假名を長くひけはヲの假名いつる也

是又五句のくさりいつこにても同じ

連聲の親句に

元日[○]やはれてすゝめのものかたり

正親句は言葉つゝきの縁をもて仕立る句法なり本歌の傳に
同じ幻住庵秘記

俳諧に

何の木の花としらす句かな

此の如く綴る事なり又嚮親句は五音十聲の通ひをもて綴
る也是も本歌に同じ

聲すてふ葉山かくれの掉鹿も

はのくゝ見ゆる武藏野の原

○

松風のにほふとつみや濱の宮

いろあさやかに御手洗の蓮

俳諧に

むつかしき顔は家老に極まりて

正響合牀の時は上五文字を普通に綴り下を連聲にも綴る
也又上を連聲にして下を普通に仕立ることあり是は一
句わからざる時の事と知るへし譬へは

はたかにはまた二月の嵐かな

右三品は奉納法樂のみに限らず祈禱夢想賀移徙此普通連
聲なきを用ひす尤も連聲は大昔の格にして綴り難し名人
たりとも能く心を付くへし以上全書

親句と云は神佛へ奉納又は祈禱新宅夢想并に旅立等都て慎
むる發句協迄はアイウエヲの五十字を結ふへし是ゆゝし
き也句の五七五の結目三節にあり一に意二詞に三に文字
の響也

第一 意の親句

よしの山岑のさくらの散しより

花はあたなるものとこそしれ

かやうに山といひ峯と云櫻と云ひ又花と極む加様に候は
六義に非らず相通に非らずといへとも能歌なり

發句に 象潟や雨に西施か合歡の花

斯の如く百獸の長たる象といへる文字に三千第一の美人

をかけ合能女のなやめる姿に合歡の花の雨を帶たるを思ひ合彼の西施か吳に送られし愁を余情にふくめり又象潟は合歡の木多し是心の親句なり

第二 詞の親句

うつり行雲にわらしのこゑすなり

ちるかまさきのかつらき山

此歌上は皆ひゞきの親句也まさきのかつらといふはいにしへよりのつゝき詞也依て響をとるに及はす是詞の親句也

第三 響の親句

よそにのみきかましものををととは河

わたるとなしにみなれそめけん

是響の親句也

俳諧の證句には

あなたふとをこの初日を御膝元

元日やはれてすゝめのものかたり

奉納

あら涼し鹿島の海の笹小舟

初午や田なら畑なら鍛冶やなら

首途

からたちのやかて其まゝ枳穀哉

是心の親句也からたちの花のやかて枳穀に成るといふを唐國の御進發自出度歸國有へしと響かせたり幽齋の名句

也さるを譯しらぬ京童の季なし發句也とて其身は頓てきこく哉といひ傳侍る大なるひか事也下のつゝきてきこく哉と連綿して出陣には不吉の句也惣して祝儀の發句又脇の續き等皆假名にして讀つゝきて見るへしは一の心得也

恵方へと鶴ものしたる旭かな

敷居際から投るとし玉

右かなしきと脇へ續ていまはしき也親句の發句脇は

うたかふなうしほの花も浦の春

吹よる影もその月日貝

是は芭蕉翁二見文臺出來の頃裏書にし給ふこれ道の祝義の發句也近頃松村氏此文臺を得て開の賀筵に此脇あり首尾相調ひ秀吟たる故此證句とす

疎句は無相、空相なり、實なり、性字なり、遠なり、理なり、深なり、禪默止なり、工夫なり、正躰なり、宗なり、重なり、義謗なり、無爲なり、先漏なり、菩提なり、悟なり、心なり、涅槃なり、遊戲なり

疎句は了義經 是は別教等の眞如實相中道等の實義を明す方等の諸教なり又は滿字經とも云嬰兒に文を教るに偏と作り一字になして教るか如し佛智見をあらはし給ふこと了義とは云なり不了義是に翻して知るへし

疎句は夫を取崩してあふなく作りたる草体の句なり今平生に皆作する所なり尤も蕉門の平生に作する中にも眞の句体もあれと夫はやはり取崩して作する中にて眞の句体に

出来たる分也

今なす所は草体常にて中に取しまりけるものゐるは大方は行の体也眞の句は當世善惡を見分る人さへなく更に好て句作する輩もなし世の下りたる事かくの如し師説録

陳句は平生鉢の句也されと古人の言葉に陳句は親句に増れりといふ事あり是意は譬は人の許訪んに袴ならては参りかたし抔いひて日數經り不沙汰にならんよりは内々のさまにても不取敢訪侍れば其眞實先へ通し威儀調ひたるにおとらず發句もかくの如くたとへ連聲普通の句ならずとも取あへず眼前鉢には神佛も納受ましゝ眼に見へぬ鬼神をも和らくるといふも此事なり禮之用和爲貴といふ聖語もこもるへし口傳

親句は他流にいへる五音連聲等の事正風に子細なしたゝつつきからを思ふへしたとは、

露清しぬれて

死

梅か香や今朝は

燒

などの類ひはわし、神祇奉納のみならず歳旦暮祝の吟皆此こゝろ得なり奉納にあらざる神祇は其用なし釋教も奉納になすときは神祇と同じくつゝさからを思ふへし常々の釋教は其用なし

祝、贈答、餞別、留別、哀傷は尤も自他親疎をわきまふへし

祝贈答餞別留別哀傷すへて人に對しいふ句になそらへ句いひつかはすに子細ありたとは、

猶いく代長濱あゆめ春の鶴

かくいふときは正に其人を鶴にせし也

鶴とともに長濱あゆめ春の風

かくいふときは鶴に比して其人と鶴と別なりこれ蕉門のおしへなり一理萬通すへし寂榮

三ッ物の事

三物解 發句より第三迄を三ッ物といふ脇に五体第三に二鉢あり師によりて學ふへし

發句脇第二起定轉合の習ひあり各詩の格式也起とは四時の景物に對して一物なき處に情を起し十七字に結ふ是れ發句也

定とは譬へは發句梅にせよ鶯にせよ其物に打添て或は場を定め時節を合せ發句に云殘たる所を補ふ也よつて請定るの心也

轉とは發句脇を一連の前句となし天地より人の生して萬物始たる如く又はより一起すれば附を微細にせず二句の懷ゆるやかに遠をよしとす

四句目は合の場なから百員歌仙の續きものなれば詩の格と違て爰に習ひあり

詩の起定轉とは

薄暮層巒雲遶腰

傾盆一雨定明朝

老翁八十眉如雪

立拔溪邊獨木橋

此句の心は夕暮方立ならひたる山々の腰を雲のめぐる風情なりよつて盆を傾けた程の雨か明朝降ふとなり是れ發句と腰の二情也第三は此山の日和癖を見覺たる八十の翁なりかくの如く發句腰の情を轉して景情二句つゝかは人に替り人情二句來たらは風景時節時分等に一轉する也猶古人の三つ物に工夫すへし

春

發句

脇

第三

若菜

春の雪

歸鳥

蒟蒻にけふは賣勝つ若菜かな

吹上らるゝ春の雪はな

歸る鴨かへらぬ鴨をさはたち

梅

雉子

家普請

梅の香にのつと日の出る山路哉

所ゝに雉子の啼たつ

家普請を春の手邊にとりつきて

鶯

禮者

藪入

鶯に朝日さすなり竹格子

禮者うすらく春の靜さ

藪入の土産似合にこしらへて

夏

題知れす

水鶏

雨

そらまめの花さきにけり麥の縁

晝の水鶏のはしる溝川

上張を通さぬはとの雨ふりて

夏の月

門涼

時節

市中はものゝ匂ひや夏の月

暑しゝと門々の聲

二番草とりも果さす穗に出て

秋

蜻蛉

芦の穂

霧

蜻蛉の壁をかゝへる西日かな

潮落かゝる芦の穂の上

霧の外の鐘を隔つる松こみて

さりゝす

秋夜

居所

灰汁桶の雫やみけりさりゝす

油かすりて霰寝する秋

新疊敷ならしたる月影に

初茸

谷川

替地

初茸やまた日數へぬ秋の露

青き薄に濁る谷川

野分から居村の替地さたまりて

初時雨

木の葉

旅人

冬

鳶の羽もかひつくろひぬ初時雨

一と吹風の木の葉しつまる

股引の朝から濡る川越て

霜

橋

景情

霜に今行や北斗の星の前

笛の音こはる曉の橋

ひと番鶴の來て寝る松經りて
四句目より揚句までは三つ物と違て附句千變万化するこ
と也附合小鏡

歳旦三つ物 芭蕉曰天地人の三つ也歳旦は天意尤もよし脇
尤地理也第三尤も人意也此を心得たる上はいか様とも自
由あるへし歳旦に限り三つ物といふ三の數火の形即ち陽
を貯る祈禱也俳諧秘記

三つ物先つ發句は元日なれば其ひく所をちらりと見付て
脇は十五日までの季節なるへし又三ヶ月に渡る季節もあ
るへし柳、霞、陽炎の類なり一曲一作なくてはなるまし只
ぬらりとしたる句は尋常の俳諧になる歳旦は格別働入る
事也

又第三の事大率三月の季節を心得へし必ず早春の季節つ
かふへからす是非三月の季つかはれぬ時は三ヶ月に亘る
季節にて凍解、春雨等の類其外いか程もあるへし

脇は句をかしこく働き第三はのひく景曲あるへき事
なり若し發句に景曲ならは第三世話事なるへし只三句に
百韻千句の働とは此事なり勿論らしき所を專一と案する
なり總して尋常の俳諧にも初春の發句に初春の第三はせ
ぬ事也是第三句目打越す故也他の季之に准す 奥儀秘蘊
歳旦三つ物脇てには留の句

着衣始うらを探らす大夫殿

俵かさねてなか戻りする

此脇にて文字ありて留りてにはなり第三むつかし

歳旦發句の習同三つ物の事 芭蕉口傳云く歳旦の句と云ふ
は元朝一天明初る時初ていふ句也二句としては歳旦なら
す抑々日本は神國なれば神道一教を守るへきことなれと
も片寄らぬは又和風の風儀なれば尤も有かたき事也秘密
神道の奥儀は天子御一人しろしめし行せられは四民の末
々は心ろに道に入るへき國風こそ尊とけれされはとて神
道も廢れす正月元日より三日までを神代の風に祭りて家
々の行事あり三ヶ日のうちは全く神道なる事顯然たり昔
より俳諧歳旦の發句は自身の上を祝ふ事とはかり心得才
覺に句作り禮を知らず非道をのみおもふ神は非禮をうけ
す必ず不吉をいひ出して凶事にあやまり神罰を受ける事恐
るへし是正風體に非ざる故也

當流案方の大事といふは先つ神國なる事を思ふ精誠穢を
拂ひ心を正して其身一人の神となるへし中臣祓にも神と
人との元の心とあれは其古へに精神なる所を見るへし屋
を穢ひ衣服を改め躰を清め心を淨めて先つ第一に天下
平國土安穩を祈るへし一天下の治世民安全の心を先と
して強ち秀逸を好むへからす只新らしき句をすへし少
にても古き句はめてたからす譬へは随分結構なる扇に
も持古したるは用ならず龜末なる御寺扇なりとも新ら
きを正月物とするか如し只發句は手垢なくやすくと
作り榧土器のことくあるへし是正風體也

五老井締突集曰當時歳旦の格式しれる人稀也次第に師説もうとくなり行くこそ口惜けれ

只初春の季を入る迄にてはかつて歳旦にならぬ句のみとし歳旦の字意をよく工夫し待らは仕損しなし歳旦の句二つ三つ記し出す族あり又歳旦帖に子の日二日三日など題して出す人もあり師説いか、聞き置き侍る覺束なし遠國の歳旦など交て出にも遠慮ありたきことが大津繪等の前書後代歳旦の格式是にて分明なり季の詞を結ぶなども時代の考へあるへし元日やといふうち平めたる詞杯は四五年過去たるへし歳旦道具等猶以て新古の差別あるへしと書けり此事見まかひあるへければ荒増爰に註を加ふ歳旦の字意をよく工夫し侍らは仕損しはあるましと書けるまでは右の師説にて明也歳旦二つ三つ出す族もありといへるは一とせ千那季由歳旦帳に子の日七草左義長の類を一句つゝ立發句にして出すへき旨相談に及ふとき師曰く無用なり時節あらざる句を前方より出す事せぬもの也歳旦の句年内に極め出すことは元日より早々板行なりかたき故に是非なくすることなり遠國の句交せて出す事遠慮ありたきことかと申されたり又大津繪等の前書をは

空の名残をしまんと舊友の

來て酒興しけるに元日の

晝まで臥して曙見はつしけ

れは

二日にもぬかりはせしな花の春

芭蕉

二日は歳旦にならざるによりて充分の前書なり又

三日閉口題四日

大津繪の筆のはしめは何ほどけ

全

是も題を前書にて斷りたり元日より三日までは神道なれは何佛の發句四日に題せられたり僧衆の禮も四日より始まるなり

歳旦は元朝明け初めたるより明はなれて迄なれば此所をいひ課せんとするに盡るなりよつて題を極る凡二三十もあるへし此題を以てするに皆歳旦に相叶ふ題なれば昔より題なしにはせぬ也然るを近年題なしに初といふ字さへ入れは歳旦と心得たるこそ口惜けれ又元日やといふ五文字平めなる詞故いひ古して一作なくてはつかはれす第一元日は一日に渡る題也其辨ひもなく元朝やとする句などにも元日やとあり尤も師説をも知らぬ故也

元日に田毎の日こそ戀しけれ

田毎の日とは一作なり大曲なり信州城捨山に田毎の月あり是を元日にかけ合されたり

元日や板倉殿も御めいにち

許六

板倉内膳正殿天草にて元日討死したまふこの句手柄なり句口傳

元日や工夫して見るへその穴

孟遠

人に九穴あり皆々其役目あり予西國行脚の時豊後國日田

に年を迎へ終日隙にて元日一日は寝たりされは九穴の外
臍ばかり何の役目なければ申出たり惣して一曲一手柄の
らは過去といふ事あるへからす毛頭古きことなし 奥儀
蘊外或集抜

三物 是は千句の時兼日に發句より第三までを極め小短
尺十枚に書つけて會席便宜の所に掛くなり是を三物の
短尺といふなり歳旦の祝義に發句より第三までつかうま
つりて三物といふは件の義によれり今三物を三組九句有を三
物といひ五組あるを五ッ物七組を七つ物なといふは來
由を知らぬ俗説なり幾組ありとも三物といふへし俳諧名
目抄

賦物の事

賦物の事昔は發句より揚句迄言葉に縁故を取て致せしか近
來面はかり其後は第三迄當時發句はかり花の發句ならば
「賦何鯉」とす是下賦と云花鯉とつゝ言葉鯉ならば壺也
鯉の發句に「賦花何」とせば上賦と云 賦何鯉俳諧の連歌
と書くへし 蓮齋漫錄

上賦は山路を何路と取る也

下賦は山路を山何と取る也

一字露顯は 香を蚊 日を火 名を菜

二字反音は 花を繩 毘を繩 夏を綱 水を罪

三字反音は 花を繩 毘を繩 夏を綱 水を罪

四字上下略は 鶯を杭 玉章を松 苗代を橋

ひのかな違へとも此類苦しからすくひとは取かたし訓

あしゝ口受

五字中三字略は 杜若を肩

三字上下略は あやめは矢 霞を酢

上賦下賦の外俳言無くてもかまひ不中かまひ申といふは重
秘を知らぬ人のいふこと也 秘記

賦物の事六義興風賦比の一也則賦物の字を心はると讀む百韻
の全體此一字より發る去る程にむさと取るへからす長頭
丸も發句花なれば「花連歌俳諧」月なれば「月連歌に端書
するなり

是も一字露顯の心持なり但し賦物を取る卷には其賦物を
取ける面を可嫌又賦物の字五ヶ條の内下にあらは體を嫌
ふへきなり

俳諧には五ヶの賦の字取る事稀なるへしさて其外賦物の
文字取る事は千變萬化なるへしたとへは

賦何路連歌 俳諧なれば 賦何俳諧と置也此何の字置く
心はなそ様の心様也と知るへし又發句に嵐と云字を思ひ
入たらは其文字に隨ひ、賦山何連歌、俳諧には、賦何俳
諧と置く也始は山路とつゝくやうに取る故に何の字上に
置く是をうはふことを云なり

但し追善夢想の連歌俳諧には賦物なし其時は追善の連
歌、夢想の連歌なとゝの文字を入れて置へき俳諧には追善

の俳諧、夢想の俳諧と置いてよし右の外一字露顯なと何にても思ひ寄の字を取るべし何の字大方上はふなるべし五ヶの大事と云事は

山は伊勢 路は住吉 木は春日 船は玉津島 人は人 麿 是なり翁の掟

賦物 連歌の諸抄物に其品委しく見へたり俳諧には賦物を用ふる事なければ今是をしるさす經文名號は賦物の類なから俳諧にも用ひ來れり端作の書やうかはりめわら名目抄

六義の事六種とも云

俳の六義は連歌に預からず歌道六義也

風、賦、比、興、雅、頌

風雅頌を經となし賦比興を緯となせる、詩歌に六義といふ事は漢土には詩經に起り我朝には古今集に廣まり連歌も俳諧も其跡をおへり六義の説は和漢ともに分明ならず云々

風雅頌の三經には世界の人理を諷諭して關雎に哀樂をと、なふるか如く王侯士民の心をはつかしめ

賦比興の三緯には眼界の景物を朗詠して論語に文質を交ゆるか如く鳥獸草木の名を知らしむるに其地に其人を當る時は遊山翫水の風をと、なへ理世撫民の優情をのふは詩歌は王者の弄ひにして天下の治りとはなれるなるし

せて其名に其用を知る時は引句引歌によらす六種に六色の當用は和訓のあやに知るべき也

風はそへ歌也よそへよめるなり定家は色の見えぬを其品よせあらはるゝ也と云

風はそへうゝ也定家郷説には風といふ物はその色見えす物によせあはせて其品あらはるゝためし也

先いはへ梅をこゝろの冬こもり

風は諷諭、風言はやり副歌と訓す、風は多く里巷歌謠の作より出て男女相共に詠歌して各々其情を謂ふ周南召南は親しく文王の化を破る云々然れば其國其人の風俗の善惡を風謠はやりに依副そまへて差しむる故に風化と云

風化風俗上所化曰風、下所習曰俗以風化下、下以風刺上

俳諧には論言さとしとも訓すへきや

賦は本意なり、鋪なり、故に賦をかそへ歌と云ふなり賦は量る也

賦はかそへうた定家郷いふ心を一篇にとゝめざるの義也心をくはる也かそふる也つくす也

梅若菜まりこの宿のとろゝ汁

賦は鋪なり量也算言算へ歌とあり眼前の物を算へ並へて直地に姿情を演るの謂なり

定家郷の釋文にも賦は歌人の本意なりと四季に月雪の變相を詠し花鳥の優侮を知れとなり

賦は殊に文章の惣名なり

比はなすらへ也たくらへとも、物の物に似たる也、譬喩也
たとへなり、そへ歌とは顯藏の違ひあり、似たる事にて
少違也

比は比喻準言なへ準へ歌なり托物比興と詩人歌人の優情を
拵へて鳥にも木にも物を言はす類なり比と興とは姿情に
先後の心得ありて比は物を取て其姿に準へ興は物に托て
其情を起す物を催すと物に催るゝと自他の差別を知るへ
きなり

比はなそらへうた定家郷はくらへ歌ともよむへき也

いさめるや心の駒のかけをとり

興はたとへ歌なり蓮心院殿聞書にそへうたはかくれ、たと
へうたはわらはるゝ也

盆のところ月はくまなく花さかり

興は誘引の義、誘言喩へ歌と訓す興の一字は和漢ともに分
明ならず論語の陽貨篇に子路に詩經の風流を勸て詩は以
て可興とは四季の月雪花鳥に誘れて優游の情を興せと
の謂なり興は決して遊興の興と註すへし

雅は物の成就して調ふたる體なり、たとへこと歌也、言雅意
雅なり、意雅は治定なき體なり、言雅は言葉にあらはし
て、一句を作るなり、雅は正しきなり

雅はこゝことうた定家郷説に思ふことを少しもかたまるこ

春雨のけふはかりとて降にけり

雅は正なり真なり、正言と訓す歌には真言たと歌と訓す風
雅時二體は詩經の成る所にして風は虚を以て天に起り雅
は實を以て地に止る故に俳家に風雅虚實の二用と見て風
に懲惡の虚を用い雅には勸善の實を用は雅には正直の
意を汲て公け言とも訓すへきや異名同體の例

頌はいはひ歌なり世を譽め、神に告るなり、祝儀なりつき
出して褒美したるは讃頌の跡なり、只神明に告る心、奉
納發句に入跡也

頌はいわぬうた定家郷説に神明につくる心ある也

たいくや小判ならへて菊の花

頌は稱なり美なり祝言と訓す祝歌と訓す詩序には雅頌は一
體の様なれと雅には國家の諷諫を含み頌には君父の壽量
を祝して神に告る意は勿論にや雅頌の二用たる外には姿
「莊密」を備へて内には情「和寛」を含みて詩歌の優美を調
へし云々

夢想の事

芭蕉曰夢想の俳諧に呼かけ附とて嫌ふ事あり哉留の發句に
敷島と付る類せぬ事なり「かなしきと呼かける故也又玉
柳忌むへし「魂やなきといふに通ふ故也わたまし其外賀
の俳諧此心得あるへし

夢想の俳諧には夢といふ字をせざる古來の傳へなり帝トに

門宮にみやこ戸に上戸歌に短冊を嫌ふの類のさもあらんか伊駒に馬、むまに鞍馬は連歌に面を嫌ふ故俳諧には七句なり七句とは同じ折にての事なり折かはりては七句の物も三句なり一坐に四の物もとより一とつ二つの物は皆折をかへてよし七句の物は五句五句は三句にゆるし二つの物は四つなりといへとも輕重あるへき事也餘はなすらへてしるへしはなひ大夢想とは夢中に得たる句をいふ夢想ひらきの會は習ふることなり名目也

即興の事

即興とは（遊山翫水月見花見に則座の興を詠するを云ふ）或は題を出しても詠し又は題なしに眼前の景望面白き心を詠する也題の歌ならば常の題歌にかはることなし但し目前の景氣の其題に叶ふへき題を出すことなれば随分目前の景を寄てよむへき也

題なしの歌ならば猶以目前の景氣より外の事詠へからず題無き歌はいつれも詞書あるへし總て題の歌も題なしの歌も山に遊ひて詠せば其山の面白き心野ならば其野の面白き心をいか程ともいひはやすへし其山に居ながら外所の海山を思ひ遣るやうの事あるへからず但し夫れも、春の山の花を見るに其山の花を譽てよし野初瀬も及はしといひ、須磨明石の月を見て姥捨更科も及はしなといふは若しからず此山を捨てかしこの山を譽るやうのこと有ま

しき也

名所の山ならば勿論其名を詠すへしたといひ其所にいひならはしたる名ありとも古歌に詠したる證例なきは俗名所として詠まぬこと也只山ならば山の景氣川ならば川の景氣はかりを詠すへし

神社佛寺にて詠するには其社其寺の外他の寺社詠すへからず

譬へは北野に詣うて法樂の歌奉るに外の御神を申やうの事なり北野にては其御神の神徳をあふき御めくみを忝くするよしをいひ諸願成就を祈り奉るよしを申也北野とも詠し又北野と申さてたゝ神垣神のみむろみつのひろまへなとはかり申ても苦しからず

松梅神木なれば寄て詠すへしいつこにても此詠格也又佛寺はたとへは清水に詣て詠せば大悲の御惠をあふき又普門品の中の要文の心なとにて詠すへし

又人の亭に至て其庭の月花の興をいふにも其庭前の面白きを譽るを肝要とす外の海山の事をいふへからず又主への挨拶の心專とすへし祝儀の心あるは猶よしとす（挨拶の註別にあり）又さしあてゝ挨拶の心なくとも月花の面白き心を詠めは其宿の花やとの月を譽るなれば自然に挨拶こもれり随分即興の歌は早きを專とす面白からずとも先そうそくに出すへし遅ければ無興なる也望たる人も迷惑なる物也

挨拶の事

挨拶句とは（即興に誌せる如く人の亭に至りて其庭の月花の興を云ふにも其庭前の面白きを譽るを即興の肝要とす外の海山の事を云ふへからず又主へ挨拶の心事とすへし祝儀の心あるは猶以てよしとす）前にも誌るす如く人の亭に至りて即興を詠するに或は花の興あらは幾會か此宿の花に心を染めて外を求めず詠らんと又花見にと此やとのこのもとに立よる人も主とをもに幾會なれ見んとも心あるやとの花は春ことに問人絶えすみはやせは花も嬉しと思ふらんと又月の興ならは千々の秋月に主も面かはりせてなれみむとも又なくて澄月影も此やとからいと光そふなとも詠へし其外なにも其時の興に隨ひて相應の挨拶を外すへからず總して挨拶當座の時宜和歌の肝心とする事也

いか程の秀歌秀句なりとも時宜にそむきて不挨拶なる歌發句は詮なし古來の先哲も挨拶を忘るへからずと吳く釋し玉へり

業平朝臣か人の前栽に菊うゑける所にて

うへしうへは秋なき時やさりすらん

はなこそちらめねさへかれめや

此歌挨拶深き歌にて挨拶の事には引出さるゝ歌なり又挨拶

と云にも大舛程よきかよし餘りにめにたち耳にかゝる

挨拶は却て慇懃卑陋とて嫌ふ事也能く思ふへき事とそ

又人の亭にて興行不時に一會催すといふなとあらんには兼題當座或は

兼題はかりにて當座なき事もあるへし兼題は祝の題又は

折に觸れたる景物の題もあるへし其時の興行の様によるへし

祝の題ならは打まかせて其やとを祝ひ主を祝ふ心もよし又

松竹の題ならは其やとの松竹になして祝の心を詠へし或

は月花ならは其やとの月花を譽る心又は只月花のうへは

かりをおもしろくよみはやすへし所詮其時の興行のさまにより題の趣きによりて心遣ひあるへし

當座は十首十五首二十首三十首の組題なるへしされは其や

とのこのみは詠かたければかけはなちに外の名所又野

山の景物をも詠へし常々の會の如し爰に大事の習ひあり

兼題は挨拶を詠せさすへき爲に或は祝の題松竹の題を

出せば右に誌す如くとりへに挨拶の心あるへし

當座は挨拶にかゝはらざる組題なれば挨拶の心あるへ

からず軸の歌にて挨拶はする也

又春の組題などにて題の中に花あり幸其庭に花もあらは

これらにいさゝか心得あるへしされと軸の歌は其座宗匠

又貴人などあらは其人の詠する事也又軸なとにあらねと

こと題にても挨拶を詠するは其日の上客又ハ賞翫の人なとのする事也然るをさしてもなき題にて末座の人などの

さしいてかましく挨拶したるかたはらいたき物也吳々も
加様の心遣ひ大事也

又兼題も當座も随分禁忌のこと亭主方へさし合のことな
きやうにすへし、ねたゆる庭、人とはぬやと、淋しき庭
あれたる庭なとかやうの類故らに多し心をつくへし其外
亭主かたなとふとさし合の事なとある物也

昔其ためしなきにあらず中納言行平河行幸に大たから
ひの役にて花やかなる狩装束なと着して出られしとき

おきなさひ人なとかめそかり衣

けふはかりとそたつも鳴なる

其時行平の年老ぬれは我身のよはひを思ひてよみ給へ
とも帝御年五十七になり給へは御身のうへにきゝおは
せましゝみけしきあかりしとなんされは今以老人
の亭の會にて老なとゝいふ事心遣ひ有るへし

又禁裏御會に行路柳といふ題にて定家卿

道のへの野原の柳もへ初て

哀おもひのけふりくらへや

此歌不吉なりとて勅勘ありしと也

人の新宅の會なとに「火」煙「いつる目なとやうのこと
詠まぬやう心得あるへし

又西三條逍遙院殿定家卿正筆の天福本のいせ物語を今
川氏親へ遣はされし時

これをたに今ははなれていせの海士の

舟なかしたるこゝちこそすれ

といふ歌をそへられたり是は古今に伊勢か七條后にを
くり奉りし時の哀傷の長短の詞也後に聞給へは氏親の
母は北川殿といひて京の伊勢守の娘にて其比尼にてお
はしければいせの海士の舟なかしたるかたゝゝさし合
のことなりとて一生御後悔ありしとなり

今以曠かましき興行の會には其家の家識名字等まで心を
つくへきこと也かやうの例かす多し古來の先哲たに如此
まして此比の人よくゝ心をつけさりせは不挨拶の事多
かるへし

挨拶切の發句に

さゞらは雪見にころふ所まで 芭蕉

右挨拶は他に對するの一つにして挨拶を天となし挨拶を地と
していざゝらはは天也雪見にころふは地也すへて此類上
下の言葉主客の隔てを以て一句の切とする是れ挨拶なり
挨拶の發句に

わかれたり逢ふたり春は霞んたり

燕のくせに狂ひこそすれ 龍師

此協の「の」字要用也此發句「別れたり逢たり春は霞ん
たり春は霞んたりと」てには重なりてかろくて重き句な
れば此協は又「てにはに輕るかよしと也さてまた燕もと
か燕はとか有るへきを燕の風とせしは燕のやうに狂ふと
いふ事にして此「の」字要用也」ものと「はとかすれは

燕の脇になる也此さかぬ考ふへくさて此「の」の字にて此句脇の位に成たりいさゝかのてには脇の信魂つまひらかなる事可感なり十二夜話の三

兼題の事

兼題とは會の數日前より出す題なれば兼題といふ各一題して詠す是を通過とらひといふ宗匠の批判をうけて後いつれも懷紙に認むる也、認めやう流にならひあり尋きくへし紙は地下人はいつれも小鷹たかに認むる法也、女の懷紙は薄葉一かさねにちらし書也書様習ひあり耕雲口傳に云當座出題の時は餘念に渡らす是を案するによりて中々よろしきことといてくる也八重垣集

兼題の歌は餘日あるを頼みて何時にてもと觀法して打過る程に期日近付て驚ろき案するによりて當座の句よりをとるたるあり故只題を取りたらん初め當座の思ひをなし能々案したくむへきにこそと云々八重垣

兼題書方の事 會を催さんとしては兼日に題を作者に分ち遣す也其の題の書方五首十首二十首までは短冊一枚に二行又三行にも認むるなり二十首より多きは短冊に及はす短冊は三つに折て二行の内に題を書き一折に左右に分て會日と亭主の名を書く也

一首題は折目へかけてかくへし來三日
基定亭

二首題は二行に書くへし題の並ふは嫌ふなり

又一折に一題つゝかきたるもあり

三首は三行に書くへし五、七、十、二十首までは一紙なり

右の如く書て三つに折短冊に添て杉原にて上包をして出すへし近世勸進の短冊上包に何懷舊何月何日取重などゝかくは更に無稽の至りなり上包を白紙にして出すは作者に名を書すべき爲なり、上包は題書したるものは下の折に作者名をしたゝむへし但異例なり千鳥の跡

當座の事

運座とも云

當座運座は會席にのそみて則坐に詠すれば當座と云ふ十首題十五題二十首題三十首題五十首題にいたる迄人數に合せて但題を用ゆ各短冊に認むる也

當座は則席の歌にて程なければ強よく案すへからす強めて案しぬれば案しまとひて出來せず當惑するもの也先あしくともさらくゝと詠すへし早く出來たりとも人より先に詠草認むへからすまして出すへからす達者顔なるものと見苦し又題をとりてその儘書つくるは兼て讀置たる中の句にやとも思はれ又さそ句あしかるへしと推せられてかたはらいたき物也尤心つかひすへし

曠りましき會には歌いてきなはたとひ其座に宗匠ある會にてもあれ先内々にて功者の人にひそかに見せ合すへし句の善悪は時によることなれはいかゝせん若正體なき事

か又其座にさし合あるかかたゞ卒爾なきやを能く吟味して其後清書して宗匠にみせて批判を受へし衆議の會には此心つかひ猶以て也

衆議とは宗匠なくて衆中歌合評議するを衆議と云

人の新宅の會祝義の會興行の會なるには不吉の事禁忌の詞亭主方に不挨拶なる事無様に心つかひして人にもみせ合すへしいにしへもみせ合て難をのそきたる例おほし無名抄に數々しるされたり

當座短冊は大鉢探り題なれば一探則とは短冊を硯ふたに並へて人丸影前にあるを次第にさしよりていつれにても探りあたれるをとる也さしよりていつれにても探り得たるを懷中して座にかへる也短冊を影前にてひらきみるへからす取かゆへからすさて座にかへり料紙をとり硯をなをして後短冊を懷中より取りいたし題をみて詠草のはしに題を書付て詠草の折目へ短冊をさし入詠草を下に置き上に硯を置いて句を案すへし

當座の卷頭卷軸は一座の宗匠又は貴人先輩の人詠すること也よつて探題の時も卷頭卷軸は別に短冊を並へたる上に又二枚ならへて横さまに置く事もあり探題の時上の二枚はとるへからす又常鉢の會には卷頭卷軸ともに一つにをしませて重ねる事あれば若し取り當りなは宗匠か又は其坐の貴人先輩などに詠せしるへきよし難く辭退すへしさらぬ鉢にてをしたまりゐるへからす若し宗匠などの其儘

詠すへきよしさしつ再三に及はし詠すへし以上八重垣集

卷頭卷軸讀方の事

卷頭卷軸の歌は随分安らかに長高聊もうれはしき詞述懷懷舊などの心なきやうに心つかひすへしたとへは

うき つらき かなしき なみた さひしき 物思ふ
わひしき くるしき はかなき 世をいとふ さた
めなき あれたるやと ねたゆる などの詞さるへし

卷軸の歌は題大かた祝、神祇、松、鶴、龜、竹などの題なれば自ら祝の心を詠する也尤禁忌の詞等さるへし卷頭の如し又時によりて述懷懷舊釋教などの軸もあるへし其時によつて夫々の心然るへし

祝の心詠らるへき題ならは祝の題ならずとも詠すへし祝の心詠かたき題にしゐて祝を讀んとするもかへつてあしくさやうの題は常の如く詠すへし

懷舊釋教などは人の遠忌とふらひの會なるへければ其人の挨拶になる心よし又遠忌などには祝の軸もあるへしそれは打まかせて祝の心然るへし猶行末を祝ふころなともあるへし總して卷頭には祝の心は詠かたき物なればたゞ長高く詠すへし

軸には随分祝の心を專にして一鉢こまやかに詠へきことなり八重垣集

皮肉骨の事

骨はさひからみ細みさひしみ風雅の骨也

皮肉は匂ひひきしをり風情は風雅の皮肉也皮肉骨も匂によりて皮肉の勝ものある骨の勝ものあり直旨傳につきて見るへし師説録

骨のみにして皮肉なきもの皮肉のみにて骨なきものともに病句なり所詮句作成就の上の論なれば句作成て三品満足せぬならは有りて益なし速に捨へし三つの物句ことに備らすんは有へからず

皮 埋木 荷に念入るゝおはりのしゆく

木膳はいとそさうなるはたこにて

奇垣 集垣 芦の穂わたにはの字との字に

秋の部の亂曲揃くりかへし

雪の 采 霞の玉をふるふ簀の毛

とやこもる鵜飼の宿に冬の來て

肉 埋木 普賢の前によめる法華經

鶯の聲はさくらのこしらにて

寄垣 集垣 たまれはたまる物てこそあれ

屑の金屋いてとる古たゝみ

雪の 采 ちまたの神に祈るかねこと

御供してあてなき我も忍ふらん

骨 埋木 からりゝゝとからめきをする

山椒と胡椒と入てすりこはち

寄垣 集垣 又まくらゆふ二の丸の聲

都鳥富士はうしろに影黒き

雪の 采 我手に脉を大事からるゝ

二度呼の内儀は今度屋敷から

皮肉骨と三つに分けたる體予芭年來是を工夫するに一句々々に皮肉骨颯ふ物なり骨をせんと考へ皮をなさんと思ひ肉をつけんとおもふは此道の大煩ひ也自然と満足の俳諧は調ひ未練の人に教ても埒せぬ事也此境界修行すへし眞草行も同斷なり師説録

皮肉骨のこと野々口立圃の雜談に古きを以て師とせよとは和歌の道ならしされと連歌も俳諧も時代に隨て替りめあり先づ付心を知り次に句からを思ふへし前句によらざるは獨相撲をとり中よからぬ人々の坐敷に並ふ如し去年の曆も見所にこそより候へけれと也是を思ひはかるに、書體にも皮肉骨の三味といふ事を立て道風行成佐理を三跡と定む、道風は骨を書、行成は肉を書、佐理は皮を書強きは骨、愛あるは肉、やさしきは皮也三體の内には骨を以て本體とすといへり寄垣集

序破急の事

芭蕉曰初表の句序の序同裏より二の折まで序三の折破名殘の折急なり初折二の折位に三の折にてみたれて名殘の折にてさらゝと申へし是百韻の法なり今時の旨俳初折にけやけき事をいひ名殘の折にておもたくるしく位有事を

云ひ出して判を乞ふ長短の點を引まことに一言衆言を引とやいはん

同書に御傘はなひの説の外誰か所にてはこれを人倫にせずこれか他にては居所にせずなと、まぢくのことといふ其許し用るもの何者そ宗祇宗鑑貞徳立圃などのかすはきをなめてひとゝなりし鼠俳ならずや連歌に於ては新式無言抄至寶抄など俳諧にては御傘はなひ等の法度を能守るへしたとひ過ちありとも先師のこゝろへ有ことなるへしと思ひて私の見をなすへからず

三句の渡りのことおもつかろく花に實にして行へし行やうといふも長途の海になり山になり野になり里になりするか如し戀の句多く同し心になる故二句にて捨るかよし同し心ならぬは此限にあらす

神祇釋教無常哀傷三句まで續けとも一句にても苦しからぬは同句二句續きたる跡はしにく候三句へ歸ることをおそれてなり戀一句にて捨ざるはやむめ戀とて不吉成故も見渡し留に同字せぬかよし浦山里水草杯の類一二を擧て記す三句四句ほどにて手爾葉留見よし懷紙つらとて肝要なり

得手のなきやうにするかよし坐毎に同し言葉をいふこと耻しきことなり

發句いひたて手を込たる句ならば脇も其心得にて附へし第三は風景などにてすらくゝと有へし大かた第三は其卷

頭と心得へし以上俳諧獨稽古其他

一卷は面序の序裏序、二三の折破、名殘の折急也百韻裏うつり二句のうちは戀名所にすへてむつかしき句無く位をとりてすへし是古へ面十句の内なれば也一坐の外歌仙四十四等に至るまで序破急忘るへからず筆つむし

俳諧小鏡に去來曰表の句序の序、三の折破、名殘の折急也名殘の折にてさらくゝと申へし是百韻の法也云々小鏡

脇附方の事

抑々發句脇は一卷の天地にして父母なり此二句合體して百句千句を生ず故に發句脇を離せは二つなれとも附る時は二句一體也故に外の平句と違ひ發句の餘光をにかけて第三へ洩さす寸毛も心の殘らぬ様に脇にて云ひ切り次へはこはぬやうにすること肝要なり脇は字留と定るも此意味有に依りて也字留にする時は自然に心の殘らぬ様に調ふものなり故にてにをは留は留るや否やは初心の心に落着し難し云々俳諧師說錄

脇は發句に隨ひ時節時候違ひなき様に打揃ふて附るへし文字にて留る也てには留口傳餘りに一ふしの手たてを考ひて附るは脇句の本意にあらずすへて發句の餘情を考ふへし

相對附、打添附、違附、心附等の四躰あり俳諧獨歩行

脇は發句縦の時は脇を横に仕立る也發句に顯れざる所を脇

に順はし發句に違はぬ様に仕立る也尤も同月の季を入れる
へし三月に亘たるものは別に心得あるべきこと中略總て
發句は其情を十あるものを七つ順はし餘れる三つにて脇
を調ふる事よしとす同書

脇は發句に隨て時節を抱へ又主客のわしらひあるへし中松集
脇は發句にかいそひて句柄を丈高く物の名か何にても一字
にて留るなりてにをはにいていひ流し留ぬものなり紹巴法眼
又云本歌の發句の脇は發句の云殘したる詞を以て歌の末
を云聞せる様になすへし一ふしの手たてをなしたきよし
を思ひてせんは脇の句の本意にたかひつるなり脇に於て
は五つの格あり

一わいたひ附、二打添附、三違ひ附、四心附、五頭留の
五格あり俳諧埋木

長頭丸云脇に對附、ひろひ附、大小の脇なと云ことわり
季吟云ひろひ附とは發句の心を受けてよく細やかに附おふ
せたるを云へり、心附といへる打そへ附なとのたくひに
等しかるへし、對附は相對附と等しく大小の脇とは違ひ
事なるへし全書

紹巴法眼云ひとからみと云こと脇の句にあり譬へは藤な
との發句に松を根さしてはひかゝる物なれば一句の内に
松なとに収合はたゝ花を賞翫にて發句に無益の植物を取
そへたる事更に入らぬ事也全書

脇は字眼を定めて後趣向を立へし字眼を礎に置古式なれと

句意となふ時は上下の論なし俳諧寂業

脇の留はいつまでも字留然るへしと芭蕉も申されたり字留
といふ事テニハの字はせぬ法と古より定りたるなり是守
るべき事也眞の俳諧なとは別てなり眞の俳諧といふは神
祇賀の事也テニハの脇といふ事能く習ふてすへし別て習
と云事に口傳ありテニヲハの留脇は萬葉を濫觴とする也

秘蘊集

脇は發句に隨て時節を抱へ一篇さはやかに賓主のあしらい
有るへし紹巴法眼の云發句に添て句から丈高く何にても
文字にて留るへしテニハ杯不留脇に五の品あり一に相對
二に打添三に違附四に心附五に比留り是なり猶對附、ひ
ろひ附、大小の脇とてありたとへは

雪なから衍山もとかすむ夕へかな 宗祇

行水遠く梅匂ふ里 宵柏

俳諧もし去年の櫻ひろはん小笹原 信徳

雪間に黒く竈のすて石 同

又ある人の興行に

餅搗にひとつ合點の閏フ月

年待つ花はやまふきの柴 鷺水

是らや打添附なるべき又

名か聲かほとゝきすとは時鳥

卯の花や雪雪や卯の花 立圃

是等を對附と云

猶述懷の發句等獨吟ならは同躰も可然歟述懷の句に他人の附たる時は述懷の脇然かるへからず

身やことし都を餘所の春霞

此脇宗祇旅行のあらまし老後なれはいつくの霞とりならんと思ひを述べられたり

またき野山の花のあらまし

是は述懷の心を捨て花のあらましに取なされし也其外挨拶の句の脇古事本説寺の句の脇等様々の習ひとも引句取用てと思へとおほやう此心を以てはかり知るへし以上俳諧

寄垣集

五體の事

脇五躰

打添

枯枝に鳥のとまりけり秋の暮

歟かたけ行霧の遠里

傳曰枯枝に鳥のとまりたる夕暮ならは遠里は霧立渡り農人の歸るへき頃也と時分を定めけしきを打添る也案し方五躰ともに離るへからず雪中庵葛藤の巻

市中はものゝ匂ひや夏の月

凡兆

あつしゝと門ゝの聲

芭蕉

五月雨をあつめて早し最上川

全

岸に螢をつなく舟杭

一榮

是打添の脇也打添の脇とは家といふ句に軒垣窓柱なとつ

くるを云たとへは海と云句に舟岸なとを附るはよし舟といふ句に海川とは前句のうはさ也證句の趣を知るへし古式に云吉野山に花姨捨山に月と附るはよし花に吉野山月に姨捨山とはあしゝ尤此趣脇のみに限らず平句にても同し心也俳諧寂楽

違附

月花の愚に針立ん寒の入

やゝ春近き市の人聲

傳曰發句は四時の風雅に愚なれば針立んと興したる閑人のさまなるをいそかしき師走のさまを云立て附るなり違附と云は白きに黒き長きに短き大に小と詞違て心通ひるか如し葛の巻

違附

須磨も明石も軍最中

松風にひとり念佛の聲澄て

是前句は源平兩家の戦なるを隱者の山居なとして亂世を避けたるさま是違附也同書

尤附

秋の暮行先ゝに笠屋かな

萩に寝やうか萩に寝やうか

傳曰秋の夕暮の行先々も宿かるへきよすかも無ければ何れの草に枕せんと尤めて道理なるさまを云也三の朝

比附

秋に添て行はや末の小松川

垣根に虫の遠さかる頃

傳曰發句は秋もやゝ名残り近く小松川と云名のおかしければ分行んと云ひ立たる句也然は垣根の虫もかれゝに

露も霜に置かはるへき比と定む全書

馬士の手に火をつかみけり秋の霜 野水

梢の柿の落つくす比 且葉

是比留の脇也頃留はかくの如く頃と云字を礎に置く古式也しかあれと發句の頃を定むるなれば上下の論なし三春三秋の趣を能辨へて附へし俳諧重業

對附 奈良七重七堂伽藍八重櫻

曙かすむ三笠旅笠

傳曰奈良七重八重櫻とけしきを數へたる發句なれば三笠旅笠と其所の名とて其けしきを見渡したる旅かさを打添て心詞ともに對也常に好ましき句也全書

五脇は發句の餘情を盡す所なれば發句の心を沈吟すへし五七の聞えぬ所あれば作者へ篇と尋て花に蝶と愛し梅に鶯と附る也此所低句なれとも高句になる程にこめされは脇にはあらず先は發句を定る體よき也發句に場われは情を請て發句に淋しき餘情あらは淋しきを受くへし面白き情あらは面白き體をは情に汲て挨拶すへし此故に發句は客の位にして脇は亭主の働へき所なり芭蕉後集

相對 忘るなよ虹に蟬なく峰の松

杉のしけみを歸る三日月

頃 市中は物の匂ひや夏の月

あつしくと門々の聲

對 釣鐘は撞て降り行紅葉かな

蜂のから巢に蜚啼く

打副 空大豆の花咲にけり麥の緑

晝の水鶏の走る溝川

打着 椎の根に覗き出したる清水哉

ぬくふたやうな夏の青空

てには 霜月や鶴のつくく並び居て

冬の朝日の哀れなりけり

脇の句習のこと抑 脇に五様あり所謂打添附、くらへ附、

面影附、大小の脇、頃留りなり

打添附と云は發句にすかりて面白く附るなり

白妙や動けは見ゆる雪の人

筏の掉にさはくわち鴨

是は雪ふりて四方も白妙に見ゆるなれば人の形も動かぬ時は見へかぬるなれば脇にも群居るわち鴨も夜るなれば筏の掉にさはかねは知れぬと夜の體面白くうつしたるなり是にて知るへきなり

くらへ付といふは

花咲はつけんといふや小短尺

御酒の餘興に鶯か琴引く

是は花か咲は思ひめくらし短尺をつけんとなれば酒もりの跡は淋しさうなれば鶯か琴に七餘興を催すくらへたる也

又 情いかにあれ織女 牽牛

萩に露ちり萩かうなつく
如此なり様々に風情をめぐらすへし又是をは相對附拾ひ
附ともいへり

面影附と云は二様あり姿の面影心の面影也俳附句の部を見る
べし

大小の事

大小の脇といふは

見渡せば花はかり也春や京

麥麴を敷く鄙の三月

彼の平句にて違ひ附といふ者に似て少しかはりあるなり
頃留と云は歌にも

春はたゝ霞ひはかりの山の端に

曉かけて月の出る頃

と定家も申されしとかや

木隠れに蟬はかり動く夕へ哉

汗入かねて簾すく頃

平句と脇句とは少し替りある平句にては

麥蒔さして月を見る頃

花の下紐ときてぬる頃

兩袖しほる五月雨の頃

なとゝあり上の句の頃留りたまさか也所謂

柳御前が桃折に行離の頃

如此いづれも口傳にいふ成るへし

脇てにをは留

脇をてにをはの字にて留る事は又習ひあり宗祇の連歌の
句に

見るめかれおふてふ濱の雪の暮

松に氷れる月はかゝりて見ゆる

是は見ゆると字を云殘したれば實はて留にあらす俳諧に
は大坂宗因の句に

月のはしらに男たてして居る

如斯に留られたり是も居るといひ殘したる也さりながら
右何れも一代一句の事也季吟か句に

今朝見れば軒端を染る時雨かな

歸花咲湯にや有らむ

是は全句を上下へ返して聞んさりながら皆好みてすへき
体とも見えす上手一代一句の事也但千句萬句などの時は
卷のかざりに一句はかりは不苦や以上芭蕉後集

脇にてにをはの留をすること外幾品もあり或は發句の中の
文字へ返す事あり又かけてにはにもすへしと芭蕉はいへ
りまた脇の句中へ返す事もあり我はかう覺てすましき事
也と宗因もいへりとかや

青鳳曰宗因の金言妙感すへし是脇句のみにも限らず平
句にても大事のてにをは秘傳なとをは能知りてせぬか
能きなり未練の俳師未坐につらなりて物知りたてに珍

らしきてにをはを出して宗匠並一席の貴人をもとく事全
なき事なりたしなむへしといふことしかり芭蕉後集

ひさこ いろ／＼の名も紛らはし春の草 珍碩

うたれて蝶の夢はさめぬる 芭蕉

是手には留の脇也脇は礎を文字になして留る也さるをか
くの如く手にはにて留るは脇體備はりたる上の事なり自
得の人ならては好む可らず寂葉

冬の日 霜月や鶴のつく／＼ならひ居て 荷兮

冬の朝日の哀れなりけり 芭蕉

是もてには留の脇也同じてにはなから是は又格を外した
る也發句の手には留にまかせられし成るへし自得の人な
らては好むへからず

春の日 蛙のみ聞てゆゝしき寢覺かな 野水

額にわたる春雨のもり 旦葉

是人情の脇也人情の脇は平句に落入やすし其心得あるへ
きこと也すへて脇は趣向の立過るをわしとすわしゝとい
ふは平句に紛れ安き故也

いつな昔 ひとつ松此ところより浦の雪 加生

鳴こす峯を入かたの月 其角

是てり合の脇也てり合の脇とは浦に峯、海に山などとし
並ひて云也よくてり合されて放れ／＼になる脇也分別す
へし

深川芭蕉庵を尋て

わら野 雁かねもしつかに聞はからひすや 越人

酒しぬならふこの頃の月 芭蕉

是贈答の脇也贈答の脇とは違附をゆるす格也たとへは客
の自の句に亭主の自の句を附る故に違附也客發句亭主脇
餞別を受ける脇祝等の脇皆格也

芭蕉小 新麥はわさとすゝめぬ首途かな 山居

文庫 又相蚊屋の空はるかなり 芭蕉

是餞別の句を受けられしや

新庄の 歌仙 御尋に我宿せまし破れ蚊屋 風流

はしめて薰る風のたきもの 芭蕉

是亭主發句客脇さま也いづれも違附也是を時宜の法とも
云也

笈日記 しるへして見せはや美濃の田植唄 如行

笠あらためん不破のさみたれ 芭蕉

是亭主發句客脇也美濃といふに其國の名所を附たる例也
打添の心にして不破といふに美濃のと附るはわしゝと知
るへし

冬の日 炭賣の已か妻こそ黒からめ 重五

人の粧ひを鏡磨寒 荷兮

むいつた 鴨啼や弓矢を捨て十四年 去來

又ほそらぬ霜の小刀 嵐雪

深川集 年わすれ厄に桃の花かゝむ 洒堂

膝に置たる琵琶の木枯 素堂

是此體格を外したる也自得の人ならては好むへからす

雲ちる
の巻

生船やさくら雪ちる魚氷室

藤句

金涌の郡豊浦の春 千春

是揚句に似てわけ句に非らず文字留の脇也異體なれば爰に顯はして参考にのする自得の人ならては好むへからす
以上寂乘

脇手に葉留に

霜月や鶴のつくく並ひ居て

冬の朝日のあはれなりけり

發句てには留なれば脇韻字留にせずといふ古法也大かた此の如きながら其法を知りてこれにかゝはるへからす其句にもよるへき事なり只てには留とはかりいふ時は、れ、けり、ん等の常にありかやうの句にも必脇をてには留にするといふにあらす元來懷紙、書留の見苦しからぬ爲にすること也又曰脇のてには留は全體草體也挨拶などには必ずせぬかよき也格別に耳立たるてに葉留の發句挨拶に出來たらは脇に其格もてする事非禮ならず右手に葉留等句脇の對する時は第三韻字にて留るといふも懷紙面の並はぬやうの心つかひなり何も芭蕉のおしへなり師説錄挨拶にさへかくのことし故ある俳諧にはすましきこと推て知るへし

脇の句法 芭蕉曰脇の留を韻字といふは眞名文字にて留る故也聯句の脇は對也此格に倣ふて韻字留といふ脇體の事

五體三體など姉小路殿傳紹巴昌琢宗祇の發明の説われとも俳諧は其發句に對して體を定めす宜くすへし定れば古くなるなり唯の發句に旅の脇はせぬもの也第三苦しからす全上

脇は發句出來たらは體の句か用の句か又有心か無心の句か大中小のはたはり時節等まて是を辨へて發句けしきならはけしきの脇人倫人事ならは脇もまた是に隨ふ或は大に或は中に或は小に姿情意味其發句の機嫌にかなふをよしとす全上

芭蕉曰脇に五脇と云事宗祇の比より定まる事なれとも當流には發句の振によりて可然すへし定る體あれば古く成なりと教へられし也世間此説を知るもの稀なるか必ず五脇をもて教とす初心の手かゝり暫く階梯ともなるへけれども千差萬別の旨をしらは早く先師の教に隨ふへし然ともかくいふのみにては初心の手かゝりなし其句のほとによるものなれば豫めいひ方だけの心へとするなり全上

五脇の名目 芭蕉曰脇はひとつとり付、心附、打添、違附、頃留也加様の事は末細にするに不及俳諧成すなければ益なし満足すれば自然と濟むこと也

脇は大悟の收る所とは發句は大悟の立つ所脇は大悟の收る所故に脇は少しも跡へ心の残る所なき様云ひさる也聊か次へ運ぶ心あるは脇に非す平句也芭蕉一大事の教也全上下の句て留の事古今抄

大抵はバと押て「てと留也

蟬の端山に花は残りて

松にこはれる月ばかりて

保ばかり月は霞みて

如此の類なり但しヲハの字を上より十字目に置也

にて留をさへ字五つある事俳諧埋木

を、ハ、は、も、からぬ

水くさき心を人のならひにて

うたてきはをひ女房の客氣にて

よりそへは顔ににせざる心にて

老たれとしふともなきも道理にて

しなたるゝ顔にくからぬ繼子（たぐひこ）にて

てと留らぬを「てと留る事全書

そ、か、よ

夜はひそとしるしにゆくも疑ひて

とゝなる神かと聞けはうすひきて

さらはよとたんた一聲いひすてゝ

下の句つゝ留全書

下の句つゝ留りはさのみ習ひと云事も非す只上の句のつ

ゝ留りと中に「なりとか「けりとか云詞ありてつゝと留

むへきよし宗養の説なれともすへて近代好まざる事とか

や下の句は

大盃を酌かはしつゝ、

なと近くも長頭丸なと云給へり

見ゆ留全書

うくすつぬふむゆる

ほのゝ月のひかり堂見ゆ

まいりせし鵜の波にうく見ゆ

右近の馬場に玉をうつ見ゆ

かく文章のつくろはぬ見ゆ

打ちはたかりて縄をなふ見ゆ

木すへにとゝかゑのみはむ見ゆ

むかひの山にところほる見ゆ

大方加様にて見ゆと留り侍り又さなくて留りる例もあり

自らはかく覺へて人の事はとかめ聞ゆましきなり

一字はねとは押字なくてはねる也たとへは

なへせん みんなと也全書

二字はなしとは前句押字或はやを受てはぬる事をいふなり

全書

三字加へとは宗養三ヶ月に原と付老にその森句作る類也と

宣へり俳諧に

手折て供にうたせぬる萩

大水も心かへらし玉まつり

四字不同とは宗養云松と藤とあり前句に風と浪と付る也と

云々愚案に松に風は苦しからましかれと藤に浪は今世

の俳諧ならはうしろ付とやいはん夫も又句の仕立による

へきにや全書

かけてにはとは前の終の詞を當句のはしめに當て作る也とかや

連歌に

來る秋の心よりをく神の露

かゝる夕部を萩のうは風

是を俳諧に

見玉ふと袖に流れしおんなみた

おつる出家の心わりなし

きせてにはとは當句の韵の字を前句の頭の詞にことはらせたる也とそ

連歌に

詮方もなき秋の悲しさ

霧くらき夕の山の雨やとり

俳諧に

めくるもやすき神の寶前

みあかしも油さしたる御車

重ねてにはとは前句の終の詞を當句の頭に受て替りる事のこととなへおなしき詞にて云出せるなりとかや全書

桐の葉にされいにそゝく露の玉

たまの家にあ出す冷むき

當りてにはとは前句に取やすき詞あるにあたりて付る句也俳諧に

又かきたつる窓のともし火

古今集すめは後撰に筆を染め

又といふ詞に重又地又と云事あり

重又 また留守をして茶磨ひけとや

地又 又と逢ふそもしならねは名残おし

加様のてにはを能心得て付侍るへきなりとかや

すへて八字の付所といふ事あり

さへ なにか 猶こそは 誰も

是ら也これらの心をしらて付侍る作者は目なし鳥のをしに道向ける類ひなるへし

すみのてにはの事

伸あかり覗く垣越し花ありて

すんすりとしたる松かけ駒とめて

如此をくてにはに一句の長高くなるものなれば第三なとせんに此心はへ有りてよきと返すゝものたまひけるを今に小耳に狹みて忘れ難しけにゝと出る折ゝ只侍そかし後世これを見ん人必すゝゆるかせに思ひなすへからす以上俳諧埋木

第三の事

第三に變化といはす一轉といふへし變化と心得て強て自然を失ふへからす當流の集々を見て味ふへし古法に杉形、太山振あり當流には是を用ひす、すみの手に葉をぬ

くといふ事あり昔より大切の事とせしか今は大方の人知れる様になりたり此テニハをぬく時は先第三の位を得るもの也初心の階梯也

すみのテニハといふは上五七の間下七五の間のテニハ也、又やすみの上畧五七五の間の休み字といふ事也、留はいつとてもテ留にすへし若しさし合時は「もなし」「なれや」「らん」「になとにて留るへし但哉留の發句」「にて留の第三すへからす」「にては哉に通ふ故也、脇テニハ留の時は第三韵字留にするといふ古法あり、芭蕉曰第三の韻字留は用體のあるものにて五文字のものにて留るなる貞室瀧の月と留たり奇異のためし也是にて格あるへし又除字テニハとてのの字にて留る事ありたとへはきよめてのと留るは清めめてなり

韻字留心得の事

韻字留に二様あり古例に一種蕉門にて起りたる例一種冬の日の 檣檜山家の體を木葉降 是は古例の字留の例に非らず蕉門にての例也外にもある也口傳

芭蕉曰「もなし留の事たとへは馬に角もなしと真にいふ是發句のもなし也牛に角もなしと一轉したらは第三のもなしなり以上師說錄

第三は前二句とは違へり二句の間より一物なり出ると知るへし附ぬやうにと云說覺悟なり移句ひ奇位等尤微意な

第三に限り附るといはぬもの也第三を致すといふ也脇に附るにあらされはなり

第三の一轉とは發句人倫人事ならば脇も然り其時は氣色なり發句脇景曲ならば第三人情にて作るへし發句脇大ならば第三中より小餘は是に效へ都て三句均しからざる始なり以上直旨傳

春の卷頭に第三までに花出ても出すとても不苦素春にも植物は出すかたよしといふ說あれともなくても亦苦しからす其場の宜きに隨ふべし

秋は第三までに月を出す也星月夜は月にならぬ也其時は句のあつかひ大切の心得あり三月盡九月盡はいかやうにもすへし九月盡は脇にも月をする事なし第三に月を出せば季戻りして宜からす習ひなきうちは九月盡の發句立ぬかよき也直旨傳

第三は詩に起請轉合あり俳諧また斯の如く發句あり相對して脇あり是を陰陽天地に比す其天地より人を生し人より四民に分るか如にして第三は發句脇を二句からみ前句と見て其場其人時分時節等時々宜きをあしらふへし一轉の場なれば附方も平句と違ひ前句を微細に捌す大やうに附へし句作また習ひあり、て留にならぬて留といふ事あり是ら口傳を受くへし三の朝

第三は發句に相對して脇あり是陰陽天地に比す天地より人

を生し四民にわたるか如し第三は一轉の場なれば平句と違ひ微細に不捌脇よりは丈高くを本意とす留はてとめ定とす發句脇にニテ文字折合たる時は「にらん」もなしなとの内にて留へし發句哉留の時「にて留はせぬかよき也尤哉に通ふ」にてならぬは苦しからず治定の哉惣て「にて通ふ也」其角堂獨歩行

第三杉形

スキナリ

むら雀日和定まる聲立て

杉形は句の姿也譬は杉の本末細く中ふくらにすら〜と立伸たる心句法はむら雀聲立てと句の心濟やうに作りて日和定ると七文字かふる也一句の姿平句に紛れす丈高きか故也雪中庵三の朝其角堂獨歩行

太山振

タイサンブ

松の風鍛冶の銚の通ひ來て

太山は泰山をゆりすへたる如く作せよといふ教へ也句作は鍛冶の銚の通ひ來てと作り後に松の風と冠る也又松風にと置は句意かしこく譬は雜兵のはたらくか如し是平句

第三の分ち也芭蕉風雪其角其外古人の第三を味ふへし全上第三の句作 芭蕉曰第三は大附にても轉して長高くすへし

古法には留りの沙汰なかりしを宗祇心敬の比より今の格式は立り疑の發句の時は第三はね字に留めすうたかひの句は二句去ゆへなり又曰古書にいはく脇句テニハなれば第三文字留といふも懷紙に假名の並はさるやうの書法より定りたり如是の事は功者達人の業也初心は常の留りをよしとす直旨傳

第三は二句の間より出るやうの心にて脇を附るにわらす寄

る也移をとる也但哉留の發句「にて留の第三古へは嫌ひ

侍れとも今は嫌はす（哉に通はさる「にて留の事也」初春の發句に初春の第三はあるへからす他これに倣ふ全書傳に曰脇手に葉留の時は第三字留にする事ありたはいへ

差合なきにて留の場を物好に餘の留を求ることなかれ「なれや留は五文字の下にかゝえ字あるへし字留は五文字一名といふ事あり口傳發句にて遣ふ「もの字を第三に

は「をといふ」をの字をもはとつゝける事習ひ也、らん留の中の「や哉留の言捨は古式に誤れるの口訣あり哉留にはかならず句中に抱字あるへし、傳に曰第三は心軽く

其調重し一句長高く轉を專として發句に心詞の戻らぬをよしとす春秋は季あり夏冬は雜也發句二月の季に正月の季を用る事惡し、順の季を用へしとそ、芭蕉曰第三一字

韵字は哉にかきらす一字韻にて留へし暮春の發句に暮春の第三もあるへからす逆氣は常のところにもせず師說錄

第三振といふ事あり此振りを知らぬ人みたりにテ留外なるへし初心の人に教へて振りのつく留りを撰みて「て留」ら

ん留「に留なとすれば第三ふり自然と備る故に定めたるもの也其ふりと云ものは巧者ならては確に知りかたし荒

増し下の五文字にて發りたるもの也又すみのテニハとい

ふ事習ひ也秘蘊集

すみのてにはの連歌に

松立る奥の山本日はさして
越て行せきの山風袖さして

是山本山風中の七文字の留りにテニハを持たせたるもの
也又上の五文字と中の七文字と緑の切れぬ句作也第三に
此心專一也全書

第三字留の事 先すみのテニハにてさら／＼と五七を續け
下の五文字にて起す

春の風 菊の花 冬の月

加様なるもの、名か季節の題の詞かにて留る但テニハの
字は留につかず

第三の韻字留は用體の有物にて五文字のものにて留る也貞
室瀧の月と留られたり奇異の例し也是にて格あるへし、
一字韻字は哉に限らず一字韻字にて留るへし、第三に「の
と留る奇異の事のやうに傳來れと除字「てにをはといふ
はの／＼の歌の體也たとへは「さよめての」と留るはさ
よめて」なり「のは除字のテニハ也各准之全書

第三韻字留 前句の五文字にかゝらず長高くして一句體に
とまる同第三の「てにて留申す内あるへは「らんらんは
常の事のやうに候へとも口傳あり又もなし留「に留前句
のあひしらひによるへし眞澄鏡

第三にて留の事 「にて留にする時は先發句の哉を能味ひ
「にてに通ふか通はぬかを吟味すへし」にてに通ふとは
いへはえにいはぬは花の盛かな

此哉はにて也花のさかりにてといふを哉と留たり加様の
時「にて留の第三はしかたし然れとも詞の續やうに寄也
譬は「かすかにて「長閑にて「はるかにて坏と仕立ては
苦しからす其故はかすか哉長閑かな遙か哉とはいはれぬ
詞也此心を以て味ひ知るへし秘蘊集

發句に哉留「にてと通ひたる句

梅遠く香を遣水のなかれかな

水殘く根はふる芹の野澤かな

右の流れかな、野澤かなと治定したる句也加様の發句の
題にては第三に「にて留せぬもの也又發句のからにより
「たくひ哉ともあらはたくひかと疑ひたる心なり是にて
は「にて留苦しからす能々發句吟味第三肝要也全書

第三にての事 哉留の發句の第三に「にて留せぬといふ事
は發句哉「にてに通へはせぬ事也口傳「にてに通ふ哉と
は發句のうちにお、は、も、か、ら、ぬ、はの押へ字わ
らは第三にて留せぬ事也たとへは

ほとゝきす今一聲を寐酒かな

此發句の第三「にて留せぬ事也

ほとゝきす一聲聞て寐酒かな

是にては第三「にて留苦しからす是は「にてに返らざる

故也芭蕉後集

第三に留の事

打なひき糸ゆふ暮の永き日に

くれなるのや、見えそ衍める山の端に
是第三の「に留は此の如く句意上下廻る様に作るへし是
極秘也山の端にくれなるのや、見え初る又永き日に糸の
ふ暮の打なひきと廻る也此心を以て作るへし三の朝

新疊敷ならへたる月かけに

に留は下五文字よりよみかへさるゝやうに作るへし

馬時の過てさひしき牧の野に

是「に留也に留第三は下よりよみかへさるゝやうに作る
へしたとへは

月かけに敷並へたる新疊

牧の野に馬時の過てさひしき

かく作るへし

萬歳の長きはかまを春毎に

なとゝいふ句は兎にも角にもよみかへされぬやよくゝ
分別すへし俳諧寂榮

第三振 友雀の句に 月見んと汐引のはる船留て

傳に曰第三心軽く其詞重し譬へは他家の如し脇の下に心
をふみ一句長高く轉るといふは詩の轉の心と場となり發
句に心詞場所のもとらぬをよしとす

春秋は季あり夏冬は雜なり春秋三月に亘たるものは能々
心得へし、二月の發句に睦月の第三等を綴る事宜しから
す太郎月の發句に彌生の第三は輕し様にて苦しからず、
脇てには留の時は第三を字留にすることもあり本式十百

韻に十體の格ありて一卷いひ捨の俳諧にも其例を引あて
「て留に求る事なかれ、十體の格にも」もなし「らん留と
は」かな返し句「に留」けり留等は言葉わけて吟味すへ
し「なれや留は五文字の下に抱へ字を置き七文字にて押
へ其言葉輕からざる様に仕立てるへし字留は外に口傳あ
り

朧月 杜若 金衣鳥 郭公

加様の景物にて留る也五文字一名といひ傳へてあはひに
手に葉のなきものを坐の句とする也

行く舟はこゝろに芦の隈もなし

鹿の音はまへの山よりほとゝます

我家と思ひは空の廣からん

狭みはこ持せず聲をふるふとは

分別の落るところは椿かな

鳴からに響もすゝも松むしも

放さるゝ鳥は小田かる頃なれや

右第三留手に葉の事は數多にして一樣に定められす豫め
テニハの取合、押、抱 六ヶ敷体は古式と新式の譯を記
す一句の面より發句にてつかふ

「もの字を第三には」をといひ「その字を」もはとつゝる
事第一也「らん留のや哉留のいひ捨は古式に誤るの口傳
あり以上有也無也の關

第三はね字留の事

第三はね字は發句無心體の時すへし有心體の時はずへからず堅く先哲の教也其意は無心の發句は風景など云立て句意輕きをいふはね字の第三は句の姿詞ともに重き物なれば無心體の發句の時はずをせよとなり有心の發句は

象潟の雨や西施か合歡の花

此の如く姿も心も眞也仍て句重し故にはね字の重きを嫌ふ大むね三句の轉を知しめん爲也雪中庵三の朝

第三刻字留は發句無心體の時すへし有心體の句は重きものなればなり口傳句作は上にうたのひの字を置くへし其角

當傳書

第三もなし留のこと

木葉散る分入る山の道もなし

是は有のまゝに云下す也發句の「もなしは意中の輕重あり此境を考ふへし此句木の葉ちりとせば平句也ちると切たる處大やうにして太山の句法也

「もなし留は發句にはたとへば馬に角もなしと眞にいふを發句のもなしなり第三は牛に角もなしと轉したる心にて第二のもなしなり古今抄

山からの笠に縫ふへき草もなし

是「もなし留也」なれや留「もなし留別に子細なしたた句のたけ句のおさまりを見るへし發句の十分の位脇五分の位第三七分の位也と其心得にていつれの留にもせよ長高く第三體に作るへし深川集

山からの笠に縫ふへき草もなし

句意有りのまゝに言下すへし發句の「もなしとは輕重の境ひあり口傳 此外韻字留異體第三の事は師に就て學へし

其角堂傳書

第三異體の事

鳴からに鈴も與も松むしも

春の未天下に名ある時鳥

雲雀鳴小田に土持頃なれや

銚子取花も紅葉もなかりけり

世に韻字留の第三とて糸櫻初紅葉机等のテニハ入らぬ五文字を下に置いて韻字留め傳授とす蕉門にて曾て取らす是は初心への教也

都て第三の大意は「前句脇と云切たる場なれば一轉に物起す句作也」是に仍て古人「て留に定む」「て留は前句へなしみ跡へ及ぼすテニハ也故にて文字差合たる時は「二留」もなし留「らん留等の跡へ及ぼす留にて押て知るへし此意を能味ふへし然る時は「て留」に留に限らす第三の姿あきらか也右の異體深く味ふへし悉く及ぼすテニハ也されとも此一條は深秘にして曾て初心の人にゆるすへからず返すくも「て留を重んずへし俳諧獨歩行

第三らん留の事

野

藤袴たか窮屈にめてつらん

芭蕉

すり川 水せきて晝寝の石や直すらむ 曾良
 歌仙 是らん留也らん留は上に疑ひのことは置くへし左なく
 は留らす疑の詞は「や」「いつ」「いつれ」「いかに」「い」た
 れ「たそ」「かは」「なそ」「何是らの詞を上置きへし

あら野 夕かすみ染物とりて歸るらむ 冬文

此句上に疑ひの詞なし染物とりてやと「や」の文字を句中
 にこめたる也

久かたのひかりのときき春の日に

しつこゝろなく花のちるらん

しつこゝろなくいかて花のちるらんと「いかて」の詞をこ
 めたる歌なりと歌書の傳にも見へたりしかあれと上に疑
 の詞をつかふに子細なし

みさる 雲雀啼小田に土持頃なれや 芭蕉

是や留り也以上俳諧寂技折

第三五文字假名留の事

冬の日 花蘇馬骨の霜に咲かへり 杜國

是五文字假名の第三也五文字假名の第三はいつれ上下の
 五文字にてテニハなきものを居る也「假御殿」「門柱」是
 等の類は假の御殿「門の柱」とテニハ入る也テニハ入るの
 はあし、「時鳥」「机」「簞」などの類ひはテニハ入さる文字
 を置くへし

ひさこ 嘴太のわやくに啼し春の空 彌頌

はしめよりかくテニハの入るはよいつれも句たけ一句

のおさまりを思ふへし寂技折

第三仕様の事

惣別第三は句を三段に開ゆるやうにせよと

いへり先隅のテニハと云は

延上り覗く垣越し花有て

行當る森より先に道見えて

此の如く脇に取寄薄ともたしかに長高く句の心ゆるやか
 なればよき也是等の句皆五文字を後に置たる也先いかや
 うにも上の五文字を云て一句を作り立又後に能く案して
 置直すなり然は長高くゆるやかにゆゝしく開ゆる也平句
 にても其心得肝要にて是を隅のテニハといふ箱をさし候
 も先大體に隅寸を定め置て後に打付る時能く極に寄りて
 之をいへり又長け高いいかめしき句體なれば圭角きつと
 立たる故にいふか又切繼テニハといふは中の七文字を後
 に置たる也

松むしの歌乞垣根聲更て

是は松虫の聲更てとまわして聞へし又下の五文字を後に
 添たるなり

時鳥待し雨夜の鐘更て

是を打敷テニハと云則下の五文字を後に置たるなり又留
 りに文字を用て則テニハ留にせさる事あり是又一體
 也

風高し春また残る浪の花

宵啼をゆるして待は不如歸

右の二句「にてと添て聞へし又一體なり

聲立て聞人を呼きりゝす

是は上五文字と下五文字とを置かへて聞なり

折れて瓶に咲し卯の花

妾ても餘所に主なき山櫻

と芭蕉の附られし是はかけてには也又近代不角獨吟して

芭蕉に伺ひし其第三に

はつし置柱^{コトナ}たまつて歸る雁

と致して見せしに芭蕉曰歸る雁たまつてと返したるか

はかり申されてさして難せらし事もなく然は如此に一句

の中へも返すへき事ならん第三の體いか様に變するとも

先は此數體に過ぎず又第三の留に

秋高し南高簾隠れ里

しはし砧のやむ殿隣

月更ぬ鶏鐘聞も我宿の

此の如く口傳あり又平句にも宗因の

夢にもと社むかし男の

口傳あることなり以上芭蕉後集

第三て留然るへし諸書に出る所同前いく度も「て留宜し夫

故脇の腰に「て文字せぬ法也されと貴人などの句たま

ゝゝある時は第三「に留「らん留なるへし字留の事習ひ

あり習ひ知りたりとも常の俳諧には無用たるへし歳旦、

三つ物ならは「て留はかりもならぬ「らん留「に留「も

なし留「捨やなどの中にも字留あるへし第三とまりの事

口傳といふは何にて留ても苦しからず第三ふりといふ事

を知るへし祕蘊集

第三に手に葉の事 第三の留りに文字の定りたる事は一句

のさま發句のやうなれとも下のとまらぬ所にて次の句へ

及すへき爲なり此理をする時は「にの字「ての字にも限

らすとするへしされとも此句は第三のさま成ると百句の

中にても撰む出すほとに第三の様をしられはやはり定

りたる留りしかるへし世に句字留に傳授ありとてあるい

ははつ櫻あるいは郭公なと押字抱字の沙汰あるは知らぬ

人の推量なり

かうろきも未だ定らぬ鳴所

いつれの時か我も此第三ありしか一坐をいまして他聞

を免さず發句と平句などのさかい此第三の句字にても知

るへしされと尋常の留りにて事欠くましき事也二十五ヶ條

第三脇にこまゝと不附とも一句のからを長高く大やうに

さはくと有るへし去なから脇に一向付さるも又不宜平

句などの詞入ては句よはく成るもの也いふ度も「て留然

るへく若また發句哉と留たる第三に「にてと留る事別外

有るへし「長閑にて「遙かにて「幽かにてなどの類こそ

は自然留る事有へし又發句中にはね又句にて「はね脇に

こしの「てあらは第三に「にて留「はね字す術へからず口

訣發句の體によりて第三かはりめ有へしたとへは云立て

たる發句の第三は景色成へし第三を三假にて云事あり連歌に

小男鹿のゐる野のたちと聲ふけて 宗長

俳諧 龍のはる秋の雨そら水まきて 立圃

第三に「らん留」もなし留「に留等は習ひありいつともいはるゝ限りは」て留するか本式也但發句脇「疑ひか」未來か「不知の心有る時によりて右三の留可然此外に字留りの第三とてありたとへは

よふこ鳥又おもしろふよふこ鳥

と信徳のせられし也猶工夫あるへき也寄垣集

賀の仕様第三たけ高き句よろし「櫻花」「梅柳」「松竹」「花を待」「開く」「玉すたれ」「まきの屋此外色々可然ものなり是は別段の脇の心也未練成就の味ひ子細に不及其内祝儀の發句に忘れても「千とせ」「千代などゝかきたる句悪しく多くある事也秘藏集

四句目五句目等の事

四句目 芭蕉曰四句目にて春秋の季をつゝけ月花の句を附る事必ずあるまじきなり四句目心得あり

四句目は軽くすへしといふ事昔よりの教なりざるを得違てやり句する様に覺たるは誤なり蕉門の説には四句目を變化のはしめとす大切の場也すらゝとするは作のこゝろなり此故に「なり留にするか宜しなともいへり其旨

を知らは何をかゝはる所あらん猿蓑に狸をおとす篠張の弓といふ句もあり發句脇景曲の時は第三人事の句大かた出來ゆへに四句目に力らなければ第三はかり離ものゝやうになる也かゝる時は大方人事を附る也以上直旨傳

四句目傳曰平句のはしめ也古式は初心の場とす蕉門に於ては功者の場とす句作輕くはしりを專要とす「言葉のはしり」「心のはしり」「附のはしりあり三つのうち必ず其一つを心懸けて作るへし

第三に打添ふをよしとす附起すは惡し狸をおとすの付事を起したる句作に似たれとも第三によくゝ打添て一句はしれり故に波たつ事なし妙也以上師説錄

四句目は脇の姿より引さけてやすゝと付るを四句目ふと云也但留りは「也とか」「けりとかいふやうに兎角輕さをよしと云り

面八句の内にてても六句の内にてても四句目は初心のすへき所也と知るへし寄垣集

四句目をは脇の句より引上げてやすゝと付るを四句目ふりと云留りは「なり」「けりなといひ流し可然埋木

四句目より輕々しきやうにすへし

古人の名神祇釋教戀無常述懷同字此分嫌ふ世の字柴の戸絶へて住などの述懷めきたる事嫌ふ淺芽生つれくなとも然へからす親子の沙汰述懷に用ひさる故而八句の中にも不嫌貞徳老丁は八句の内にも人の名出され候よしをひす

なとも句體によりゆるされた事多し勿論世の字つれゝゝ等の詞苦しからず縦へよきと云詞にても句作によりなにもなるへき物也總て耳に立つ言葉を用すとあり

はなひ大金

四句目はいかにもすらゝと仕立脇句よりも引さけて輕く作るを四句目ふりといふ也留は「けり」なりなといひ流したるはよろし亦文字にても留る

附合下の句に二五、三四、五二、四三といふ事いかにも覺へねはならぬ事也

二五、三四とは

まさにしくれを「さく」さくら花

待たる君に「來たる」あつかさ

五二、四三とは

橋翻り「ほとゝきす」啼く

峰の旅人の「行衛も」しらす

二五、五二別條なし三四心よく四三よろしからず好さる

也然とも千句などには場に任すへし直旨傳

下の句に二五、三四、五二、四三といふ事しらすはある

へからぬ習ひ也

二五、三四とは

かい日のくれに「なく」ほこりきす

山ほとゝきす「きなく」晚景

五二、四三とは

うそくらかりに「ほとゝきす」なく

晚かたのほと「ときすと」なけり

同じ作意をとさまかうさまに思ひめくらして其うちになへんに耳にもたゝすきゝよろしきやうに仕立待るへしすへて三四をよきに定め四三をあしきに定めたり二五と五二とは其句によるへきにや埋木

五句目は第三の句をかたとり長高くいさきよくすへし留りは「はね字なともよし左なくは云ひ流したるかよし貞徳説若三の仙なとならば月の坐也但歌仙たりとも發句脇第三などに月出たらはすへからず又發句秋の句なりは脇か第三に月をするかよき也それも時宜によるへし若し發句脇第三までに月出さる時は爰を月の坐とす歌仙する時其心得有るへし爰に月の句出たらは六句目と裏移り秋の句たるへし寄垣集

五句目は第三の句をかたとり長高く沙汰あるへく韻は「らんなとはねて然るへし左なくは云ひ流したるへし梅の鎖五句目可然すへしふしくれたゝぬやうにと心得へしは句表の時は此二句五句目六句目無役の場にて仕にくき所なりやゝも

すれば表ならぬ句の出来るものなり直旨垣

五句目を筆わきと云ふ六句目を筆句と云執筆の致す所なれば也寄垣集の寄印歌仙の時

五句目より位も引さけて次第ゝに句輕さ作をよしとす

獨歩行

六句目歌仙の時は六句目を面の限りとす五月日月あらは是非ともい愛も秋の句すへし歌仙の時は筆句と云執筆の致す所なればなり

六句目は面八句の内にも六句の内にも初心のすへき所也と知るへし以上寄垣集

六句目可然すへしふくれたぬやうに心得へしは句表の時

五句目

時は此二句

六句目

無役の場にて仕にくき所なりやゝもす

れは表ならぬ句の出来るものなり直言傳

七句目より句からを安くと風景風情はかりにて置くへし尤もたけ高く有るへし但百韻五十韻四十四ならは月の坐也

總して月の坐花の坐といふ事獨吟などに其沙汰なし大事の景物にて歌道第一に賞翫の雪月花なる故一坐の人々互に時宜してむさと月花等の句をせず既に七句目共至る時は非と望まれて先輩の功者達のせらるゝ所也むさと初心の云くたすましき事を見はかりよく知りてあなかつ五句目七句目を坐とかたきるへからず

百韻五十韻四十四等にては筆わきと云歌仙の時は五句目を云百韻等の時は八句目を筆句と云執筆の致す所なれば也以上寄垣集

七句目月を出す時は論なし秋の發句の時は爰に他の季の句を出すへし歌仙は一季にても苦しからず名號の俳諧はかた式によるかたよろしき也

七句目を他の季にて月あるへしとは九月盡の發句の時は月なくとも可然也七句目他の季にて月あるへし直言傳

七句目は五句目より句からをやすくと風景風情はかりにて可然梅の鎖

月の坐の句亦一位ありて他の平句と同じからざること但第三の次に立はとの位を持へし師説錄

八句目は詞につまる何となく輕くと幽玄體をもて付るを八句目ふりと云埋木

八句目は若七句目に子細ありて月なき事有る時自然に月をもする也是を翻れ月と云也寄垣集

八句目は面八句の内にも六句の内にも四句目八句目は初心のすへき所なりと知るへし

面八句の内神祇釋教戀無常述懷懷舊哀傷の詞人の名名所同字はすへからず但發句にはいかやうの事もすへし八句目を筆句と云執筆の致す所なれば也七句目を筆わきと云以上寄垣集

折はし裏移心得の事

折はしの句やり句するやうに覺るは誤なり尤表の折端は聊か心遣ひもあるへし卷中に至ては其卷面の折端毎に安き句の附ては後の句附出すべき力なき故に却て卷中惡くなる然とも折はしふりといふ事なきにしもあらず心得てするまてなり都て附句は一句立やうにてひとり立たす趣殘

るやうになるか後の手がゝりと成て面白き事の出来るもの也是を句の運びと云ふなり直旨傳

九句目は殊につまり行もの故前句のテニヲハにそとわたり付らるへく去ながら懷紙のうつりの事にあれば句丈引立られやう肝要なり梅の館

九句目を裏移りと云是より神祇釋教何にても苦しからず白韻五十韻四十四の時爰を裏移りと云歌仙の時は七句目を云也寄垣集

裏移りに戀を附る事待兼戀とて世に嫌へり待兼戀と名付て制するは何事そや其故を問は、ひしとつまるへし祝詞などの俳諧に釋の句先荷ひ出さんより遙か増るへし句ひの花揚句までも戀の句をする事苦しからず返て祝義なりと芭蕉も申されしにて知るへし

前句は覺へす言捨の俳諧に「雙六の恨を伯母の書盡し」と芭蕉の句あれされと其席の宗匠是を制せは背くへからずすへて面にせざる物は裏うつり二句まで昔制し侍るにや當流には其沙汰なし

裏うつり三四句猶初裏のうちは事もなくすへしなといふ説も百韻或は席ふりの俳諧の心得そかし草體は是にかゝはるへからず表よりの運びにも寄る事ながら大かた裏うつりは起請なり（こは句數にいふ起請にあらず附方の上の起請也）力を持せん爲なり表の折はし大かたやすらかにする故也

面うら二句目其起請に應してしかと附る也三四句故に六ヶ敷し捌のはしめとするなり此三句目大事也風景などにて逃附にあしらひなとすれば俳諧骨折る事はいらす附にくき所はいつも逃句するやうになるへし

此三句目〳〵の變化を學ひとする事也其三句の別か手に入れば千句万句も自在也といへり

俳諧の稽古は附寄る意味と三句の別との二句此中に千差萬別の體出来る也四句五句或は見渡しの計ひは運びの扱ひ也

偕右裏移の三句目も捌けて付たらは四句目は逃んとする也更に氣色に移りかたくは半延の句とて半無用のことはをわしらいて句を作る五句の人心得て人情を抜て氣色言語にて附延す也かしなからかくいへはとて格式のやうに覺へて是にからまれ偏屈におち入へからず

附合は前よりの運びによる物なればかく心を得へし上に變體自在なるへしかくて人事を五句も運ふへく風景の句は二句に過へからず、無情の句多く續けは卷中力を失ひ弱くなる也仍て無情の景曲二句も續かは、三句目は必ず附起して人情を出すへし爰に人事人情を盡して附責る事上手の業なり、初心のうちには人情三四句も續け得ざるもの也とむへき所にて人を抜ときは忽力らぬけて一卷の疵となる逃るへき所は自然と出来る也

是を見る事に功者の眼なくては難し其事盡さずして手の

ひかれざる所は何句にても附責るは當流の力なり是尤も自然の境なり、然るを世間の俳諧は三四句も人の上を續ければうるさしとて必ず無理に逃句を附るなりいはれなき事そかし、

惣して運ひもて行く所大かた始終同じ調子なり、附けといふ場と地にて運ぶ境のわいためなしかくは一卷の眼と見るへき所なく力なきなり、轉變不轉の變今日の上に當て了簡すへき事をかしいか、定あらんや付へき程に前句か附けよ／＼と来るなり通るへき場も亦其心得也事定り盡るもみな自然也以上直旨傳

初裏の初に戀を嫌ひ又二句目までは表の句位を持續て附るなといふ事は其故は本式十句表を畧して百韻の八句表を製せしより起れると也本式十句のうち八句を表に残し餘りの二句を裏へ折かへしたる故表の内二句か裏の内へ來てある心なる故のたしなみなるよし歌仙又百韻表八句を畧して六句表とし句はうらへ送りたる故百韻と同義なりと也芭蕉是をいはれなき事也とて用ひ給はさりし故蕉門にはこれを取らず他門は今も是を用ゐると也師說錄

十句の内といふて面も同じ事なれば百韻歌仙とも裏うつりすくに戀及びけやけきものを出すを不好獨歩行

初裏の三句目捌のはしめ聊か氣を改て附起すへし沈むへからずさはかしかるへかす師說錄

十一句目初裏三句目云より心を回らし思案專要也風姿をつつけ詞

をかさり風體をたしなみ遊はしよき前句に付候はんとて面をすり句毎に後れ前句受られぬ所にて付候へは必ず一句もふし立つかぬものなり先に懷紙移りには二句三句の内を心かけやす／＼と付られ其うらに思ひより句出來ならは夫にて一ふし仕候へは連歌も花やかにて心致されす候て存分より外の句を初心にて願ひ句毎に後れもて行やり句をさい／＼なす事也是等の心得肝要也埋木

裏の十句目から移りより一句二句と數へて十句目に高さ植物せず花に嫌ふ、若十句目に春の句出たる時は十一句目にも花を引上げてすへし是を呼出しの花といふ也初裏十三句目花定坐但し歌仙ならば花の座也歌仙なれば七句目より秋の句を出し月は十句目を定とする也、百韻五十韻四十四なとならば月の坐也十句目を月秋とし爰にて月の句をする也乍去自然これより前に仙歌のときは花百韻五十句四十句四なとの時は月來たらは其沙汰有るへからす前に云如くわかちに月花の定坐とて爰までせぬ物といふ事には非らず只大事の景物とて互に時宜する習ひなれば前にも秀逸の句をさへ附そへは苦しからず全集

名残の裏の事

芭蕉曰名残の裏は句の事を捨ていかにもすら／＼と句作すへし不深切にやり句するやうにせよとにはあらず今更事をもとめ耳立やうの事を慎むへき也又句並を追ふるにも

及はす揚句は附かぬやうにといふ古説も一句に成て一坐退庵し興醒る故にかくいふ也又兼て按し置ともいへりものに著すへき俳諧などは跡にて付直すへし揚句は發句の主又は亭主のする所にあらず始の一順の終に執事の句なくは執筆すへし發句にある文字を用ひす相傳は如是なりといへとも賀庭追善など噴の會には其坐其巻の模様によりて發句主に名殘の花を所望する事もありさる事あれば揚句も亭主にさすることもあり加様の事は例にはなき事なり所以ある俳諧には發句に心の通ふやうの名殘の花有るへし揚句も亦自然と其こゝろはへ也譬へは客來て其日の事を述て先より雜談時をうつし歸る時に至りて又其日の事を云事禮を盡して罷歸るか如し但發句に同意にせよといふには非らず句ひの花とは本式會に稱すへし常には名殘の花といふへし直旨傳

名殘の裏 紹巴曰名殘の裏なとに事かましき詞なとゆめ
〱せぬ物也前句にひかれ節立ものにて候へは付句にてやす〱とする事功者の心得なるへし

季吟曰俳諧は兎にも角にも能付たるをもてはやし侍れば名殘の裏にてもたゝおほつきならさらん様にたしなむへし流石に俳諧は連歌よりも廣き道にて侍る云々、長頭丸もさのみよくのたまひしか去とて前句に詮なき事など一句を飾ん爲にこと多く仕たらんはあやなきわさにこそ又無文にてあまりにぬるき様ならんも聞所なきなれば其程

のさしはからひたゝ其人の心得なるへし埋木

名殘の折とは百韻第四の折を云

歌仙四十四五十韻の時は三の折を云

名殘の裏八句第四の折の裏也月すへからす昔の懷紙には月有るもあれともせぬかよき也寄垣集

名殘裏七句目花の句すへし、にはひの花とて殊に賞翫する也初心の人はすへからす心得も有ること也散るかしかける等又は傍題等の心すへからす

八句目揚句と云々不付とも軽く早くすへし全集

名殘の表三句目猶其心得あるへし、初裏の三句目よりも一際起して附改むへし、初裏の三句目の捌のはしめ也聊か氣を改て附起すへし沈むへからすさはかしかるへからす師説錄

揚句の事

儀式の席に舉句の事 我家に舉句の掟といふ月次の如き坐俳諧には論なし或は祝言の會といひ或は哀傷の席といふ時はおほむね宗匠の發句なれば名殘の花をも宗匠に望む事也然れば舉句も常ならず其花をあしらふへければ或は一坐の老人か或は親族の功者に望むへしさるは一卷の始終を調ふる意也然るを今の俳席には揚句を無下の場所と覺へて身にしみて我を案せず人も其坐を立さはきて果は筆句にもいひ捨てとさるは一坐の俳諧にて公式の論には

及はすといふへしそもや儀式の俳諧といふは執筆は一順の終りにありて名乗の肩に執筆と書へし無名に筆とも執筆とも書けるは略義にして論せず然れば祝言哀傷の發句に祝言哀傷の名殘の花は本より鉢用の心得なれば揚句も發句の脇にかゝはらず其花の用を整ふへき也或は貴賓高客を請して晴かましき一坐の俳諧に發句は其日の挨拶ありて名殘の花はよのつねならんにも揚句は一坐の首尾なればさして前句の附意になすます前にさし合はぬ當季を案し直て治國齋家の時宜によるへき也ある年湖南の新靈山に遊ひて

七浦や一字の題を一字つゝ

霞の刷毛にわかる八景

されは其時の評論に此發句は殊に衆議あるへし本より我門の式となせる名所に雜の發句にも似なから是には當季の脇をつけて四季格ともいふへきやと其日の脇は鶯に定りしか名殘の花に至りては發句のぬしより支配すへきにあらねは例のよのつねの散花なりきされと舉句の衆議には此卷頭の常ならぬには揚句も一ふしの心得あらんかと霞の一字を以て七浦のわしらひととさるは定家の一字の題に霞鶯の發語をかれは也此外に揚句の事を其卷くの變通なから有用無用の二品には過さらん

俳諧は今人倫の花ささて

面白頬面白目白さえつる

鄰へも知らせず歟をつれて來て

屏風の陰に見ゆる菓子盆

此二連は有用無用也前は難障二百韻に眞草のあらそひ有て草の百韻の舉句なるかさるは我家の宗とせし人倫の俳諧こそ面白けれといふ意を目白頬白の拍子にかけたる爰に一卷の用ありと云へし後は彼いふ炭俵集に變化の中の曲節にして名殘の花をも引わけたれば爰にはよのつねの附合をもてわとの留らぬを興とすればその一卷には用なしといふへし然れば揚句は干變なから詮する深く案し入て一坐の首尾を屈すへからす會後に其卷の用あらは幾度も案しへき所也古今抄

あら野

花の頃談義參りも浦山し

越人

田にし喰て腥き口

芭蕉

熱田三歌仙

常盤山常盤之助が花咲て

桐葉

霞に残る連歌師の松

叩端

是文字留の揚句也揚句は都て一卷の終りなれば容易に附る事なから發句の意脇の意を齟齬せざる様にすへしさりやとて同事を附へからす祝賀の卷ならば祝賀の意の施るやうに作るへし、追悼の俳諧ならば追善の意を述へし揚句にも揚句の體あり能々考へ見るへし當時の俳諧揚句を疎略につくるは誤り也筆軸なれば忽かに作るへうらす

春の口

見付たり二十九日の月寒さ

荷兮

君のつとめに氷ふみわけ

羽一翬

是はてには留の揚句也

山中の巻

鐘撞てあそはむ花も散かゝり 芭蕉

醉狂人と彌生くれ行 執筆

是は北技曾良芭蕉と山中の温泉に遊びし時の吟の揚句也
心得へし

涙花の技折

舌うちもまた霞也ほとゝきす 野童

鬼貫亭を馬樂堂といふ 瓢界

是は鬼貫新亭の賀のわけ句也

一ツ星 廟まつる幣に胡蝶のやとりして

調幽か母の齡ひ遅き日

是は調幽か母の年賀の巻の揚句也

希草集

塩ものに咽かはかする花盛 乙州

奈良はやつはり八重櫻かな 沾園

是は發句戔留にてなき時はかく揚句に戔留をも附らるゝ也

連歌には櫻に花をも附る俳諧にては花に櫻を附るはよし
櫻に花を附るは悪しゝとて許さず花に櫻を附るも心得な
くては附き難し貞徳曰前句の正花めかざるには花に櫻を
附る也と有況や櫻に花附ましき事也俳諧寂寥

月花定坐の事

月花の事、去來云花に定坐なしと先師はせを翁いひ給ふ當
流にはこれを用ふ花を引上るに三品あり

一は一坐に賞翫すへき人ありて其人に花を望むとき其人
の句前に至り春季を出して花を望なり是を呼ひ出しの花
と云

一は貴人功者の人他に譲るへき人もなければ呼出しを待
たす花を作る又兩吟の時互に二本つゝの句主なれば辞退
に及はす引上げて作るなりさて故もなく呼出すは呼出す
者の過ちにして花主の罪には非らず 略月花は一卷の飾り
にして定りたる坐あるには非らず附合の辞義に譲りゝ
て後れたる時賞翫の月花を折端へは翻されぬ故折端の高
句をもて定坐とす例に其故を知るときは月花の坐を必ら
すとせず一卷の變化は自在ならん但し月は折端へ翻せる
例あれと是は前の月の障りありてやむ事を得されはなり
花は翻せる例たえてなし歳時記

月花の句は一卷の陰陽なりなくてならぬ道理を知て前々の
係ある句なりとも居て一卷を調ふへしと二十五條にあり
され共其前句によりて只月の花とあしらひては附かぬ句
あり是又附句に季を結か如く月花を句の用になして働く
へし此頃或人の句に

婆々に渡せば赤子泣やむ

爰元は花の彌生も蟬の月

斯く附侍れは一句の趣向は囁乳にして月と花とは句作の
用也赤子のせはりたるに蚊のあしらの餘情限りなし

狂歌も一首出來て名月

鋤鍬に荒れても花の都あと

附は舊都なり花は句作の用也花前に至てかゝる傍若無人の前句を出せるを乙兒か只何となく附わたして席上贅舌を吐り

醫者が遠くて間にあはぬ也

菅笠に花の都と書てあり

是も花前の難則也附は前句の煩人を都人と見出して花の一字は用也句作也尾城の巴靜か席上の人に涙を翻させし附句也

枕もふたつ鴛鴦にならへる

浮舟をまはす花の瀬月の淀

浮舟は戀の應答にして趣向は舟道遙也月と花とは句作也

初日の唄聞なから我軒

月をほしたるはら貝の酒

附は山伏の假枕にて月は句作なり

堪忍ならぬ七夕の照

名月の間にあはせたる芋島

前句七夕の照とわれは眞晝の句なり依て附は芋島にして月は句作也

曠野の百合に涙かけつゝ

狼の番して明る夏月

附は番人月は應答なり

はら／＼と錢落したる石の上

酒で乞食に成やすき月

附は乞食月は應答也

日は赤う出る二月朔日

初花に伊勢の匏のとれ初て

附は伊勢の海にして花は應答也

曲突焚付ける妻の尻輕

花の露月の鏡もそれながら

附は櫛笥也月花は用髮結さして立働く姿明らかなり又月花の句は前句の作者に功者不功者あり功者の人前句へ廻る時は程よき應答を出して附句に骨を失ぬ也三吟未來記初折の花前秋の三句目なるを庵の雜水をすゝる小男鹿と翁の附られたりされは此鹿は妻乞秋にもあらず奈良あたりの鹿にして一句放しては雜也依て秋季に花を附るむつかしみもなくすらくと連ひ侍り名人の心つかひ後學の作者思ふへし附合小鏡

三吟末
來記

ふたゝひ暮るゝ霧の明方 嵐雪

見盡して蚊屋へ這入る月の友 其角

庵の雜水をすゝる小男鹿 芭蕉

一通り彼岸の花の咲ちりて 嵐雪

月の座の事

芭蕉曰月の定坐をこぼす事五十句うちにはあるへからす奥

に至りて三折も過ては少興にもなるものなれば稀に翻す事もあり是も定例にてはなし歌仙には苦しからず元來畧式なる故也月の坐に月の字も有明の字もさし合たる時は異名にてすへし月は上の句を賞翫とす落月無月はつゝしひへし法にはあらず

星月夜は秋季にて賞翫の月にはあらず若發句に出る時は素秋にして他の季の有明などの附句致すへし

月といふ字は五句隔つと新式に有り月二句裏に稀にあり此時は月數八つ也名殘の裏はまれにもなし直旨傳

表の月の座の句亦一位ある事他の平句と同じからざる事但し第三の次にたつはとの位を持つへし

傳曰落月無月の句もし付たる時の心得あり口傳但し月の字有明の字など近き時定坐に月の字を出す事法外の變格あれとも初心のすへき所にあらず必らず宗匠功者にまかすへし

素秋は先せぬ事なれともなさて叶はぬ場にはなさすんはあゝへからず古式ありとも當流に之を用ひす別に當流の法あり口傳師說傳

秋は第三までに月を出す也星月夜は月にならぬなり其時は句のあつかひ大切の心得あり三月盡、九月盡はいかやうにもすへし九月盡は脇にも月をする事なし第三に月を出せは季戻して宜からず習ひなさうちは九月盡の發句立ぬかよきなり直旨傳

星月夜の月を持たる變例 春と秋集名殘の表

うたれてかへる中の戸の翠簾

格に目をさす程の星月夜 芭蕉

次谷の梟と附け名殘の裏引返し冬籠と付三句にわたして冬月としたり異なる例也師說錄

月の句異名にするはよからず無據する事也月前是を制して月の字出すへからずと芭蕉も申されし尤も時にもよるへし法には非すと也百句も三十六句も悉雜の句なる旨をさとは月の扱ひいかやうにもありて異名の論かゝはりなかるへし

折端に目を翻せる稀にはあり故ある事と心得て猥にすへからずすへての變格子細も知らすみたりになすものあり變格を格式にとるは不學の誤なり月花を引上げ或は翻しなとする事も會釋ある席には其理なくては失禮なり常の席無名の俳諧兩吟等にはともかくもあるへし實に道をあきらめ自然に師とも仰かるゝ輩其坐其時の運び變化物好にて古になき變格をもなす事もあるへし是は其坐限りの事にて又すへくもあらず去來糸櫻をもて花にかへたるも古傳ありとはいへと珍らしき物好なり是等をもとも思ふへし直旨傳

月並の月二句隔て月の字出さぬ法にはあらず句作りのふりによるへし但有明の外十六夜亥中まつ宵の類もあまりなるへきだけ異名にてはせぬ方よし正風にては大方異名に

てはせぬなり古集にも少きにて知るへし師説録

月の字は面の内是非とも可詠こと百韻は七句目歌仙は五句目也附渡りにより輕重の捌あるへし獨歩行

月の傳、月花は一卷の的にして尤も重し其坐の宗匠功者又は貴人等のする事也月は一表に一つ、七月也引あくること子細なし百韻に一ヶ所は翻す事をゆるせとも極りたる事には非らず、初裏の月は決してこはすへからず、月花を一所に仕立る時は五分〱に聞ゆる様にすへし是は月の坐を略して一所にする故也甲乙ありては月花引題して宜しからずさはいへ月に秋を結ふといふには非らず、月短句にてはそへす長句はかりは苦しからず、秋の卷には脇第三までに必ず月あるへし月無きを素秋とて室内の外には用ることを許さず、月前に據るなく雨の句など出たる時は待月過たる月ともを拵へ用ること然るへし、打越に時刻ある句には月の座は晝夜の文字を用ふることなかれ、夏冬期の月にはのゝ字を入るへし、月に戀を結び名所を結びたる句は一卷に一ヶ所と知るへし以上幻住庵傳

翻れ月の事

こほれ月の事 世に傳ふ俳諧の式には月の坐に指合ありて次の低句に月を譲る時は月を翻すといひ習はして其句に附方の子細はなけれとそも月の座と云は連歌の家の式なれば二句三句の以前よりその指合は遠慮すへし然れとも

貴賓少人の句を強てとかむるは時宜に非らず或は宗匠の稱美せし句も或は執筆の聞もらせる句をも己に懷紙に載する時は二句も三句もけつりかたく其時は今の附方をもて次の句に月を翻すへき也是をも今の附方に二品の式目をわけて前句より月をいひかくると月より前句にもたるゝと畢章は例の二句一意にして前の高句より月をふくめは其坐の月と同じ意也さて前句より月をいひてゝかくるとは

掃地日の隙より所作のうかれ初

玉のすたれの高臺寺前

あらかねの芋は〱と賣ありき

今宵の月の名はかくれなし

去れは前句より云ひかくる月は前に趣向を立るに及はず凡て前句の噂にして月はやすらかにすへき也或は前句より云ひ掛けながら月に趣向を立る時は

踏わけて出たる男鹿の山の端に

月も嬉しとおぼしめすらん

此月は歌仙の四句目に翻して是また附方の一體也彼いふ前句の全體より月をいひかくる句法にはあらず男鹿のふりは其前に用ありてをのか當句の趣向ながら山の端の古語をかりて次の月にはいひかけたり爰に此句の附意は嬉しとは見る人毎に思ふらん山の端出る秋の夜の月とよめる其歌の裁入ながら月よりこなたを嬉しとは是を翻轉の

句法にして二句の間に力を入たる附意の死活を稱すへし

干物を忘れて露をぬらしけり

門は晝かと思ふ月の夜

此附方は委情の兩用にして干物と晝との繋きを見るへし惣して翻れ月の附方はいひかへるももたるゝも二句の間の道理なれば多くは情のはこひならめとこれらは姿の證句と云へし以上古今抄

翻れ月の事

春の

松風にたふれぬ程の酒の酔

羽笠

賣残したる虫はなつ月

執筆

炭俵

黍の穂は残らす風に吹たふれ

野坡

馬場の喧嘩の跡にすむ月

嵐雪

是れ翻れ月の古式也翻れ月は折端に月をする事也月といふ字をかくの如く礎に置く也雲はなる月「小夜ふくる月」と、詞の月に縁の續きたるは悪し、虫はなつ月橋を行く月など、詞に月の字の縁をたちて心に縁を續きて月といふ字を礎に置くこと也寂業

さる
みの

此夏も要をくゝる破あふさ

醬油ねさせて暫し月見る

古集にかくの如くの翻れ月もあれと古式を守るにしくはなし全上

月は百句に七つなれとも若し貴人高人杯の御句に月ありて

宜き句なと出来る時は名残の裏に月をして八つにするなり又至て貴人か花の本の宿老かなれば名残の裏の花を月花にする事也左なければいつも裏には月なきと心得たるか能きなり又表にても裏にても終の句にても月をはこほれ月といふ百韵にてもたまさかに一つはかりは不苦にや併し好まざることか千句には有る事也必らずすへしと芭蕉は申されし也芭蕉後集

月に日と星の事 前略先哲の句をあけて當時の扱を知らしめんとす爰に月の坐に至りては故翁は隠見の句作あり

青闇はあらふる神の宮遷し

北より萩の風そよきたつ

此青闇は世に傳へて故翁に高名の扱也是は歌仙の七句目にて例の月秋を斷れば此遷宮の秋季を出せしに十六七の青闇にして唯今の月の附方ければ爰には神の威靈をよせて萩は句並をのはすへき其時の會釋也されと青闇の打越に月のあしらひの殊に六ヶ敷くさはとて十句目に月を翻さは歌仙の秋季もやかましく花前の月も無念ならんと爰に隠見の句法を用ひて

八月は旅おもしろき小幡綿

といふ句はかの中秋の名によせて此巻の見渡しに月の一字をあらはさむか爲也詮する所は青闇の萩に唯今の月の面影を響せて月といふ字に古法を捨ざる遠くは歌仙の二花二月の先非と衍いひ近くは當坐の妙用といふへき也然

れとも此等の汲は故翁に例の變通ならんに我門の學者に一人りふたりは聞あやまりて背闇をいつも月なりといへる師道の興廢はたゞ門人にありて百世におそるべきは遺訓の沙汰也

六月や峰に雲をくわらし山

是は嵯峨の落柿舎にて名所三歌仙の發句也此の卷の五句月に至りて異名の月は何々ならんと月次日次の名類を尋ぬるに此時に其名の評論ありされは連俳の古式より有明に論に及はす或は既望をまつといひ或は三日に影を結ふに盃の影をもて月となせるは俳諧の狂言にして今の用にわらす然るを古式の汲にも彌生師走といふ類には打越を嫌ひて附句を嫌はすとやさるは日、星の例ともちかひて理をとかめぬは寛制といふへし畢竟はたゞ姿の論にして五月雨に八月を嫌へとも五月雨には嫌はすといへる耳目の變としるべきやしからは卯月とも菊月とも訓にいふ時は嫌へく二月とも八月とも音といふ時は月のひゝきなしそれをも嫌はぬ筈なれば執筆の法にいへは「さみたれ」と假名にかく故に執筆の働あれと二月八月とは假名にかくれす月といふ字の姿をおそれよとそ「次に音訓の評論あり今いふ發句の五もしは六月と音に吟すへし人もし「みな月と訓に唱へは語勢に炎天のひゝきなからんとそこれらは音訓の妙用といふべき也」次に異名の次第をもて星月夜の評論あり古抄は星月夜の名をわけてたゞ秋な

りとはかりいひ捨て月に去嫌の論なければとも是は秋にして月にあらず發句脇第三までに此名巨ある時は其三句は素秋にして七句目の月の坐に他の季にて異名をすへしこれらは例の埒なりとそ從上の評論はすへては故翁の遺訓也

隱見の事

月の一字に隱見の事 此の格は前に題なし翻れ月の類ながら或は夜分の指合か或は天象の去嫌にて月の噂をいふ事なり畢竟は月といふ字を隠すと見はすとの二品也隱見の法は漢家より出て詩家の家の名目なりさて月をかくすといふは

秋たつや朔日汐の星しらみ

はら／＼松の岡に稻の香

姨捨の歌には誰も袖ぬれて

爰に云發句脇第三は歌仙の表合也されは朔日の脇に臨みて月は尤も六ヶ敷第三はまして星しらみに指合さはとて六句の表に四句まで月を翻すへきにあらねは爰に姨捨の名をかりて月の俤をふくめる也さりや芳野を花といひ更科を月といはむに誰か月花に非らずといひ増して前句を田毎に見なしたる山田の形容を稱せさらんや去なからいつとても芳野と更科といひて月花を隠すに論なければ前句のうつるとうつらぬとに作者の眼力を知るべき也 以上

古今抄

月の名所花の事

更科や曇るといふは花のこと

月の名所に到る人春は花などにて作る人多し實に大事なり
長頭丸の片帆傳にも委く其場を辨へ花にて月を稱美する
牀にすへき事とそ更科は月の本名にして風雨の爲には曇
るへからず彌生の花の霞より月の朧と變化して聊か光の
薄き事もとより一卷に仕立てる時は初表の月の坐には正月
あるへからず

夜の綿 かつら男 常娥

等の粧ひを以て作り裏の月は苦しからず花は發句體と月
の爲めにいひ得る牀にて中の花ともに用捨なき事也 有也
無也の關

花の事

芭蕉曰花四本のうち下の句一句はかりはありまれにも定坐
を翻す事なし或は賞翫の花の句前句への附意か又其句の
心か其實は梅菊牡丹などを下心として仕立正花となした
るは其草木にたかひ季を定むへき歟或問正月に花は陽春
美名なれば子細なし九月に花咲なとは大に誤也なき事也
名木を隠して花といふ句はあるへし花は櫻のことながら
都て春の花といふ是等を正花に立すしては花の句多く出

る故に却て賞翫輕し宗祇時代までは百韻に花二本雨一と

つ也宗長の時に至りて馨の花一本雨一とつ 勅許を蒙り

度旨奏聞せられて花四本雨二つには極りはへる直旨傳

芭蕉曰句ひの花といふ事千句と夢想にいふ事にて常の會に
申さる事未練の次第也意想は千句滿坐に香を炷により句
ひの花といふ今は名號の俳諧には何にても炷なり

此名號の俳諧とは神納法樂祝言饒別追悼追善懷舊等都て
名號の俳諧其事によりて發句に應して宜くすへし但比論
もて句作るなり

名號の俳諧には其事によりて詞に可忌事古式に數々あり
加様の格を正しくする事は名號の俳諧の時ばかり也 以上
師說錄

句ひの花根元の起りは後柏原院御宇久我家の黒方梅花の薰
物兼々望給ひしを牡丹花進上申されし時何にて衍も御褒
美かつ給はれと勅し給ひしに此花の事中されしかはや
さしく思召て 勅許を蒙りけるより句ひの花の稱出來た
るなり依て連の席及び俳の席にても此花の句作る時必ず
黒方の薰炷事古實とはなれり全上 但俳席に於て今は此花
吟聲の時炷なり香主の習わり口傳

傳曰それ花は万物の花にして櫻に非らず又櫻になきにし
も非す曰櫻は花なり花は櫻なり

名殘の花と稱する常の事也句ひの花とは本式に揚句はひ
たくと付て仕舞ふかよき也直旨傳

揚句の花宗祇の神祇の卷にせられし事は常には無き事也
全上

花の句の事定坐に花とはかりする事は勿論子細なし變格
の扱は殊の外子細あり先引上る方はくるしからず稀にも
齎す事はあるへからず櫻を正花にする事も秘事也猥にあ
らせまじき爲なり句作尤習ひあり全上

花の事 花の句尤も正花をいふ百韻に四つ可詠也元花の句
一折の内定坐はなけれども賞翫の景物なれば初心は遠慮
すへし功者は鹿句無念と思ふ故におくれたる時は「十三
句め歌仙にては」十一句目定坐とする也定坐にて詠時は
句さしてよからずとも子細なし

花前に上の句して又花の句を撰はれてする其次に又出勝に
も句前にも當てする事少しも苦しからず長句短句のつゝ
きたるなどいはぬ事也こゝろに差別するまての事也ひか
し慈照院殿大原野の花見の時宗碩一巡より下の句六句つ
け裡一順にて長句一切あり是は公家武家十八人の句並
を揃んか爲なりの事也直旨傳

花前に植物差合時は似せものゝ花をする習也其時は其一句
は雜にて前の植物にかまはねとも其句に春を附て正花に
扱ふ故に後をは植物定式の去嫌にする法也此格ありとい
へとも花前に心なく植物を出す事双なき無禮也急と制し
て其句を戻すへし面々愼てすへからず只貴人などの風と
植物を出し給ふを返し侍ん事いかゝなれば其時の用に扱

ふへき爲の用也事もなきに好て似せものゝ花せん事おか
しからぬ心得をしるへしいつとても正花正月をもて遊ぶ
こそ風流なれ全上

花の句發句脇第三の外表にせざる法なり、波の花、潮の花
正花にあらずされと扱へは正花なりと先師申されし也雪
の花、霜の花扱ふて正花にもなるへきか本意は雪霜を賞
翫していへる花の字なれば前條とは違へりと也師說錄
花紅葉とつゝけて正花なり雜なり二季兼たる名なれば也
尤句によりて其強きかたに季を立て後を附る也花のふゝ
き植物にあらず花の雪同前花の雲植物也
花の波水邊也植物の花の雲は花を雲とも雲を花とも見る
體なるへし句によりて分別すへし花の波は散て浮たるを
いふ

花の都正花也花皿正花也其故は櫛は常ながら其時節く
の花を手向るものなればなり直旨傳

花櫻の事

花櫻の論 芭蕉曰花と櫻の事細川玄旨法印より秘して花咲
先生へ口決し給ふ正傳ありといへとも其後更に用るもの
なし門人去來予の猿蓑の卷に末の花を略して彼傳を顯す
ことあり惣して櫻一本の時は咲開く或は落なといふ字を
置へき也是正花に立る習なり

櫻三品といふ事は 山さくら さくら花 花さくら

山櫻は散るけしきを賞翫とすさくら花は室も麓も満山の
花爛熳たるをいふ花櫻は咲散る交々の體をいふ只其わか
ちある事をしりて又強ちにかゝはるへからず全上

花櫻といふ事本歌にすへき習ひあり一山一繩手など平一面
に花を見渡したる時の事也師説録

花櫻の事 みちくや道にひろけて花さくら

右は櫻は花也花は櫻也唐土大和の引合に牡丹はわたの
花也されは我嶋根の花にして花櫻といへるは花花櫻櫻と
いふ心なるへしさるを花櫻と用る事本歌に深き縁ありて
一山一繩手などと花を見渡したる時の事也如住庵五花の口譯
花に櫻付る事 むかしは花衣、花の袖などやうの物には誠
の櫻を付誠の花には櫻鯛櫻人の如きものを付たれと當流
は是を用ひす花は花櫻は櫻と分明に附るを習ひとす

幸崎の松は花より朧にて

山はさくらをしほる春雨

櫻の句に花を附るへからず花にさくらは苦しからず吉野
に花は附へし花に吉野は附へからず櫻も同じ心へ也他の
花の名所も是に准す句の仕立やう心得あり於芭門櫻に花
を附花に吉野をつけ其外花に名所を附ることあり別義な
くして此例の表裏なり古式を取てとらず取らずしてとる
の意趣なり直旨傳

さくらをこほす市のあさけり

大和路へ入る日はけふも花曇

翁

世に花といふは櫻の事なりといふ人も有れと花とは萬物
の心の花なりたとへは花聲、花娶の類茶の出花染物の花
やかなるもそのもろくの正花なれば花と賞翫の二字に
さたまりぬいつれの花にても春の季にして植物に三句去
るへし花は春の發生する物なれば也古より花に櫻を附る
事傳授あると初心にはゆるさす或は櫻鯛の類など前の花
にあらざる櫻ならはあきらかにして附へきなり花前の植
物とても此類にて知るへし但花は櫻にあらす櫻にあらざ
るにもあらすといふ事我家の傳受と知るへし二十五條中

唐崎の松は花より朧にて

山は櫻をしほる春雨

右花にさくら付る事前統ひの花、花聲、花嫁、花かつは
等ならは家櫻、山櫻の類を作り共正花の時は櫻貝、櫻鯛
櫻人などゝ作する也櫻に花も亦同じ有や無也

花に櫻、櫻に花の附様の事は花と櫻と二本に仕立るなり
といへるは宗祇の説なりといえり但古傳に似せものゝ花
には眞の櫻を附け眞の花には似せものゝ櫻を附るといふ
事は皆々知りたる事也然れども是には二本になりかたき
事ある也但似せものゝ花には似せ物の櫻を付け眞の花に
は眞の櫻を付て心を格別に仕立るなりと翁の中されし其
證句には

花ちる庭にはかてたゝすむ

遠山の櫻や雲にまかふらん

宿のさくらに青葉見へけり

四方山の落花に春も驚きて

是真の花櫻に眞の花櫻を付て二本に仕立る也また

花笠をかつく乙女の顔白く

雪氣の衣伊達櫻色

若衆を餌に釣さくら鯛

宮船は花の帽子を印にて

是似せ物を並へたる也又連歌にも

花ははやりて淋しき四方の山

といふ句に宗祇の

歳木にまさる櫻見る袖

と附らしとかや等をかよはして知るへし芭蕉後集

花に櫻を一句の内に結ふ事は是も花と櫻を別々に成様に

して又花も賞翫の心有へし

花を左さくらを右に植ませて

花は眞櫻は軒の下草に

櫻ちる跡まで花はさかりにて

是にて能々可心得事又吉野に花立田に紅葉附ぬと申人あり是非也用ゆへからすと知るへし故いかんとなれば是を押し時はいかほとも有へし廣澤に月三吉野に雁なと也加様に云はんには付合有へからす故に不用と翁申されし也

同上

花に櫻の事 抑も風雅に月花の事は四季に春秋の景物とい

ひ其坐に其巻の飾なれば世法の五節になをらへて舊例の辭義を調るか如く其句に新奇を求むへからすとは本より白馬の遺訓なる也然に連誹の古法より花に櫻を附る事は櫻子とも櫻鯛とも異名か異牀の物をもて花と櫻の差別となせれとをのゝ其跡を師とするのみ下界

辛崎の松は花より朧にて

山は櫻をしほる春雨

此發句は湖南の春望にして今はた句意を註するに及はす然るに此脇の山櫻は其時の衆評にも崎には松を花といひ山には雨の櫻といへる花と櫻との別様をしれとそ但いはむ此の櫻はむかし長等の山櫻と見るへし

詠とて花にもいたし首の骨

かたけて歸る山さくら人

此二句は檀林の俳諧也然るを中古の證句とし其比の俳抄に書傳へたれ其例の古風のいひかけなれば今の俳諧の論に及はす但いはむ櫻人は催馬樂の名目ながら其人を花にたふふれば花と櫻の心得もあらんか總して花に櫻の事は不祕の秘訣といふべき也

發句

木のもとには汁も鱸もさくらかな

花の座

千部よむ花の盛の一身田

前句

しよるゝ水に蘭のをよくらん

花の座

糸さくら腹一はいに咲にけり

此四句は故翁の遺訓也前の櫻は狐集の發句にして初折の

花の坐に正花あり後の櫻は猿蓑集の附合にして初折には正花ありて今の糸櫻は名残の曲節也或日本曾寺の舊草にありて茶話に此二集の模様を尋しに故翁は例の笑ひく聞すや我家の正花論に花は櫻に非らざるにもあらずとは言語不到の師授にして口に理をいふは秘訣に非らず二三子なを察せざるや將に知るへし我家の俳諧集は天和の比に濫觴せしか冬の日春の日は論に不及委情は凡を狐集に分れて花實は將に猿蓑集にとゝなふはざるを此比の炭俵集は變化の中の曲節にして俳諧はかく三變と知るへし然は猿蓑の大任なる糸櫻の卷を一部の巻軸といひ其集の撰者の句ならんには爰に名残の曲節をもて一部の虚實を扱かはさらんや糸櫻は例の秘訣にしてすへては文章の優游なりとぞ

發句 もろこしの芳野は岩に牡丹哉

花の座 我國の遠山さくら咲にけり

此發句は待野の某か穴あき岩に牡丹を畫たる掛物の畫賛也さるを新宅の賀となして其日の俳諧は興行せしに初折の花の坐に至りて遠山櫻の三字を用ゆ其扱如何となれば和漢に花王のあらをひありて大和の歌には櫻をよみ諸越の詩には牡丹を作れば其いふ唐の芳野には櫻はなくて牡丹哉と岩の一字に委情を分けたるは全く花王の争なるや然らは花坐に至りて我國の櫻を稱せさらんや是らは風雅の意地にして畢竟は牡丹といひ櫻といふ心詞の花を知る

へき也但いふ諸越には牡丹はすへて春にして百花の終りに咲けるより其名ありとそいへりける

發句 曇りとは櫻に伊達の憂名かな

花の座 入逢も聞かす尾上の歸り花

是は外山の霞といふ和歌にならべる隠し題にて五文字の曇りには花をも隠せる也然るに其卷の花の坐に至りて例の衆評を窺ふに櫻に花は論なけれども爰に曇りといふ詞は花にありて櫻にはなし然らば發句に花を含みたらん此時は其櫻の歸花をすへきにやと其坐の衆評は一決せり但いはむ尾上の二字は江師の歌の意を摘めりこれらは連歌の俳諧といふへし

發句 雉子啼て岩根に赤き花咲ぬ

此發句は山中の即事也さて其卷の花坐に至りて例の衆評を窺ふに岩根に赤き花といへは決して木瓜つゝしと見ゆれと例の名をさゝぬ花なれば爰には櫻やしからんと子細なき櫻の一字を用ゆ但いはむ塩竈のことき櫻の名をさす時もあらためと其句は其坐の品によるへし

前句 茶の湯といふも是迄の事

附句 肩衣に花も咲ねば世を捨て

此附句は越の新潟にて鑑亭の七里と三吟せし歌仙也されは歌の三吟は二折の花ともに前句も附句も同作の句順なれば名残の裏にのそむ時に例に花の坐をかはらんといふに亭の主の物數にて強て同作の花を望む爰に其いふ謂れ

を問ふに今年遷返シムセに此席を設て鑑亭に百世の俦をとめむとす今や句順の事を得て同じく亭主の前句をもて同じく我師の花あらんは今の教ゆる變通ならずや予曰其故ありされとも二花の同作には必らず同作の謂れ有るへし其謂れ有らば句主とならんさしもあらすは無用の沙汰といひ法を觀ふ罪遁しと其の花の前句を待に

前句

其關ひろく火鉢なかむる

附句

肩衣にふたゝひ花の咲はこそ

斯て此の二花の即評に百韻は本より四折にして祝言衰傷の儀式には發句の作者に名殘の花と望むざるは其事の始終なればたとへ發句に花あり櫻ありとも名殘の花は遠慮すましけれと是は一坐の俳諧といひ増して歌仙の二折なるには此例は心得もあるへけむ此故に今の案する所は同し肩衣をもて二句一意となして花は一本といふへければ例の罪をも遁へしとぞ

發句

花に寄る胡蝶や夢の魂まつり

句花

花に寄る胡蝶を花にけふの客

此扱は越の井波にて夢占といふ集を撰らひ十餘輩の亡名をわけて一題くゝに魂をまつれる巻軸の百韻にあされは發句は魂まつりにて正しく秋の花なれば句ひの花に至りては其夢の胡蝶をまねて此花の客となせり後の花は全く春といふへし然れば花に寄る胡蝶は二句一意の格に似なからしは其花の詞かりて此花をいはむ爲なれば胡蝶の花

の無用なる客の花の有川なる秋と春との差別を見るへし爰に思へは法式の沙汰は彼いふ千例万格にして此外の指令去嫌も其坐に其時の用を見て豫め此扱によらは有方も無方も例の變通なるへし古今抄

打越花の事

みよし野は常の花さへ春の色

右定坐の一二句前水仙、山茶花、花野、櫻等の句ありては花の字植物花の坐にさはる故に宗匠執筆の許さるる也然れとも其人高位正客などの句強て返すに及はす其時此句作の例を用ひ此體を味とりて作はいかやうにもあるへしかくて次に春の句を附へし是素より芭蕉の教なり師説

みよし野は常の雲さへ春の色

右附合花の定坐の一二句前さかん花、野の花、野梅等の句ありて花顯れたる時は定坐の花にさはる故多く花前とて執筆の許さるる所なり併し貴人高位の據なく句作出來すれば返句に及ふこと能はざるなり其時は證句の如く綴て花脇にも春の句を附へし句佳座書

他の季の花短句花櫻の事

句解

稻妻を木の間の花の心はせ 舉白

秋季にて花を附るに月に花を結びて付るか又は一卷の趣によりて他の季の花を附る也他の季の花とは夏秋冬の内にて正花なるへきを附る證句の如し又雜の花といふもわ

るとは聞けと元録の正風に見わたらす故に爰にもらす古
哲のなさるゝ事を好て成すへからす浪波の技折に

花火たつるも水の仇こと 札

是は短句の秋の花也心得へし熱田三歌仙に

こからしにかちけて花の二ツ三ツ 荷兮

是は冬の花也心得へし前に云如くみたりに附へからすま
た鷗尾花に

花に符をきる坊の酒藏 芭蕉

是は短句の花也花の坐よりは前へはつみて附る也花は翻
れ花と云はなき事也炭俵集に

此島の餓鬼も手をする月と花 全

是は長句にて月花を結びたる也深川集に

踏まよふ落花の雪の朝月夜 俗水

冬の日に

旅衣笛に落花をうち拂ひ 羽笠

是は花といはす落花と漢語を用ひし也是等も心得へき事
也猿みのに

糸さくら腹一はいに咲にけり 去來

句解百韻に 三度蹈む吉野の櫻よしの山 仙化

此二句は花といふへき場を櫻と附たる也尤も花は櫻櫻は
花と云なれとも先はなき格也と知るへし自得の人は格別
花と附るかた然るへし他の季の花短句の花さへ古人も多
くせざる也心得へき事也寂樂集

一本櫻の事 糸櫻腹一はいに咲にけり

右附合一本櫻の事は細川法印より秘して花咲先生に口訣
し給ふ正傳有と云へ共其後更に用るものなし門人去來予
は猿蓑の卷に末の花を略して彼傳を顯はす事あり總して
櫻一本の時には咲く、開く、或は荅むといふ字を置くへ
き也是正歌に立事習也有也無也の關

○(雑の花の事)

からさきの鯨は花より見事にて
行列といふものは何にやら

右雑の花は秋うつりなとに有へき事也歌仙に八句目より
月秋を句作るときは十一句目の花春に及かたしざるは冬
季を待たぬ故也同上

其卷には雑の句花を出し花より三句去て素春をする事習
ひなり雑の花とは異名なり又は花嫁花賀も稱美の事なれ
は皆是雑正花なり春を付行く時は見立花と云ふ也 同書

○ 面に花の出る事 發句脇第三に限るへし裏うつりよりはい

つれに出ても苦しからす月は翻しても不苦花は翻すへか
らすとある古式の事、花は翻さすとは百韻十三句め歌仙
十一句目か限りなれば也俳諧獨歩行
花のある面に櫻を嫌ふ連歌の説也俳諧には七句去てすへ
し然れとも歌仙などには模様いかへはへらん或書

呼出し花といふ事 一坐の貴人或は賞翫の人に花の句を乞ふため春を引上て出すをいふ也

是非に花の句すべき所の前句に春をする事なりよからぬ事なり私曰是むかしよりはなき名目なり月花の定坐といふ事中頃より云出したる俗説ある故によりて呼出の名目も出たりしかしなから花の句あるへき所ならは春をせぬかよきなり裏の十二句めに立さるかたき春の木の本といふ句せしに其折にいまた花出さりければ花の句なりかたきよし云て句を戻したりとなりそれはとになくても春をするはわろしとなり俳諧名目抄

戀句附合の事

戀の句は昔より二句附されは捨す昔の句は兼日に戀の詞を集め置て心の戀の涙をば不問也戀は別て大切也作意安からす宿昔宗祇宗祇の頃までは一二句にて止事あれば其例にならひ此後門弟子議して一句にても置へきか其趣は前句戀とも戀ならずともさためかたき句あるを必戀の句附て前句ともに戀に取なすへし左様の時は其句のみにして其次に戀の句附るに及へからす新式にも其沙汰あり然れとも議する所は其坐の宗匠にまかすへし直旨傳

戀は月花よりも大切のものにて扱は春秋の季節同様の位也此故に句數も春秋と同じくつゝ也都て季節と同じ扱にて季節の代にも立る物也月花の代にも遣ふ春秋のはしめ

句に若し戀あらは其季につれて三句ながら戀をわたすへし若し春秋二句前に戀出なは四句戀をつゝけ春秋の三句目に戀出たらは一句春秋を附のへて春秋の戀をすへしこれ又口傳の一つなり

同季は五句去れとも季と季との間に他の季ある時は四句にてゆるす例也又季と季の間に戀ある時も四句にてゆるす例なり是れ則戀を季節同様に扱ふ故なればなり師説錄

戀の句二句目骨折也詞にて附捨て置は無念なり一句にてさしおく事のあるは付て前句に心かよひ二句の間に戀を含む故也當流詞の戀をとらす心の戀を戀とする所なり 直旨

傳

戀の句の事は古式を用ひす其故は嫁、むすめ杯野郎、傾城の文字名目にて戀といはす只當句の心に戀あらは文字にかゝはらす戀を附くへし此故に他門より戀を一句にて捨るといへるよし戀は風雅の花實なれば二句より五句に到るといへとも先は陰陽の道理を定たるなり是は我家の發明にして他門に向ひて穿鑿すへからす二十五ヶ條

戀の句いにしへは戀の句數定らす漸宗祇宗長の頃より今の式に定む五句去なり俳には三句去とあれと百韻一折に一ヶ所つゝ歌仙には二ヶ所と思ふへし俳諧獨歩行

戀句の事 冬の日

床ふけて語れはいとこなる男 荷 兮

縁さまたけの恨残りし 芭 蕉

さるものに

大膽に思ひ名のれぬ戀をして 半 殘

身は濡淺のとり處なき 土 芳

炭たはらに

うは置の干菜刻むもうはの空 野 坡

馬に出ぬ日は内て戀する 芭 蕉

あら野に

きぬくやあまりかはそくあてやかに 芭蕉

風ひきたまふ聲の美しく 越人

はるの日に

顔ふところに梓聞居る 雨 桐

黒髪をたはぬる程に切殘し 荷 兮

是らの趣にて知るへし二句の間を情のもと戀とする詞のみ戀なりとも其戀こもらざるは一句にて捨るなり故に女娘なと出ても句體によりて戀句とせず是戀の句の捌き也
寂 葉

戀句からの事

何者のひりちらしたる床の屎

是は花つみ集の句也古人の集といへとも一覽のときよくくく分別して見るへし必ず誰なりとも古人の名に恐るへからすかゝる拙き句はたれにもあしと思ふへし

早乙女の雇はれあるく管禪

口すはれたる人の眞中

是は東都にて蕉流と唱ふるものゝ集中にあり戀の句いゝ出さんとして「口すはれたる」とはあまりなる事なり親子兄弟君臣の間にて咄されぬ言葉なり且風流といふ事露ほともなし、深川集に

掛乞に戀のこゝろを持たせはや 芭蕉

かくいはんには戀の情も風流もあり又句のからも自ら能差合もくるへからす氷清玉潤といふへし戀の句はあはれにも深切にもいふへし尤も戀の句にも限らす一句の上の風流二句の間の風流を専らとすへし

行水の時面目をうしなひて

我等か瘤は殿も御存知

是らの句四十年前(文化九年より)美濃尾張にて流行せし句也と云餘りなる二句の間也當時美濃尾張に此句の體をいふもの一人もなきは曉臺士朗なと出て元祿の昔に復せし故也芭蕉翁の忠臣といふへし

百姓寺へ伯母の敷入

なとゝいふ句作けやけく聞ゆ百姓寺作寺なとゝつかふましきといふにはあらねと元祿の俳風ならは

一と夜かる宿は馬かふ寺なれや

此句にて知るへし

さまく品かはりたる戀をして

百夜のうちに雪の少將

と其角の附られしに人も稱し其身も附たりなどおもはれ

けるよと其後伊賀の上野にて同し前句

さま／＼に品かはりたる戀をして

うき世の果はみな小町なり

と附られたるよし誠に名人の句作安らかに云下して餘情
深しと其角前非を悔ひられたると白雄夜話にかたりぬ寂

葉補

戀に結ひたる神祇句去の事

芭蕉曰神祇、釋教戀の習わり

いづれも連歌に殊更秘し傳へる大事也予世の中の宗匠を
考るに此重秘を知らず露沾公へ傳へ侍りし外他言せず

戀に結ひたる神祇は神祇の句に二句去なりこれを三句去

と覺へ捌くこと未練也釋尤も同意也神祇と神祇三句去な

り戀の情の神祇格別なり以上師說錄

戀の句本意を背く事

かならつと云つる人のけふは來て

我をや人の思ひ出らん

おもふかと別れに暫しやすらひて

戀の本意とは別れをしたひ訪はぬを恨みまつ暮にうき事
をかなしみ名の立ことをいとひ種々に心を盡すか本意也
人に思はれ顔なるは本意に非らず分別するべき也はな

ひ大全聞書

戀の詞 貞享式我家には詞をもて戀とせすまして文字にか

ゝはらねは古抄に女の一字より嫁とも娘ともいへ野郎、
傾城の名目とても當局に戀の姿情なき時は例の詞を戀と

せず此故に他門より戀を一句にて捨るといふ方外の沙法
あるよし戀は陰陽の道理なれば三句より五句は時に隨ひ
て戀を一句にて捨ましき故也支考云戀の一條は今式の大
事にして戀は一句にて捨ましき陰陽の理のみをいひて其
外は未然に定めかたからん其いかなとなれば詞の戀は字
にあれと心の戀は句にある故に其句其時にむかは句情は
兼てさはき難し譬へは此頃の附句に

普請場の飯も一度に起そろひ

筥の先にそりやと手拭

といふ附句は普請場の臺所に只今膳を居んとてそこらの
埃りを掃おろすにあとより起出る人もあれは折釘の手拭
を筥にかけて及び越しにさし出したる大工木挽の立さは
きて物の世話しささまなるを三句目の作者戀を知りて打
趣のはこひを轉せんと起請の附めを案して

思へはや思はぬ振りのつれなくて

とは傍輩中の忍ひ寢に床の下なる率ヒヤカや川のいさしらぬ貞
見てあいなからめ然れば前句の作者には嘗て戀の心はな
けれども後の眼力にさてはと戀の姿情を見附たれば彼と
我との二句となりて戀は決して二句といふへし

青藍云 蕉門には戀の詞とて定りあるにはあらず心の詞
の働きて戀ならぬものも戀句に取りなすを作者の働さ
とすれば強ち戀の詞になつみて句作すへからず許六云普
子か句に

物さしに狂ふ男のたゝかれて

灸とは嫌ひ餅につきやくふ

と云は戀の詞一字もなし全く踏込たる戀の句也近年俳書に戀の詞を扱へ置くは其人の胸中狭き事知れたり云々戀の詞は戀の技折に多く集められたは彼に譲りて爰には荒増を記し聊か註釋を加へて初心の便とす云々歳時記

戀に上中下の事

戀は貴となく賤となく只一情ながら和歌にも逢戀あはぬ戀逢てあはさる戀なと趣さまゝなり俳諧の附合とても上中下初中後なきにしもあらず

上品

來へき宵とてゆふかはの蜘蛛

うしろから鏡の機嫌なくさめて

上薦の人待給ふ夕化粧なり我せこ來へき宵也さゝかにの蜘蛛のふるまひかねてしるしもと右近の君などのなくさめ申たる夕良の宿の風情もあらん歟

中品

頃は出口の柳拈く

嘘かりに來る手に筆を持たながら

川竹の風情也此文の返事いかにとあね女郎なとに叫たる年波の有様ならん僞のうちに誠有て中品の戀といはん歟

下品

田植に色の白き雇人

居風呂に水さす戀と焚戀と

君はをだまき麻の糸思ひ合せてよるはかりと麥搗唄の鄙ふり戀なを衰ふかしやもめ女の雇人見る心地せらる馬に出ぬ日は内て戀するといへる附句も此あたり歟

初戀

押やられてもはてぬ初戀

虫干の模様も鴛のをしへ鳥

はつくさのねよけなからわかめたるあたまき戀也中たち初る女もさゝめきたる虫干のかいまされと附たり

父母愛少女

女是聰明子

生不識鴛鴦

繡出鴛鴦是

是等の余情歟

中戀

裂て捨るかなを起請なり

吉原をこちらの髪に梳直し

きのふの綾羅の仇なるよりけふの紬の實ならんこそとはしめ終を含て中の戀ともいはんか

後戀

枕の文を解てなくさむ

髪結ふた幽靈ひとりなつかしく

楊貴妃かへつて唐帝の思ひ李夫人去て漢皇の情けとありし雨月のつれゝならはかの反魂の薫もあらまほしき歟猶戀の姿情此六種に盡し難しよつて爰に諸集のうちより拔萃す是を讀て工夫すへし

前句

様々に品かはりたる戀をして

附

浮世の果は皆小町なり

前句

うは置の干菜きさむもうはの空

附

馬に出ぬ日は内て戀する

前句

藥をはこふ簾中の秋

附

此戀は兄か合點を待ばかり

前句

それそこへそよく彼の迦陵頻かりやうびん

附

眼鏡へかはる戀もはるく

前句

我物おもひ浮世一人

附

此戀をいはんとすれば吃にて

前句

泣てしまふた跡は寢られす

附

下紐の結びめ高きわすれ草

前句

我年におはねと娘盗出し

附

戀にかならず變の友達

前句

長女使の御返事を待オナナ

附

かくし題思ふ方にもよみまさん

前句

口紅粉凄き石佛の顔

附

啞の戀涙こぼして見せにけり

前句

傾城とのを御客あしらひ

附

疱瘡神のけふは髮梳もの好み

前句

しとやかに朽葉鹿子の古狐

附

封もそのまゝ師直か文

戀句は前句の情を動してつくれは前句則ち戀となり待れば一句にても捨よとの玉ひけるとそ是戀句を猥りにせさるの謂なり只情を専らとすへしされと當時傾城、女房、後家容儀の善悪衣類の伊達遊所の名等心に戀なきも戀の詞

道具をもてわしらい置是とても戀の大切成るか故也此境

を勘へ知るへし先は陰陽の道理なれば二句はわしらふへ

し古人五句まで續くといふ説あれとも蕉門には用ひす

以上附合小鏡

戀の辨

蕉門に戀句の論有て戀を一句に捨す二句より五句

に至るへし他門はひたすら戀の詞寄ありてむつかし古抄

は姫女房、後家の類野郎、傾城の名目を戀と定められと

心の戀なくは戀にはあらず百年のつくも髪もわりなき面

影にはたへぬへし女戀ならは男もなるへし娘戀ならは

むすこも戀ならん娘とは親に知らせて仲人のいひしるへ

て樽肴に定置たれは何のやるかたなき戀ならん人は浅茅

が宿に云忍ひて雲井のよそに思ひやりて跡なき袂に戀佗

ぬされは戀の附句いへは現か夢か思を恨て附たらんに附

かぬ事あるましこの境を見立て情の戀といふ事骨皮なり

月花に昔小袖の袖狭く

常のなさを出代りに泣

八朔も九月も酒はさたばかり

朝寐夕寐に年寄のつて

前章は戀にはあらずされと附句戀ならは二句の戀ならんに出代りといへは戀にはあらず後章は節句に小袖を飾りて遊はんと思ひたるに酒はさたばかりにて夕寐朝寐の淋しき心のゆかん所ありて此妻は若き後家と見るべし

なるもならずも言て見るなり

無筆にはいかに生れて美しき

湯漬の膳に涙こぼるゝ

傾城の人待うちを隠し合

枕二つを誰そと答ひる

枕二つを答ひる人誰ならんと其人を定むるに傾城の身仕廻に口舌と見て此句の身仕廻るといわされは枕ふたつのよるへき坐敷の隙なしされは身仕廻の跡淋しく禿なと引寄てたはむれたる枕也或は肝盤の二膳客も身仕廻に間屋のほし鯨もかゝる細微の情をもらさす傾城野郎の坐敷といふとも知て遊はんは高し不知遊はさるは低し然は我門の戀句とならば釋迦も達磨も覺束なし

物さしに狂ふ男の叩かれて

糸とはきらひ餅につきやくふ

縫針の真中へ來て戯れし姿見るやうなれば面白し是れ戀句の辨芭蕉後集

平句戀句の事

平句は姿より一作心得てよし戀句は姿より情から入込めは殊更むつかし戀句を姿より入込て噂に聞へあしく是を平句戀句の傳とて連歌にも大事の心得なり全集
夾戀^{はさぐさこひ} 平秋春の句に戀の春秋付て又平春秋付なるを嫌ふことなり

戀句^{このく}

こひくといふはわろし戀の句とのゝ字入るへしと

なり

戀つまり 戀五句に至りたるなり

戀春戀秋に戀をむすひ春に戀を結ひたるなり以上俳諧各目抄

俳附句の事

俳と云は古人の名を出すに限らす二句の中には西行是は頼阿なとゝ句ひに見ゆるを俳と云ふへし附句も左の如し今時楠の辨慶のといへるたくひは多く軍書を讀やうにて俳諧なしたとへ人名を出すとも俳諧の心を忘るへからす

草庵に暫く居ては打破り 芭蕉

命嬉しき撰集の沙汰 去來

代々^{このく}に居風呂の月

辨慶か笈の中より蕃椒

俳の句はかくの如く前を西行能因の境界と見て附る也直に西行能因と附るは手強くならんたゝ俳にて附るへし又人を定めていふのみにあらず^{雪中庵雪の枝折}

發心のはしめに越ゆる鈴鹿山

内藏頭かと呼聲は誰

いかさま誰をか俳ならん又或席にて宗祇老人、悲莫悲兮生別離、樂莫樂兮新相知此心をととりて
旅のこゝろを何にたとへむ

ならひとて長き別れは慰むに 宗 祇

かはかりのかたき事を打和けて遣はりたりすへて故事古歌とり等それと聞へぬやうに幽ませて作る事なり俳諧小鏡

あら野に

うらみたる涙まふたにとまりて 越人

静御前に舞をすゝむる 其角

冬の口集に

型は敵へ首おくりせむ 重五

小三太に盃とらせ一とつ颯ひ 芭蕉

さるみの集に

發心のはしめに越ゆる鈴鹿山 全

内藏頭かといふ聲はたれ

冬の日に

豆腐つくりて母の喪に入野水

元政か草の袂もやれぬへし 芭蕉

春の日に

咲わけの菊にはおしき白露を 越人

秋の和名にかゝる順 且 豪

深川集に

頬あてをはつして月を打詠め 曲 翠

悪七兵衛景清 か 秋 洒 堂

俳の句月日定まりたるあり前句附句ともに其心得あるしたとへは秋季に會我の夜討冬季に長篠の陳など附て

つかぬ也尤も難の句に附るは子細なし附句も生田の合に秋季など附ては附かざる也 寂 庵

脇五様の中に面影付と云は二様あり姿の面影、心の面影先姿の俤と云は

池水に蛙飛込む夕部哉

片袖重くかさす春雨

又前句の發句に和流先生か此の如くに付ては心の面影申にてや候はんと尋ねしかは尤なりと先師答られし句和歌にやはらく春雨の空

是にて心得へし又是を心付ともいへりと也 芭蕉後集

附味は景色推量俤此三つに極る色々の事有之といへとも兎角此三つを能工夫すへしかくの如く並へて附るには非らず景色に景色、推量に俤とも付るに二句つゝは苦しからす

推量

衛士のかゝり火立る黄昏

采女招す玉の御膝の打崩れ

俤

草庵に暫く居ては打破れ

いのち嬉しき撰集の沙汰

右附句は往古より三變也昔は附もの專一中古は心附（俤のこと）元祿此かたは句、ひゝき、挽なとよしとす云々

其角堂説

俤の事 古事古詩古歌古語などを取て作るには三つの習ひあり和歌は證歌を取てよむ故に能因の白河賴政の白川

なと同じやうなるも聞ゆれとも俳諧にては人の句を取て作らぬ事也新意を吐こそ俳諧の誠なり芭蕉も一句の主とは成難しと云はれたり必ず人の句を取るこそ無用なり蕉門の教へに古きを用ひて唯一二字のてにはの新らしみに遊ぶと云は古き詞を用ひて心の新らしみにてにはを盡すと云事也人の句を取て一二字のてにはを換へて作る事には非らず中畧人の仕たる趣向を奪ひ口先の手つまに心を寄せる事有まし卑劣第一成るへし耳底記

他門の古歌古事を取るは其歌の詞をとり其歌にすかりて其題に吟する也故にあるは糟粕或は講釋となるなり蕉門の古事古歌を取るや本歌本説を傍に置いて眼となるへき詞を二三字取て別義別題に詠する也故に古人の心を取て古人の力をからす俳力の俳士古事古歌取と云事を見出し得す師説録

古歌を取る事唱歌にては二句或は二句半取へきか三句と事過分と申す也發句には一句半まで取るへし發句は上の句のものなるか故に二句とつては我句とすへき所なし此覺悟なくして古歌古事を二句取跡の句見へはへるは學さる故か猶大切の覺悟侍る也直旨傳

俳附に死活ある事

草庵に暫く居ては打やふれ

芭蕉

前句に「ゆかみて蓋のあはぬ米櫃と凡兆の句あり其米櫃のある家は一所不住の世捨人の草庵也と人の見出しにて

又一句を風流に作りたる也

命嬉しき撰集のさた

去來

去來抄に曰く初は和歌の奥義をしらす西行と附たり先師云前を西行能因の境界と見らるゝはよしされと直に西行と付んは手筒ならんたゝ俳にて付へしと直し給ひぬいかさま西行能因の俳ならんと云々草庵の人を定めたる付にして廣く西行能因などのうへにあるへくやと思はるゝ所を附る事芭蕉附合幽玄の場にして一人に人を定めす見ん人の西行とも能因とも定むへきは心くゝにあるへくと其俳にて附よと教へ給ふ所後學の者沈思して味ふへし直に其人を出して附るときは死物になりて跡の附窺屈也俳にて附る時は千差万別たり爰に死活の附句といへるある事にして一句窺屈たる時は一卷の調子とゝのふはす第一難たるへし初心の心得違ひある所なればよく工夫して蕉翁の俳鵬を探るへし先輩西行の俳也と定て鎌倉より撰集載集の撰ひあるを聞て俊成卿へ申遣はしたる俳也又撰集抄のより所もありてたしかに西行也なと極むる説あれともそは芭蕉のおかしく思ひ給ひ又歎き給ふらんと思はるゝ論にして蕉門の俳諧を覺へる人のいふへき説にわらず既に去來か云へる如く西行能因の俳ならんと廣く見るへき事肝要たるへし別に蛇足の説を設るに及はす猶みのさかし

面影付問答の事 杜年曰面影にて附ると云はいかゝ去來曰
うつり、ひゝき、匂ひは附やうの鹽梅もおもかけは付や
うの事也昔は多くは其事を直くに附たりそれを面影にて
附るといふは

草庵に暫く居ては打やふれ
命嬉しき撰集の沙汰

初は和歌の奥義はしらす候と付たり

先師曰前を西行能因などの境界を見たるかよしされと直
に西行と付んは手つゝならむたゝ面影にて附へしとてか
く直し給ひぬいかさま西行能因の面影ならむとなり又人
を定ていふのみにもあらずたとへは

發心のはしめに越ゆる鈴鹿山

内藏の頭かと呼ぶ聲は誰ぞ

誰ぞか俤ならんとなり面影のこと支考も書置たり見合す
へし去來抄

古人の名面に出す事句作心得あり古人を體とせず用に遣
例也其名は噂にして別の事をいふ句作り也あしらひに
る也又古人たりとも二十年此方の名は用ひぬ例なり願
は表に古人の名等出さぬ方宜しく芭蕉日頃の給ひしよ
なり師説錄

名所附の事

名所付と云は所の名などにてかつて取寄のなき所などを

合付るなり富士に武藏野、嵯峨に鎌倉などを付るを變對
と云其名所の近所を付るを常對と云變對に二様あり古
對古事對也私に云武藏野に富士を付るは名所か國を隔
たりといへとも古歌に讀たる類也又名所によみたるも
あり或は富士に時鳥花雪煙又武藏野に草隠れ茂み月な
やうの事也是は皆々名歌等の名所集によみ來れり昔よ
名高き名所には古人の歌か名句など無き事は何の書に
とても付來らざる也近代の名所の名物等を用附ること
沙汰の外なれば此類にはあらざる也去ながら能々心を
て仕へき事也よしまた作意にてくらへ付たる事もあり
謂嵯峨に鎌倉を付る事は何れも隱者の名所なれば似たる
を見立て付る也是又一體也心得へきこと也古事も右に同
し事也いづれも證句引に及さること也芭蕉後集

深川集に

深草は女はかりの下やしき

酒堂

伏見の戀を入相にさく

曲翠

是れ深草に伏見と押並へて附たる也

宇院法師に

此度は母の願ひの身延山

許六

底倉の温泉を下に見おろす

李由

是は旅中のさまにして附たる也行へき方の道すからの名
所地名を何にても附らるゝ也

深川集に

名所附の事

初花に伊勢のあはひのとれ初て 芭蕉
久ぬき若やく宮川の上 嵐蘭
是れ伊勢といふに其國の名所を附たる也

賣若菜に

いさり不便や娘捨の月 芭蕉
散る花に垣根を穿つ鼠石 嵐雪

是は同國の名所に同國の地名を附たる也此外にも思ひやりたる句は打越のこともいはるゝ也すへて名所に名所を附る事は此を味ひて附るへし俳諧寂業

名所國名地名等の發句には句もさるへき名所に對する法なり

しるへして見せはや美のゝ田植唄

笠あらためん不破の五月雨

古法かくの如しといへとも對ならてすへし芭蕉に格外

あまたあり師説録

名所發句作の事

名所は其の季を用ゆるに及はす直に名所をさして云かよし何の爲に季を用へんと沙汰しければ其時の季をつかふには名所の賞翫薄くならんと思ふことそや名所は随分景色にはまり面白き趣向を思ひ遣り侍る事なれば俳諧にかけらす詩歌とても同じ事なりされと季を用る事も一作の出來にまかすへし芭蕉後集

名所をつかふ句作の事

五月雨に隠れぬものや瀬田の橋 芭蕉

下京や雪積むうへの夜の雨 凡兆

木母寺に歌の會ありけふの月 其角

斯の如く名所に聊かも遣はるゝこと勿れ名所を遣ふ事と知るへしたとは、花の雨を案るに吉野初瀬をかり用ひ月の句を案るに娘捨石山をかり用るは詮なき案し方也五月雨にかくれぬ橋を瀬田に定め雪のうへに夜の雨を下京に定め江戸の歌よむへき所を木母寺に定めたる是例の俳諧のちからなるへし或書

名所を思ひ合する事

口切に堺の底をなつかしき 芭蕉

喰つみや木曾の句ひの檜もの 俗水

積る雪越の友人朝寝せむ 素牛

是らは思ひ合せたる句なり其所に至らすして名所の句案するには必ず思合すへし芭蕉及古哲の句々を考るに武江にありて花落の句をいひ出せるといふ事なし
古人曰東海道の一筋も知らざる人宇治川の盤住吉の沙干正にいひ出したらんは興さめぬへし能く分別すへし

行春を近江の人とおしみける 芭蕉

猿蓑集に望湖水惜春とはし書あり或集に送別とはし書あり一時の誤のみにあらず後世の人を惑はす一盲衆盲を引の罪輕からずたゝ知らざるをしらさるとせはかくそれにいはれまし

名所に望みて句作の事

菊の香や奈良には古き佛達
芭蕉

朝櫻よし野深しや夕櫻
去來

武藏野やいく處にも見るしけれ
舟泉

似合しき聖子のひとへや須磨の里
文章

まことに其姿を得へし吉野にも泊瀬にも紛るゝ樂し方は詮
なきことなり

芭蕉曰名所に望みて句をいひ出さんには其日其夜の其心
にまかすべし

高野山にて

父母のしきりに戀し雉子の聲
芭蕉

角田川にて

いさのはれ嵯峨の鮎喰に都鳥
貞室

鎌倉山にて

眼に青葉山はとゝきす初松魚
素堂

當摩寺の曼陀羅をおかみて
更衣みつから織らぬ罪深し

園女

八島にて

海人が家に聖よひ込む彌生かな
千閑

伏見の夜船

はんのくはに雁落かゝる霜夜哉
路通

黒塚にて

つかの間や鬼こもるとも一涼
維舟

我駒の咎あらためぬ橋の雪
湖春

瀬田にて

是等は皆其所に至りて其名を顯はさて樂したる也其委情
はもとより景物を一句に結ひて案るも一法なり益他の名
所に紛されざる様に心得へし

名所に望みて古歌或は古き思ひおはする句作の事

裸にはまた如月の嵐かな
芭蕉

増賀聖の大悟を思ひおはされし句なりはし書にも西行の
泪をしたひ増賀の信を感ずとも

猶見たし花に明行神の顔
全

岩はしの夜のちきりもたへぬべしわくるはひしきかつら
きの神」かつらきの神は夜のみ出て晝はかくれ給ふよ

白川の關越るとて

卯の花をかざしに關の曠着かな
曾良

古人冠を正すとあるを思ひおはせしなるべし

五條の橋の上にて

橋すゝみ千人切の嘶せむ
桂士

和歌の浦にて

たゞ鶴を相圖に戻れ沙千狩
鳥醉

和歌の後に沙みちくればかたをなみ芦邊をさして田鶴啼

わたる此歌の心あり

名所に望みて難の句作の事

かちならは杖突坂を落馬かな 芭蕉
光廣卿紀行くたひれてかちより通る旅人はみな杖突の里
とこそ見れ

是名所の雑の歌なり

歌書より軍書に悲し吉野山 支考

ひそかにいふ名所の雑の句いゝ出さんには春の句中に春
をこひへし秋は句中に淋しみ自然と秋なるやうにすへし
尤好みてする事にはあらず古人もいふまれなり 以上寂業其
他諸集

はし書ありて句意を深くする句作の事

さくらをはなと寝所にせぬそ花に寝ぬ

春の鳥のおゝろよ

花に寝ぬ是もたくひか鼠の巢 芭蕉

富貴なる酒屋に遊びて文君か爪音も

酔の紛れに思ひ出らるゝに

酒屋に琴の音せよ窓の花 惟然

僧にわかるゝとて

ちるとき心安さよけしの花 越人

去來曰罌粟の一體の句としていひおはせたり餞別となし
て獨見所あり

按するに端書ありて慥かなる比の體なるへし比は物をと
りてそれによれる詞によせていふと長頭丸も申されし
也

其罪をにくんて其人を惡ます

蚊に酒をすはせん夜半の蜩の月 白雄

是らは僅かなる端書にて意を増すの趣を知るへし

兩國の橋にて郭公を聞侍りて

兩國の橋にて聞やはとゝさす

かくはし書も發句も同じ事を述るは詮なき事也さりやと
て無用の文もまた書へからず證句の趣きを味ひ知るへし
以上寂業

凡端かきの事は一句の光りを添るなり又は一句聞え兼た
る又は何故に一句は成りたるかの時なるへしはし書なく
ても濟むへき句には無用なり端書と發句を離れゝなら
むは猶うたてかるへし七部集大鏡

名所に望みて詞書の句作

崑崙は遠く聞て蓬萊方丈は仙の地也まのあた
り土峰地を抜て蒼天をさへ日月のために雲
門をひらくかとむかふ處皆表にして美景千變
す詩人も句を盡さす方士文人も言をたち畫工
も筆を捨て走る藐姑射の山の神人有て其繪を
よくせん歟

雲霧の暫時十景を盡しけり 芭蕉

山中の温泉にての吟なり

白雲峰に重り煙雨谷を埋みて山賤の家處々に
小さく西に木を伐る音東にひゝき院々の鐘の

聲こゝろの底にこたふ寒雲繡石といふ句に思ひよせて

高取の城の寒さよよしの山 其角

よし野の吟なり

芭蕉の奥の細道許六か風俗文選等を熟覽すへし而して後實に居て虚に遊ぶ趣を書くへし文飾するかよきとて虚より虚に走るへからず又俗中の俗言鄙言の交りたらんは龍頭蛇尾とて見くるしきもの也今の文を見るに多くは剽襲にしてたゞよく繼合せたるまで也證に出せし文章をよく味ふへし俳諧集

名所に名所を作る事

加茂川や胡摩千代まつり稍近く 荷兮

岩くらの聳なつかしのころ 重五

是は思ひ合せし句也思ひ合する時は日の本の名所に唐土の名所も付らるゝと知るへし

京に名高き瘤の咒ひ 桐葉

富士の根を笠きて草鞋はきながら 芭蕉

是は旅のさま也道すからの事は何にても作にとりて付るなり

鼻紙に都の連歌書つけて 芭蕉

暮るゝ大津に三井の鐘聞 叩端

是はおしなへて付たる也眼前見るやうにすへし

しるへして見せはやみのゝ田植唄 如行

笠あらためん不破のさみたれ 芭蕉

是は國名の其國の名所を付たる也名所に國名をは付けす心あるへし俳諧道の便

旅牀の句作 旅は風雅のやつれなれば旅の情見ることかたからん偶々風雅のやつれたる已か觀想の情に落入て一句の姿しつ玉に近し我ひよろゝと暮して露けしといへとも足も縦横に伊達の大木戸を越兼て世は樂しむへし怨むへしと知たらは或は細かに純子の夜具に逢ふて年忘れの酒に酔へし一枚の菰を身にまとひ花の春をいひありく是を世にある自在の人と云へし只旅はうき物と見て面白きは其日の徳と思ふ事旅のみにかきらぬと先旅と云ふ字の見ゆれば馬籠渡し場の舟と計りおもひ寄せて虫藥の附合も耳にありておかしからず煮豆麥焦は順禮の時の附合と覺ゆられ去れば旅と云一字に付て其外寒暖風雨貴賤貧福の境を見定す何を何に付たるとも山川往來のすへて旅にあらざる物なし此故に戀と旅とは中に有て骨折るべき事

初旅に先雨のふる不仕合

男戀しう城て年寄る

機嫌よふ旅にたゝする親こゝろ

富士を眞向に乗つて行馬

元服に猶奉公の面白しく

風呂敷を片よせて置く窓の下

旅寝は寒き老僧の咳

風呂敷を拵て置窓の下

異見をすれば小便に立

旅中の句はおのつから淋しきをよしとす古郷を思ふなど

旅の本情なり芭蕉後集俳諧寂

名所地名遠附の事

鼻紙に都の連歌書つけて

暮るゝ大津に三井の鐘聞く

いせの音頭も忘れかちなる

難波江に風ひくまでを月の舟

附かたは大かたこんな物しや、とちらそひとつは噂ひと

つは現在也手引巻

本式十句表の時五句目に極て名所を出すへき法となり名所

と〳〵五句去るへし一本に二句もつゝく
三句去るへしとあり

前向附の事

當時前句附といへるもの別種に行ふ人あり是をいやしき俳諧なりと思ふ人も少からず是俳諧古學にうとき人の言はしめけるとと思ふ上古より宗鑑までは近世の様に百員つらぬる事多からず只前句に後句作るのみにて貞徳時分までかく有し俳諧のみにて連歌も上古かくのことし前句附は古風の傳へたるものなり付合初心の稽古は今もかくありたきものなり付方の本意を知らざる初學の時より百員

連ぬること何の益かわる所詮付かざる句をなかとと聯

綿せるより一句にても付合すことを句作せは餘は是に準して知るなれば付句様の導には大に益あるへし後世前句附の外に折句といへる名目あり其様を開けは一句の上五文字を判者のかたより出し中七文字五文字を作者より繼せいふなるへし伊勢物語曰かきつはたとといへることを句の上に置て

からころもきつゝなれにしつまにしわれは

はるゝきぬるたひをしそおもふ

如斯當意即妙有しこれは一字つゝ一句〳〵の上に置ける一鉢なり加様な例より後世思ひ付くものと見えたり

笠付は初五一句の上にさせる故此名目出來しと也是は俳句の古風に例なきことゝ覺ゆ此前句附笠附とて後世の俳士野鄙なることとさたみるもより所あり前句付笠附とて判者よりほうひと號し道具或は瀬戸物なとさま〳〵の器物を調ひ數多集りたる句の中にて一番勝には何二番勝には何、卷軸には何と句の善惡にて次第を立かのはうひを贈る由誠や春臺先生獨語に打たる如く畢竟は勝負事なりけ様に卑劣なる取捌ゆへ先年官家より御制禁ありける此徒に交らざる俳士あしくのゝしる成へし只かけ物なしに前句附をなすは古風を慕ふなるへし然れ共いつとなく前句付といへる徒に入ると只句柄も勝れす成行よし予は俳諧初發心の時より今いふ前句附といふもの終に一句も作配

したる事なきゆへ只世人の咄に聞傳たり前句附箋付の外後世様々の句鉢の名目繁多に成たるよし句々の貴賤は俳諧に遊ぶ人々發明して随分邪路に赴さる様に用心すへし

俳論

指合の事

指合の沙汰といへるは連歌新式の外は其家々の了簡さまざま替り有て一決し難し先此事に付て五の品有るへし功と分別と用捨と斟酌を了簡なるへし殊に俳諧にいたりては猶いろ／＼の言語にわかれていよ／＼其さかひ分ちかたかるへく貞徳は連歌一座に四つのものは五といひ立圖は四つあるは八つにて然るへしなと夫／＼の趣いつかたもおかしく云ひなして斷りは立ぬへし畢竟指合は其座の諍論をやめん爲の掟とを席に至りてよしあしもなく句數を多くするを手柄とのみ思ふ人に向ひてはさのみ制すへき程の事に有間敷をもかへすは是時のよろしきなり又たしなみ深き人は句作今少し何とぞと思ふうちに毎々人に取られて句前をのかせは終に句遠になる故にはからぬ句なりともわれかしと思ふ様の所か又は貴人少人初心などの句は少々の指合はありとも折節のさま能く捌くへき事此道の肝要にこそ侍る可けれ 獨積古

指合の事 俳諧と云は俗談と雖もいやしからざるやうに一作書たるかよし俗談と雖も所々に用る事の知れかぬる言

葉もわれは聞合すへし 中略 發句を出し脇をうけ三十一文字になる是を發句の姿情を受て脇をする法也時に歌仙行にあそはれぬを第三とて先句の情を起して「テの字」「ニの字」とまらぬ「テニヲハ」を用ゆれば四句目も其テの字の留らぬより一作思ひ出し及ぼすなり一奏には三句四句の五句程には先句の情を起し云侍るへし弱き句も強き句にてそたて強き句を弱き句にて和らけ高き句をいやしき句にてさけいやしき句を高き句にてそたてたる法なり是をさし合と云ふこと也

一卷にあやかしと云句あり是はむつがしき句を云からめてにけ難き附合の續きたるに用ゆる事也其用ゆるには少し前句をからめておかしき事を作意するかよしとするなり 芭蕉後集

指合とはテニヲハの同字なり夫もてとでの清濁は答めず讀む時耳にかゝらぬ故也數字も送字も舊式より輕したとへは一盃に由一つの如き語路の拍子の耳にかゝらぬは二句以下は決してとかむ可らずと 貞享式

指合の事 俳諧に指合の事はなひ草の類に隨ふへし少しつゝの新古の事ありされと一座の了簡を以て初心には随分許すへし一句の好惡を論して指合は後の詮義なるへしさし合は變化の道理なりと先其故を知るへし變化の不自在なるより世に指合の掟わり萬物の法式は此境にて知るへし 二十五ヶ條

さてテニヲハの指合といふはテ留りもニ留りも附合はま
して打越し（打越とは我附すへき一句置て前の句を云）
をもとかむへし腰の「て腰の」にといふ事は七七の短句
（低句とも）に限りて長句（高句とも）の中間には其とか
めなし或は見れば聞けはの如き「ハを濁る詞より押字も
抱字もすへて附句を云へき也

されと打越に附る時は五文字か七文字か同じ拍子には用
へからす畢のぬはまして不のぬとても惣してテニヲハの
指合は吟聲に語路の悪しき故なれば譬へ名目なきテニハ
とても同じ拍子にとゝこれは我と指合はすましき事也
古法は其字に此字をとかめて問はねは知らぬ事も多から
ん爰に指合の汲といふは「ぬの指合を」すと直すに真名
（真名は言語の首本の變化せざる所を云送假名便に委し
附て見るへし）には同じ「不の字なれと吟聲の差別にて
本よりとかめす是等を一理の凡例と知るへし

凡數字も送り字も耳目の變を先にして文字の上にてとか
むへからす（送字とは送りかなを附することなり語尾變化
するものは其變化する所より寫すを云）たとへは一盃に
山ひとつの如き語路の拍子の耳にかゝらぬは二句以下は
許すへし

されと送字は目たつ物なれば三四句も去へきにや古式の
鈴鹿に鹿の如きまして野分に「分の字の如き文字の上
てはとかむへからすたとへは鈴鹿の打越に染物のかのこ

の如き是を異体の差別といひて執筆ハ假名真名のくは
を知るへし

名所人名には同字別吟（同字別吟とは難波に波大和に
紫に筑紫の類を附句に嫌はす）の古法あるをや是等は
概打越をも許すへし二句さらはましてとかむへからす
故に去嫌の古法に萬物ともに打越を嫌へとも附ては苦
からぬ物あり親子に障子といふ類也打越はかへりて目
立へし 古今抄

指合證歌の事

古式 月に影花につほみや村に里

弓矢に駒は付句きらへり

明にあす手に持にきる足に踏

わゆむといふも付句嫌へり

鼻にかぐいさり火に蠟末にすそ

待に攝待付句きらへり

名所に寺號天竺日本や

名字名神嫌ふ打こし

ふり物に霧や火の雨花のふる

雨露のめくみも嫌ふ打越

影に陰星に月日やたそかれに

暮夕の二字も嫌ふ打こし

馬舟に綿に衣箱や獵人に

生類なとも嫌ふ打こし

野に原や閑にのとか今にけふ

七夕に月二句去そかし

糸に緒や衣類に碯客に袴

木履にせつた二句去にけり

そらに雲久かたに空寝に臥

雲に曇りは二句去そかし

生に死や幾日に日頃にくりたる

同字の假名も二句去にけり

古にふるきもみちに楓や風に風呂

わたに木綿は二句去そかし

火にもゆる煙に薪間にすきま

油煙にあふら二句去にけり

もつたいに姿や文に反古など

都に宮は二句去そかし

食に飯米にふちかた駒に馬

旗に八幡三句去るへし

父母に伯父伯母なとや賀に祝

文字にみそちは三句去なり

風炉に風呂句ひは伽羅やうら盆に

蘭の花をも三句去るへし

島に磯釣簾につり針舟にのり

さすに月戸は三句さりなり

朝にけさ虫鳥けもの聲に音

麻に鈴鹿も三句去なり

衣季や竹田のけふり夢なみた

月松まくら舟は五句さり

堂に寺垣にもかりや橋に梯

石に岩茸七句去るなり

山かつにいやしき馬に一騎など

駒にまくさも七句去るへし

人足に道具のあしや火に火燧

あしに脚氣は七句去なり

神にみこ帝に門や大君に

公達なとは七句去るべし

御の字や句ひにかはる三字假名

花にさくさも七句去るへし

網にあしる海にうな原關にせく

渦にともへは面きらへり

夕暮に黄昏なとにかみなりに

いなひかりをは面きらへり

短冊に歌や眠にねふりの木

うたひに能は面きらへり

若舞に瀧丸文に戀や糸

男堀海面きらへり

妻に妹みやこに京や酒に下戸

旅に旅籠は面きらへり

殿門や王星神に庭はしら

床駒車おもて嫌へり

餓鬼に鬼經に看經塚に墓

禪にさとりは折を嫌へり

天目に茶碗や釜に罐子など

行燈に挑灯折嫌ふへし

煩に病もくさに蓬くさ

油煙に墨は折さるふなり

君か代に御宇や勅使にみことのり

伶人に舞折をさらへり

新製

峰山も嵐も海川も

沖澤磯も三句去なり

馬車火虫茶酒飯と餅

一座に二句と定むべき也

飯鐘と木魚の異名四つはかり

脊虫の異体數を定めず

龍虎も鬼も千句に一ツなり

異名異体は數を定めず

からもゝや歸花より山吹も

千句一座に一句なりけり

雁燕柳さくらも鶯も

菊も千鳥も二季に二句也

庭垣もあかつき昔より袖も

文も便りもいひかへて四つ

泣く笑ふ照るも曇るも植刈も

寝るも起るも面八ツなり

目と鼻と耳口手足此類は

折をかへては四つもあるへし

網に魚鳴子に鳥やけたものや

かゝしも海苔も植物に二句

月次の月に月影三句にて

てる月と月五句去るそかし

百韻に雨は一折四つなれと

雪はおもてに入つとこそきけ

子の日には松さらしなに月の句も

花によしのも去り嫌ひなし

以上袖かゝみ

爲辨抄に指合といふは、てにをはの同字也それもとでとの清濁はとかめすよむ時耳にかゝらぬ故なり數字送字も舊式より輕したとへは一盃に山ひとつの如き語路の拍子の耳にかゝらぬは二句以下は決してとかむへからす惣して名所も物名も鈴鹿に鹿のことき屏風に松風のことき偏か旁かの字形をかへ眞名か假名の差別あらは附句も打越も用捨の捌あらんされと松かせも山ひとつも假名にやはらけて書へけれと風寒みともひと雨とも假名にかゝれぬは其論にあらすこれらは同字に同意の捌にして松風に風

呂敷の如きは舊式より同字別吟なりされとふろしきと假名にかくは執筆のはたらきといふべきなり畢竟は法式の道理をしり一卷の變化をしり語路の拍子をする時は指合も去嫌もさして新舊の法になつます其座に其事は明ならん此故に此論は明眼の師をえらみて其故を學ひさらんには法にわやまつ所あらんとを古法は誠に學ひてしるべきをしようと其法になつむ人は學ひてしらぬ人といふへし

爲辨抄抜

折合の事

折合とはたとへは下の句中に「花を見んとて山に入るなり」と云句にテ留の上の句を附す又前句の上句に「秋の夜の明はつるまで月を見てといふ句に泪にくれてなと、腰の折合に「て文字をすへからすと云義なり」「ての字に限らず「は文字」「に文字」「はね字皆同斷「はて」「まで」「すて」などのテニハならざる「て留に嫌はす夫も「捨て」「果て」などゝて文字附たるは嫌ふ也 御傘

上句の留りの字と下の句の中の留りと同字を嫌ふなり但てにはの字なり物の名は苦しからす又上句に下句を付るには折合わろし下句に上句を付けるはかまはすといふ人あり此説非なり兩方いづれも嫌ふなり又「て文字」「に文字」はかりの事と心得たる人あり左にわらす一切のてにはの字を嫌ふなり文字苦しからすといふ説あり夫もわろ

し名目抄

同字別吟の事

別吟とはたとへは難波に波、大和に大、紫に筑紫のたくひ是を同字別吟といふ附句を嫌はす

重と重は同字なれとも八重九重なとに石の重きなとは同字別吟にて付句を嫌はぬ事なり 俳諧獨歩行

中風に中^{かすが}春日^{はるひ}に春日、關白に關白しの類さし合にならぬなり又同字別心といふあり正直に高直、満足と兩足との如し同聲なれとも心のかはる故に五句去なり 俳諧名目抄

去嫌の事

去嫌はすへて同じ心に通ふを制するの法式也故に異なる字なれとも同意になるは嫌ふ也今其一二を擧ぐたとへは古へに昔しは面を嫌ひ古筆古歌或はふることは句によりて昔に二句去也

又

重と重は同字なれとも八重九重なとに石の重きなとは同字別吟にて付句も嫌はす

重に重なるは三句去重と重は七句去八重といふに幾重

一重なとは折を嫌ふか如し

幾多の文字皆此格也擧て數ひ難し然れとも一座々々に御傘嚏草を懷にして指合をくる時は果しなく附合は文字穿

繋の論場に落ぬへし是をしりて拾捨の捌きあるを上手の
宗匠といひ杜撰に捌くを下手の宗匠といふへし左に顯す
所は古式を忘れぬ爲に擧たる也されと歌仙は只三十六句
也三十六句皆別の句たりとも容易なるへしよりて何なり

とも一句云なは餘は遠慮有かよき也 獨歩行

去嫌に前句の詞の體用をよく見定むへし

あつまやのまやのあまりのあまそゝき」とある歌の詞を
とりてする句は居所にもならず降物にも嫌ふましといふ
人有へしたとへは

あつまやにうたふやうなるあまそゝき」といふ句なら
は居所には嫌ふへからず降物には嫌ふへし今降る雨を
見ていひたる句なる故也雨そゝきは其句の體にてあつ
まやにうたふやうなるは其噂の用也

されと是等の類連も老練の上はとにかく先は前にいふ如
く去嫌かよき也

頃折時の三字同じ心に通ふ時は互に二句去と本文に擧た
るはたとへは

物思ふ頃といふ句のあるに、花の咲く時、花の咲折
なといふ句の事にて句質の親疎によりて斟酌すべき物
也

すへて加様の類は一座の宗匠に任すへし

前にも云しことの去嫌の輕重のある事をよく辨ふへした
とへは

松をたよりに住ひとの家

なといふ句には旅のびんき便風の類字去也

風のたよりもたまさかになる

なといふ句には旅の便宜聲によむも折を嫌ふ

此句の如きは折を嫌ふも嚴しきやうなれとも前の便りと
後のたよりとおのつから其輕重なり是らの義は凡て其坐
の宗匠の捌きにある物なり且此便りといふ字は一坐三つ
便と聲によりて一以上四の物にてびんとたよりは折か
面か嫌ふへしといへるもの也 同書

去ると云ふは重し嫌ふといふは少は輕き心あり去るといふ
物はいかやうにても用捨を加はふる事成り難し嫌ふとい
ふ物は句により時により又宗匠の料簡によりて用捨する
事もありとなり

連句の去嫌は當日々々の宗匠の預る處にして露ふたつとも
一とも同字三句とも五句とも式書たる本をひらけは其ま
ゝ定めしらるゝ物にて今日附句の手練三句のかけはつし
の修行地に於て無益の事なりさて越に「馬の候て蚊帳と
は生類以の外也なと執筆の句もおそろしければおはれ其
日の宗匠寛仁大度にましまさん事を蓋是を他に出して判
を乞は一句の仕立二句の間の親疎三句の連ひの當非を討
論せしめて明日の修行にそなへん爲なれば判者其ところ
を辨明して強かち去嫌をのみ目かとなつたる事なかれ

去嫌大意 貞享式云去嫌とは天象地形より草木鳥獸も器財
食服も目にたち耳にひくものは見渡しに遠慮あるへけ
れはたとへ人の制せずとも我と用捨は知るべき也云々是
を我門に一理萬通といふ抑俳諧の式は楚仙の無言抄に濫
觴て貞徳の御傘にひろまりたれといつれも連歌の家にな
らひ慶安の新式を鑄形となせるより例に妾情の行ちかひ
わりたとへは

袖ぬるゝに「泪、遠きに」遙か、天に「空、雲に」曇
り、の類ひ二句去の式なれとも蕉門一派の姿の運びに
誰か二句にて附へからん

古式に牡丹は一坐一句の物故に俳には廿日草深見草の異
名にて今一とつあるへしといふたくひたとへ音を訓にか
へたりとも同じ一坐の百韻に同じ物の二つ出たらんには
實に作者の不機轉といふへしさはいへ牡丹のけやけきも
踏皮の牡丹をいひ或は牡丹餅といふときは植物の牡丹に
あらされは折を去面をかへて五句も三句もすへし是等を
異名といひ異體といふ古式今式の差別餘は准て知るへし
世に流布の俳式は御傘より抄出したる去嫌ひなれば妾情
の行ちかひあり用かたき式もあり貞享式もあるへし
むかしの俳諧も今の俳諧も打越の論の明ならぬは妾情の
二のわかれさる故也それか中にも人倫の運びはたとへ
雨ふり風吹といふとも見るか聞かのさかひより百韻は百
句ながら人倫ならずといふ事なし本より人倫を二句去と

歳時記

定たるは起居見聞の詞につけて人のさまは多き筈なれば
父母といひ男女といひ目たち耳たちたる文字の外は或は
自他のさかひにわかち或は妾情のたかひを考ひて打越の
附心と別ならは人倫の噂は似かよふとも一巻のくはりは
變しやすからん然らば古抄に掟たる「主」「誰」「身」「獨」「媒
といふ類はたゝ人倫の噂にして人倫とは定へからすこれ
らに法制の寛猛を察すへしそもや古式の覺へかたき所は
「誰」「何」といふ打越に人倫を嫌ふとは例のいふ字をとか
め、僧は人倫にあらずとは例のいふ理屈にて一色くくに
書つけて百式は百品に分別すべきや

「僧の打越に人倫は去へく」「寺の打越に居所を嫌ふへし
然らば「親王」「皇女の如き」「天童といひ」「天女といふと
も何の部に入れてさへくべきや」「帝も人倫に二句去へく
「御門は居所に三句さるへしされと」「仙洞」「新院の類は
人倫と居所との品によるへし昔しより舊式にも部類を定
かねられしか」「佛と」「鬼の打越はたとひ人倫ならずとも
人倫のさまは嫌ふべき也

雪は四ありて「雨は二とあれと雪にまさりて用多し」「あめ
「さめにかはりては六も七もあるへき也或は「虫」「魚」「馬
「車の如き」「飯」「餅」「茶」「酒の類は其名を其まゝに二つ
ゝあるへし」「木魚」「飯鐘の如き異名にいたりては三四に
ゆるすへし」「背虫」「煮餅の如き異體に呼ひては例の數量
を定へからすいてや古式の嫌ふ物は「松に子の日の大論

より「月に更科は附句をさらひて」「芳野に花は附句を嫌はすされ」と此論は今の用にはあらずいてや古式の嫌はぬ物は「冠に烏帽子をつけ」「綿に木綿をつけ」「夕立に雲を嫌はねは」「雨に笠とても」「鷹に符とても論すれば二句一意なれとも此類はすへて附句を嫌はすこれらは今の俳諧に全く無用の沙汰なれとこゝには五品をもて無用の凡例としるべき也其餘は皆々擧るに及はすされと大昔の沙汰には「彌生といひ」「師走といふ類に異名の月をは附へし打越を嫌ふとは古今の掟と稱すへし但し彌生にたゞ月とも附へきにやまさを知るへし

古今の斟酌とは連歌には二三ある物をも俳諧には只一といひ連歌には只一と制せし物をも俳諧には二三ともいへるは俳諧はたゞ日川の咄にて一坐の人和をあつかひは折ふしは馬の打越にまさしき牛ありとも其日の時宜にやと見ゆるすへし是らに連俳の用と無用をしらは彼は其家に其用あれは是は此家に此用ありて法は變通自在ならんをや

然るに字をとかめ意をはこひて「山伏に五品さらひ」「師走に釋教を嫌ふか如き一坐の争は絶えすしてかへりて世法の害とやいはむ

今選するにむかしの去嫌は人の見聞になれる物は重けれども近くゆるし人の言語になれぬ物は輕けれども遠く嫌ふたとへは「山は三句去にして」「峰は一坐に二なり」「風

は三句の字去なれとも」「嵐は一坐到二なり是等を舊式の凡例にて連歌の艶詞くらへには「峠とも」「飄とも目にしたち耳にひく物は只一と定られし法の増減は尤なれとも今の世の俳諧は擧一知萬といへる敏據の變を家とすればこれらの差別に斟酌あらんかたとへは「山を三句さらは」「峰も」「麓も勿論にて」「岨をも」「谷をも三句去るへししかれば」「海も」「山の對にて」「沖をも」「磯をも」「川も」「澤もすへては三句去ならんに」「山に」「峯との去嫌は二十餘字のちかひありて百世のまといは此故也たとひ山、字を三句されとて百韻の俳諧に二十五句もすまし古今抄去嫌といふは象物の類にして草木鳥獸はいふに及はす器財食服の類より居所には駄用の差別あり支牀には詞の輕重あり或は名所物の名に同字別吟の取さはさすへて姿情の二より趣向と句作との差別をわけて用と不用との道理をさへくへし舊式の如く文字をとかむへからすたとへは梅櫻に柳腰のことき野飼の牛に咄の尻馬のことき居所に傘の家名のこときはたとひ打越も其人により其句によりて用捨すへければ二句以下はましてとかむへからすそれを姿情の差別とは野飼の牛は目に見ゆれとも咄の尻馬は馬の姿なし其外もこれらの格例より趣向には用われと句作には用なき故と知るへし 爲辨抄抜

去嫌早引

打越をきらふ物

木と舁 鳥と獸と虫 月と日と星

このことくかはれば二句去にて付てよし

二句去のもの

とて る、 から より たき たい れり れる
それ なり なに らん うち このことは のみ やら
また けりこそ さて ざへ さは めり する
重ね字 折々 猶々 など

此分たかひにかはれば附てよし、とまりは見わたしを
きらふ

二句さりにて附られぬ物

風体 火跡 書体 降物 雨に露の 言語 乗物

歩行体 時分 濁り假名 畢ぬのぬ ふのぬ等

三句去の物字去といふ

(イ) 言いふ 幾いく 色いろ 今いま 出いて 入いる
花はな 原はら 早はや 晴はれ 降物の晴は折 果はて
張はる 外ほか 程はと 邊へほとりとへは折去
所ところ 居所の所は折 時とき 遠とほき 問とふ 共とも
取とる 解とく 通とほる 留とめ 止とめ
(チ) 路ぢ 散ちる 花のちるに花のちる、葉のちるに葉
のちるはともにおもてさり葉と花かはれば三句去音おと

置なく 小か 折なり 押をす 我われ 忘れすれ 分わけ

渡わたし 水邊の渡は折 割わり 川かは 風かせ 替かは

歸かへる 方かた 陰かけ 影全 懸かけ 兼かれ

(ヨ) 吉よし 夜よ 立たつ 爲ため 絶たえ 誰たれ

初そめ 添そふ 其その 遣つかふ 露つゆ 他の季にかはり

て 次つく 付つく 就つく 着つく 詰つめ 中なか

鳴なく 並なみ 無なく 成なる 猶なを 双ならふ

(ラ) 内うち 上うへ 請うけ 打うつ 居ゐる 登のほ

上あけ 残のこる 野の 落おち 思おもふ 多おほし 追おふ

吳くれ 雲くも 艸くさ 來くる 暮くれ 暮の秋年の暮な

とを大暮といふこれは折

(ヤ) 山やま 様やう 待まつ 間ま 又また 廻まは

深ふかし 吹ふく 振ふる 心こる 聲こゑ 木こ 比こる

此この 是これ 爰こゝ 此の三字共にかはれば二句

事こと 込こむ

(ア) 明あけ 有あり 浅あさ 跡あと 逢あふ 合あふ

相あふ 餘あまる 當あたる 里さと 下さる 先さき 去さる

更さら 木き 際きは 聞きく 切きる 消きゆ 行ゆく

道みち 水みつ 見みる 皆みな 知しる

(エ) 日ひ 人ひと 引ひく 元もと 下もと 許もと

物もの 持もつ 住すむ 末すふ 捨すて 過すき 濟すむ

全三句去

木に木 草に草 鳥類に鳥 獸に獸 虫に虫の類 魚に

魚 山類 水邊 降物 かはれば二句さり
地名 名所 かはれば二句去 神祇 釋教 無常 述懷
支牀 飲食 かはれば二句去 衣類 旅体 在体 賣体
簞物 居所 夜分等也

五句去

衣季や竹田の船路 夢 月 松 枕 七句去るへし
と連歌の歌を引て俳諧に五句去と定たれとこれらは斟酌
もの也

煙けふり 御み 御お 袖そて 等也

七句去の物

飛とふ 頓やかて 御こ 旋めくる 花に櫻のるゐ 戀の
句 並に三字假名 いつれ いかにかに いかゝ いかん
はかり はなし ぬらし ぬめり ぬめる ぬらん か
らん からし つらん つらし ならん ならし なれ
や らるゝ やらて けらし もなし せられ せらる
すらん かてら等也

七句去留りは折也 るらんは三字假名にあらず二字かな
也

面去の物尤見わたしをさらふ事也

(イ) 離はなる 走はしる 泊とまり

(チ) 終をほり 若わか かわりて面也 重かさね 隠るか

數かつ 代かばり 假かり 片かた 輕かるき 返かへす 彼か

(ヨ) 寄ふる 依より 高たか 垂たれ 頼たのむ 給た

違たかふ 空そら 傍そふ 面つら 作つくる 突つく 摘つ

積つもる 盡つくす 長なか 馴なるゝ

(ラ) 結むすふ 浮うく 薄うすき 移うつす 失うせる 除く

後のち 表おもて 遅おそし 送おくる 組くむ 廓くるわ の

(ヤ) 屋や 屋號は折也 安やすし 眞ま 參まぬる 前ま

先まつ 氣け 古ふるき 越こへ 拵こし 毎こと 如こ

撰ねらむ 得ぬる 手て

(ア) 朝あさ 間あひた 嘸さそ 覺さめ 酒さけの噂

氣き 着きる 夕ゆふへ 結ゆふ 故ゆふ 代しろ 人名等

(ア) 光ひかる 火ひ 廣ひろき 病体ひやうたい 面もつら

少すこし 素す

酒の噂廓の所作當時七句去にゆるすといへとも式の通り
見わたしを嫌ふへし

折去の物

(イ) 家いへ 板いた 糸いと 至いたる 致いたし 初はつ
初には字去 始はしめ 拂はらふ 放はなつ 刎はれる 葉け

但無名也 木と葉と竹と替て三句去 運はこふ 俄には

邊はとり 隔へたつ 年とし 年歳も昔ンにかはりて面去

(チ) 地ち 千ち 濡ぬるゝ 惜をしむ 納をさむ 霞むす

算かそふ 書かく 垣かき 門かと 限かきり 搔かく 借かり

買かふ 勝かつ 欠かけ 藏かくす 傾かたく 幽かすか

(ヨ) 世よ 世に代に三句去 呼よふ 横よこ 讀よむ

悦よろ 旅たひ 大たい 便たより 溜たまる 叩たたく 互いたか

慥たしか尋たつれ他た 類たぐひ 染そめ 背そむく揃そろ
 築つく 常つれ 包つゝむ續つゝく繼つく 強つゝき寝れる
 人生類かはりて七句
 流なかる 撫なて

(ラ) 群むれる 後うしろ 埋うめ 寫うつす 賣うる 動うご
 疑うた 初うい 初とかはりて面なり 軒のき 延のふ
 乗のる 望のそむ 拭のこふ 御おん 奥おく 驚おと 恐おそ
 威おとす 覺おほへ 同おな 重おもし 劣おとる 趣おも 負おふ
 國くに 喰くふ 苦くるし 汲くむ 加くはふ 悔くやむ 賦くほ
 熊くま

(ヤ) 宿やと 宿に面なり 破やふる 任まかす 罷まか
 曲まかり 稀まれ 毎まい 増ます 迷まよふ 卷まく 丸まる
 交ませる 削けつる 消けす 踏ふむ 福ふく 細こまか 乞こふ
 剛こはし 扱こく 濃こき 天てん 照てる

(ア) 集あつ 集あつ 顯あら 飽あく 預あつ 厚あつし 改あら
 恠あやし 凶あし 哀あはれ 雨あめ 雨う 雨さめにせもの
 あめにも七句去 刺さす 探さくる 捌さばく 騒さわ
 逆さかさ 定さたむ 拭さかす 流石さす 清さやか 儀き 究きわ

霧きり 雪ゆき 異名他の季は面ざりにせもの七句去
 譲ゆる 緩ゆる 短みしか 猥みたり 瑩みかく 亂みたる 品しな
 忍しのふ 静しつか 然しかる 沈しつむ 凌しのく 順したふ
 (エ) 響ひく 扣ひかへ 開ひらく 浸ひたす 諸もろ 求もと
 戻もとす 用もちゆ 者もの 盛もろ 催もふ 筋すち 勝すく

居すばる 既すてに 隅すみ 直すく 救すくふ 勸すくむ
 百員に二ツの物

(イ) 命いのち 勇ゆうふ 古いに 石いに 池いけ 祝いは
 磯いそ 煎いる 市いち 暇いとま 庵いほ 賤いやし 偽いはり
 厭いと いと、濱はま 林はやし 橋はし 耻はち 遙はる
 榮はへ 庭には 場には 新にい 西にし 洞ほら 堀ほり

仄ほのか 干はす 友とも 鳥とり 無名
 (チ) 沼ぬま 布ぬの 主ぬし 岡ぬか 小野の教ぬし
 怠ぬる 驕ぬる 補ぬき 別わかれ 僅わつか 業わき 濁かた
 顔かは 神かみ

(ヨ) 宵よひ 代世に去 焚たく 瀧たき 谷たに
 堪たへ 様ためし 忽たち 貯たく 譬たとへ 助たすけ 園その
 育そたつ 存そんち 反そる 連つれ 津つ 傳つて 難面なき
 つらき 願れかひ 名な 習ならふ 渚なきき 眺なめ 半な

灘なた 嘗なめる 投なける 情なきけ
 (ラ) 村むら 虫むし 無名 昔むかし 歌うた 浦うら
 噂うはさ 伺うか 失うし 海うみ 井ぬ 老おい 沖おき
 帯おひ 自おのつ 可笑おか 課おは 仰おほせ 車くるま 窪くほ
 競くらへ 括くる 委くはし 癖くせ 臭くさし 碎くたく 曲くせ
 繰くる 中なか

(ヤ) 焼やく 漸やう 町まち 窓まと 誠まこと 申まう
 負まけ 招まれく 紛まき けふ けさ 麓ふもと 防ふせ
 塞ふさく 子、生類に七句去 植物子に三句去 殊こと

好このも異こと 漣こす 轉ころふ 江の 枝わた 寺てら
(ア) 曉あけ 翌あす 嵐あらし 炮あふる 主あるし 興あふ
案あん 足あし 味あじ 遊あそふ 洗あらふ 争あら 欺あざ
危あや 嘲あさ 侮あな 誂あつ 酒さけ 音と異名に又あ
るなり 笹ささ 崎さき 澤さば 坂さか 盛さかり 淋しみ
幸さち 榮さかへ 境さかひ 避さく 喚さけふ 君きみ 御きよ
きのふ 岸さし 嚴さひし 嫌さらふ 北きた 夕ゆふへ 豊ゆた
所縁ゆか 免ゆるす 珍めつ 都みやこ 宮みや 峰みね 南みな
湊みなと 右みき 島しま 汐しほ 印しるし 鎮しつ 認しめ
忍しのふ 親したし 測しはむ 退しり 絞しほる
(エ) 東ひかし 于ひる 鄙ひな 晝ひる 低ひくし 拾ひら
左ひたり 密ひそか 等ひとし 森もり 専もつ 守もる 尤もつ
貫もらふ 瀬せ 關せき 洲す 砂すな 冷すさ 涼すさ
速すみ 則すな 進すすむ

此書面に記さぬ分は百員に只一ツと知るへし尤訓と音と替りては二ツ有也禽獸草木も異名とかはらは折去ては又有なり

東 西 南 北 此四字音に二訓に二ツ折也

青 黄 赤 白 黒 此五字音に四ツ訓に四ツ訓音かはりて面テさり但白の字はかりは白しろきと白はくと替りて七句

百 千 萬 此三字は音に四ツ訓に四ツ訓音かはれハ面テさり也

一文字音にハツ訓にハツ訓音替て七句

二より十の字までの文字ハ訓音の差別なく見わたしに一宛なり

但し折去の物も折かはれハ三句去り見わたしをさらふ物七句去の物も其面テをされハ三句去り也又云二句去り三句去り五句去りの物は面テ折かはりても式のとほりに去へし

支那の部

一ツの物 頭 耳 鼻 眉 腮 襟 脊 腹 肘 膝

腕 股 膝 髪 髭 腰 肩 臍 等也

二ツの物 顔と足

四ツの物 目と口

ハツの物 手(腕、器財の手、又ハ上手、下手に七句去り)

此分入用の字なれば類を分出しおく

樂ハ二ツ 苦ハ四ツ 福ハ四ツ 貧ハ一ツ 高ハ八

ツ 低ハ二ツ 廣ハ八ツ 狭ハ三ツ 輕ハ八ツ 重ハ

は四ツ 大は四ツ 小は三句去 勝は四ツ 負は二ツ

夜は三句去 晝は二ツ 拾ハ二ツ 捨ハ三句去

此定めの輕重を推察して萬端に心配らは中らすといへとも遠からずとしるへきなり 俳諧去嫌早引大全

打越の事 俳諧の制

秀句の打越に秀句言たるは悪し又秀句に秀句云もわし、結ひ句言かけの句次の句にて請るはよし

字に書て假名付る常の事なり是又當世の備俳のする事なり萬葉の文字の外は義理よみは有るへからず假名つけ文字にて文をしらすること第一比興の至りなり

俳言も言聲にて違ふこと好むまし俳興あれはとて指令の句いふことは親子兄弟貴人高位の慰にもなる物なれば戀の言葉すらけやけなること好むへからず

故事のこと其事を含て句作りたるはよし楊貴妃昭君淵明孔明なと、押出して其名をさし其所をいふことの次の句の邪魔なるへし

熟して覺へざる事なと申出して其句の譯問ひかけられ答につまりたるは第一赤面たるへきなり

都鄙ともに渡りて人々能く知りたるは言出しも科あるまし近年のはやり言葉なと申こと一向盲俳の業多かるへし花の坐の外に引上げて花の句すること最上の尾籠多かるへし

難句申出し一坐の衆も付あくみたる躰ならば斷りを申早く歸るへし

長短の句ともに言つめたるはいやし聞にくし心敬僧都も連歌に篇序題曲流を第一と心得へしといへり歌にてこへ

は篇は「冠五文字序は「肩七文字題は「腰五文字曲は

「足七文字流は「沓七文字連歌にても前句篇序題上の句下の句かはりなし附句曲流と前句曲流なれば附句篇序題と心得へし一二を擧てたとふ左の如し

下の句 落着なり

前句曲流

かへしたる田をまた返すなり

左の有様と云

附句篇序題

足曳の山に臥猪の夜るは來て

落着なり

前句曲流の心

面影は遠くなるほと悲しけれ

右の譯を云

附句篇序題の心

花見し山の夕くれの空

右の通り曲流々々とも行かす篇序題々々とも行かす前句言流したるは附句にて斷る多くは附句言渡すへし句毎に言つめたらは此味ひ有ましたとは、篇ははしめて見ゆる様、序は中立頼むさま、題は文をやるさま流は成就したさま也

前句親句より又親句と來たらハ附句疎句と心得へし親句といふは親しく細かに手をこめたる句疎句とは眞實をもとにしてさらりと言ひたる句なり親句は縁言などを委しく相はなれざるなり疎句は別句を引まとひていひおとす句なり俳諧獨積古

打越の證句、句去等の事

金陽より出したる兩喰集に

百姓なれとみな兒玉氏

月星を神事にかけて祭るなり

長きは稻とおもはれぬ稻

此三句目打越しへ通ひて所謂觀音開といふものなり

賤か家の乙鳥も通ふ法性寺

同しつらなる駕の拵へ

いししを綸子の袖にかくし喰

あかるう成てはつす覆面

風に潰れたもある八十社

綸子の袖打こしの法性寺の人物と見えて○いしし已下

いづれも變化かしねて芭蕉の申されし蓮の莖といふしめ

しには

風に潰れたもある八十社

こゝやかしこに休む雇人

粥ふかす鍋の大きさ五六尺

田舎へ下る輿を泣々

八十社五六尺二字つゝの數字打こし○田舎へ下る輿も打

こしのこゝやかしこの場顧るへし

寝る鳥のむらつく中に二日月

二句去に

二歩も崩せは鐘はとつさり

これらは取かへられぬ數字にては無名を

壺燒の貝に松葉をとり合せ

打こしに

花咲て行脚もしよく成にけり

打こしの松葉植物ならずとも云はれまし

しら梅や鶴まではしき山の畑

此四句目に

老の手業にのらぬ活魚

薄へりの數の揃はぬ暮の月

小高の中に廣き秋の野

老の手業述懐なり表に如何○ふのぬ二句つゝき○腰の

「にも打こしなり殊に表の見渡しなるそ

陣屋のうきを遁れたる朝

二句去に

尾張屋の楓伊せ屋の松の月

屋の字家にかゆるとも近くて

きりきりと鳴く音は霜のきりきりす

打越に

花の蔭煎茶道具こまゝし

疊字打こしを

徳利合點となるも楽しみ

打越に

吹あけくれた傘を見とれる

又打越に

たわれて隠す髮結の筈

器財打こしつゝきてうつとし

暮遅き日やたれ灰汁の音もせず

此五句目

満月も縄手通りは片明り

田むし送りにわたる獅子舞

髪わけて頭瘡吹るゝ初嵐

満月中旬なり初嵐初秋なり季戻になりて

ひそくゝと二階の口舌聞とれず

冷し肴のぬるくなるらん

涼しさに椎の木抱て一眠り

寶物一の破れ鐘か鳴る

中日は月もほとよき彼岸にて

國の踊をおとる親ふね

雁梢をやたらに落す年も有

旅籠たけなり客のあしらひ

數字近くて見苦し○寶物の鐘に彼岸いかにもべたつけなり是を前句へはまると云ふなり○彼岸に踊り時候戻りて何れ此踊七月と聞ゆ○國の踊旅籠なるに旅籠も旅躰打こしにて

畑割すんで蛙なき出す

打越に

一搔鐘めた僧を見送る

畑割一搔事は變れども何れも田家の趣にて打こし聞くるし

鳥の巢五斗俵ほとにしたりけり

句作つまりて聞苦しいかよふとも云ひまわさるゝものを

年明けてから初めての雨

假初に寝られし息の屠蘇臭く

初の字如何こは同字別吟といふにもあらず

栗の皮こはす羽織の袖たゝみ

襟に巻居るおとり手拭

おとり手拭も季戻りならずや

捨るはかりの風呂を振舞

打越に

たふるゝ襖うけて立聞

打越に

きぬたか止めば確を踏音

風呂も襖も居所の用なり打越を嫌ふ○立聞に音も聞も聞

躰打こしなり

顔出しなから若い虚無僧

細道も小川も名ある京くるり

風重たしと朱傘ひろける

御物見のひそくゝ笑ひ聞えけり

南京鳩をつれて来る鳩

天蓋をかふりたるかそれを着さらして居る躰なれば朱傘

廣ける打こしへ躰近くしかも兩品とも釋教の用と見ゆ○
京の字近くてこは一座一句の物ぞ

つめたき水も音は暖か

暖かなるは如何なる音にや

蝙蝠や土橋の裏を晝かせき

かははりのかせくほとどのやうなことにや

あふつ妻戸に月のひらめく

打越に

米とり濟す里のゆつくり

妻戸のあふつも如何に兩句居所ならずや

退屈な奥淨瑠璃も年忘れ

打越に

いふ事も聞ことも皆つれなくて

いつれも聞躰にこそ

水鳥にして家鴨なくさむ

季こそまたね家鴨も亦水鳥なるそはれならぬ物をこそ

打越に

蛙さらへて捨る五月雨

同

炬ふみけして戻る月代

腰のて打越つゝき候○月の字打越此論は雪丸けに五月雨
の打こしに月の句出たるを關更か咎められし一書あれと
もそは其傳を知らぬと見えたり故ありて是嫌はす

賽錢の百も上らぬ神の留守

町も及はぬ穢多の瓦家

ふの「ぬ附句になりて

雞子啼て崖の松毬轉ひけり

くわらりと空の晴る初東風

萬歳の一番船に乗あひて

此發句に脇第三を歳旦初春等の作にて季の戻りたるは如
何二に萬歳の一番船に乗たる一作何の手柄ありや

手桶持眷もちはしる鮎の落

座五つまりて聞苦し落鮎にとすれば初五へ戻る「てには
にて句柄も直るぞ

繪馬掛に大さう騒く宵の月

二句去に

伊豫麗にすかす花の夜明り

すみ草の撰拵へに飽にけり

連のあるまてのはす藪入

宵月に夜明り夜分近し○此藪入延ひしとすれば二三月迄
も遅なりしと聞て可然けれども延すとすれば當座の詞故
正月也されは季戻りになれり

先八九分ふけし綿もゝ

ふけし「てには語をなさず「ふきし也拵綿は花の跡かも
ゝになり拵綿の吹也もゝか吹とは云はす

朝風さむく毛を立る雉子

風の寒き故に毛をたつるところより雉子の心をいかにし
て察したるや公治長の徒かしらす

わら寺に輪飾りなども切込て

いかなる故のありて注連繩を寺に切込しやあまり事を新
しく云はんとて世に有ましき事を求めるにや

忘れたる閏の月を騒き出し

また釣て來ぬ鯉の献立

ある長者踊浴衣を施行して

一句置て

鴉めか長啼すれば葬か来る

忘れたるより秋三句つれたる心か閏の月ある頃の月と聞
ゆ柳鯉春なり鯉とはかりは難なり踊浴衣のみ秋にて來の
字ちかし長の字打越なり

煎立の葩煎芳はしき店の先

二句去

軍にわれし町の氣の毒

居所ちかし○軍談の句に榮なし

夜半から釣らする櫛の餘波哉

音はかりして月遅き松

雁下りる御旅屋の垣は透もなし

櫛も生るゐに預る物故打越を嫌ふ也○獵や綱釣の糸なと
生類にあつかる故に嫌ふ打こしと矜式歌にあり○かゝし
鳴子杯生類植物に嫌ふも同じ道理なりことに第三ならす

や

箕てすくふほとひよこ産けり

卵生のものはすべて卵を産て扱日を経て後孵るなり是を
産とはいはす○田夫野人の調さへかへるといふに俗談平
話をたゝすとは芭蕉も申置かれしそ

見る所へゆくまで暗し月の松

飛越す川に茂る犬蓼

圓竿倉の底にあつかりて

作食うけに誘ひ合する

發句勿論秋なり蓼犬蓼ともに夏なり蓼の穂の花秋なり殊
に茂るとあれば猶更夏なるに○第三圓竿季節慥ならす一
句も其理聞えす○腰に打越し也

また春も寒し布子の折目高

寒しとおきては勿論發句なり平句にあらざるに

傘にもひとつ削懸釣る

初荷とる馬を宵より拵へて

初荷正月二日なり削懸釣は松の内過ての事也是も季戻り
なり京攝には十五日まで飾を置けとも江戸には七日まで
にて門戸の飾を除て削かけを釣なり祇園削懸は元朝なれ
ども是は釣とは云はす新年の水火を受けるなり

松風の吹はと月はみかゝれて

落した水に泡のみなきる

作徳もおさまる寺を持なやみ

此卷の發句月の松なり又月に松を結びては遠輪回なり二に此三句秋ならずは同季つれざるに作徳の納る寺とはかりにては秋とも云ひ難し夏作もあるものなり全駄句意難なり季離れの所ならは可然に

色よさに焚きくよける落葉哉

窓の明るき霜の朝さへ

此脇所謂無文也「てには止め脇も連歌にさへする事故俳諧には勿論なれとも其句の格によるものなり今蕉門の徒は格を知らずして「てにはとめの脇をする故一句拙くて笑至の事なり蕉門の先哲は其心得有てせられしを只其よき所に目のつかぬは傳書に疎き故なり

霜に明るき朝牙の窓

とすれは有文になりて句の据りも一入なるに

掌の破れさうなる數珠の音

二句去に

行脚の尻も先すわる秋

釋教三句去なり一句近し然し是は行脚といへは旅を廻る俳諧師の事と心得たる間違より釋教の心つかさると見へたり行脚とは能仁氏の頭陀執行に抖擻^{トソ}行脚とて諸國を歩行事なり俳諧行脚と云ふは其名目を借りたるまでなりされは俳諧行脚とか畫行脚とか斷なくおしなへては浮屠氏の行脚なり

木葉降輿にひかへて松の月

涸てかたよる瀧の落口

反古煮る烟の嗅き里越て

此發句も前にも云る如く發句の「てに遠慮すべき事なり發句の哉とめは「にてに通ふとて第三「にて留を遠慮するも作者のたしなみ也兎角古き式目を學はすして只末書のみを一家の規矩とする故かやうの事には氣のつかぬも笑止にこそ

狐の穴に傍示たておく

打越に

思はぬ人に團扇敷るゝ

同

雜行ことに金を惜まぬ

いかにしても「に文字目に障りて又申事そ

約束の奈良茶斗て蛙聞き

烏帽子も着ねはならぬ世渡り

女房は京生れにて裾長き

中かわるさに隣覗かぬ

奈良茶食類ながら都の地名のかれす打越に京如何なり扱烏帽子も着ねはならぬといふ人柄は鈴ふり神道者か小宮の神主なと見ゆされは是も長袖のはしくれ也然れば女房もとなくては濟まぬ斷りなり女房はとする時は亭主はさすか長袖のはしなれとも其女房は田舎生にて不取合の趣ならずは所詮なし烏帽子も折々着る男に裾長の女房は

相應の事なりはと反する場ては無し然し其男に女房はにもせよ。にもせよ前句の註なり隣覗かぬも又其再註になりて變化無し諺に云ふ竊桶なり○隣覗かぬの二句去に

飼鳥に屋根むしらるゝ不肖さよ

打越に

老曾ては日野を山家と譏れとも

又打越に

また誰も來ぬやら門に蜘蛛の網

いづれも居所ならずとは申されまし

初心な槍奪を釣て慰む

橋詰の常床髪に顔賣れて

阿波座鳥と書た挑灯

三句の渡り變化なく殊に打こし同じ人柄と見ゆ是らも竊桶なり

其日茶屋鶯一羽飼こめて

くらひ一間は武具て塞かる

一文字は音訓とも七句去なるそ

乗が來て毎朝かふる寒の水

水は浴るなりかふるとは云はず芭蕉もかふりふり申さるへし

生干の和藥とり込暮の月

鹿か斃れて所厄介

隙て居る盆も脱れぬ役袴

是にて秋三句つれたる心なるへし中の鹿か斃れしは雜な

り奈良の町なとにては間々ある事なりこれは鹿とさへ云

へは秋と心得たる未熟よりそ鹿の妻戀こそは秋なれ鹿の

斃るゝは秋に限るへきや鹿の聲、鹿鳴又は鹿とのみ置て

戀の心を案し込たる古人の作例を見誤り近き頃はそれも

おさなしと思ひけんある老人の句に

かちくゝよ竹にあたるや鹿の足

淋しさや芝にからびし鹿の糞

なとせられしを批判せし事も有し此斃れしも同日の談なり鹿とさへいへは秋になり候はし猫とさへ云へは春なるへし題の本意を失ふ事は如何にめつらしく句作したりとも賞すへきに非らず

隙て居る盆も脱れぬ役袴

御無心ことに御歌下さる

名にも似ぬ武者小路の優長さ

こは前句の御歌下さる人を武者小路殿と名をさして註したるなり其ぬしのきこしめさはいかゝ思さんやそはとまれかくまれ前にいふ前句の噂なり又打こしの役袴も其家の何某と思しくて三句のわたりも

目にたゝぬ次郎太郎を花の番

打越に

本陣は背門に田も打網も打

日和にも雨にもかふる櫓笠

貧乏村に澤山な鶏

田を打花に打こしを嫌ふ事勿論又田も打網も打に日和にも雨にも耳に立て本陣に村居所近し
嘶聲でもしれる喜多流

打越に

何所の鐘やら麗に鳴る

兩句聞躰なり

娘入道具の休む居酒屋

是は道具をおろして休む人足なるへけれどとさる長々しき事には心あまりて詞たらすかく云ひては道具か妖物にて歩行て来るよふ也

鳴狐氷の湖を渡る聲

啼聲と歌にも讀俳諧にもつかへとも此上の啼の字か下の聲の字か何れなりとも一字省きて濟む事なり文字の足らぬ故にや其たらぬ所にはよき詞もあるへきに

小祠にも只の石にも注連張て

打越に

酔はさめ花はうき立つ七ツ晴

是らの句作同調になりて打越聞苦し同卷に

風呂も流も月に明るき

岡崎は静か吉田は神さひて

なと斯様の句調卷々に多し老人の癖か

礎とされて虫の啼出す

打越に

しるしの失せて知れぬ傘

て文字腰と腰に打越なり

出這入に散る軒の薙苙仁

二句去に

穴ほりて罐子かけたる小挽小家

居所ならずや

侮りにくい穢多の小理屈

髮結を裏からそつと呼にやり

穢多の小理屈に困りて裏からそつと髮結を呼にやると前句をかる付也前句無くは何故そつと呼にやるとも知れす初心などの附句には折々ある事なれとも一句離しては聞えすかの一字離しては讀め申さすと答し惡筆の手紙と一荷にせは捧を折るへし

生憎の鯛味噌呉る壁隣

二句去に

明き家の屋根に龍膽の咲

兩句居所なるに

牛の子撫て子は撫もせず

打越に

竿つゝ張て飛越る川

腰にて文字打越なりしかし是も際限なさまゝに以下は略す

鶉鳴塀の内外かけ合に

啼鶉となくては句格調はす殊に第三ならずや

鳴網に左勝手山の月

韻字留第三は連俳とにもする事なれとも是は其格を學は
すしてせし故只平句也第三の格を知らされはたとへて
留「に留なとにてするとも平句に同じ事を左もなくは脇
第三の句格を古人も論すへきや

誘はれて染まぬも落る木葉哉

門田に残る鳴のあし跡

鹿小家の火をまた消さぬ有明に

醢醢醢賣に起されにけり

人並に糲をするほと穂を拾ひ

落穂を拾ふ脇の門田をいかん鹿に家も亦其場なり表の見
渡の珠數つなきにて○第三四句めに文字折合也

不斷蚊遣りも楠を焚なり

先住の譲りの斧は手に合はす

前句の楠を割る道具を御叮嚀過ぎて拙く不自在也

苞かと思ひし其鳶の心を知られしそ不審なる

苞かと思ひし其鳶の心を知られしそ不審なる

波もふみ込旅籠屋の庭

二句去に

秋風に破れ館のまはり番

是も居所ちかし

わたまし當坐茶湯三昧

花咲はいきとれる鬼神鱈

八十八夜たつた空合ひ

數字打續きて

日暮るゝに風吹に磯の鶴

道はとちらも同じ枯蘆

松ひと木伐れは枝葉の山つみて

發句風に植物第三迄續きては變化なし是は只風を風の事
とのみ心得たる故の誤なり洛の言水か

風の果は有けり海の音

といふ句の性根を考へ見へるし第三輪回ならずや表の句
は猶更かゝる事もたしなみなるを

霽に來た人も珍らし雪の朝

二句去に

雨舍りする家とてもなし

降り物近く殊に表の見渡しなるに

屋敷の椎て屋根は常ぬれ

等閑に古い佛を持つたへ

上ばかり見て妻も定めす

門過る葵車に夢覺めて

居所近し○葵車神祇也佛に打ちし

瘡の神にさかふ酒のみ

あそこ折こゝ伐り楠の枯さうに

又打越に

扇さらへに露の時雨るゝ

に文字折合○短句の腰のに打こしつゝきて

西行忌とてさわく潜上

梅生て世上の花はしらぬ顔

上の字前句にも

山から里へ池のはつ鮒

二句去に

落葉焚はかりか徳の御山寺

こは字去なるものを

朝倉方を追立し槍

唯軍談のきりぬき文句にて俳諧なし軍の句の造り方は古

人も念頃にしめし置れしそかの炭俵の附句に蕉翁か

ひたるきは殊に軍の大事也

是兵糧はとすれは理屈に落て南無三也ひたるきはとせし

か上手のてつまにて風韻ぞ

迷ひ子は只北山を指さして

茶を乞ふほと知音もなし

迷ひ子に知音も無し是を二句一意といふて先哲もいまし

め置れし事ぞ

手一束はと髭延しけり

打越に

口わたりよき六八日の米

數字も支躰も打こし也

白川をこす數入もおひたし

かるた結ひの帶のりしき

長紐の文箱の出入眼に立ちて

かるた結前句の人也入の打こし○此使亦前句の人そ

秋の蚊に安家買ふて後悔み

二句去に

雪駄ならへて垣にかはかす

居所近し

日南尋ねて下りる鈴鴨

此鴨も日南を尋ねて下りしや鳥の心知るへからざるに

酒杜氏二村三村かけ持ちに

打越に

旅せねは月の一句も疎々し

數字近くて殊に表の見渡しなるぞ

松魚一ふし買ふて贅いふ

亦一文字句去に見へたり

京師にては表六句或は裏移り二三句迄にてやみたる由に
て只丹波の月樵洛の杜鰲等と三喰のみ聞ゆ其俳諧も

福耳と人ははやせと冷つきて

せつゝ立てはつす盃

て文字折合なり

三句去に

門々て小言こき居る鉢坊主

釋教三句去ながら其物變化なくては一巻の模様悪し小僧に鉢坊主白眼廻しに小言さく杯句體似通ひて門々て小言の打越に

いさかひも浮氣と見れば面白き

是も小言にいさかひ如何と覺ゆ

飛んだ蓮の實焼は又飛ぶ

二句去に

さほとには芥も無いに芥川

三喙に同じ作者の句前なれば聞苦し脇に 植つけ頃の水も來ぬ川と有る舉句に

汲上る間もぬるむ池水

脇の文字言葉等を舉句にせぬは勿論なるに浪花にての兩吟三喙等も

との山も雲には疎しけふの月

一風さむく河鹿聞ゆる

此脇も「てには留調はす只平句也」「てには留の脇は連俳とも習ひの有る事にて本式千句の時は必ず好みてする事そかし千句の式にて一處のみ歌仙などに常々むさとすへき事にあらす兎角傳書に疎く只古人の作例あればとうし

てもよい事と思ふは其傳を知らぬ故なり何故脇は韻字留にすへしと古人の定め置れしやとうしても能き事ならは其式目は入らぬ事なり扱韻字留にすへき脇を「てには留にて調ふやうにするの傳授也表六句目に

けふは御降此かたの雨

發句けふの月とあるに殊更表の折はしの句なるそ

女のむれに二間ついへる

約束もせぬにもて來る朝の駕

前の女出戀なれば此句にてしかと戀にすへきを駕の約束せぬと有ては決して戀ならず約束といへは戀の詞のみふにや約束も事によるへし朝の駕と有ても後朝とは聞えず旅籠もあるなり

月の宿船底橋を見あてにて

風かとはかり棕鳥の一つれ

白禰宜て一生立る顔の皺

船底橋も拵へ過たり一文字附句になりて

刺す事知らぬ寄居虫やさしき

刺すこと知らぬ虫は是に限るへからす諸虫皆さすに寄居虫のみさらぬなとはやさしかるへし刺すこと知らぬ虫の方多しさす事知らぬ胡蝶やさしきとてもいかやうにも

誠の友は酒屋又六

一休か杉葉立てたるをせられしこそ風流に聞ゆれ酒屋と

打出したるは未熟の作也又六とはかりにて作意あらは聞ゆるに

備へ崩すと見ゆる旗の手

これも前にいふ軍談の切抜文句にて滑稽なし軍の句はかよふに眞面目にするは初心なり成程俳諧といふ眼がなくては

脇に

下闇寒く川鹿聞ゆる

とある擧句に

籠打明て薪揃の家

未だ擧句の法を御存知無きにや句もまた拙し

綿賣のすけなきものに時雨かな

鳥は曇り鶯は照る冬

向ふ風天窓つかゆる駕かりて

市人あての酒の味なき

第三向ふ風といふ見込時雨の場へ戻りて聞ゆ殊に第三句の場と變化すへきものを無素氣無味表の見はたし

二句去に脇も冬の字の手柄見えす

檜笠かけた柱の露雪

二句去に

音かしましと庭の松賣る

又二句去に

間つゝさの方角迷ふ臘月

共に居所近し音かしましとを云ふはかの瓢を捨て清貧の人也されは松賣とは却て心きたなし是上下不相應の句也
榎の僧正の如く伐捨てこそ

孫は撫すに牛を撫てけり以下畧

右俳諧七章に載せて打越句去折去等の大概を顯はしたるものゝ中抄

場の越を嫌ふ事

問曰場の越と云ひて打越に山と有に家と附れは嫌ふ事あり居所は三句去るへしと聞傳れとも山に家とは事替りて嫌ふへきに非らず、いかなる事にや
答曰其句體によるへし、されと附んとして句を作ればたとへは

山くは残り少に落葉して

淋しき上に又寒うなる

わら磯のすき間も見へす打曇り

と附侍れは淋しかる人か山を見たと附たるに、又さひしかる人か海をみたと附たれば前句の附たる所を又附んとするなり是をひきさくといひて嫌ふこれ山と磯と其場打越せはなり、場のことといふはすへて此類なり、附ぬ場はくるしからねと付るとする句なれば付ぬ場はいはぬ筈なり、活法の書に居所三句山類水邊等の三句去なるもその附の同じからぬ様にとての定にあらず、其時わたりを不構たゝ其名目はかりの去嫌ひと心得侍るはわた

き筈なり、然れども我句には體を附れとも、場の内には人情を交へ降物の内には竹木などを交へする故に、其交り物が打越へ障りて苦しむるなるへし、我附句に降物はかり人情はかりにて、道具表式等の交物無時は我次に附るものも變化の附くるしむ事はなき事なり

問曰人情はかりにて作をせよとは不自由なる事にあらすや
古人も交り物有て句もおもしろし交り物なしにせは面白からぬ句と成て樂みには成り侍らす、交り物なしに句にとにせよとはせまき教にあらすや

答曰其許は交り物なくて一句の上おもしろからすとおもは、いかほとも交物して遊はるへし、元と遊事なれば好む方に随ふべし、今いふ所は打越に苦しめ仕方はいふなり、尤支考か教へにも交り物なしに句作せよとは云はす、是は全く予か新製にて打越の附安からん爲めなり
東西夜話の八體の引句にも交りあり

東西夜話前句

けふも浮世の入相を聞く

其人

つく／＼と木枕の角廻し居て

木枕は道具なれば會釋の品の交りたるなり、夫れを予か案に

つく／＼と腫たる膝をかへ居て

とすれば交り物なき人事なり

其場

湯上りの簾に近き草の花

りの論には不及なり

又問曰山に越して此議の句はいかにもわろし夫れ誰も知りたる事なれとも、人情の句に少しく場の有をも場なりと嫌ふはいかに

答曰附句は變化を第一とす、されは人情たりとも

建付の透たる宿に肱まくら

とすれは淋しかる人の肱まくらしたるなり、しかれとも寒いと有句なれば其寒いことはりを附んとして、建付の透たると句作するなり、其場は山と家と替れとも寒いのはれを附たる場なれば、場といひて嫌ふなり、同じ肱枕と付るとも

女房を無理に泣せて肱まくら

と趣向を定めて五文字を女房とも傾城とも、其作は其席の機變によるへし、此外は一巻のうき沈みを見せていかはとも勵くへし

打越を苦しむ事

問曰東西夜話に俳諧に打越をくるしむるは附方の變化を知らざる故なり、昔の俳諧はさる事にやあらん、今の俳諧は打越かつて苦しからすといかなる事にや

答曰苦しからすとは苦しむことはなきと云ふことなり

亦問今我々かこときとて席に臨て人情其場等の打越ありて附句にくるしむは夜話の説と違はいかに

答曰三法にて案方を定め八體にて附侍れは苦しむるはな

き筈なり、然れとも我句には體を附れとも、場の内には人情を交へ降物の内には竹木などを交へする故に、其交り物が打越へ障りて苦しむるなるへし、我附句に降物はかり人情は人情はかりにて、道具表式等の交物無時は我次に附るものも變化の附くるしむ事はなき事なり

問曰人情はかりにて作をせよとは不自由なる事にあらすや古人も交り物有て句もおもしろし交り物なしにせは面白からぬ句と成て樂みには成り侍らす、交り物なしに句ことにせよとはせまき教にあらすや

答曰其許は交り物なくて一句の上おもしろからすとおもは、いかはとも交物して遊はるへし、元と遊事なれば好む方に随ふべし、今いふ所は打越に苦しまぬ仕方をいふなり、尤支考か教へにも交り物なしに句作せよとは云はす、是は全く予か新製にて打越の附安からん爲めなり東西夜話の八體の引句にも交りあり

東西夜話前句

けふも浮世の入相を聞く

其人

つくくくと木枕の角廻し居て

木枕は道具なれば會釋の品の交りたるなり、夫れを予か案に

つくくくと腫たる膝をかへ居て

とすれは交り物なき人事なり

其場

湯上りの簾に近き草の花

湯上りといへる人の上に似て交り物にて予案に

細葎のすたれに近き草の花

とすれは交り物なきなり

天相

飛鳥の影もかすかに雲ちかき

飛鳥は地に属すの形あれば會釋の品にして交り物なり
予か案に

赤き日の影も幽に雲ちかき

とすれは交り物なきなり

時節

門松の雪もしつかにとし暮て

門松は形ありて會釋の品雪は降物にして時節ともきつ
と定かたし交り物なり予案に

寒空もはや程近く年くれて

とすれは交り物なきなり

問曰しからは支考か附句は交り物有る故に惡しきにや

答曰あしきといふにはあらず、其子細は「けふも浮世の
晚鐘といふに其人はつく／＼と居てといふか附にて木枕
は句作なり、其子細は木枕とはかりは前句へ不付つく
／＼と居てとはかりは附なり、爰に付たる所の躰を見る
へし、餘は是に準すへし

問曰東西夜話に打越のくるしきとは人の附たる跡を又附ん
と云ふ人なりとあり、是は人のしたしく付き侍る跡なれ
は此度は餘り付ぬやうにする事にや
答曰さにあらずたとへは

けふも浮世の晚鐘を聞く

つく／＼と木枕の角廻し居て

此次は木枕を廻すといふ所に附へきなり、其木枕は旅籠
と見て

扱 此 所 高 い 宿 賃

高い安いは翌朝ならては知れず又木枕の出るは夜の事な
れば打越の晚鐘に障りはなけれども、何とやら晚鐘頃に
宿りたる事のあるましきにもあらねは、扱の一字に少し
觀したる聞えもあつて、越の觀したるに聊心障りわれは

枕うつふせに普請場の膳

とすれは朝飯の支度にも聞ゆべきにや、此外陣中とも傾
城町とも其木枕の有へき所はさま／＼成るへし、是を會
釋の案し方といひ旅籠屋普請場は附方に其場なり又前を
女と見る時は傾城町として

水 難 炊 を 金 の か け 盤

かくする時は是を奥方と轉して此次を付へし、如此には
いかほとも轉すへし、附と句のよからぬは予か未練なれ
はなり

問曰前句木枕といふ句作なく、只人のみにて一躰前句に附
侍らは轉し方むつかしくあらんか

答曰人の上にも前句の附たる所の躰と用とありたとへは

けふも浮世の晚鐘を聞く

つく／＼と腫たる膝を抱へ居て

つく／＼と居てといふか其人の附にて腫たる膝は句作なり

此木屋町は能き座敷なり

此療治の人と見たるなり下署

附句案やうの事

附句の案し方發句は格外の事なり附句は其座に望みて無情に案しぬか能きなり我か心沈みぬれば趣向もしつみ我草臥より人も草臥て一座終に成就せず附句は初念の趣向より心を落し付るかよき也此故に趣向を定る傳受あり惣して工夫は平生にある事なり其座に望ては只無分別なるへし定家卿も歌は深く案してはいたらぬものなりと仰られしなり附句第一調子のもなりあればとて速く出すへからすなきとても久しく案し入るへからす能くも悪くも一座の程を知りてこそ俳諧の世情に便りある修行成としるへけれ但し大事の附句は先云はなして後に思ひ返せは心の結れとけてかく別なり二十五ヶ條

附句趣向を定ること 其趣向と云は一字二字三字には過くへからす是を執中の法といふなり物其の中を取て前後を見る時は百千の數有ても前後近し人ははしめより案して終を尋る故に其中隔りて必ず暗し口傳源氏物語のことされば表八句の趣向は

初さくら、塗笠、暖簾、村雨、鶯、手習子、月、新酒

此の如く趣向を定置てあるひは作にも或は不作にも或はかたく或は和らかに黑白青黄の姿は作るに皆只句作の手つま也此法を知らされは人の俳諧に驚く事あり前二字三字の趣向より變化の姿も明らかに見ゆる故に最打越の好惡を速く知る故に此法を知らざる人は我句を作りて後に打越もよからす變化も面白からねと今までの骨折に心殘て其句を崩す事かたし二字三字の趣向をかゆる事は曾ておしむへき骨折にてもなし此法は第一に變化の爲なりと心得へし古への儒書佛經源氏伊勢連も其中よりはしまらすといふことなし天地豈に人の爲に生せずや其中には其初なる事を知るへし口傳天地は人の名につけたる事ありされば二字三字の趣向にも渡らす五體八體の附かたにもよらす世にいふ空機といへる案しかた有て其時其句にあらされは文字の道理に書答へかたしそれは百韻にも三所四所はあるへし然らされは言路の道理に落て俳諧に不傳の妙所なし此執中の二字をさして我家の傳といふへし人よく此條を工夫せば天下の政明らかに人間明くれの働をも知るへし全條

前句へ附方のこと 今日初て俳諧仕候者も付申候へは必ず前句へつけへからす随分はなれても付ものなり付やうは前句へ系程の縁を取て付けへし前句へならへて句聞へ候へはよしと申置候句の行樣段々申置候へとも紙筆に申上られす候云々杉風消息

附句見分け合點のこと 芭蕉曰近來の俳諧世人見様を知ら

す古きと見えし門人ともに見様申聞せ候

一篇見ては只軽く埒もなく不斷の言葉にて古きやうに

見え申へし

二篇見申しては前句へ付やう合點行ましく候

三篇見候は、句の姿かはりたる所見へ申すへし

四篇見申候は、こと葉古きやうにて句の新敷所見へ申

へし

五篇見候は、句は輕くても意味深き處見へ

六篇見候は、前句へ付やう格別はなれ只今までの付や

うは少しもなき處見へ

七篇見申候は、前句の惡き句にはわしく正直に致候と

ころ見え申へし

是にて大形合點致すへしと被申候杉風消息

執中の法

芭蕉二十五ヶ條のうちに附句に執中の法三義の寄合あり執中と

は中を取るといふ事也案方の肝要とす源氏物語などの大

部なるものも須磨の左遷より筆を立て前後は枝葉なりと

そ淨溜理の五段續きも先三段目のおもしろき所を作して

さて初段は寄せものなり附句も左の如く前句に對して附

へきものは一字二字三字には過す是を辨されば句に向て

趣向を求ること遅し爰に至て執中の法を用ゆへし其一字

二字に手爾葉を加へ延もしちゝめもして二句連綿する事

也附句は蓮の莖を切はなし中中に糸を引か如く情のかよひたるを上品とすつらねうたといふも此心にや

へし折枝のからき肉桂

扱は夢座敷なくなる草枕

附は夢の一字

糊強き袴に秋を打うらみ

鬢の白髪を今朝見付たり

附は老の一字

手紙を持て人の名を問

本膳が出ればをのゝかしこまり

附は振舞

此秋も門の板橋崩れけり

赦免にもれて獨見る月

附は左迂

鳴子おとろく片藪の窓

盗人につれそふ妹か身を泣て

附は盗人の妻 以上俳諧小鏡

執中の法に附合は先づ趣向を定むへしその趣向をいふは一

字二字三字には過くへからす是を執中の法と云ふなり物

其中を執て前後を見る時は百千の數ありても前後は近し

人は始より案して終を尋る故にその中へたゝりて必くら

しされば表は句の趣向の定ためやうはたとへば

初さくら 塗笠 暖簾 村雨 鶯 手習子 月 新酒

也附句は蓮の莖を切はなして中に糸を引か如く情のかよひたるを上品とすつらねうたといふも此心にや

へし折枝のからき肉桂

扱は夢座敷なくなる草枕

附は夢の一字

糊強き袴に秋を打うらみ

鬢の白髪を今朝見付たり

附は老の一字

手紙を持て人の名を問

本膳が出れはをのゝかしこまり

附は振舞

此秋も門の板橋崩れけり

赦免にもれて獨見る月

附は左迂

鳴子おとろく片藪の窓

盗人につれそふ妹か身を泣て

附は盗人の妻 以上俳諧小鏡

執中の法に附合は先づ趣向を定むへしその趣向をいふは一字二字三字には過くへからす是を執中の法と云ふなり物其中を執て前後を見る時は百千の數ありても前後は近し人は始より案して終を尋る故にその中へたゝりて必くらしされば表は句の趣向の定ためやうはたとへば

初さくら 塗笠 暖簾 村雨 鶯 手習子 月 新酒

斯の如く趣向を定置て或は作にも或は不作にも或は和かにも黑白青黄の姿を作るに皆た、句作の手つまなり此法を知らざれば人の俳諧におとろくも有り尤二字三字の趣向より變化の姿も明らかに見ゆる故に尤も打越しの好惡をばやく知るか故に此法を知らざる人は我句を作りて後に打越もよからず變作もおもしろからねと今迄の骨折に心のこりて其句を括ることかたし二字三字の趣向をかゆる事はかつてをしむべき骨折なり此法は第一變化の爲なりと知るへし此執中の二字をさして我家の傳と云

附合はその趣向を先とすへし趣向の字は前句の外の姿にて唯二三字を定むへし此定むる二三字の趣向に四五句の指合去りきらひの吟味してよく、工夫を決して二三字の前後を句作るには前句の内のうつり言便にして制するなり依之これを執中の法といふなり二十五條解

述句の事

述句は多く形なき寒暖四時より風雨雲霧の類晦朔の類にて其數少し依て述句の方時節は用る事多用なり

この頃は春めくほとに成にけり

とする時は全く述句なり、是其形なく輕ければなり、されはこそ十論變化の段は述句は風雨寒暖の類より時節のあしらひをいへは述句は輕く會釋は重しと見へたり、依て時節の用は述句に多用なり、たとへは司召とい

へは時節の述句なり、司召るゝとすれば人事に引けて述句の用はなさず、しかれとも司召るゝ頃に成とすれば、

又述句となる、多用は述句に用るにありと知るへし、かゝるか故に十論に述句の内に時節と云ひたるなり俳諧或問

十論に三法の附方あり第一を有心附第二を會釋第三を通句

といふ一卷はすへて此三に變化すへしされは俳諧の案方

といふはいつれの附句にむかふ時も先とて我句を案すへからす始に三句の打越を見た爲め其次に四五句のはこひを考へ其次に目立たるさし合を見あはせてそののち我句の趣向を案すへし中略

俳諧は本より心のあそびにしてましては離附の道理あるをやさるを浮世のよい事つくしに腰に萬貫の銀をまとひて鶴に乗て楊洲にあそはむといへるそれらの程をしらしき時に其人の衣類か喰物かそこらの道具表色にて程よふそこを除く事也さるは世間の諺に牢人あしらひといふ事もむつかしき時の機變もおよそ百韻は六七十句も此會釋にて過るものなれば其中の模様はさまゝに變して世法の時宜も此間に修すへし本より會釋といふ所にとちらへも變化の自由なれば是を俳諧の地と名つけて一卷の變化は此會釋によるへし述句は全卦別名にして風雨寒暖のたくひより時分時節のあしらひをいへは述句は輕く會釋は重し爰に別名の故を知るへし

然るに第一の有心附は其日其場の模様によつて或は寒いに物着るとも或はひたるいに物喰ふとも親疎は附所變のにしたかへは道理と理屈も其道おなしくよいとわるいも其場ひとしく物の至極は危き所にありて名人と初心との位地なるより上手はおそれ附ぬ時もおほしかへすゝもおそるへきは有心附のまされにして此附方には先手後手の論あり本より俳諧の案方も碁將碁の工夫にかはる事なしたとへは前句の模様にて

大名なれと碁はお下手なり

とあらんに相手は商人人と趣向をさためて「損した門に畏ると句をつくれは商人は先手にして畏るは後手なり誠ににお下手の風情を失はすおそれ入たる風姿をも見るへししかるに世間の附方は先手に畏る者を案してもしや句つくり商人とも思ひよらめと、明眼の師は先後の理屈をしりてこれは前句の噂也と難すおなし口より同じ事をいへとも先後に上手と下手ありて爰に俳諧の明暗をおそるへし下畧十論第九變化中抄

伸句の事

伸句といふは縮る句に對していふなり縮句は力を作して付心も立寄て付縮るなり伸句は逃て付ゆるめたる也「思ひ切たる死狂見よとまで付縮めて」「青天に有明月の朝朗」「湖水の秋の比良の初霜」と二句附伸したる風景なり

はれす是等の二句は其前六句とまで緩中急「序破急のこ」とに附責來れば死狂ひ見よにて事盡ておのれと拔へき場に至れり此見わけなくして又こゝを附責する時は無理になる故或は重み付て鬱陶敷なりと巻物奇麗ならす六句とも責來り拔へき場を逃さすぬきたる故此二句の伸句まことに快然として一入榮合よく麗しく見る也

深川の夜話に嵐雪の論に附合は大方料理の甘し辛しすく苦く物による如し能きも極て能きに非らず悪きとても亦悪しからすといへり此論よく當れり面白き句の縮たるも場によりてうるさくさまでもなく尋常の伸句のやうなるを取替て居へたる時却て卷面榮有て奇麗に風味よろしく成る事ある物なりされは能きも能からす悪きも悪からすと知るへし直旨傳

遣句の事

遣り句を伸句逃句と同様に覺たる輩多し誤なり伸句は所々にあれともやり句は數多なし是は殊外に附つみたるとき又は見渡し及席上しふりたる時は安々と句作りして其場の乗りをよく取り句を投やりにする也先師殊の外工夫ありし事也冬の日集のさも工なる巻の中に

藤の實つたふ雪はつちり

と云句あり其の後の集にも猶此はからひあり炭俵になく深川集にも亦あり附詰る場なし故にやり句なきなり

全體前々より運び力を盡す事弱く調子に緩中急なく常に平地を行く如くする卷にはやり句すへき場なし尖り来る所なき故なり

西瓜さる如く、梨子喰ふくちつきの如く鏝もとに切込如く大木を倒すか如くなとの教へを味ひ知りて其意氣自得すへし

附句をたゝ上手にするはかりにては得へからず其氣かけろふの如し

景色と風情との句と同事に思へるも誤なり

景氣は附責めたる跡の鬱氣をさます場の外はなし

風情は附責るうちにも句に人を出さずして人の上を聞かす句にて附ふたる二句の間に其人其住居など見ゆる也はつれたる去年の寢産のしたゝるゝ

寒徹す山雀籠の中かへり

是等の類也伸句ならば勿論景色とは大に相違せり是は風情の句といふ也景色とは

一筋も青き葉のなさすゝき原

薄雪の上に霰のころゝと

是なり其用る場も句作も大に異なりと知るへし捨句といふは遣り句とは又別なり是は儲の會などか千句にかさやうの時の心得也曠くましかれば各能き句せんと下心に思ふ故に席沈てしふり出し巻はしらす其慾を捨て捨句して席の氣を引立てるなり今少しと思ふ所も自己を捨てする也

客より席ふりの氣變なり

卷中の序半急の事に古より教るところなり其中に亦緩中急の詞有る事也此事は先師も普くは沙汰に及はす意に持つ大事なり初心の輩加様の事に頓着すれば句作縮まり却て修行のさはりとなる故也

句毎に風流と風情とを失ふへからず風流は心にあり風情は姿にあり風流なきは俗に落ち風情なきはしほりなく句やかならず句作利口有るはいやしく云詰めたるは附へき運ひなし

但此風情といふは初に云ふ風情の句と稱るものとは別なりこは何の句にもせよ一句々々の粧ひを云也是を失ふ時は句々木の切石屑を見るか如く人體の皮骨を去りて骸骨を顯はしたるか如く拙なく賤しくきたなし殊更に俳諧は俗談平話をもて述るものなれはいとふつゝかにして聞苦く吟聲も淺聞し此風流と風情とを含むか故に颯て拙からず吟して耻る所なし此境よくゝ心得へきなり以上直旨傳

遣句 當世付句につまりたる時ぎはゝと數を吹く風只目ふるまに雲はれて行なとゝいふ句を付るをやり句と覺えたる人多しさにはあらず前句はなはたむつかしき句又は付んとすれば打越の心あしく打越しを宜しくすれば付る事もならぬやうなる時只すこしはかりよせて流しやる事なり句のたくみになきをいふにはあらず不功の人はやり句は得せぬものとむかしより申あへりとなり俳諧名目抄

二句一意の事

二句一意の事とは

いつな昔

顔直し賑ふかたのめてたさに

たけをくらへてむすふ水引

深川歌仙

淋しさや湯守も寒くなるまゝに

殺生石の下走る水

二句一意は前句に云殘してあるものから越向を遠く句作を近く附へしなくては附かぬ也

ひとつ里

それ聞ひ毛衣人のうつへくも

孝心しりも富る秋の戸

是らの句も凡て一卷の模様と知るへし俳諧の聯句は一卷のやすらかなる様にすへし一句にて功を得んとするときは一卷みにくき物也欲をさりつとめて一卷を能くすへし俳諧寂業

二句一意とは何の爲にする事そと云ふにたとへは貴人などの句にて一句かへされぬ句に譯聞えず埒明ぬ句の遣たる時に其次の附句にて足らぬを補ひ埒明けてやるを二句一意とは云也

亦功者同士の中にはふと其意の有る事もあり「雉子か出て鳴けはあれをと思ひぬる」「是のわさびを見るにつけても是二句一意也是は上手同志の上には又有る事也もとめてすへき事にはあらず

總て表に鐘又は入相なとゝはせぬ事也音としても聲としても不用時鐘なとゝつかふは苦しからず表に昔といふ事は不用夢も嫌ふ也

戀の句の事につきて論あり忍ひ男の來てイみたるにその下女の障子の明けたてにつけて聲高に叱るは忍ふ思に折かわるいと心のひゝきを知らせたるて下女の心にはさしてもなき事を叱り給ふと思ふらめと其意は忍ふ男には通する也其叱るを實に落てしからるゝ事を搜したらんは全く前句の理を云なり此叱るはさして叱らすとすむ事をあらゝかに叱るはいとしき心のひゝきより出たるならんとその裏を案して見れば庭の籬に光源氏も居給ふならんとそこに虚實は明らか也戀の情は勿論此附心要用にて常の附句とても鉉のあんはいは工夫すべし

我門に法に戻るといふ事要用のこと也發句とても附句とても平生とても此意を忘るまじき事也たとへは三尺の溝を飛んとする時は一尺もととりて飛へはやすゝと飛也扉をたてんとするにもきしみて立かねる時は又引戻しては立引もとしてはたてする時は自然とたつ也行つまりて溝を飛んとし亦はさしむなりに扉を立んとすれはいかやうにしてもやすからぬ也戻るは進むの理にして戻るは戻るにあらず進むの用也と知るへし附合に戻るといふも附る爲めの用也とそりかたき教へ也十二夜話之七

附合の教へに 上手の鞠は蹴わけより落るまでか何とな

くゆつたりとして而かも鞠のはつみも速かに鞠の姿もしかとよく見ゆる也それ故に上手のは暫く空にあるやうに思はるゝ也附合も左の如く上手はゆつたりと句作るゆへ跡の働にも苦しまぬなり下手の鞠はせはしくて鞠の働もせはしければ跡も難足に成りて苦しむ也附合の味合は全く是らの按排にある事なりと申されぬ

總て附合は前句の二句をよくく吟しなせは前の句の附心もたしかにさはけ用と不用も明らかに見ためてひたと前句をよく見て心くはれは自然に趣向出るもの也初念の趣向にたゞよふへからすとの教へもあれと全く初念の大切にしていかがう様々の趣向出るとても初念の意は退きかたきものなれば初念か大切也とかく前句をよく工夫を仕盡してさて趣向を定る物なれば初念に龜忽の趣向工夫すまじき事也されは附に向ふて案するに面白きよき句を附んと思ふ事甚たあしゝ惡しき句を付ていつれにも先瑯を明て見ればそれを手かゝりにして句作るへしさてまた爰に習ひあり前のはこひ三句の渡りを先つ工夫する時に亦其工夫にしつむ時は心に重く出來て沈む故に趣向にも骨折ある趣向出ても句作りしつむもの也又それに心付て前のはこひ三句の用不用を先かくる心に置いていくらも句作りして一句作りては三句の按排一卷の運びに心を配り又句作りては心を配りいくらもする内には自然とあたりさわりなく種よき句作になりてとゞのふ也

附にくき所にも兎角趣向あるくといへは自然と座中も心からみて趣向に沈む事なしつゝしむべき事也總て附合に行つまりて爰は運ひむつかし三句の用不用も見わけかたしとて趣向のなき事は有まじき事也天地の間の世情に遊ぶものなれば趣向附合のなきといふ事あるへき道理なしさるは人と人との相對にもかはらす斯くいへは氣にあたるいはねは用か辨せぬといふ時にはけつかふ人々言語を工夫してあたらずさはらずによきほとにいひなして今日の用を便するなれば俳諧とても世情のあつかひなればこれに何そかはる事あらんや畢竟五七五七々の法にかゝはりて句となれば外の事をいふやふに思ふ故に趣向に行つまる事ありさはあるまじき事也

世上の交りにも按排をしらぬ人は附句にも趣向はなき筈也爰の事は大切なること也

廬師の口傳に附合に行當りたる時には附合をせんとと思ふ故にひたもの句作にまよふ故にとゞのひかたしやうの時は一方向を作る事をやめにして只世上の人の言語の長短或は山川草木の姿をひゝもの話しにするやうに世上に今日の言葉をもつてさま／＼にいふて見れば自然とよきはとの言葉に言あてゝ付句出來る也五七五七々に直に句作せんとと思ふゆへむつかしく無用の事もいはねは一句か聞へぬやうになりて案しまよふ物也とかく世上の平生の言葉にして見て附か附かぬかを工夫すれば自然とよき程

の言葉つかひ有て附句と、のふ也と座師口傳ありしよしありかたき事也

昔より今迄の俳諧に世上の事を漸くに二十はと人々句にいふていまた百の物なればいはぬ事か八十余もあらん天地に一片に遊ぶ事なればさはなき筈也畢竟は世上と句と別なる故なりと老師か申されしありかたき事也

附合にも世上の按排にも没滋味といふ事ありさるは味ひのなき事也味なき物は甘くも辛くも成やすし世上の事にとりて工夫すべし言葉もいひ出さぬ先はモツシミにしてふと味を附こそなふて言出せる事は其誤を言はときかたし爰に没滋味の内にあんはいをよく工夫して附合をせんには甘くも辛くもなしやすければ虚實も爰に自在ならんさはとて味のなき事は今日の世情にはつるゝ也此鹽梅は常に心の附合にて工夫の第一也

附合に兵法のならひ有り是は全く付合の常用也紙ひとへのへたてあれば百里も同じ事也ふん込て鏝元にて付る時に結句其理を得ること也とかく我物にして按排を工夫すへしとぞ

附合に折聞附といふ事あり此折聞といふは佛法の十界にして地獄我鬼畜生修羅人間天道聲聞緣覺菩薩この十界也其内に折聞は段々と修行して佛の道も悟りおほへたれともいまた人にほとこす事あたはす一身はよく悟りてすましたれとも人に方便をなして救ふ事あたはすよつて佛界

にいたりかたしされとも此折聞迄にも修行の至る事かたき物なればあしきといふにはあらず

注文のとをりに看そるひかね

吸かけさせる女房へやる

此句にて考ふへし是よく附得たる句也されとも女房へやるといひつめてしまふたれば一句に尾ひれなし一句は至極は得たれとも跡へほとこす事なりかたし是折聞の附也勿論わたらしきといふ事にはあらずと也附合にうす鬢厚鬢糸鬢などいふ事は嫌ふ事なりそれよりけつく下さまの治はつかへとも右の類はつかふましき事ならひ也とぞ附合に屈したる時の教に曰合ぬ敵と見て一太刀打てかけ通るといふ事あり聊あしらふて飛のいて附ること也是また入用の事也とそ十二夜話五

附句は往古より三變也昔は附ものを専とす中古より心附を好み元祿此かたは「句ひ」「響」「挽」といふ所をよしとすれと一卷の模様により附もの心附も亦あるへし獨歩行

附合の事

巻頭の句は景曲にして姿あるかよき也有心かちにふかきは脇も六ヶ敷ければ表ふり安らかならず是は尋常の俳諧をいふなり事によりて發る句此論の外也いかやうの句出來んも知るへからず出來に任せて是に應すへし猿蓑集已後常の席には景曲なる句巻頭に置れたり冬の日なとは有心

の發句より起りたれば全體重みを離れず猶諸集を見て其旨を知るへし

發句出來たらは體の句か用の句か又有心無心の大中小のはたはり時節等まで是をわきまへて發句けしきならはけしきの脇人倫人事ならは脇もまた是に隨ふ或は大に或は中に小に姿情意味其發句の機嫌にかなふをよしとす

古説に附句は一卷の糸の通りたる如くせよといふ教あり芭蕉素より是を捨給はす左れと古の俳諧は連歌と等しく詞の上の論也

芭蕉は詞の俳諧をとらす心の俳諧なれば附合も是に隨かひ連歌及び古の俳諧は詞の上にのみなれば前句の詞にすかりて作る也芭蕉の俳諧は前句の心に問ふて心に答ふるの附也故に古俳諧は連の糸詞の上を貫通し芭蕉の俳諧は心裏を貫き通す也是をなすの術は「響き」句ひ「技折」此三つに連の糸を導き通す也されは一句も此三つの内に外れし句有ればそにて糸か切るにより貫通せずして連句一卷の疵となる也但ことはりなれば一句も附かざる句とてはあるへからされともはしめより終りまでたへたくと附るのにはあらず先第三を過て後は始末地の付といふを下敷にしてそか中に其折其場有りて一句に一句の附或は附へき場或は附せむへき場と云あり是を一卷一折の模様とは云也此又模様は順逆表裏の口傳あり其場其折の變に應じて起り來るもの也芭蕉精撰の卷々を深く味ひ見な

は大やうは考しること有へし一卷の首尾と云事ありて是又その首尾にかゝはるの一也唐にては詩をうたひ樂に合せ本朝にて和歌を諷して樂をたすく故に和歌は則うたひもの也俳諧も其和歌の一體なれば同じくうたひものなり此諷物といふ事を常に忘るへからす忘るゝ時は賤しくも拙くもなるなり師説錄

附合は先四五の運び四折の模様、打越しの氣味を見合せさて前句を見て考ふへし芭蕉云附合は耳に聞くへからす目に見るへしとかや是則ち初念の前句の姿を見るところにあらす前句の姿と云ものわれは夫を聞て見ると心得へし只吟聲の拍子に乗る可らず是を姿を見る案しると云を偕附合の工夫は七名八昧あり然れとも一ツゝ其句に當て考は附所延引すへし是は日頃より熟讀して居る大切を先大様有心會釋逸句此三つにて添行へしそて段々前句の六ヶ敷三句の渡り有て其所七名八昧にて働くへしたとへは不斷は浮沈運數にて濟事と同然なり病氣六ヶ敷時は惣身の脈を窺ひ藥をもる事なれば此心得引合て考ふへし先前句を得て案方に取付時は打越前句の姿を考へさて前句の意を吞込むへし其上我句の姿句作りの結ひ吟味をすへし、句作といふは趣向の後にて前句のつなき所是句作に有ることなり、趣向は前句の尊をはなれて前句に外の姿を見るへし、句作は前句の由を尋て前句のうちの情を

嫌ふるへしとの教を專一に思ふべきなり大方趣向はかり
にて付合句作の前句の情なり結ふ所はなきものそ夫故前
句の情にも付ぬ句も出来るなり自句の結び一句のうちか
らは前句々々を能く心に浮ふれば幾くとも面白き趣向は
出来るものなり必ず前句を餘所になし我句はかりの飾り
を思可らず只一座一連首尾能き所惣體の心得なり案方七
名八體の事左に證句を顯すなり

案方七名

有心 一字一言に心を配りて前句の姿を失はず句に其姿
をととのふと云

大名なれと基は御下手なり

商人は損した門にかしてまり

人情 三句へ渡りたるときは三句目は前の人を出して前
句の人に對するをいふ人情運ひのあしき時の用な
り

あら鷹は唯の拳にいさませて

大名なれと薄着好なり

麥飯にわざと侘たる老の錆サビ

起情

風景三句引張たる時三句目に人情をあしらひて前
句の情を付出すなり風景勝なる時の用なり

一むら雨の通る日の影

五六本田中の杉のあつちこち

我は狐にはかされたやら

會釋アヒラヒ

打越のむつかしき時は衣類飯食道具衣食にて附て
轉するを云なり

迹句

打越の轉しやう前人悲勝なる時は風雨寒暖時分時
節などにて付るをいふなり

右二名一體にして會釋は重く迹句は輕し是を附合の地と

いふなり

拍子 一卷のかたみを言語の拍子にかけてちらし用るな
り

焼餅のニッ巴に三ッ巴

赤ッ銅ツブ鐙のなんだ辨慶

色立

乗リ掛ツケの挑灯しめす朝の風

汐さしかゝる星川の橋

附合八體

けふも浮世の入相をさくしといふ句に

つくくくと木枕の角廻し居て

其場 湯上りの簾に遠き芥子の花

天相 飛鳥の影もかすかに雲近き

時節 門松に雪も静に年くれて

俤軍書 柿かまめな便りのうれしくて

物語 入道も娘に後世をとりはつし

時分 朝夕の時分なり、湯上りの句の類なり

觀相 風景人物の觀なり、飛鳥五月雨の類なり

以上俳諧獨稽古

附合八體の事

前句

使のものを待せ置てや

其一

奥様へ矢の隙をねかひ出

其場

板の間も鏡の如く奇麗すぎ

時分

暮るとも月夜は安き渡し舟

時節

御流れの例に涼しきわやめ酒

天象

一通り山から晴るゝにはか雨

観相

記念とはおもひかけなきうき別れ

俳

宗盛の機嫌を熊野もはかりかね

時宜

とは其座、其時の時宜也證句引かたし

此八躰はことゝ註にも及はす句面にて分明也但し其影の事は七名にも名いひ叶かたきもの也實に無分別の場所の分別と心得よくゝ古事のおもかけを取合すべきにこそ

附合八體の七名

有心

参りにも船下向にも船にして

となりの婆々もこちへ出来合

是を有心付といへる心は前句にいつれとも其體なき付にて姿をあらはしつらなる所の句體なり下七文字て有心のこゝろをふくめり

拍子

上戸衆の寄れば更るも知らぬやら

さらりゝと手を打にけり

是を拍子付といふ心は前句に噂する所を付にて其姿を

わはせ噂と姿と立ならひ自然に自他を分る也手をうつこときの品を拍子といふにあらす

色立

赤坂の名も折からに紅葉して

知行寺やらいかい白壁

是を色立といふは紅葉に白壁と色を取合せたる也しかし此附合のすかたはけやけきゆへしゐてする事にあらす百韻に一兩所と心得へし

起情

雲雀も上る程の日なれば

春風に酔はせはせしと船にのせ

是は起情也此前句には情あらはれず付句にて情を述るなり常船に酔人なからも此長閑き空とさし所を極め其姿をあらはして二句一意の句作とするなり是は一折に一所はくるしからす

向附

つかひのものを待せ置てや

異見いふ時は言葉も改めて

是を向附といふは使にさし向ひて前句より趣向を求出さす肌合むつましく連する體也自他は本體各ありといへとも五句三句のわたり親しき時はかくの如くする事もあり引句の外にくはしくは、大名といふ句に老僧の付合するをも向附といふへきは其巻編む時の事也

應答

一代の料はないかや秋の暮

はろりと落る蓮の實の音

是は應答といひ又會釋ともいふなり應答は自問自答の

心にして會釋は前句を釋する心也二句一人の述る所に
て詞は自他あり是も打越のむつかしくわたり來るとき
の機變としるへし

遁句 幾年も筈のはけたる宮造り

口にかさりをいふは宿引

此付合の體遁句なり是は會釋の別名のことくに誤る人
あり遁句は一所に別人有て前句にもたれす先づは遁句
作りの趣向風雲寒暖の類より時節神祇の姿にて輕くつ
けはなし次へわたす故に尤手柄ある句なり會釋遁句は
わかちかたきよし先哲も風話あり初心の人これを作る
事なかれ其引句

加茂の社はよきやしるなり

附合八體の七名

有心 顔に懷梓聞ゐる

黒髪をたはぬる程に切殘し

有心附とは多くは前句人倫のさまにして士農工商まち
／＼に貧福の情あり老若の姿あり貴賤の品は其人に隨
て衣裳の模様も身帶の格構も前句の言外を見盡し聞盡
して聊もおのか按排を附せずそこに其人を見るやうに
して一字の手爾葉をも殘さるそれを有心附と云ふ

柏子 芥子尼の小坊交りに打群て

折るゝ蓮の實たてる蓮の實

拍子は宗因風に今の姿をとゝなへたる事也

色立

引渡す虹赤／＼とはるゝ雨

峰に峙たつ坊の白壁

色立は頼政か紅葉に白川の類なり

起情 朝顔の花の手際に咲初て

腹の鳴來る水のかはりめ

起情の名稱は有心に属するか如くなれとも無情有有情
に轉起するか如き附方もあり

迎附 狩人歸る岨の松明

落武者の翌日の道間ふ草枕

迎附とは前の句の人に人を對して迎合に付ることなり
又句實目立すして前句の夫に是を對してあしらふか如
く付ることもあり

會釋

里下をしては伯母御の泪くみ

塗た箱より物の出し入

會釋は打越のむつかしき時に其人の衣類か食物かそこ
らの道具等にて程よく附る也凡そ百韻は六七十句歌仙
は二十余句此會釋にて過る物なれば其模様はさま／＼
に變して時宜も此間に属するもの也一卷の變化は此會
釋によるへし

遁句

此度の藥はきゝし秋の露

杉の木末に月かたくなり

遁句は會釋と同體別名にして風雲寒暖の類ひより時分
時節のあしらいをいふ遁句は輕く會釋は重し爰に別名
の故を知るへし以上猿蓑註解付記

附方八體の事

其人 其場 時分 時節 天相 觀相 時宜 面影

其人 また雛をいたはる年の美しく

かゝえし琴の膝や重たき

其人は前句の貴賤老少より衣食貧富の品を見わけてす
へて有心の附方と知るへし

其場 大かたは持たる金につかはるゝ

庵より見ゆる町の白壁

其場は前句の都鄙山海より家内と家外の運びを見わけ
て多くは會釋の附方と知るへし

時分 機嫌能かひこは庭に起かゝり

小晝の頃の空しつかなり

時分には晝夜朝暮の事をいふ也

時節 くれ竹に置直したる涼み臺

蓮の卷葉も解かゝる頃

時節とは春夏秋冬より式日祭祀等をいふ此時節と前の
時分との二體は多用にして或は有心の附方もあるへく
或は會釋の附方もあるへし

天相 長持に小揚の仲間そはくくと

くはらりと空のはるゝ春寒

天相とは日月星より風雨寒暖は更にして陰晴の輕き詞
をもて多くは遁句の用と知るへし

觀相 此あたりすへて桔梗か原とかや

臉まぶたふさきて陀羅尼一卷觀相とは月といひ花といひ或は世上の哀樂を觀するを
いふ觀相の句は一座を鎮むる附方なれば多くすへから
す面影 臉まぶたに星のこほれかゝれる

引立て無理に舞するたをやかさ

面影とは源氏狹衣より或は軍書物語の品くゝ或は能と
いひ狂言といひ古代のさまに似よりしを當句に寫すを
いふ

時宜 此一法は一座一興の扱ひなれば證句を出さす

時宜の一體は其世に其時の風俗も其座に其日の挨拶も
俳諧は平話の優游なれば一坐一興の附合もあるべし

以上幻住庵俳諧集

附合八體の轉句

一字流行 かけ合の爲に日和を定めかね

半分焼てやすむ田樂

いこのころは羽織の裾にされかゝり

意轉ノ附 やふの異名を捨る一貼

切賣の捧はいろく吹そらし

名こそその瀧といふはとこやら

二曲の附 何となく聲のとうりし歌かるた

無事てそたつか祖父もめてたい

小町か秋はよこれてんけり

植込の中に瓦を取ちらし

拍子木聞てたはこはしめる

尻に手を組む 天下百姓

右轉句三段の付は前句の姿を見定め他の思ひよらざる所を付行く事第一なり彼宗鑑か姿を見よやかきつはたと云脇にのまんとすれと夏の澤水といへることきは口先の俳諧とて當元祿の新式にははなはたいむ事也七名は八體のつかひ方にして轉句は八體の轉句なれば自然にそらため句作あるとも下心には體廓にあたる所をわきまへ句作すへき事也第三聲枯す山郭公飛くれて是は難なし今時の付合多くは此第三の風情を以て轉句といふ也小町と天下百姓も地曲風曲の俳諧には常並の附合にて地の俳諧には轉句と意得へきものなり有や無やの關

附合十弊の事

京極黃門は和歌三十體を撰む、宗養法師は連歌三十體を出す、季吟法印は俳諧三十體を出す、十體は初心の知り安からん爲に出せり

幽玄體 是は珍らしき一ふしをいひかけて作意を働かする中に無量の味ひこもるをいふ

春なれや旅なれやと社山越し

霞をくゝる乗掛けの馬

發句 淋しさや問んとすれば嵯峨の月

長高體 是はすら／＼と何の曲節もなくいひ出して大様

にのひらかなる也

軒端の風かつけし春かせ

伸上り覗く垣越花有て

發句 山の景や一兒さくらにほの海

正風體 是は詞正しく心すなほ也いは、成徳の君子にあふか如し

さて／＼景の能所かな

沖繪おもはすかつをかきへらし

發句 時鳥今一聲なけほとゝさす

有心體 是は心ふかく一手かゝりある句なり先は戀に能き體也と云り

はとくは嬉し髪よ心よ

合點した顔て手に取る封し文

發句 孕句をいつ悦んはとゝさす

物哀れ體 真情を專にする也

おくれの髪をかき撫てやる

我死なは後のかゝさまいとしけれ

發句 万事は皆彼岸さくらの一さかり

花麗體 是は一ふしいひかなへて珍らしき景色を添たる也赤玉を白羅に包たるか如しといへり

ぬれにそぬれし湯女か戀瘦

世にはまたかゝる若衆も有馬山

發句 雁金は秋風樂の柱かな

見過體 是は本心を見たるまゝに作出すなり

浦の筈屋に氣ふり立なり

見渡せば花も紅葉も桃室

發句

村雨の露もまた干ぬまきざつは

撫民體 是は民をおはれみ世をいたはる心姿なり

夜寒しらする雁金の聲

發句

霜まよふ時や麥田のしつけ時

賤か家の寒さしらする砧かな

強力體 是は鬼神大勇者をも只一とつかみと思ふ體なり

見上げて見れはおそろしき顔

まぢく夕陽を耽らむ鬼瓦

發句

摺小木も紅葉しにけり南蠻椒

興体 是は何の事もなきことを一ふし有る様にいひ立たるなり

浪波を燒き夕陽日を燒く

不二晴れ南に一筋雲見えて

發句

やくわんやも心して聞時鳥

附合十五躰の事附方十五法のこと

理附 違附 離附 其人 其場 時分 時候 景色 向

附 迎附 心附 響 寂 撓 句

理附附合四道の逆

甲斐の根かたは雪の橋木

鐵炮の玉ほりに行夏こゝろ

傳曰甲斐の根かたは寒國なれば夏木立の頃も布子な

とうち着ゐたらんと理を以て附たる也

違附全上

須磨も明石も軍最中

松風にひとり念佛の聲澄て

傳曰前句は源平兩家の戰なるを隱者の山居なとして

亂世をさけたるさま是違附也

離附四道の放

旅はうきものとは兼て知ながら

はら／＼はらと雨の來るなり

傳曰前句は旅中のものうき様なるを只雨にて其姿を

あしらひはなるゝ也一卷のむつかしき所にて用るの

附かた也天相とも云

其人四道の隨

鶏頭見てはまた刺かく

奉公の苦しき顔に墨ぬりて

傳曰前句は鶏頭などの日受到さし向ひてゐぬふりた

る人なれば未だ小者などの夜手習に寝たらぬさまと

其人を定むる付方也

其場

繩手を下りて青麥の出來

との家も東のかたに窓を明け

傳曰前句は麥の出來宜きさまなれば其村は皆東窓に

萬日請よき所と其場を定る也

八九間空に雨降る柳かな

春の鳥の囀はる聲

是其場の字眼を定めたる也

時分 四道の放くるくくと五郎に繩をかけまくも

夜はしらくくと明六の鐘

傳曰前句は曾我兄弟が夜討のさまなるを五郎に繩をかけたる頃は夜もしらくくと明はなるへしと時分を定る也是も六ヶ敷附句のつゝきたる時走る附かたと知るへし

梅か香にのつと日の出る山路哉

ところくくに雉子の啼たつ

是發句に場も時分も出たる故にたゝ時節をわはせたる脇也

荇株や水田のうへの秋の雲

暮かゝる日に代かゆる雁

是發句に場の出たる故に時分を字眼に定めたる也

時候四道の逆

息災に祖父の白髪のめてたさよ

堪忍ならぬ七夕の照

傳曰前句に老の息災を只云たてたるさまなるを殘暑に人のなやめる頃を付て前句を繋く是時候也

景色四道の放

又も大事の鮮をとり出す

堤より田の青やきてゐるよな

傳曰前句は大事の鮮なと取出して客もてなす體なれは堤より田の青やきて酒のむけしきにて前句を繋く也

向附四道の轉

きのふの文をまた明て見る

城中に相圖の狼煙とつとあけ

傳曰前句は戀などの文なるを爰には城中の相圖の文など見出して前句の人より差向ひたる方を付る是深祕の附方也

つかひのものを待せ置てや

異見いふ時は言葉もあらためて

是を向附といふは使に指向て前句より趣向を求出す肌合睦敷する體なり自他は各ありと離も五句三句の渡り親しき時はかくの如くする事もあり引句の外に悉くいはゝ大名といふ句に老僧の附合するをも向附といふつきは其まで編む時の事なり幻住庵

迎附四道の隨

江戸の左右むかひの亭主登られて

こちにもいれと石臼をかす

傳曰前句は日比睦しきさまなれば借りに来る人の其家の女房などのさしむかひたる附かた也向附とは遠

近の違ひと知るへし

心附全上

妹をよいところからもらはるゝ

僧都の許へ先文をやる

傳曰前句は婚姻の取組あるさまなれば伯父などの許へ知らせやりたるへしと心にて附る也

時鳥またぬ心の折もあり

雨の若葉にたてる風の口

是心の附也またぬ心の折も有とは常に待と云句也故に雨の戸口に立ると對せし也句意に任せて知可寂棄

響四道の轉

麥畑の替地にわたる傍示杭

賣人も知らぬ頼政の筆

傳曰前句は麥畑の寺地か屋敷かの替地に渡るさまなれば田家などに持傳ふ古筆を頼政の筆とも知らず拂ふたる情と知るへし

寂寂付
一本四道の隨

町内の秋もふけ行明星敷

何を見るにも露はかりなり

傳曰前句の明星敷を見れば露はかり也と只寂にて附る是らも華やかなる句の續たるをしつむる附方と知へし

撓たはみ四道の轉

星さへみえす二十八日

ひたるきはことに軍の大事也

傳曰前句は只暗夜の姿を附句より夜討と定め一句を撓む尤名人の場也初心の及ましき事也

句

にはひは一卷の句ひにして百句は百句に渡るもの也是に依て句なし深く味ひ知るへし

句ひの花といふことは千句と夢想にいふ事にて常の會に申さゝること未練の次第にて候意趣は千句満坐に香を炷き候故句ひの花と申候夢想同意なり
以上雪中庵葛藤の巻俳諧寂棄幼仕庵集

俳諧集

附合十六様の事

假摺付

孤附 送り附 違ひ附 當り附 蒙り附 懸り附

親附

疎附 景氣附 名所附 間附 間附 心附 井附

括り附

假摺附といふは前句の少の縁を取て詞をかさり面白く附ること也

笠かたむけて出る道野へ

雲雀たつ方にかすみの森見へし

此心笠かたむけて出るは道を尋る體の心なれば附句に雲雀の立かたに霞て少し森見へしは我尋ねる所の道筋にてはなきにと疑たる心なるへし

孤付と云は前句の據ある趣向を一つ儲て置て夫にまた

附るをいふなり

立ならひけり里の門まつ

追犬の聲ひきうなる辻風

是は里の子供か春の始なれば群居て駒とりなとして遊
ふと假に趣向を儲置て夫に辻風ひなと謠ふ浪人なとか
來てそこら立まはるを彼の子供か犬抔けしかくる跡を
付たるなり

送付といふは前々の句より移り來る所を送る也然れとも

段々に同じ心にて附れば三句目に引きはる也然は心を二
つにすれば物をかへ物を一つにすれば心をかゆる者なり

花飛てこゝろうき立波の音

足を空にてしやくる飛風

野送りは泪かと手に取る松明

右は物をかへたるなり

宮もわらやも同じ夜咄し

春とへは嵯峨や吉野や女市

屏風障子もはなの繪坐敷口傳

是は心を付け送りたるなりまた

さねこんといひて別れし昨日今日

時に取てはあわぬ辻うら

祭待つ里のうなひは雨に泣

是は詞共に附かへたる也能々可心得

違ひ附といふは段々句の運びあしく成來りたる時附違る

也去なから是に取ても三様有るへし心を違へ物を違へ、
詞を違る也

一重頭巾も夏は苦になる

繼立て寒氣をふさく破れ障子

是は物を違へたるなり

夫婦の者は背戸へ隠居所

先住は奉加に残る金ためて

是は心をちかへたる也

しつほりとしたる雨夜の御茶の會

仕方咄しに書く繪そらこと

是は詞を違へたるなり此外にもいかほとも

有へく心を付て考ふへきことか何事も以心

傳心なりよくく心付き可きなり

當り附といふは前句の專一たる詞當にする也是に心得品
々有へし作意のへる所也能々可心得者也

網引あとに残る小いわし

浦の子か目籠拾ふ海松のみか

是は見るのみか小鯛をも拾ふ當りたるもの

也

蒙り附といふは前句の下言葉の當りて附句の頭にかふ
しする也手に葉と云に似たる物にて少し違ふ也夫は詞を
つゝく是は一物ある物を用るなり證句にて知るへし

泪なからも出る道野邊

石地藏立かた闇き木かくれに

是は道野邊の石地藏とかふせたる也

懸り附といふは前句の頭へ附句の終りをかふせ付る也
せ手にはといふに同じ心にて少し相違あり心得は前々
かふり附と同じもの也

乗る人も曲馬はかり心せよ

瀬にしたかひて引のはる船

是船乗る人もとかけたるなり

親附といふは前句に同じ詞にてしたしく附來る也され
脇などのことくしたつる也あまり好たる事にはなけれ
も前句よりの移りに寄るさまく附來るなり

郡て世渡る新田の市

舟宿の名代に坐敷威を持て

關のわら屋に歸る乞食

小町とて老母名を賣る昔今

是は慶長元和の頃都に今小町とて歌讀
ゝ食姥有る故事也

疎附といふは前句になき事をいひ出て趣きはかり取
詞ともに用さるなり是には面白き句共ある也

月今霄瀬々の細代に照添て

雪ふらぬ夜は冬も朧夜

四季折々は夢ようつゝよ

昨日けふ燕か歸る雁か來る

此外いか程も有へきなり

景氣附といふは前句により處なく唯時の風景など四時の
移り替る飛花落葉の折々只眼の及ふ所を附け過る也

關つらなよ霞の名のみ残りて

行並つらなへ半は雲を渡る雁

是は見たる躰の如し

名所附といふは所の名などにかつて取寄せのなき所など
を取合附るなり

富士にて武藏野、嵯峨に鎌倉などを付るを變對と云其
名所の近所を附るを常對といふ變對に二様あり古歌
對、故事對なり私に曰武藏野に富士を附るは名所の國
を隔てたりといへとも古歌に讀たる也又名所に讀たる
ものあり或は富士に時鳥花雪煙又武藏野に草隠れ茂み
月杯様のこと也是はみなく名歌等の名所集に讀來れ
りむかしより名高き名所には古人の歌か名句かなと無
き事は何の書に有とも付來らざる事也近代の名所の
名物等を用附る事は沙汰の外なれば此類にはあらざる
也さりながら能く心を付て申へく事なりよしまた作意
にてくらへ付たる事もあり所謂嵯峨に鎌倉を付る事は
何れも隱者の名所なれば似たるを見立て付たる也是ま
た一體也心得へき事也古事も右同じ事也何れの證句引
に及さる事也

問付といふは前句の心を問ひ伺ふやうに付る也

人にしらるゝ身ともならはや

いかにして我一藝を極むへき

是は人に知らるゝ身になりたやと願ふ心は
何とそ一藝を極めてこそと前句の心に問答
したる成るへし

聞付といふは前句の心如何と能々聞定て付へき事也せま
り付ともの事

形見に切れとせまき袖下

すねからも取か紙子の火打石

是は前句のせまき袖とあるからはふくさには
成るまし大方は紙衣の火打の外にはなら
しと治定して附たる也去とも直に紙衣の火
打とすれば袖にあたりてしたしき故に句を
かくの如くかさりたるものなり

心附といふは前句の心を能々取立て句面にかゝはらす付
逆けて能心に相應したる様に見ゆるさまに付る也是には
上手の入る所也様體にて色々あるへし

烏啼まで留られにけり

打殘す圍碁の一手の切盡し

半分月を隠す松はら

八景を皆はかゝれぬ扇子の繪

此外さまゝあるへし専ら當流の意味を用
へき也

并附といふは其物をならへ付る也とかや親付といふに似
たる姿もあるへし但廣狹のたかひ有旨也私に曰是は廣し
彼は狭きのみなり是も物を并へ景をならへ事を并へ其外
色々品あるへし

括り付と云は前句に數多き事を皆く一所にくゝり集て
附るなりたとへは

松梅さくら同し鉢の木

歌一首けふの坐敷に出來兼し

是は三種の三つを歌にてくゝり付たる也皆
々如此也芭蕉曰此外肌へあるへきとも見へ
す候古風に立入りの諷取りの四つ手組の堀
付の拾ひ付のとて有しかと是は皆々嫌ひ來
りしなり此外に古事仕様は何の古事も體に
聞ゆる様に仕へき也紛らはしくてあれこれ
へ通ふやうなるをは嫌ひ來りしもの也専ら
當流の附味を守るへしとしかいふのみ芭蕉集

附合體用の事

躰用の事貞徳去嫌の歌に水邊や又山類の體用連歌の如く然
るへき也とあり又御傘には左の字の所に躰用は俳諧には
水邊山類共に以て體用の沙汰有へからすと有て一事も是
に同心せられたると見えて兩上りに體用の沙汰有へから
すとあり其外立圃ははなひ集に體用を分ち出し元隣空頼
維舟良徳色々抄物多くわりといへとも或は躰用を分ち或

は駄用なしと沙汰せられたり貞徳の詞にさへ二色にいい置かれしかはまして後人のまよふべき處也此事の分ちいはましく思ふ事もあれと畢竟當俳に其沙汰なきうへは不申及と云々

體用の事古今抄に中古は連俳の發句も附句も趣向と句作との差別なければ教ゆる人も其埒あきらかならず學ぶ者も其詞にまよふ此故に我門には趣向を定るに執中の法ありて趣向を先にして其駄を定め打越より二三句の變をかわせ句作を後にして其用を窺ひ前句の姿情をとゝなへむとす是より發句と附句とにさしむかふ初念の掟也以上寄垣集駄用の事雪中庵雪の技折に曰たとは、川は體橋は用船も用也附句に至此心得思ふへし用に體、駄に用とは續くへし體用體とは惡し、推て知るへし

駄用の事古今抄に雜物體用の扱とは家に垣とも川に橋とも此類は二句にゆるすへし云々

駄用 山類水邊居所に各駄と用とあり駄はしかと山類水邊居所の動かぬ物なり用は駄の上にて少動くものなり又其上にはたらくものを駄用の外といふなり駄用三句續く時互に打越しを嫌ふ駄の外なる物は打越しに苦しからず委連歌の抄物に見えたり俳諧には此差別鼻祖の沙汰なし給はぬはありてなし猶師説あり
駄付用付 是は又右の駄用とはかはりて何にてもあれ前句の駄なる物を付るをよしとす前句の用なる物

を付るは用付として嫌ふ事なり俳諧名目抄

附合虚實の事

俳諧は虚の實實の虚也といへり風雅の虚とは無念無想の空虚也其中より一物を生ず則ち實也其の生物の形を顯して發句と成る句と成て又虚也又實也

源氏物語にて譬へは此物語は面影を書て皆作り事也五條あたり夕顔の宿今鍛冶町松原上る處升屋與三兵衛と云もの、屋敷に夕顔墓あり水を水向て願をかくれば病も退くと云ふ物語も夕顔も墓も虚也驗あるは實也虚の實は加様なるに有之

人をあさむく嘘とはかはり無念無想の中より自然と顯れ出るもの風雅の虚にて只曲を好み作を隠くして落し穴に入る様なる作者こそ嘘つきとは云へし

俳諧の虚といふはうそには虚實化合して二つはなく言語にのへかたき處なり

虚實の事 俳諧は餘の歌と替りて談笑の姿を顯はし裏に清閑の心を含める句法なり玄旨法印云俳句は上段の虚をいふ如く綴ると也貞徳の説も同は是金言として虚は虚也虚を實に綴るを是とし實を虚に作るを非とす是れ宗因の説なり實を實にいひ虚を虚に顯はすは俳諧の道にあらずと也師説錄

附合虚實の事

袴ゆふなる御所の童形

射もころし切もとゝめよ襲ひもの

誰も疝氣は背中から腰

前句は御所に物の化と實の附方也三句目病氣と見直して憎めるさま虚にして一轉棄也是等に限るへからず虚を實にてしつめ實は虚にはとく所百員百篇に忘るへからず虚實は俳諧の兩翼にして是を辨へざる作者は一卷のつまり終に理外の妙處をしらす雪の栗

句作の仕立やふに虚實のあんはいをさとし申さるゝとて

女房叱つて酒買にやる

是は實にして實にあらざるは今日の自然ならざる故なりさはとて是も平生に有事ながら俳諧の平生にあらずしかも今日のおかしみなく實に落たる也是則實にして虚也人情の常にも自然の平話ならざる也

女房たらしして酒買にやる

かくすれば今日の平生にも人和ありてしかもおかしみあり是虚にして實也例におかしく例にさひしきも平生に虚實のあつかいも是らのわざにて修行すへきことなり又

賣物のあたりさはりも物馴て

お主の恩の親も中々

是は實に落たるやうに聞ゆる句なれとも是は二句の間に其子の主の恩にて人となりよき手代ふりになつたるさまを親の見て此恩の厚さは中々親も及ばぬとてここに二句を

さはきて物すきに二句の姿を見せたり一句の趣向は實に重けれとも句作りにて虚をさはきて軽く成たる也趣向と句作りとのあんはいも工夫すへき事也十二夜話

附合自他の事

聯句は自他の分ち肝要也將た三句の轉しを思ふへし左にかゝくる如く此外に附方なしといふは自他の分ちにして人情にて附かたなしといふ事也人情打つゝきたるときは其場、其場のあしらひ時節、時分、天相此五つをいつれなりとも附へし

人情なき句三句つゝくはあしゝ、人情の句を人情なき句にてはさむはあしといふも三句の轉せざるゆへなり、人情ある句二句つゝきたらんには、のはし句いくたひ出しても苦しからず、すへていふときは、のはし句なからのはし句と唱ふるはあしゝ其場くゝのあしらひ時節、時分、天相と唱ふへし 俳諧寂棄

いかに能く附たりとも同體の句三句續ては以外わろきこと也 寄垣集

古き口傳にも油斷なく心を轉すへき事と侍り句毎に心をあらため行やうにすへき也全上

祝にむかひすたれ捲つゝ、自

梨の花咲そゐたる夕小雨 時節

雉子におとろく女ひと群 他

此外附かたなし

むかい火に尼か涙やかゝるらむ 他

松風落て水の行す衛 其場

さつはりと酔のさめたる明屋敷 自

此外附方なし

並木の露のはらゝと落 時節

巡禮の子を抱たる朝の月 他

餘所目もさらに鍛冶か勢ひ 他的向附

いかにくるしき赤かれの髪 他的巡禮の

ものゝ哀も盆の名残よ 自にて他の句へむかひし也

此みつの外附かたなし

落瓦あらしは松にしつまりて 其場

皆わすれたる明かたの夢 自

看病の粥ふきさます小くらかり 他自よりふひ出したる也

着ものゝ手さかりもはや秋ちかみ 自の句に自の句を附たるは其人の自の句より

此二つの外附方なし

ひとつすゝ手本もらひて粽ゆひ 他

しかる局に笑ふつばねに 他的向附

跡や先裾にむしろの下向みち 他的局のな

染衣を思ひのまゝに賣つけし 自他の局へ向ひたる也

此二つの外附方なし

薬になつむ彌生つれなき 自

人事もいはて日中の御垣守 他自よりふひ出したる也

こほれ松葉を手まさくりぬる 他御垣守の

ほろゝおちる屋根葺のちり 他向ひ附

此二つの外附方なし

わたらしき草鞋に旅のあらたまり自

いのちなりけり洛外の春 自

見よかしに櫻かもとの女房達 他自よりふひ出したる也

此外附方なし

巻わらに弟もむかふ手束弓 他

浮世の中もたのむしき哉 自他へむかひたる也

西國をうては都も旅なれや 自

此外附方なし

杭四五本を門の馬つなき 其場

かけろふもえてかはる川筋 其場のあしらい

赤くすゝさし行燈のさや 時分

爪へにうつる双六の石

日はうすゝと入相の鐘

温泉の香に曇る朝日さひしき 時節

雨の跡門田の稻葉穗に出て 天相

時鳥聲ゝ啼て通りけり

雲はこふ空は間近く風落て

青天に有明月の朝ほらけ

いづれも人情なき句なり、其場とは野山海川等を云、其場のあしらいとは硯、机、戸、障子すべて其場にあるへ

きものを云なり、時節とは四時の季をもつものを云、時分とは晝夜且暮のことを云、天相とは日月風雨陰晴の事を云、

又人事にて自とも他とも分かつたさる句あり附句にて自とも他とも定むるなりたとへは

朝またき狩弓狩矢持をへて

うしろ姿もはたちうち外

かく附るときは前句も他の句になる也

つめたかりけるかも渡り川

かく附るときは前句も自の句になる也是附かたを以て前句の自他を定むる法なり

芭蕉曰聯句のこと前念へもとるへからすと則ち三句の轉し也

古人曰聯句のこと前句を動かすへしとはまた三句の轉し也

鳥醉曰聯句は有用にして無用無用にして有用の附方を思ふへしとは尤も三句の轉し也 全書

文かくほとん力さへなき

うすものに日をいとはるゝ御かたち

熊野見たきと泣給ひけり

文書く程の力さへなきといふを及はぬ戀病を見て其戀せらるゝ人は羅に日をいとふ富貴の人と附たり三句目の作者其前句を動かす花山院の儼なとゝ見て熊野見たきと泣

玉ひけりと其人を定むされは打越は目にして二句の附合は他の噂也人情の論能分るゝ此多少自他を辨へさる作者は三句目に至て人情の續を恐れ或は景情或は時分時節等に遡て終に附合佳境に入る事なし是蕉門附合の深秘也深く蕉門の部集を熟覽すへし蠶の巻

附合古新の事

支考曰附句は句に新古なし附る場に新古あり云々蓼太云森羅萬象いかて古からんいかて新からん江戸筏集に

辨當と先へ來て居る按摩取

靜こゝろなく花のちるらん

古有言云情は以新爲先詞は以舊可用云々寂葉

定家卿曰詞は三代集に出へからず俳諧も亦意を新らしくするを專用となす詞は新たに作り出せるを嫌ふ或曰俳諧には俗談平話をつかうとも何を苦しかるへき答曰俗談平話とは歌連歌につかはれさる詞をもつかふを云也且一句の句作にもよるを、さむしろとも、疊とも、藥こさともいふ是を俗談平話とはいふ歌連歌につかはれさる、疊、寢こさをつかふといふ事也俗中の俗言鄙言の事には非らず又新詞のことにもあらず去來抄に

賽錢も用意顔なり花の森 去來

芭蕉曰花の森とは聞なれす名所なるや古人も森の花とこそ申侍れ詞を細工してかゝる拙なき事いふへからすと教へられたり

附合四道の事

一に轉 二に隨 三に放 四に逆

轉は前句の人情其場其時の一轉也放の付句に差別あるへし

爛鍋の藥ふる夜の辛頭とも

伽羅あらそひの風薫るなり

かゝる世をつくく彌陀の爪はちき

前二句は戀句の應答なるを焼香の伽羅杯と一轉してかゝる名聞の世を彌陀の爪はちきと彈指を句作したり寺院の結構伽羅炷人のさまで餘情に及ひはかるへし

隨は前句の姿情を動かさず隨ひ成すへし

繪姿の撫斗は似たれとも

きぬくなしの膝に三絃

煤竹の女房こひ茶のおもひもの

前句は繪姿の撫を答てあやしき人の遊所の居續けなとゝ附たるをきぬくなしと云る詞に隨て女房のおもひものと應答ひたり

放は前句に對して風雨寒暖陰晴四時の働きと知るへし

先財布出して飛脚の汗を拭

拾ふた跡は我いのちなり

告わたる聲はのくと鳴鳥

前句は金飛脚の一大事と附たるを爰には拾ふた命を難風に逢ふたる舟なとゝ見直して只鳴鳥のあしらひ奇

也

逆は前句の姿情を見直し多くはこなしの用と知るへし

凌霄の盛に空も曇らせす

世を川越しの浮つ沈つ

後ろから冥加な甲着せ申し

前句は凌霄の夏けしき大井川阿部川の淵瀬と附たるを爰には世を川越しのと云る言葉を答て落人など打渡したるさまと附たり只川越しの上にて行へきを一ひねりたる所二三の折の附方にしてことくは好ましき句也

以上俳諧小鏡

一字の變といふ事

抑々一字の變といふは我家の發明にして言下に趣向の違ひ有ると知るへし惣して指合と去嫌ひ跡々の付句を直すへからず言葉似かよひたる多からん姿は一字の變によりて雲泥の違ひ有りと知るへし芭蕉後集

四道の畧説

連歌に四道と云事あり俳諧にも猶此心得有るへしとて或人の書る物に

發句景氣あらは第三はいひたてたるへし

發句いひたてたる句ならば第三ひとへに景色はかりの句なるへし

四句目脇の句を吟して輪廻なき様にすへしいかに能付たりとも同様の句三句つゝきては以ての外わろきことなり

古き口傳の中にも油斷なく心を轉すへき事と侍り句毎に心をあらため行やうにすへき也

此外に下の句に口傳あり句を作るに七々のかなのつつきやう也二五、三四、五二、四三といふ事あり又しるししるき「みゆ」「みる」「きこゆ」加様の事人々あしく心得て皆仕違ゆる物也口傳加様に物毎に其かんを見出し分別して句を作るへしたとへ四道を知りたりとも加様の事を習はさん人は似たる事に似て似ざる事は誠に似ざるへし禪に云やすし「かたし」「かたし」とかや申も心にそ解行かさん程は道に入事ゆめ「有へからさる也」云々

附合三義とは 一にてには、二に句作、三に寄合、てには前句に對しての聚也打越へかえらぬやうに一句の働きあるへし

句作 前句に對して新古虚實を能く考へ可き事也

寄合 前句に對して趣向を定る事

駕につゝけは餘寒忘るゝ

一背負御守殿風のうしろ帶

是駕に供女の寄合也されと誰を案すへき古みなれば爰に趣向を立て女の駕訴訟と見出したるを新しみと云

駕につゝけは餘寒忘るゝ

願書もつて女の褰端折

されとかくの如きは句作なし是に手爾葉の技折をつけて

駕につゝけは餘寒忘るゝ

何ヶ度も男まさりの願書

斯の如く男まさりと云處に走り添たる女の風情あり「と見ゆ凡て附合は寄せ合の内に趣向の新古を見定て句作すへし是を執中の法といふ雪の枝折

附合三段の事

芭蕉の俳諧は連歌の後心の場より附合を定められたり

連歌の附合に初心中心後心と三段に分ちたる傳書なり

初心は二所を附る

霞こめたる木々のむら立

見ぬ花の匂ひにむかふ山越て

中心は兩方へ道ひて中を行

薄くやならん袖のうつり香

咲く花に染るよ法の心さし

後心は凡俗を放れたる付にて初心の人は見もすましきことなりとそ耳底記

附合に段をとる或るは段をかゆるといふ翁の教へあれと當時の是を知る人なし故に一卷眠るか如し翁四三十六句も百句も一卷皆文章也と故に其段とは則ち文章にいふ段落の事也一卷皆文章なるか故に段落有へき理をかし段落とは今日断の上にもありて發句の上にていふ時は則ち切れ也此切れなき時は始末分明ならすして聞へかたし是一巻をはかるの第一義とはいふなり訓詁錄

附味の大事 附句を付るとは云はす乗といふ第一打越をせぬ事なり 打越とは我付へき一「躰付」用付は古へ今に變らず只三句目よく轉する事也

五つか鳴れはかへる女房

此際も利上げはかりに言延し

まんまと今朝は軈に乗出す

又

おとろへて土器ふるふ身の弱り

御念ころにて鎌倉を立

門々に翌の飾をくけり置き

いつにても此はなれ三句目を思ふへし

我あとからも鉦鼓打來る

山伏の切てかけたる關の前

鐘もたねはならぬ世の中

付合は皆上戸にて飲あつし

さらりくゝと霞ふるなり

是に皮肉骨流しなとゝいふ事備れりよくゝ師につき習を受くへし俳諧秘蘊集

附味の事

附味は景氣、推量、倅此三つに極る色々の事有といへとも兎角此三つを能く工夫すへし千姿万體此中より出て天地かけ廻る事也又此三つをかくの如く並へて附るには非らず景氣に景色、推量に倅とも付るに二句つゝは苦しか

らす芭蕉奥義

景色

乗かけも提灯しめす朝あらし

汐さしかゝるほし川の端

推量

衛士のかゝり火立る黄昏

采女招す玉の御膝のうち崩れ

倅

草庵にしはらく居ては打破れ

いのち嬉しき撰集のさた

下の句作の事

下の句に二五 三四 五二 四三と云こと事あり

同じ作意をとさまかうさまに思ひ巡らして其内にとなへんに耳にも立たず聞よき様に仕立ること也凡て三四を能きに定め四三を惡きに定めたり二五と五二とは其句によるへき也梅の鎖

下の句に二五、三四、五二、四三といふ事いかにも覺ねはならぬ事也師説録

附合下の句を作るに七々のかなのつゝけやう也二五、三四、五二、四三といふ事なり寄垣集

二五三四とは

まさにしくれをさくさくらかな

待たる君に來たるあかつき

五二四三とは

橋 翻 りほとゝとすなく

峰の旅人の行衛もしらす

二五五二別條なし三四心よく四三よろしからす好さる
也千句などには場に任すへし師説録

附合疊字疊語の事

疊字疊語の格は昔より和漢に詩歌の常なれと附合に此格を用ゆるは凡俳諧を始とやいはむ爰にそれらの濫觴を尋ぬれば

前句 葦の柵木に鳶をなかめて

花の 坐 鳶の居る花の賤屋とよめりけり

是は故翁の附合にて其頃武陵に名高き句也さて其時の口評に此附は前句のいひとりを歌の前書と聞なしたるよりかくは詠めりと附たる也此類は前句の情を起してこなたより意を添ふたれは起情の法ともいへるなり然は此いふ附合に疊字の沙汰はなけれども今や此附を格別となせば百世に疊字の證文といはむ思ふに此附の詮用は前句の沙汰としるべき也但高句に伊吹山といはむに山郭公と疊みたらむは漢土に詩門の例なれば今の新製とはいひかたし或るとし加賀の小松にある人の附合に

婆々なれと婆々といふをは腹立て

名はいろくゝに御所の御道具

此附合は名殘の曲なりしか名はいろくゝといふ詞の前句に對して聞へすと云ふに其作者の附るは婆ともなけ

ればならぬといふを名はいろくゝといひかくせるよし
さるは前句の崎といひて今の俳諧の第一にいむ事なれ
は爰には疊語の格を用て

婆々なれと婆々といふをは腹立て

婆々といへとも御所の御道具

かくは口評申せしかこれらを疊語の格とやいはむされ
は此頃の俳集に此格はやゝありなから或は低句より高
句に疊みたるあり附合は前後に附る物なから高句より
低句に疊むへし語路の拍子に違ひわれはなりされとも
鳶の句のことは前句を前書と見たる時は高低の論に
は及はざらん此格は本式に見合すへし古今抄

疊字の事

葦の柵に鳶をなかめて

鳶の居る花の賤家と讀りけり

此附句は榮園集に鳶の居る花の賤家の朝もよみ木をわる
斧の音に聞る（一本に音を聞ふるともあり）此古歌を取
て前句を歌の詞書と見なしたれば附句体用を分つ

琵琶に拍子を付てさゝなみ

さゝなみや雪の花ちる星月夜

前句は琵琶のさゝなみ附句は志賀のさゝなみ也餘は推て
知るへし詩にも

去年荆南梅似雪

今年薊北雪似梅

是らを疊句の格といふへし雪中庵小説

懷紙式の事

萬句 千句 十百韻

支考曰連俳の一卷といふは百韻を數の限にして十卷を重ぬれば千句といひ百卷を重ねれば萬句といふ十百韻と千句の差別は一座と十坐の違ひにて去嫌の用捨ある故也

百韻

表八句七旬目月

裏十四句九旬目月
十三旬目花

二の表十四句十三旬目月

二の裏九旬目月
十三旬目花

三の折二の表裏に同じ

名殘の表三の表に同じ

名殘の裏七旬目花

支考曰四のひゝきをいみて名殘の折といへり

百韻式

發句天 脇地 第三人 次の五句五行五常也

百八句衆生八苦 十四句不動十四根本 二之表裏二十八

宿 三之表裏千手廿八部 四之折十六句十六菩薩 六句

當六根

右四折分配四天王也又比春夏秋冬

すへてさし合等くる時一坐何句とあるは百韻をさしてい

ふ也

一硯 墨 紙 水 四方神 一筆 中央大日

古の百韻は表十句名殘の裏六句也今時の表八句名殘の裏

八句も首尾合せて十六句也日本は東方にて陽國也依て陰數を用八は陰數也婦人始て經行陽數にて二七十四也男子始て陰調ふ事則陰數にて二八、十六歲也是は句を用考陰の數百句に滿と知るへし

古い百員は四花八月也是陰は陽に負るものなれば折毎に出して花四本の陽に合躰也されは名殘の裏の月花と立ち合してむつかしければ宗長法師勅許を蒙りて四花七月に定られたる也以上筆つむし

米字

表は句七旬目月

裏十二句七旬目月
十一旬目花

二の表十一旬目月

二の裏十二句初裏に同じ

三の表二の表に同じ

三の裏十二句七旬目月
十一旬目花

各殘の表十二句十一旬目月

同裏八句七旬目花

七十二候

支考曰七十二候とは百韻を三折にはふきて三の折に裏を八句とす然れば三花五月にして其名は七十二候をかたとれり

七十二候は四季の七十二候より割たるもの也百韻の三の折をぬきたる也筆つむし

易

表八句七旬目月

裏十二句七旬目月
十一旬目花

二の表十一旬目月

二の裏七旬目月
十一旬目花

名殘の表十一旬目月

同裏八句七旬目花

源氏

青藍曰易とは周易六十四卦の數をかたとれり

支考曰源氏とは三折也さるは歌仙の變數にして中頃の名目なるよし其名は源氏の六十帖によれり歌仙三十六句に二の折二十四句加へて六十句とす花月の定坐同し

源氏とは三折也さるは歌仙の變數にして中比の名目なるへし表六句に裏を十二句とし三の折の裏を例の六句とす

其名は源氏の六十帖に比す古今抄

源氏は面六句裏十二句二面十二句二裏十二句名殘面十二句同裏六句合源氏六十帖比す筆つむし

五十韻

百韻の二の裏までするを五十韻とす

世に五十韻と定法に覺へたる人あり非也これは百韻に満たさる下略と知るへし花舉句強て本式を用るに及はす一坐の時宜によるへし筆つむし

五十韻は古法にして百韻の半を減すしかるを百韻の折附には初ノウと云に始りて二ノヲ三ノヲ三ノウと次第して名ノヲ名ノウと終る也此故に二折三折の懷紙にも名ノヲ名ノウと書たるはわるし四折の外は法の省略なれば五十韻はまして七十二候三ノヲ三ノウと書捨へし

四十^{ヨッシ}四は五十韻の變數にして二の折の裏を八句とせさるは其日其夜の時宜を見あはせ或はちゝめ或はのはして一坐の首尾を作るへき爲也其名は四十^{ヨッシ}四をよよしとは例の

いふ俗習ながら稱せは祝言のひらきともいはむ古今抄

四十四とは百韻二三の折をぬきたるもの也筆つむし

四十四支考曰五十韻の變數にして二の折の裏を八句となせるは其日其夜の時宜を見合せ或は縮め或は延して一坐の首尾を作るへき爲めなり其名は四十四をよしとは例のいふ俗習ながら稱せは祝言のひらきともいはむ古今抄

歌仙

表六句 五句目月

裏十二句 七句目月
十一句目花

名殘の表十二句 十一句目月

全裏六句 五句目花

支考曰歌仙は名目の風流也そは十八番の歌合よりその讀人を歌仙といへるに爰には上下の句を合せて三十六吟の名となせり

歌仙は三十六句は名歌三十六歌に比す筆つむし

歌仙は名目の風流なりさるは十八番の歌合よりその讀人を歌仙といへるに爰には上下の句をあはせて三十六吟の名となせり本より月花も二折の式なれと六句十二句とせはしければ今式には二花二月の沙汰あり本式の遺訓に見合すへし古今抄

長歌行

表八句 七句目月

裏十六句 九句目月
十五句目花

名殘の表十六句 十五句目月

全裏八句 七句目花

長歌行面八句裏十六句名殘面十六句同裏八句合せて四十八句也筆つむし

短歌行

表四句月なし

裏八句初句月
七句目花

名残の表八句七句目月

全裏四句三句目花

合せて二十四句也

長短行も求韻の俳諧の爲にと例の支考か新製なりその辨は「東花式」及「和漢文操求韻」の序に同じ

短歌行面四句裏八句名残面八句同裏四句

右長歌短歌は詩より出たる名也東花坊製作すされと長歌は裏のひる也短歌は面せはしく月花の配り殊に苦しければ用るに足らずさりながら旅行などに歌仙満さる時の急用と知るへし筆つむし

十八公

表十句九句目月

裏八句七句目花

十八公とは千歳不變の松を象りて數をとれり

首尾

表六句五句目月

裏六句五句目花

支考云首尾の吟は一坐の時宜也或は奉納の諸願を祝し或は歳暮歳旦の賀には始終をとゝのふる意也さるは六々とも八々とも表と裏の首尾を合せて月花二坐は模様によるへし

首尾十六句は百韻の表と大裏と合せたるもの也十二句は歌仙の首尾也筆つむし

首尾の吟は一坐の時宜也或は奉納の諸願を祝し或は歳暮

歳旦の賀には始終をとゝのふる意也六々とも八々とも表と裏の首尾を合せて月花の二坐は巻の模様によるへし

古令抄

懷紙用捨の事

本式千句表の條下に古法表十句の例を守りて今式は表八句

の後裏二句過るまで表の如く嫌ふものゝ類今に至るまで

連歌にはせず俳諧にはゆるすへきか先師曰いはれなき事

也連歌に鬼女龍虎等さし出たる類は表のうちに嫌ふ俳に

も鬼女は成かたし其外人を殺す切る縛る等の類用捨すへ

し是等は百韻の中にも一句に過へからず或問戀の詞述懷

の類祝言にいひ立たる句はいかゝ侍らん答曰句によるへ

し文字は苦しからず假令祝言にいひなすとも人の上にい

よゝ述懷なる花は淋しきの類は苦しからず壁の崩れに

さかる夕顔などは全く貧家の體なれば慎むへし他人の句

は答るに及はず又問ふ戀無常其外表に嫌ふ故事本説を下

心に持て白地に云願さる他のものゝうへに假用たるな

との句は如何侍らん答曰大方は表に嫌ふへし事にもよる

へきなから詞に出すして下心に嫌ふことを持たるは作者

論すへからず又問古今の人名表に出す事いかゝ答曰今の

人の名は慎むへし古人の名はことによりて苦からず若出

す事あらは其人名あるやうに句作すへし變例なれば常に

する事にあらず又問懷紙に戀の句なくては叶はぬや是を

む由縁は如何答曰此事は至て大切の事也懷紙に戀の句を大切に目立る事は神祇陰陽和合して豊蘆原草創の其例也戀なくては叶かたきをや憤むへし一坐一句のものの連歌新式に四十はかりあり前條にいへる鬼女龍虎に一つなれとも俳諧にはいひかへて又有へき也たとへは虎屋虎之助の類なり生類の虎の心なければすへて本名異名なりとちらにても一ツ異體は數をさためす他は是に準す直旨傳

懷紙端作の事 翁壯年には俳諧之歌仙晩年には俳諧之連歌とあり意味あり晩年を可用

はしめの名は三十六人の歌仙の名より起るといへとも法式定りての後は只三十六句の連歌也師說錄

本式十句表の事

神祇 釋教 此二ツの内一方は發句にあり

月雪花、郭公、名所、寢覺、如此出す 戀は不入

五句目に極めて名所を出すへき法也

月は定坐九句目

芭蕉曰世に表十句は知る人多し裏の詮議無沙汰なり裏は古法二句也秘也此二句に戀を出すへし今首尾の吟とて表六句裏六句する事自然に古法の表裏の數にかなひたる事道の天然なり

十句といふは十百韻也別にかはりたる式なし尙古式の卷にしるす

芭蕉曰百韻といふ事百句となりとも百詠百吟などいふへ

きをいかに韻とはこそ知る人なし俳諧大事是也此員詩を次て割たる數にて雪月花の用所明かなり表八句裏十四句也裏十六句と數を定へきなり律詩絶句の姿の數也仍て表四句目まで起承轉合又五句目より起承轉合月の坐轉の場なり裏の月花の座算るに起る轉の所に極て當るこれにて韻の字濟なり以上師說錄

懷紙之法式 紙は杉原也水引にて閉る也水引有合せす白紙にてとつる時は表の方にちよつくと墨を付へし祝儀の習也追善にはいつにても白紙にて閉る也會紙の表とちめの端の所に年月日前書略としたゝめ表紙をのけすに表より直に書出す也百韻八句書にして裏より七句七句と書也名殘の裏に至り又片面に八句書て終る也都合紙數は右のはり合にて裏のとち目までに揚句書つめて仕舞ふ也十二夜話の七

句數去嫌の式

春秋 五句去

春と春、秋と秋同季五句去なり三句より五句もつゝ二句にては捨てす

夏冬

二句つゝきて三句又は五句去る二句、三句つゝきても苦しからず平句にては一旬にても捨る

神祇 三句去

二句より多くせず平句にては一旬にても捨る

釋教 三句去

二句より多くせず述懐無常引合ては三句もする

戀 三句去今五句去後人の私也

二句より五句までつゝく二句一本二句にては捨てず

無常 三句去

無常と釋教も三句去也一句にても苦しからず述懐
と無常と引合せては三句にするなり無常ばかりは
三句つゝかす

述懐 三句去

無常に同じ述懐と述懐、無常と無常三句去也

居所 三句去

二三句つゝく一句にてもよし駄用二句にてゆるす
もあり

人倫 三句去一本二句去とあり

二句つゝきても苦しからず

山類 三句去

一句にても苦しからず二三句つゝきてもよし駄
は二句にてゆるす

水邊 三句去

山類に同じ

生類 三句去

二句もつゝく魚と鳥虫と品かはれは二句去也

植物 三句去

二句もつゝく木と木は三句去也木と草と品かはれ
は二句去なり

衣類 五句去

二句より多くはせず帶にゑもんなどは三句去なり

食物 三句去

二句もつゝく飲物と食物と品かはりては二句去な
り

器財 二三句去

品かはりては二句つゝくも苦しからず

夜分 三句去

三句まではつゝくも苦しからず

朝と朝、夕と夕は三句去り朝と夕、晝と夜は二句去

降物

一句にて捨る二句より多くはせず

其品替りて二句去也雨と雨は折去也雪と雪も同じ

露と露は三句去也

風体 二句去

一句にて捨る又三句去二句つゝかす松荻などの聲
は風体二句去

天象 二句去一本三句去

一句にて捨る二句もつゝく其品かはりて二句去な
り月と月は面去なり日と日は三句去星は只一句な
り二句より多くはせず

簞物 三句去一本二句去

一句にて捨る其品替りて二句去也雲と雲とは三句去也降り物に二句去但霧は降物簞物兩用二句より多くはつゝけす

支体 四句去一本二句去

二句もつゝくかしらに爪なとかはれは二句去

書体 三句去

一句にて捨へし筆に短冊なと二句なり

火体 三句去

一句にて捨る器財なとは句によりて二句去

病体

二句はつゝかす四五句隔つへし病名に針灸も三句去へし

名所 三句去一本二句去

名所地名替りて二句去二句もつゝく名所と名所、國名と名所と替りても三句去也

旅体 三句去

一句にてもよし二句もつゝくけしきと人倫とかかりて二句

疊字 何々とかへす詞二句はつゝく打越しには嫌ふ

二句去にて降られぬ物

風体、火体、書体、降物、言語、乗物、步行体、時分、濁り假名、畢ぬのぬ、ふのぬ等也

字去とは三句去也折面を替ても餘興に移りても三句去へし

三句つゝくものは三句去五句つゝくものは五句去とするか

覺へよき也寄垣集四季部類去嫌早引等

句所に寄て名目ある事

端作 懷紙のはしめに俳諧之連歌と書を云也但堅懷紙にはなし

發句脇第三 本書目次に掲ぐる條に就て見るへし

四句目 よくめと云是は第三の句に付る也

五句目六句目月所 第七句目の名也爰を月の坐とする也

筆際 是は第八句目執筆の句所なる故七句目をかく云一巡の終に執筆の句あり其前句に老人功達の人にさせ侍るを筆際と云

筆句

第八の句也執筆のする所なる故也夫も人衆多くある時は執筆の句はせぬ也大かた通用の名也

裏移

九句目は裏にうつる故に裏うつりと云
かやうに押出して云ふは初折表八句過九句め裏のはしめの句をいふ二三名殘の折に成ては二のうら移三の裏うつりと云なり

一順

發句より筆句まで人數の句を一通り書とむるをいふ也また裏一巡あり下に出す

一巡は其會に定まる人數いくたりにても發句より次第に付侍りて終に功達の人句を付るを筆際といふ其次第に執筆の人句を付るなり是にて一順なり

再返さいへん

右の人数へ又一通りまはすを云ふ也

一巡のふたゝひめくるを再遍といふなり

素秋すあき

若しは初心の人なとわやまりて秋の句はかりを三句も五句もつゝけ月の句なきをいふ

素表

此名目儘により所なし近來の俗説なるよしなり裏うつりより神祇釋教いづれも相交しへてするものなるをたとへは餘の句はあれとも戀の句かつてなきを云也

つれたる 一に「つるゝ」ともありつれたるといふ詞はたとへは春ならは三句か五句まで秋の句も同じ夏の句冬の句は一句より二句までつゝきたる時何の季はつれたりと云て限りとす

春秋は二句にては捨す故に三句つゝき候へはつれたると申なり戀は一句にては捨する物故に二句續けつれたると云なり

戀はなれ

戀の句つれたる時余の句にて付のくを云

戀句こひく

といふはわろし戀の句とのゝ字を入へしとなり

句長くたけ

戀春戀秋は秋に戀をむすひ春に戀を結ひたるなり十七の句仕立たる人は次に又十四の所にてする物なりかく心得るを長かよいもしいといふ意を句たけくるといふ也

上の句とゝ下の句とゝつゝかぬやうにくりあけするを句長くるといふなり

神祇

神の事同宮などの儀式と云

釋教

佛の事佛法僧の態を云

無常哀傷

死葬の沙汰世のさためなき有様難の事等也

述懷

光陰のうつりやすきと又は身のおとろへたる事など云

初折

第一折めの紙をいふ也合四枚有也

二の折

二まいめを云

三の折

三枚目を云

名殘の折

四枚目を云、百韻懷紙四枚目也

句の花

第四の折の名殘七句目にする花をいふ也

揚句

名殘の八句目を云

文臺際

文臺のそはに居る人を云但初心の人の居る傍にあ

宗匠

一坐のさし合なと沙汰する古老の人也

指合繰さしあひく

それゝのおきてをさはく也

表を摺す

若し案しても一句もなく人に句所をとらるゝを摺と云

句所くす

誰々と云て名さし置所を云

打越うちこ

當前に付へき句の前なるをいふ也

花前

花の句すへき前の句なる故に云

生類

天地にあらゆる生きものをさして云

人倫

人の事也

能なり

人のすること云

行歩 人のわりくていを云又行路駄とも云

乗物 舟車馬などの人の乗るたくひを云

天象 天にある日月星雲などを云

降物 雨霰雪霜などと云

吟聲 執筆懷紙の句を讀わくるを云

前句 我か付へき前の句を云

墨付 すゐづ すでに書かゝりたる句を云

執筆句を受とりて懷紙に筆をたつれば案しかへたき
とても最早句を戻さぬなり

戻る 付て見ておもはしからざるを仕直しさするを云

趣向 よき句を思ひ付たるを云

句作 句を仕立て誤りなきやうにする也

遅吟 句のおそく出来るなり

獨吟 ひとりして悉くすることなり

兩吟 二人してかけあひに一卷するを云

双句 是も前に同じ

三吟 三人してする也

鼎吟 三吟のこと也

秀逸 ことの外出來たる也

内會 内々に催したる會を云ふ也

即興 俄かにとり立る也

卷頭 卷のはしめに入たるを云

卷軸 同しく終に入たる也

卷 清書したるを云

座字 ざじ 會に行て錢など出る事有を云但坐字何錢

句引 くひき 誰は何句くくと句數を書付をいふ也

懷紙の外に句引の紙とあり滿坐の後句數を書し歳旦
の句帳と云ふ

句合 くわい 發句はかりいくつも並て點とる事也 以上俳諧
寄垣集

云捨 いひすて 昔連歌の式目いまた定らさりける時は上の句を云か

くれば下の句を付下の句をかくれば上の句を付なと
して物に書するすといふ事もなく即坐の興となせる
のみ是云捨なり式目定まり懷紙に書付るにいたりて
は云捨にはあらず今も人に答ふるにも又自云出るに
も筆紙を用ひすして口にさひ侍るは云捨なるへし近
來點取世にはやりもてゆくに隨ひて點をとらぬ會を
云捨といふ人あり點取は晴の會の稽古なる事をしら
する故なり猶あやまりては一巡を出す堅懷紙の端書
に何月何日於何所云捨會なと書て出すものあり笑
ふへし

云掛 縁語をもて云かくるなり秀句といふ是なりつれく草

に寺法師をほろしと云たるをいみしき秀句なりとか

ゝれたれば此名目古くよりいへる事なるへし

穿鑿過たる句作をいへり詞のいりほか風情のいりほ

かとして有よしなり

付句を云出すにさし合わりて戻せば其句を付待ちて

止ぬるをいふといふなり

一字誹言 はいごん たとへは鳥なきてといへは俳諧にならぬとて鳥
ないてとし又霜ふりてといふを霜ふつてなす類な
り

會料 會の入めを云也

點料 點代のこと也

批言 ひごん 何に何はあしくもなと、書付るをいふ也

褒美 ほめらるゝ也

平點 一點かゝりたる也

長點 二點かゝりたるなり

珍重 もてはやすとほむ也

無點 點のなきを云

突 つきたし 同前

點 てんしめ 點の總高也

引合 ひきあひ 同し點高にていつれの勝とも定かたきをいふ也

句題 發句の趣向すへき季の詞を宗匠より出さるゝをいふ
也

探り題 同し事ながら色々の題ともをあつめて人數程つゝ、

みて出すを取て其あたりたる題にてする也

切り句 歌の八文字を切て出すを云

加筆 宗匠になをさるゝ也

添削 一卷の點をこふ事也

雅丈 俳諧の友たちを云

入集 にふしゅう 板にする句を頼む時入集奉頼と云

歳旦 年のはしめの祝の發句するをいふ

三ッ物 同しく脇第三まで付て三組あるを云

引付 ひきつけ 三ッ物の跡に入らるゝを引付に入ると云

一句 いっくいつちよく 一直 千句興行の時掟のひとつなり句を云出すにしさ
と、仕る事よろしからぬとなり

し合われは直して又出すに猶さしあへは又入てもは
や其句はせぬなり

一二三附 いちにさんつけ 一巡の間は名を書て再遍より一二三と數付して
名をかゝぬ事也月次の奉納又は一日千句にはかなら
す如此する事なり

韻字 いんのじ

句の留の字をいふ和漢の詩に韻といふは下の句のと
まりをいへともけれとはかはりて上句の留をも韻と

云故に百句を百韻といふなり

傍題 はうだい

梅の題の發句に鶯を結ひて梅の事はわきへなりたる
類なり

はまる 前句へ付通たる事なり

筈刺 はずさし 錐小刀の事なり硯に必らず添る物なり俗にはんさし
といふ

袴着 はかまき 中七文字の用にたゝぬをいふ

二句物 一座に二つ有物なり

二句去 二句去と打越嫌ふものと紛れたること多し打越し
嫌物は付て苦しからす二句去のものは付ることな

らぬなり

二句置亂吟 二句へたてゝの上出勝に付るをいふ也

發句 かなに書く時ほくと書かよしほつくと書へからすと

なり

同意 前句と同じ心なる句をいふ

等類 古き句をとりてするに其句と心のかはらぬを云

同作 百韻一坐の内前に出たる趣向の同じき句後に出るを

いふなり

同字去 三句去の輕き字をいふなり同の字を畧して字去と

もいふ

取成付 夜を竹のよにとりなし神を髪に取なしなとして付

るなり連歌に異形通對といふといへり

遠輪廻 前に出たる付合に又其やうなる付心の句を付るを

いふなり變に多きものなり又一句の作意も前に出たる句に似たるは遠慮すへし

兩節句 歳旦歳暮の句をいふなり

輪廻 打越へ心のもとする事なり

兩嫌 神祇に戀をむすひ尺教に戀を結ひは戀と神祇と尺教

と兩方に嫌ふなり

片嫌 是は述懷々舊無常哀傷等に戀を結へは戀ばかり又嫌

ふをいふ

折嫌物 懷紙一枚の間を嫌ふものなり

折句 五七五七々の上に文字を置事なり又沓冠といふあ

り

沓冠 句の上下に物名などの字を置てする事なり

沓はかす 座の句の無用なるをいふ

掛てには 前句のとまりを付句のはしめにうけて云つくる

を云なり

掛合 心のかけ合詞のかけ合てにはかけ合とてなり

影月 月といふ字さし合たる時月の字を入すしてする月を

いふ

冠着す 初五文字の用なきをいふ

立入 物の名を句に作り入るなり

出句 豫て一巡出來して有を文臺立て會はしむる時發句人

より次第々々に仕たる句を吟して執筆にかかせるな

り是を出し句といふ

かなにはたくさくと書てたんしやくと讀となり

かねて定りたる一巡の人をいふ

夢想ひらさある事なり

人々の發句あまた書つらね侍りて後運く到來の句又

は賞翫の人の句なとを卷末に書加ふるを追加といへ

り又千句の滿坐の上其祝言をするをも追加と申なり

獨吟千句などには其作者の又百韻をしてそへたるも

有多くは表八句のみなり

中句 上の句の七文字をいふなり

難句 付にくき前句をいふ又は一句に思ふ所あるをも申な

句所にハて名目ある事

裏一巡 座中の人々名残の折になりて各一句つゝ付侍るを

結題 むすびだい 月前酒なとゝいふ題なり又寄花戀なとゝいふはよせ

題なり

後付 うしろつけ 付やう前句と前後したるなり

雨中吟 うれはしく晴やかならて何となくむつかしき句を

いふなり

求食 あさる みつからの句に又自句付るをいふなり

さし句 此所を是非ともに付よと宗匠より其人をさして望

むをいふなり

座懷紙 ざくわいし 小懷紙をいふ

再注 さいちゆう 前句を注するやうに付る事なり

季狹 きさ 戀の句に春秋の戀を付三句過て又季なしに戀付る事

なり

聞物 きもの 音聲ある類なりたとへは鐘などの打越松風等宜しか

らざるなり

禁句 遠慮あるへき句なり

聞句 きく 是は謎の句にて思惟すればよく聞ゆるなり聞發句と

もいへり闇の夜は松原はかり月夜かな、嗅て見よ何の香もなし梅のなといふ類なり

見渡 懷紙一面の間をいふ

繪懷紙 四季の繪をかきたる也

平句 發句脇第三舉句四本の花の句此外はみな平句とい

ふ

非衆 ひしう 連衆の外に出座の人をいふなり

左書 ひだりがき 句を書て其左にかやうくゝと其子細をかくなり又貴

人の御句なとは句の前に名をかゝすして左に是は誰殿の御句なりと書付るなり是賞翫なり

以上俳諧名目抄

會席作法

當坐などの會は申すに及はす兼日の一順

一順とは其會に出たる人の數を句にて定るなり盡く一句つゝ付て廻はす故にはしめてめくると訓て字の聲は一順とふ也二度めくるを

再返と云皆座懷紙なりさて一順過て横懷紙にうつすなり但是は懷紙の面に書て後少々句を引直す事も有る故に所々消しなとして懷紙の面見苦しくならぬやうになり

應安元年二月に二條大閣様救濟法師周阿等と合杯の新式目編集のつむて

執筆

懷紙淨書の役也古式は色々の作法あり

諸様を極めらる其大概に云

會に臨て執筆する人の専らたしなむへき事を拔書

先つ硯文臺會席へ出す事懷紙をは常の俱紙の如く折て硯を

は手元に置く何れも文臺の上に置いて執筆さし寄りて書へきやうに置くへき也

硯

飾りやう家々の傳あり好む所に随ふへし然れとも、墨のつか、耳かき、筆は一対いづれも笠をさせて置く也笠さし此分は是非ともに入用の物なりはその席の亭主の故實也口傳

の蓋を取てふせて硯のかけこに並ひて是を置き水を入墨する事五磨七すり

但此分にては墨うすき故に前かと勝手に能はとに摺て出すへし亭主の方

するへし

墨の置所口傳 是は執筆の故實

其後筆を染て硯のかけこに置

但筆の笠有るをあれこれと取て見て仕ふ事なかれもとより墨の付たるを遣ふへし筆の笠は上へぬくへし口傳

又硯の筆いがにわるくとも私の筆用意しるり顔に取出して書くこと尾籠也但亭主又は貴人より別の筆下さる時は夫にて書くへし夫も會終りて懷紙淨書の時はいかにも能き筆を奔走して書くへき也

懷紙を折る事四折の内一重ねを取て兩方の端を引揃へて折るへし

但四季の繪かきたるもあり

餘りに折目をきふく付るへからず

懷紙を折る時引揃ふる様にすれば自らうすくと折目付也折殘の紙をは硯の蓋の上に置く

此法を知らざる物は疊の上または文臺の上などに置くこと尾籠の事なり

執筆の居様貴人の御前などにては左右なく安坐すへからず

右の膝を立つへし

若御詞かゝりたらはろくに安坐すへし

是は殊に貴人なる御方への禮也大方の貴人には無其義遲參の人に付向披露すること當句より

其人の付へき前句のこと也

打越まで

打越とは其人の付へき前句の手前の句也

披露すへし

貴人には一面も又は幾度も吟すへし但時宜に依るへし惣して懷紙は持て書くへき也

凡は胸の通りに上くへし猶口傳

筆を持て披露する事あるへからず又去嫌或は過たる物を見るとき懷紙を折返し見る事有るへからず只覺へたる分を嫌ふへし

指合などは少々有とも苦しからず猶心得有て態と書もあり

附句出來の時先吟して其坐の宗匠に伺ふ宗匠領納ならば懷紙に寫し名まで書て吟しあくる也

貴人の御句は披露までもなく頓て是を書て披露すへし平人の句は宗匠領納を待へき也

客人などの句受取て名乗問ふ事苦しかちす指合去嫌は幾度も執筆より吟味すへし

貴人少人の句又は初心の人又は度々指合有て面を摺やうの人の句は少々さし合は見ゆるすへし

坐中の人いかに指合有とも直すへからす又執筆たる人文臺に直りて後

茶を吞むへからす菓子喰ふへからす大酒すへからす成はと物も早く食して出

いかやうのおかしき句おかしき事にも大聲に笑ふへからす食などの時は膳をもつて末坐に退へく但貴人の御詞かゝりて御免の時は膳をもはたらかすへからす又文臺も動かすへからす以上元録寄垣集

執筆附端作の事

貞徳云連歌には五ヶ十ヶ字と賦物あれと俳諧は則百韻ながら俳言にて賦する連歌なれば端作をも俳諧之連歌と書へき也

正保三年三月十七日於花咲亭定

これ夢想懷舊經文名號之連歌等の心はへ也然ればはしめより執筆懷紙に俳諧之連歌と書付て發句を待へき也師説

如是

但文傍には俳言の賦物とる方もあれは其用意して先尋常のやうに硯をおろし蓋を取り懷紙をさはき

懷紙一重の中を取て文臺に置上をとりて硯の蓋に置く墨摺り筆を染て偕懷紙に何ともかゝすして筆を持添て發句を待へきか

さて發句出れはうち誦して宗匠の方を伺ふに宗匠俳諧之連歌とかけといふ時又發句を誦して端作より發句名まで書て吟しあくる也

若賦物取る事あらは上賦、下賦を心得て賦何々俳諧連歌と書へき也或は連歌の二字をかゝても苦しからすとかく兼て宗匠に問ひ伺ひて其下知に任すへきなり

夢想の時は硯懷紙右のやうに捌き終りて其夢想の句を執筆より吟する也さて興行の人その句を常のやうに聲ひきく出せは執筆又打誦して端作發句書付てさて吟し上る事同様也

懷舊の會の時は執筆右の如くして筆を染め懷紙を取て懷舊之俳諧と書付て發句出れは誦て書付て吟しあくる也經文名號等の俳諧も皆懷舊追善の折に有ることなれば右懷舊の俳諧の如くなるへし漢和漢の折も同前也

衆人愛敬をもとして立居しけからす眠らす笑はぬやうに曉るへし俳諧の二字紀氏古集にかき支給へる文字なれば只言篇にかく習也又俳諧と書くも苦しからすとそ季吟

著増山の井

執筆習のこと

先文臺を持出懷紙四枚を二枚つゝ重て二に分横に折て又
堅を三に折硯の蓋の上に置文臺の中央に置くへしさて宗
匠に一禮して文臺に向ひ硯をおろし紙二重ねとも文臺の
上に置硯の蓋は我脇に置くへし紙一重は蓋に置一重を取
り上二枚重ねのまゝ書くへし文臺に置いて書くへからす手
に持て書くへし是は百韻の法なり

歌仙は懷紙二枚表に六句裏十二句書也此他附合の請取渡
し懷紙綴ちやう亦吟聲に祝吟愁吟等の事師に付て習ふへ
し

吟聲は發句二遍讀て名をよむ脇より下は一遍と名をよむ
執筆は句はかり讀て執筆とはよむへからす

吟やうは長句の下五文字短句は下の七文字を次第上りに
よむ

一順の留り句をは發句の如く二遍讀て名をよむ

句ひの花は抹香濟てよむ

愁吟は次第下けによむ追悼追善には愁吟也

名は句の留りに書く

雲紙の青き方を表に赤き方を裏にす

追善等には紫を表とす短冊にも青き方は上也

一句の内かしら字並はぬやうに文字假名交へてかくへし
墨次きも短冊の如く書く是を藤の花かきと云雪中庵傳書

生花傳書に詩歌連俳と花の心得あり

詩歌連俳の會の席には生花は時候によりて名所の花を生
るへし尤も幽玄第一に生る秋冬より早春までは閑情に生
るへし必ず猥かはしき生方有るへからす

名所の花には

梅雄波津梅津初せ山

柳佐保川かも川

桃漢土桃園桃原の渡

櫻

吉野山初瀬山嵐山御室音羽山

燕子花ハッ橋淺澤

菖蒲淀の澤か

やの池 蘆三島江三津濱難波津

萩二見濱伊せの濱和歌の浦 山吹

井出玉川まかきの島

松住の江高砂

芒眞野の入江武さしの

紅

葉立田高尾

秋草さか

竹伏水

藤多古浦

菊吹上濱

餘は押て知るへし惣て名所の歌なき草木は生るへからす
其内にも時候早く咲たるは珍花とてよけれとも後れたる
は用ふへからす又時節に早過たるも又殘花に同じ

祝儀の花には古禮を正しくして花も本手則ち眞の生方な
り必ず客位に生るへし草木とも雜木雜草は用ひす總て諸
事に縁ある花を用ひるなり

新宅の花は總て水に縁の有る花を用ひ赤き實物は火の色
に寄る故に禁す生方は根を堅く福相に生るへし

婚禮の花には婚儀は日本の大禮にして國の始家の始子孫
相續の根元なれば粗畧に扱ふべきにあらず依て松竹の二
種にて婚禮の媒を祈る松は男の義を表して云竹は女の貞
操を表す水引を以て其根を結ふ二度解さるを祝ふ心なり
旅出の花は神に手向て道中の無事を祈る生方なり生花傳

宗匠判者執筆亭主 連衆の心得の事

貞享式には宗匠の法と判者の法とを新式の二條にわかつて
執筆の法を一條となし亭主の法あり連衆の法あり五條は
例の心得としるへし

さて宗匠の心得といふは第一に其座の人情と見さへけて
我句に人を屈すへからず人は宗匠の顔を見て待心より調
子を失ふよきもあしきも風雅の運ひなれば其日の俳諧の
始と終とをかんかふへしさて人々の附句あらんに第一
は附心の道理か理屈かを聞わけて附句の趣向を稱すへく
前句の噂を難すへし

第二は三句の打越より四五句のはこひを論すへし四折の
變化は勿論の事也必らず當句の面白みになつたまされ句作
のあしきは宗匠より直すへく趣向の悪しきは作者へ返す
へし指令の事は執筆の役なれば宗匠の心をついやすへか
らず然るに道はいつれの道にも法と式とは立たれと俗に
はそれを青表紙といへる俳諧は殊に新式なるより一座の
設口傳といふ事ありて宗匠のよしあしは此時の用もおほ
くは月花のあつかひより二季にまたきたる彼岸の類も四
季にわたりたる無名の祭も發句にすれば季となるものな
り附句にすれば雜となる物なり詞のさし合も物の去きら
ひも其場にしかひ其人によりてとかむるもありとかめ

ぬもあり新式のかけたるをおきなふ時あり古式のかたく
明なるをためる時ありこれらをおはやけの私といひて其
才にたえされは人も感とす其和をそなへされは人も信な
しさらは此理を先につたへて其式を後にまなひなははし
めて宗匠の名はよひぬへし

爰に古人の詞あり君子も重からされは威あらず威あらず
れば信なしとは道をまなひ藝をならはむに妙所は信の一
字より入れは俳諧もなそ有徳の師によらざらんされと俳
諧のおかしみより笑言をもて人をみちひかむに例の一節
をしらざらんには古人の詞の聞まかひもあらむ

次に判者の心得といふは宗匠の一體別名ながら釋門に佛
と菩薩とのことき三十二應の自在を得て世法をあつかふ
に分明あらんされは詩歌の勝劣はむかしより君子の射に
なりひて連俳は賭物を争ふ時もあれは道を損するも判者
にあり道を益するも判者にあり況や百韻の點式には長點
の法あり圈點の格あり秀逸の印は例の危ければ點も無點
も判者の變といふへし

第一に判者の心得は俳諧一道の點といふ事を知るへし其
卷に向ふ時は宗匠の附合を聞くに殊ならず指令は筆者の
役なれと目にあたる時は断るへし

さて一道の點といふは判者の心の好所を捨て例に當句の
よしあしになつます附合の運ひの會釋と見へてはたとへ
心にいらすとも一點加ふるは勸懲の法なりいてをよ一本

の筆を動かして一國一城の人をなひけ西へも東へもむかすへきに其人は判者の癖をまなへは判者は其癖に化粧をつけて果は其黨の相詞となりなむされと點者の額うちて價をまつ人は此論に及はすそもや判者の宗匠にすくれて世法をあつかふ大事とは世界の俳諧のよしあしをは判者の心にはよくしれともいへは斯くいひ斯あれはとわりてこの所のさたのならぬなり其黨の俳諧をまとはせは其中に丈夫の人ありて例の難所をわとへ戻りて俳諧はとにもかくにもあらず上手といつは其理の明らかに下手といつは其理にくらかりしをと初めて自己の眼をひらけて判者の虚實を看破せむ爰を醫師には盼眩といひ祖録には千疑一決といへりこれらは儒佛の内證にして下愚の人には沙汰すまじき教化の人の大祕事なりされや昔の俳諧には俳言なしといふ判あり其世は例の輕口をたくみて連歌師の餘興にもいひ捨てたればはざる脇書もすへけれと今や我門の俳諧には俳諧の心といふ物はあれと俳諧の詞といふ物はなしたとへ筑波の躰をつくし八雲の詞をかさぬとも連歌と俳諧の姿は別なり此故に我家の點式には雅言のぬめりには俳諧の躰なしとも俗語のいやみには俳諧にあらずともその兩様を書わけよと新式に故翁の傍訓なり爰に雅言といひ俗語といひとちらも俳諧の公用なるにぬめりといやみとをそれか病ひとはこれらに俳諧の明白を察すへし誠や世の中の善言も悪言も口ある者の口占ならめとそ

れに病の有無をいへる式目の委細を稱せさらんや世にまた俳諧にくらき人の點者は十國十色なるには俳諧はすこふるいひ勝なりといへるそれらは放下の人にして此中の論にはあつからず

次に執筆の心得といふは宗匠の機變を能くはからひ連衆の調子を失はす假名と眞名との配りを口傳おほへてたとへ偏畫のまされありとも手つかひはやく書たらんそれを第一の心得といふへし例に指合と去嫌は素より執筆の役なれば人の附さる以前よりあしからん物は見直すへしさて指合のある時は宗匠の顔を見て竊に其事を申すへき也其場は人の句によりて其儘さし置事もあらんそれも世情の人和なから一座の禮節を知らさらんには公私のさかひに道をあやまるへし中畧

次に亭主の心得といふは勝手^{シラケ}の馳走に立さわかす喰物の次第を挨拶の人にしらせてそれを宗匠に通すれば始と終とを心得る也されは我家の面通言^{オカシコト}になら茶三石喰ふて後はしめて俳諧の意味を知るへしとはある時に故翁の戲ながら論語の精^{シラケ}にはいひまさりて名をさしていへるは例のさひしみ也されと厭はずとしつめたる文章の優にはおとろきて爰に雅俗のさかひを知らは子成か文質の論をもしらん

さて新式の饗禮に其席は一汁二菜に過す茶と煙草とはかさりある物かくその器物に氣をつけて亭主の結構に任す

へし酒は二献に過すへからすとそ誠や茶人の時分よりも
俳諧の供給は大事といはむおそき時は待こゝろに屈し待
得てあく時は昏睡におこたるまたざらんとは亭主の心
得なりかく響應の輕かちんも偏へに儉約の心にあらす例
のねむらす例のさひしからん其故あるを知るべき也

世に客發句といひ亭主脇といへるさよと偏には思ふから
す發句は客の位に似て其さまもおほつかなく詞の外に心
をわまし脇は亭主の働に似て其心あきらかに發句の余情
を調ふる故也脇の韻字も此沙汰に知るへし

世にまた名殘の花をさしておひの花といふ事あり此名は
俳諧の儀式たちて奉納追善のたくひには發句の作者は其
花を望むへし始と終とは其心をあしらひて爰に其事を
句はす故也

其座に亭主の心得は執筆は名殘の表みちて裏一順と斷る
時に亭主より其花を望むへしそこに一順を待わはす爲也
其席は舉句もつねならねは或は一座の老人か或は一家の
故ある人か其日の時宜を見あはせて花の次手に舉句をも
望むへしかくて満座の再吟に發句をは吟しかへさす句ひ
の花より舉句へつゝけて押返し二度よむへし其事の儀式
を尊重する心也これらの故は諸抄に論せず名のみ覺へた
るは覺束なし

次に連衆の心得といふは例に衣食の機嫌をと稱へ其日其
席の時刻におくれすをのゝ其所にあつまりて文臺のた

ゝぬ先はみたりに宗匠の居間に出いらすそこに一順を調
ふる時は取次をもて其句を窺ふへし連座の前の威儀に屈
せざらん爲也いつれの席にも小懷紙の用意して面々硯に
て草稿すへし本より文臺に遠ければ趣向の間の指令にま
とふさて其席にのそむ時はおほむね座配の次第ある物な
れば辭義にかまひすきてはかへりて無禮なり膳中の詞の
世なれたるも卑し附句は手をさけて執筆へ申へし宗匠も
をのつから聞しりなむ一句一直とも出合遠近とも此類は
古式に五條ありて今はた爰に記するに及はすすへて俳諧
の席を論せは第一に世情の人和をとゝなへて論語に溫厲
の變をおもへ第二は談笑の風俗にあそひて關雎に哀樂の
頌をしれや俳諧は其日の陰晴にひとしくよきもあしきも
一時の變ならんかへすゝも我門の俳諧師は俳諧は俳諧
のよしあしにもあらず俳諧はそも何の爲なるや法式はそ
も何の故なるやと其道をあきらめ此論をとかめて平話の
中の風と雅とを知らは道理も理屈も今日の戯にして虚實
はをのつから風雲の變にかなひ姿情はをのつから花鳥の
和にあそはん其人はよし俳諧をまよひてたとへ鳥鳶の字
をしらすとも和漢に滑稽自在の人といふへし

傳曰此篇は全く我家の法なから他門の式にも變らぬは其
書此抄に聞なれて大うつ童部もしるらめと爰には理事の
二を論して其法は何の爲なるや其式は何の故なるやと法
式の所謂をしれと也すべては貞享の式目をつみて五條の

心得をいへりけりさて宗匠の心得に一座の設といふ事は其日に其場の機轉なれば其事は日夜に變すべく其理は古今に通すへし

宵闇はあらふる神の宮うつし

北より萩の風そよきたつ

此句は歌仙の初折にて月秋の七句目なるに宵闇に月の附かたければ萩に神風の威靈をわしらふ然れば其次の殊にむつかしきを例に遷宮の宵闇はほのかに月影を含たれはと爰には月といふ字はかりを出して

八月は旅おもしろき小幅綿

これらは一座の名譽なりとて其比に書つたへ侍しか我門の太麁生はいつれの巻の宵闇をも月とおほへたる沙汰もあれは爰に宗匠のよしあしとはいへり此故に一座の設にはそこはくの條目を書ならへて公私の二字に結語せし爰に一犬の虚實を思はざらんや蓋おもふ此段に風雅の運といふ詞は白馬に祖翁の常語なるか左るは黄門の家訓にも道の冥加といひ高運といへる風雅の詞の須便ながら俳諧には例の殊勝地といふへし

次に執筆の心得とて假名と眞名との配をいへる但此事は古法にはあらず東華式の文格より我家の書法とはなしぬ連歌にはおほく假名をもちいて俳諧にはおほく眞名をもちゆれば眞名と眞名とのかさなりて上下の連續の心得かたき時ありたとへは

古池や蛙とひ込水の音

のことき込水のつゝき隠ならず「蛙飛こむ水の音とは勿論にして眞名にかゝねはならぬ事もあれは其時は「飛込む水の音と無用の「むの字を加ふる事いはは^{ツカヒ}大和の風躰にして假名と假名との配にもウフの通用を知るべき也此外にフヒへの音韻もイキシクの^{ツカヒ}豎横も芭蕉門の假名遣とて貞享式の一條となせる例の口傳とは此類也むかしより物の法式には道理を破りて時宜にしたかふ事あり古傳のわやまりを用ゆる事あり何の故もしれぬ事ありそれを故實の法といへれば例の師をえらひて先しるべきはた此故實の^{ツカヒ}一法ならん蓋や第二の條目に俳諧の黨をまとはすとは道に教化の大祕法にして儒門には是を孫言といひ老家には是を寓言といふ況や佛書の虚實自在なる五千餘卷はすへて方便説也これらに指月の喩をしらは爰に俳諧の用と無用とを知らん蓋や

第三の條目に一座の禮節といふ事は前に人和の温厲ながら今は公私の二字に結して法の私曲をいましめたる爰に十論の公道をあふき爰に十論の公法を學ひざらんやこれらを百世の五條目と知るへしをいな我門の文道は道德の二篇に實をほとき法式の一篇に虚をおきなふ是よく虚實の設にして讀人これらの變をしらは此十論に鼻息を通してはしめて俳諧の名をよはれて天下に横説駁説すへし君見よ儒門の四教とても忠信の教は諸道のつねにして孔子

の道は文行の學にありかく其の道の差別をしれば三家の意地をしれる人といはむ唯おそれてもおそるべきは俳諧の道の平地にして容易の人のふみまよふべきをや中畧論語も始は學の一字より終は言の一字をもて言を知らざれば人をしらすと万古不易の大道を結語せしは其言といふは論談なり論談といふは俳諧也俳諧はたた虚實にして其虚を談すれば釋老となり其實を論すれば孔孟となる爰に論語の名をも知るへし下畧

以上俳諧十論第十法式論抄

三石とは山谷集に慮思道か諷言をひきて不學者使飲墨汁三斗とも東坡集には荆公か俳諧をひきて純灰三斛の語あり三ノ字は物のほとなるへし爲辨抄

儉約 一字録の連俳篇にそも俳諧の家風といふは釋迦孔子のあとをもとめず和歌連歌のぬめりをあらひて一道の意地を建むとすれば身を輕んして儉約せよ人を重んじて謙退せよと古風の文章はかゝぬ也我と今日の道理をしり我と今日の時宜にあそへは何かは世法の和節にそむかむ唯おそるべきは時宜の變なりとそ誠に其録の一大事は言語論談の實をとめず時宜の交通を知るにしかすとそ全抄宗匠居間 一座の式目に俳諧の交席は其家の普請によりて二間三間なるは論なし一間ならば屏風に陰とりて宗匠も連衆も威儀に屈すへからす初心の方へは代句をして一順をはやく附へし當座の一順に新古を論せず附合のさま

のやすらかなるは響應の次第のはくれさる爲なりとそ

五條ノ式

- 一 諸禮停止
- 一 小語低聲
- 一 出合遠近
- 一 一句一直
- 一 一月花一句

右は舊式を増減して貞享式の條目なり此外に千句の一條あり自句二連とも三連とも連衆の多少によるべきなり万句は千句の法にかはらす十百韵といふ時は一座と十座の差別にして一卷／＼に百韵の式也しかれば一座と一卷とは去嫌の用捨と知るへしさて舊式の出合遠近といふに但シ聲ノ先といふに書あれとも先後の沙汰は紛るゝ時もあれは遠近のみにてしかるへし月花の一條にも舊式は雪月花とあれと雪は八なれば其沙汰に及はしたとひ月の句といふとも句順には堅く辞すへからす花は決して一句なるへし千句万句の一座にては月花の用捨も勿論なれば百韵の一座とても法式は例のやすき方によるへしかたければ不興の時もあらんしかれとも一座の法はおぼむね古式をまもるへく一卷の掟には古式の害なるもおほかるへしゆ全

心の俳諧の事

心の俳諧は焼米をかひ如く詞の俳諧は黒砂糖を嘗るか如し

味ふて輕きとしたゝるきと飽くとわかぬとの違ひあるへし詞の俳諧は低く心の俳諧は限りもなく高し詞の俳諧には甘み多しと云は言葉に花をかざる故成るへし大概俳諧を得足らんものはそこは見限りて洒落をこそ好むへきに何とて甘みを好む者多くあるやを答云甘みの風流に迷ふ事音頭拍子に轉る鳥のみに非らず一端洒落に遊たる人甘みに思ひ付細みを捨て詞曲の俳諧をするも有ると聞ゆ物好とは云ながら隠遁は淋しきとて俗にかへりて市にひさくか如し併しなから寂て高きは及ひかたければ花やかなる所に目のうつるも尤也以下畧梅の鎖問答

蕉門の俳諧は言葉の俳諧に非らず心詞一體の俳諧なれば榮りを専らにする故に五七五榮り續て聯聲に用ゆへきたへ間なし故芭蕉も此古法捨給ふには非ずして用給はざりしと見えたり他門は榮りを不用故に心はなるゝ所多し此故に聯聲の法あり先實は蕉門には無用の法なりされと芭蕉も捨給はすして論置き給へは知らざるは道に疎しといふへし勤て知るへきことなり師說錄

心の俳諧 古代の諸俳は附方連歌の如くにして俳言を求め連俳を分つ祖翁より以來は連歌の附に非ず前句へ對して理外の見出しあれはたとへ一句に雅言を述て俳諧なきも附たる所私の俳諧也此境を知らざる時は歌のみ連歌師なとに俳言なきと問れて驚くへし能く信用すへし古代の付方とは

轆轤首とや君かなるらん

傘の骨身にしめる戀風に

如斯ろくろに傘戀風に君と四つ手あらみにして連歌の附かた也今様は

轆轤首とや君かなるらん

櫛うりに及こしなる垣一重

如斯前句をのひ上りたる姿と見てこなたより櫛賣の句附也櫛といふ字は首の枝折也雪中庵雪の集

俳諧修行教の事

蕉門に千歳不易の句一時流行の句といふあり是を二つにわけて教へ給ひとも其元は一なり不易を知らされは基立かたく流行を知らされは風新にならず不易は古に宜しく後に叶ふ句なる故に千歳不易といふ流行は一時の變にすべきのふの風は今日宜からず今日の風は翌日に用ひかたき故一時流行とははやることをいふなり

魯町曰不易の句の爲はいかに去來曰不易の句は俳諧の躰にしていまた一の物數寄なき句なり一時の物數寄なき故に古今に叶へりたとへは

月に柄をさしたらはよき團扇かな

宗鑑

これはくとはかり花のよしの山

貞室

秋の風伊勢の菰原猶すこし

芭蕉

是等の類なり魯町曰月を團扇に見立たるも物數寄ならず

や去來曰賦比興は俳諧のみにかきらす吟詠の自然なり凡吟にあらはるゝも此三つをはなるゝ事なし物數寄とはいひかたし

魯町曰流行の句はいかに去來曰流行の句はおのれに一つの物數寄ありてはやる也形容、衣裝、器物等にいたるまで時々のやりあるか如したとへは

むすやうに夏にこしさの暑かな

此躰久しく流行す

われは松にてこそ候へまさの雪

松下

海老肥て野老瘦たるも友ならなむ

常矩

或は手をこめあるひは歌書の詞つかひ又は謠の詞とりなとを物數寄したるあり是等も一時流行し侍れと今日は取上る人なし魯町曰むすやうに夏にこしさといふは縁にあらずや去來曰縁は歌の一事にして物數寄にはあらず手を込ると縁とはかはりあり

魯町曰不易流行其元一なりとはいかに去來曰此事辨しかたしあら増人體にたとへていはゝ不易は無爲の時流行は座臥行住居屈伸伏仰の形同しからざるか如し一時の變風是なり其姿は時に變るといへとも無爲も有爲も元は同し人也

魯町風を變るには其人ありとはいかに

去來曰本を知らずして末を變る時は或は變風其變風俳諧をはなれ或ははなれすといへともつたなし芭蕉奥州行脚の

年冬はしめて不易流行の教を説給へり

魯町曰不易流行の事は古説にや先師發明にや

去來曰不易流行は萬事に渡るなり然れとも俳諧の先達はをいふ人なし長頭丸以來手を込る一體久しく流行し

角樽や傾けのまふ丑のとし

花に水あけて咲せよ天龍寺

といへるまでに吟したり世の人俳諧は斯の如き物とのみ心得つめぬれは其風を變する事を知らず宗因師一度其こりかたまりたるを打破り新風を天下に流行し侍れといまた此教なししかりしよりこのかた都鄙の宗匠達古風を用す一旦流ゝを起せりといへとも又其風を長くおのか物として時に變すへき道を知らず先師はしめて俳諧の本體を見つけ不易の句を立たまた風は時に變ある事を知り流行の句變ある事を分ち教給ふ然れとも先師常に曰宗因なくんは我々か俳諧かい貞徳の誕をねふるへし宗因は此道中興開山なりといへり

丈草曰不易の句も當時其體を好みて流行らは是も又流行の句といふへき也

去來曰蕉門に不易流行の説あり或は今日の一句の上の説あり是も流行にあらずといひかたし然れとも不易流行の教といふは俳諧本躰一時の變風とのこと也

去來曰俳諧を修行せんと思はゝ昔より時代々の風宗匠の體を能く考知盡すへし是を知る時は新古おのつから

分るものなり

俳諧の修行者はをのか好たる風の先達の句を一筋に尊み
學ひて一句一句に不審を起し難を構ふへからす若し解か
たき句あらはいかさま故あらんと工夫し或は巧者に尋明
むへし我か俳諧の上達するにしたかひ人の句も聞るもの
也始より一句一句をとかめかちなる作者は吟味のうちに
月日かさなりて終に功の成たるを見す先師曰今の俳諧は
日頃に工夫をつけて席上に臨んては氣鋒を以て吐へし心
頭に落すへからすとなり

支考曰昔の俳諧は如來禪の如し今の俳諧は祖師禪の如し捺
著すれば即轉す

去來曰先師は門人に教給ふに其ことは極りなし予に示し給
ふには句毎にさのみ念を入れる物にあらす又句は手つよく
俳意たしかに作へしと也

凡兆には一句わつかに十七字なり一字もおろそかに置く
へからす俳諧もさすかに和歌の一体也句に榮りの有やう
に作るへしとなり意は作者の氣性と口質によりてなりわ
しく心得る輩は迷ふへきすちなり同門の中にもこゝに迷
をとる人多し

去來曰俳諧は新意を專にすといへとも物の本情を達ていふ
ものにはあらす若し其事をうち返していふには品ありた
とへは

感時花濺淚 惜別鳥驚心 或は

櫻花ちらはちらなん散らすとてふるさと人の來ても見
なくに

といへるたくひなり

感時惜別大宮人の見ざる是等一首の眼也

去來曰俳諧は火をも水にいひなすと清輔かいへるに迷ひて
雪のふる日は汗をかきけりといふても苦しからすといふ
人あり夫は火を水とはかりこゝろへいひなすといふ處に
心のつかさる故なり雪の日に汗かくやうに一句を能いひ
なさはさもあらむ

咲かへて盛ひさしき朝貞をわたなる花とたれかいひけ
むの類也

去來曰句案に二品あり趣向より入ると又詞道具より入ると
なり詞道具より入る人は多是頓作多句也趣向より入る人
は遅吟寡句也

されは案し方の位を論する時は趣向より入るをよしとす
詞道具より入る事は和歌者流には嫌ふと見えたり俳諧に
はあなかにきらはす

去來曰蕉門に同巢同窠と云事あり是は前吟の鑄形に入て作
する句也たとへは竿が長くて物につかへるといふ句を刀
の鑄か障子にさはる或は杖かみしかくて地にととかぬと
吟しかゆる也
同窠の句は手からなしされと兄より生れましたらんは又
手柄なり

去來曰句に句勢といふ事あり文に文勢語に語勢あるか如し
たとへは

ふるふかことく小糠雨ふると云句を

先師曰 打わくること小ぬか雪ふると作れば句勢あり
となり

去來曰句に姿と云ものありたとへは

妻よふ雉子の身をほそうする 去來

此句初はつまよふ雉子のうろたへて啼と作りたりけるを
先師曰去來汝いまた句の姿をしらすや同じ事も斯いへは
姿ありとて直し給ひるなり支考の風姿といへるこれ也

去來曰句に語路といふものあり句はしりの事也語路は盤上
の玉のはしるか如く滞りなきをよしとす又青柳の風に亂
るゝことく優を取たるも面白しろからん溝川に土泥のな
かるゝやうに行あたりゝなつみたるはわろし其外卷中
一句二句は曲をなせるもあるへし夫とても語路の滞たる
は嫌ふ也

先師曰發句は頭よりすらゝといひくたし來るを上品とす
洒堂曰先師曰發句は汝かことく物二つ三つあつめて作る
ものにあらすこかねを打のへたるやうにありたしとなり

先師曰發句は物を取り合すれば出來る物也夫をよく合する
を上手といひあしきを下手といふなり

許六曰發句は取合て作る時は句多く出來るものなり初學
の輩これをおもふへし功者に及ては取合不取合の論には
あらず

許六曰發句は題の曲輪を飛出て作るへし廓のうちにはなき
もの也自然曲輪の中に有は天然にして稀也

去來曰發句は曲輪の内になきものにあらす殊に即興感偶す
る物は多くは内にあり然とも常に案るに内はすくなく多
くは古人の糟粕なり千里にかけ出て吟する時は句おほき
のみならず第一等類をのかる初學の尤思ふへき處也功な
るに及ては又内外の論にはあらず風國俳諧句每曲輪の内
なり予此事を示さは

電に徳利提て通りけりと云を

徳利提けて行かゝりと直す

名月に皆さかやきを刺にけりといふを

さかやきを皆そりたてゝ駒迎と直しぬ

去來曰他門と蕉門と第一案し處に違ひありと見ゆ蕉門は
景情ともに其有處を吟す他流は心中に巧まるゝと見へた
とへは

御蓬萊夜はうすものをきせつへし

元日の空は青さに出舟かな

鴨川や二度めの網に鮎ひとつ

といへる如し禁闕に蓬萊なし洛陽に出舟なし鮎一つは少
なき事にや皆是細工せらるゝなり

去來曰蕉門の發句は一字不通の田夫十歳以下の小兒も時に
よりてよき句あり却て他門の功者といへる人は覺束なし
他流は其流の功者ならされは其流のよき句はなしかたし

と見えたり

先師曰發句は昔より様々替り侍れり附句は三變にとまれりと云

杜年曰發句の善惡はいかに

去來曰發句は人のもつともと感ずるはよし、さもあるへしと云は其次也、さもあるべきやといふは又其次也、さはあらしといふは下也

杜年曰發句と附句の境はいかに

去來曰七情萬景こゝろに留る處に發句あり附句は常なりたとへは

鶯の梅にとまりて啼といふは發句にならず鶯の身を逆に啼といふは發句也

杜年曰心に留る所は皆發句なるべきか

去來曰此うち發句になると成らぬとありたとへは

つき出すや桶のつまりのひきかへる 好春

此句を先師の古池の蛙と同じやうに思もへるとなん事珍しく等類なしさそ心にもとまり興もあらむされと發句にはなしかたし

野明曰句のさひはいかなる物にや

去來曰さひは句の色なり閑寂なる句をいふにはあらずたとへは老人の甲冑を帶し戰場に働き錦繡をかさり御宴に侍りても老の姿有るか如し賑かなる句にも靜かなる句にも有るものなりたとへは

花守や白きかしらをつきあはせ

先師曰さひ色よくあらはれたり

野明曰句の位とはいかなるものにや

去來曰これも又一句をあく

卯の花のたえ間たゝかむ間の門

先師曰句の位尋常ならずとなり

去來曰畢竟句の位は格の高きにあり句中に理屈をいひ或は物をたくらへ或はあたり合たる發句は位下たるものなり野明曰句のしをり細みとはいかなるものにや
去來曰しをりは哀なる句にあらず細みはたよりなき句にあらずしをりは句の姿にあり細みは句の心にあり是も證句をあけていはく

十圓子も小粒になりぬ秋の風

先師曰此句しをりあり

鳥ともゝ寐入てゐるか余吾の海

先師曰此句細みありと評し給ひしと也

去來曰惣してさひ位細みしをりの事は以心傳心なれば唯先師の評をわけて教るのみ他は押して明むへし

去來曰凡吟ある時は風あり風は必ず變ず是自然のこと也先師是をよく見取て一風に長くとゝまるまじき事を示し給へりたとひ先師の風なりとも一風になつて變化をしらざるは却て先師のこゝろにたかへり

先師曰發句は昔より様々替り侍れと附句は三變にとまれ

りむかしは附物を専とす中頃は心附を専とす今は移り響句ひ位を以て附るをよしとす

去來曰支考等あらましを書出せり是を手にとりたる如くにはいひ難し今先師の評をわけてさとさん他はおしてしるへし

赤人の名はつかれけりはつ霞

史邦

鳥もさへつる合點なるへし

去來

先師曰移りといひ句ひといひ實は去年中三十棒をうけられたるしるしなりと悦び給ひけり爰におもへは句ひといふも移といふもわつかに句作のあやにしてのると乗らぬとの境なれば冷暖自知の時ならては悟し明らむる事あるまし此句もし「赤人の名もおもしろやとあらは」鳥も囀るけしきなりけりとも作るへきを名はつかれたりといへるより合點なるへしとは相うつり行ところ味ひ見らるへし

くれ椽に銀かはらけを打くたき

身ほそき太刀のそるかたを見よ

先師曰此句を引て教るとて右の手にて土器を打つて左の手にて太刀にそりかくる眞似をして語り給ける一句一句に趣のかはる事なれば言語に盡しかたきところ看破せらるへし

杜年曰句の位とはいかなる事にや

去來曰前句の位を知て附る事なりたとへよき句ありとも位應せされはのらす先師の戀の句をわけていは

上置の干菜ささむもうはの空

馬に出ぬ日は内て戀する

前句は人の妻にもあらず武家町人の下女にもあらず宿屋問屋の下女なりと見て位を定めたるもの也

細き目に花見る人の頬はれて

なたね色なる袖の輪ちかひ

前句古代の人のありさまなり

白粉をぬれとも下地くろい顔

役者もやうの袖のたきもの

前句のさま今やうの女と見ゆ

花になるへき雪のきぬく

月影に鑑とやらん見すかして

前句いかにも可然ものゝふの妻と見ゆ

ふすまつかんで洗ふあふら手

懸乞に戀のこゝろを持たたや

前句町家のこしもとなといふへきか是をもて他はなすらへてしらるへし

支考曰附句は一句に一句也前句附なとはいくつも有へし連俳にいたりては其場其人其時節等前後の見合ありて一句に多はなきもの也

去來曰附句は一句に千万也故に俳諧變化極なし支考か一句に一句といへるは附る場の事なるへし附る場は多くなき物也句は一場の内にもいくつも有へし

先師曰氣色はいかほとつゝけてもよし天象地形人事草木魚

虫鳥獸のあそへる其形容みなくゝ氣色也

支考曰附句は附る物なり今の俳諧は附かざるをよしとす先師の句一句もつかざるはなし

去來曰附句は附されは附句にあらず附過るは病なり今の作者附る事を初心の業の様に覺へてかつて附さる句多し聞人も又聞得すと人のいはむ事を耻て附さる句を咎めす却てよく附たる句を笑ふやから多し我か聞るとは各別なる事も多かる

去來曰附物にてつけ又心附にて附るは其附たる道筋しれり附物をはなれ情をひかす附んには前句のうつり句ひ響なくしてはいつれの處にてか附ん心得へき事なり

去來曰蕉門の附句は前句の情を引來るを嫌ふたゝ前句へはいかなる場いかなる人と其事其位をよく見定め前句をつきはなして附へし

先師曰附物にて附る事當時好すといへとも附物にて附かたからむをさつはりと附物まで付たらむは又手柄なるへし宇鹿曰先師十七の附かた路通に傳授し給ふと聞

去來曰遠境の門人の願に依て附方を書出し給ふされと後くはせをか附方は是に限りたりと人の迷ひならんとこれを捨らるゝ其書出し給ふ分十七ヶ條とやらん聞えたり是を傳受とし給ふ事を知らず大津にての事とやらむなれは路通もし其反古を拾ひとりて人に教るにや

許六曰此事をねかひたるは千那法師なり

去來曰附句は何事なくさらくゝと聞ゆるをよしとす卷をよむに思案工夫して附句を聞むは苦しき事也

去來曰風に千變万化すといふとも句体「新く」「清く」「軽く」「慥なる」「正しく」「厚く」「閑なる」「和なる」「剛なる」「解たる」「懐しく」「速なる」如此はよし「鈍く」「濁れる」「弱く」「重く」「薄く」「したるく」「澁たる」「堅く」「騒しく」「古きかく」の如きは悪し但し堅きと鈍なる句には善惡あるへし

支考曰附句は句に新古なし附る場に新古あり

支考曰古風の句を用るにも場によりてよしされと古風のまゝにはいかゝ古体のうちに今やう有へし

先師曰一卷表より名殘まで一鉢ならんは見るしかるへし去來曰一卷面は無事に作るへし初折の裏より名殘表までに物數寄も曲もあるへし半より名殘の裏にうけてはさらくゝと骨折らぬやうに作るへし末に至ては互に退屈いたされたる物也猶よき句あらんとすれば却句しよりて出來ぬ物なりされと末くゝまで吟席いさみありて好き句出來らんを無理に止ることはあらず好句を思ふへからすといふ事也

其角曰一卷に我句九句十句有とも一二句好句あらは殘らず能句をせんとおもふへから却て不出來なるものなりいまた好句なからむうちは随分好句を思ふへし去來曰附物にて附る事當時嫌ひ侍れと其わたりを見合一卷

に一句二句あらんは又風流なるへし
浪花曰今の俳諧物語等を用ゆる事いか、
去來曰同じくは一卷に一二句あらまほし猿蓑の中に待人い
りしに御門の鍵も門守の翁なり此集撰む時物かたり等の
句すくなしとて粽結ふの句を作して入給へり

附合修行の事

當時の俳諧を見るに人の上三四句もつゝく時はいまた人情
附け盡さゝるに伸句逃句を附けてはつせり故に力らを盡
すへき場出て來らすして始末只地の附の如く一卷たるみ
て爰はと感すへき處なく織物のしまの如く見ゆるのみい
かなれは人情をせむる事をかく恐るゝにや三句四句にも
其人情盡さゝるに於てはたとひ一卷人情のみにて附ると
も害なき事也其中には別段の人柄もいて來たるへき事也
仍て人情を付る事修行の專一に心得へき也去來も既に此
事を論せり俳諧は中より以下のものとあやまれるは俗談
平和とのみ覺へたる故也俗談平和をためさんか爲也拙な
き事はかりをいふの俳諧と覺へたるは淺間敷事也俳諧は
万葉の意なれば貴となく賤となく味いふへき也唐明すへ
て中華の豪傑にも耻る事なし唯心のいやしきを辱とすと

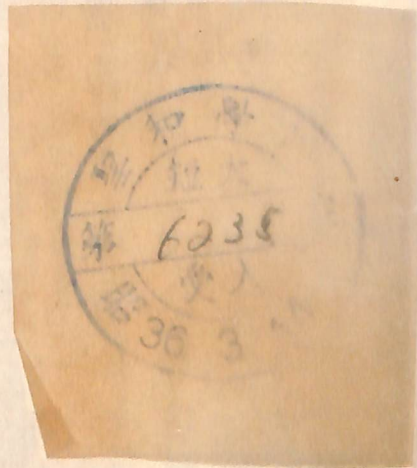
俳諧提要終

跋

爰に俳諧あり其道のしるされ
る事は故人もさまゝ教へお
かれしが未とくと得る事あた
はすさるを門下に五乳人釣雪
なる者あり二十有餘年の丹精
やうく成りて俳諧提要の一
部をものせりこはまたくつも
れる雪に道の明るさを覺えし
とやいはんより一言しるす
ものは

前雪中

不白軒梅年



明治卅六年八月十日印刷
明治卅六年八月十三日發行

俳諧提要
定價金五拾錢

編者 五乳人鉤雪

發行者 大橋新太郎
東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 水谷景長
東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷所 合資博進社工場
東京市小石川區久堅町百〇八番地

不許複製

發兌元

東京日本橋區
本町三丁目 博文館

▲俳諧作法▼

正價壹
郵稅拾
貳
錢四

正價五拾錢
郵稅六錢

正價貳拾五錢
郵稅六錢

正價貳拾
郵稅六

正價貳拾
郵稅貳

正價參拾五
郵稅四

正價參拾
郵稅八

仙談
式圖解

正價參
郵稅八
拾
錢錢

芭蕉句集

正價參拾
郵稅八錢

◎未若葉
◎五元集拾遺

稅價貳拾錢錢

嵐雪文集◎
文章附歌◎

價貳拾錢
稅八錢

化回蓮の

歷代滑錢錢

拾

革籠◎

拾錢錢

二翁未

大野酒竹君校訂 名家手蹟寫真版挿入

●素堂鬼貫全集

全一冊洋並綴 大判 二八八頁 正價參拾錢 郵稅八錢

俳諧寺社中校

●一茶句集

全二冊和製 木版和紙刷 正價貳拾錢 郵稅六錢

大野酒竹君校訂 名家手蹟寫真版挿入

●燕村曉臺全集

全一冊洋並綴 大判 三〇〇頁 正價參拾錢 郵稅八錢

角田竹治

●燕翁句集

全三冊木版 美濃判和紙刷 正價壹圓 郵稅拾錢

大野酒竹君校訂 名家手蹟寫真版挿入

●一茶大江丸全集

全一冊洋並綴 大判 三二〇頁 正價參拾錢 郵稅八錢

老風堂永機君 晋雲庵柳涯君校訂 名家手蹟寫真版挿入

●蕉門十哲集

全一冊洋並綴 大判 三〇二頁 正價參拾錢 郵稅八錢

解題(寶書齋其角)其角文集續虛栗(類柑子)(服部嵐雪)嵐雪文集(東花坊支考)支考文集(森川許六)許六文集(向去來支考)伊勢紀行(去來抄)(越智越人)越人俳文(不猫蛇)立花北枝(北枝俳文)(北枝句集)(鯉尾杉風)杉風句集(冬カ)

大野酒竹君校訂 名家手蹟寫真版挿入

●芭蕉以前俳諧集

全二冊洋並綴 大判 六三〇頁 正價一冊參拾錢 郵稅一冊八錢

大野酒竹君校訂 名家手蹟寫真版挿入

●元祿名家句集

全一冊洋並綴 大判 二八六頁 正價參拾錢 郵稅八錢

角田竹治君校訂 名家手蹟寫真版挿入

●俳諧句合集

全一冊洋並綴 大判 二九八頁 正價參拾錢 郵稅八錢

尾崎紅葉君校訂 名家手蹟寫真版挿入

●俳諧類題句集

全二冊洋並綴 大判 七二〇頁 正價一冊參拾錢 郵稅一冊八錢

竹村秋竹君編

●明治俳句

全一冊紙皮上綴 小判 五〇〇頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

維新王政の復興は明治文學の勃興となり俳句の革新を促し以て今日の盛況を見るに至り故に國內の新聞雜誌に於て此等俳句の作句を競ひしもの多し

採り更に其中より七千餘を撰擇して本書となす春夏秋冬各本なるべけんや

案察無角君著

●俳家成美全集

全一冊洋並綴 小判 五二〇頁 正價貳拾錢 郵稅八錢

目次 俳家成美(巢光小傳)成美全集(はら)一、成美成美連句集(四山)二、成美成美連句集(成美成美連句集)成美成美連句集(巢光小傳)

●俳文及雜著

目次 俳文及雜著(俳文及雜著)俳文及雜著(俳文及雜著)俳文及雜著(俳文及雜著)

目次 俳文及雜著(俳文及雜著)俳文及雜著(俳文及雜著)俳文及雜著(俳文及雜著)

俳諧論集

波君校訂 名家手蹟寫真版挿入
全一冊洋並綴 大判 三三〇頁 正價參拾 郵稅八拾 錢錢錢

續俳諧論集

巖谷小波君校訂 名家手蹟寫真版挿入
全一冊洋並綴 大判 三〇六頁 正價參拾 郵稅八拾 錢錢錢

俳諧珍本集

大野酒竹君校訂 名家手蹟寫真版挿入
全二冊洋並綴 大判 三一八頁 正價參拾 郵稅八拾 錢錢錢

俳諧紀行全集

佐藤飯人君校訂 大和古俳人手蹟寫真版挿入
全一冊洋並綴 大判 四〇〇頁 實價貳拾 郵稅八拾 錢錢錢

俳諧逸話全集

鶴澤四丁君校訂 名家手蹟寫真版挿入
全一冊洋並綴 大判 三三二頁 正價參拾 郵稅八拾 錢錢錢

俳諧年表

角田竹冷君校訂 星野夢人君、牧野望東合著
全一冊和上綴 大判 二八六頁 正價參拾 郵稅八拾 錢錢錢

俳諧諸書集

黃國五岳君編
全二冊和紙木版 小判 正價貳拾 郵稅四拾 錢錢錢

俳人百家撰

雄齋圓輝君家 木版密書挿入
全一冊和紙木版 中判 五〇枚 正價貳拾 郵稅四拾 錢錢錢

